

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 XV

道 端 遺 跡 V

2006

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XV

道 端 遺 跡 V

2006

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海東北自動車道は、新潟市の新潟中央ジャンクションから日本海に沿って北上し、山形県を経て、秋田自動車道と接続する秋田県河辺ジャンクションに至る高速自動車道です。新潟県内では胎内市の中条インターチェンジまでが平成14年度に完成しています。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しいものがありますが、平成15年末の国土開発幹線自動車道建設会議（以下国幹会議）において、日本海東北自動車道の中条－朝日間は、旧日本道路公団が有料道路として建設を進めることになりました。その後、公団の分割民営化により、平成17年10月に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれましたが、平成18年2月の国幹会議において、荒川－朝日間については国土交通省が新直轄道路として建設することになりました。日本海東北自動車道はこの地域内外の経済的な交通・流通を促すだけでなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送などの「命の高速道」としての役割も期待されており、早期の開通が望されます。

本書は、この日本海東北自動車道建設に先立って発掘調査を実施した「道端遺跡」の報告書です。調査の結果、当遺跡は弥生時代中期と古墳時代中期～後期を主体とすることが判明しました。弥生時代中期は竪穴建物、平地式建物、墓の可能性のある周溝造構、土坑等で構成され、北陸系を中心とする弥生土器や石製農具などの遺物が注目されます。古墳時代は竪穴建物、掘立柱建物、土坑等で構成され、土師器・須恵器を中心にも量の遺物が出土しました。中でも、十数個体にのぼる須恵器は県内でも有数の資料です。いずれの時期も阿賀野川以北における中心的な遺跡と考えられ、稲作農耕の定着、大和政権の進出など地域の歴史を語る上で欠くことのできない貴重な成果が得られました。

今回の発掘調査結果が、考古学研究者はもとより、地域の歴史を知り、学ぼうとする多くの方々に活用されることを願っております。

最後に、この調査に参加された地元住民の方々や地元区長並びに荒川町教育委員会には多大なる御協力と御援助をいただきました。また、東日本高速道路株式会社及び村上工事事務所、荒川沿岸土地改良区には、調査に際して格別のご配慮をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

新潟県教育委員会

教育長 武 藤 克 己

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県岩船郡荒川町大字南新保字道端 97 番地に所在する道端遺跡の発掘調査の記録である。
- 2 発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、新潟県教育委員会（以下、県教委）が東日本高速道路株式会社から受託して実施した。
- 3 発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。埋文事業団は発掘調査および関連諸工事を国際航業株式会社（以下、国際航業）に委託し、平成 17 年 4 ～ 12 月にかけて実施した。発掘調査面積は、延べ 12,400 m²（上層 9,600 m²、下層 2,800 m²）である。
- 4 整理及び報告に関わる作業は、平成 17 年 6 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日の間に現地及び国際航業整理棟で国際航業文化事業部作業員が行った。
- 5 出土遺物及び記録類は、県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・整理している。遺物の注記・記号は「05 ミチ」とした。また、出土地点及び層位を併記した。
- 6 引用・参考文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に掲載した。
- 7 本書に掲載した遺物番号は、すべて通し番号とし、本文・図面図版・写真図版の番号は、すべて一致している。
- 8 本書の方位は、すべて真北である。ただし、ここでいう「真北」は、日本平面国家座標の X 軸方向を指す。
- 9 第Ⅷ章の自然科学分析は、分析・原稿をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
- 10 本書の執筆分担は以下の通りである。

第Ⅰ章 1 節、第Ⅱ章 2 節 B 2)	沢田 敦（埋文事業団日東道担当班長）
第Ⅰ章 2 節、第Ⅲ章 2 節、第Ⅳ章 1 節 B 1) 6)、第Ⅳ章 2 節 A・B 1) 2) 第Ⅴ章 2 節 A、	
第Ⅳ章 2 節 A・B 1)、3 節	前川雅夫（国際航業文化事業部主任研究員）
第Ⅳ章 1 節 B 1) 6)、2 節 B 1) 6)、第Ⅴ章 1 節 A の土器、第Ⅵ章 1 節	片山博道（同 研究員）
第Ⅳ章 1 節 A 1)・B 4)、2 節 B 1) 5)、第Ⅴ章 3 節	丹下昌之（同 研究員）
第Ⅱ章、第Ⅲ章 1 節、第Ⅳ章 1 節 A 2) ～ 4)・3 節、第Ⅴ章 4 節の珠洲焼・錢貨、.....	辻 弘和（同 研究員）
第Ⅳ章 1 節 B 2)、2 節 B 6)、第Ⅴ章 2 節 B の石器、4 節の櫛文土器	福井流星（同 研究員）
第Ⅳ章	高橋 敦、齊藤崇人、松元美由紀、齊藤紀行、馬場健司（パリノ・サーヴェイ株式会社）
11 道構トレスはその一部を辻 弘和、遺物実測は土器の一部を片山博道、福井流星、石器を福井流星、木製品を丹下昌之がこれを行った。また、遺物写真撮影は、一部を丹下昌之がを行い、その他はモノクローム新潟に依頼した。	
12 本書の編集は、遺構図版を辻 弘和、写真図版を丹下昌之、遺物図版の土器・石製品・土製品を片山博道、石器を福井流星、木製品を丹下昌之がを行い、沢田 敦の指導のもと前川雅夫が全体を統括した。	
13 本書の発掘・報告書の作成にあたって、弥生時代の土器については明治大学石川日出志教授に、木製品の建築部材については首都大学東京山田昌久助教授にご教授をいただき、また、以下の方々、機関からもご教示とご協力をいただいた。記してここに厚く御礼を申しあげる。（敬称略、五十音別）	
及川 良彦　岡本 郁栄　金子 拓男　斎野 裕彦　間 雅之　鈴木 晚 高濱 直行	
田中 耕作　田辺 早苗　福田 健司　増田 一美　水澤 幸一　吉井 雅勇	
荒川町教育委員会　荒川沿岸土地改良区	

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理	2
A 調 査	2
1) 試掘確認調査	2
2) 本調査の経過と概要	2
B 整 理	5
C 調査・整理体制	6
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	8
1 地理的・歴史的環境	8
2 阿賀野川以北の古墳時代の遺跡	8
3 阿賀野川以北の弥生時代の遺跡	10
第Ⅲ章 グリッドの設定と層序	11
1 グリッドの設定	11
2 基本層序と包含層	12
第Ⅳ章 遺 構	14
1 古墳時代の遺構	14
A 遺構の概要	14
1) 概 要	14
2) 平面・断面形態	14
3) 主軸 方位	15
B 遺構 各 説	15
1) 積 穴 建 物	15
2) 据立柱建物	16
3) 土 坑	16
4) 河 川 跡	17
5) 性格不明遺構	19
2 弥生時代の遺構	20
A 遺構の概要	20
1) 概 要	20
2) 弥生時代の包含層と遺構群	20
B 遺構 各 説	21
1) 周溝を有する建物跡	21
2) 周溝 遺 構	26
3) 土 坑	27
4) 溝 跡	28

5) 河川跡	29
6) 性格不明遺構	29
3 下層の調査	30
A 調査の概要	30
B 調査の経過	30
第V章 遺物	32
1 古墳時代の土器・石製品	32
A 概要	32
1) 出土遺物の概要	32
2) 器種分類	32
B 各説	38
2 弥生時代の遺物	44
A 土器・土製品	44
1) 概要	44
2) 器種分類	46
3) 土器各説	47
B 石器	51
1) 概要	51
2) 各説	51
3 木製品	54
4 その他の時代の遺物	56
第VI章 自然科学分析	58
1 はじめに	58
2 試料	58
3 分析方法	59
A 放射性炭素年代測定	59
B 樹種同定	59
C 花粉分析	59
D 土壤理化学分析	60
E 種実遺体分析	60
F 植物珪酸体分析	60
4 結果	61
A 放射性炭素年代測定	61
B 樹種同定	62
C 花粉分析	63
D 土壤理化学分析	63
E 種実遺体分析	64
F 植物珪酸体分析	69

5 考 察	69
A 古 植 生	69
B 植物利用状況	70
C 内容物推定	72
第VII章 ま と め	75
1 古墳時代の遺物	75
A 器種構成	75
B 時期設定	77
C 遺構の性格	81
D ヘラ記号「×」のある土器	81
2 弥生時代の遺構と遺物	82
A 低地の発掘調査の問題点と自然化学分析の成果について	82
B 遺 物	85
1) 土 器	85
2) 石器使用痕分析	92
<総 括>	96
<要 約>	97
<引用文献>	98
<観 察 表>	104

挿 図 目 次

第 1 図 調査範囲トレンド位置図	3	第 15 図 花粉化石	72
第 2 図 調査区位置図	3	第 16 図 木材・植物珪酸体	73
第 3 図 弥生・古墳時代の主要な周辺遺跡	9	第 17 図 種実遺体	74
第 4 図 グリッド設定図	11	第 18 図 遺物集中地点と重量分布図	76
第 5 図 基本層序模式図	11	第 19 図 古墳時代中・後期における 追堀道路出土土器の変遷	78
第 6 図 基本層序柱状図	13	第 20 図 新潟県におけるヘラ記号のある土師器	81
第 7 図 遺構の平面形態と断面形態の分類図	15	第 21 図 包含層別遺構分布図	83
第 8 図 下層トレンド位置図	31	第 22 図 包含層別弥生土器	86
第 9 図 古墳時代（土師器）器種分類図	34	第 23 図 弥生時代中期の仙台平野の甕と 本道跡出土の甕	90
第 10 図 古墳時代（須恵器）器種分類図	37	第 24 図 使用痕光沢面分布図	94
第 11 図 弥生土器器種分類図	45	第 25 図 使用痕光沢面写真	95
第 12 図 SR 2 a の模式柱状図及び試料採取位置	58		
第 13 図 花粉化石群集	63		
第 14 図 植物珪酸体含量	69		

表 目 次

第 1 表 弥生・古墳時代の主要な周辺遺跡	64
一覧表.....	10
第 2 表 分析試料及び分析項目一覧.....	58
第 3 表 放射性炭素年代測定結果.....	61
第 4 表 历年較正結果.....	61
第 5 表 樹種同定結果.....	62
第 6 表 花粉分析結果.....	63
第 7 表 土壤理化分析結果.....	63
第 8 表 種実遺体分析結果.....	64
第 9 表 植物珪酸体含量.....	69
第 10 表 遺物集中地點 1 重量比率表.....	75
第 11 表 古墳時代中・後期における 道端遺跡と編年対応表.....	77
第 12 表 弥生土器編年対応表.....	91
第 13 表 観察された光沢面のタイプと特徴.....	94

図 版 目 次

[図 面]

図版 1 遺跡の位置と周辺の地形	
図版 2 遺構全体図	
図版 3 古墳時代全体図	
図版 4 弥生時代全体図	
図版 5 SI 6	
図版 6 SB107	
図版 7 SK 1 ~ 3	
図版 8 SK102・116、SX104・118・119・121	
図版 9 SI 1	
図版 10 SI 3	
図版 11 SI 9	
図版 12 SI10	
図版 13 SI11・12	
図版 14 SI15	
図版 15 SI8	
図版 16 SI13・14	
図版 17 1・2号周溝遺構	
図版 18 3・4号周溝遺構	
図版 19 2号周溝遺構内 1号土坑、3号周溝遺 構主体部	
図版 20 SK 4 ~ 8	
図版 21 SK126・132、SX117・123	
図版 22 SK120・130・134、SX111	
図版 23 SD122・125・127 ~ 129	
図版 24 SR 1 ~ 4	
図版 25 SR 2 a	
図版 26 古墳時代の遺物 (1)	

図版 27 古墳時代の遺物 (2)

図版 28 古墳時代の遺物 (3)	
図版 29 古墳時代の遺物 (4)	
図版 30 古墳時代の遺物 (5)	
図版 31 古墳時代の遺物 (6)	
図版 32 古墳時代の遺物 (7)	
図版 33 弥生時代の遺物 (1)	
図版 34 弥生時代の遺物 (2)	
図版 35 弥生時代の遺物 (3)	
図版 36 弥生時代の遺物 (4)	
図版 37 弥生時代の遺物 (5)	
図版 38 弥生時代の遺物 (6)	
図版 39 石器 (1)	
図版 40 石器 (2)	
図版 41 石器 (3)	
図版 42 石器 (4)	
図版 43 石器 (5)	
図版 44 木製品	
図版 45 その他の時代の遺物	

[写 真]

図版 46 調査区全景	
図版 47 北区弥生面全景	
図版 48 1 ~ 4号周溝遺構、SI10 ~ 12	
図版 49 遺物集合写真	
図版 50 SI 6 (1)	
図版 51 SI 6 (2)	
図版 52 SB107	
図版 53 SK 1 ~ 3・102	

図版 54	SK116、SR 1・2 a	図版 72	SK132・134、SD122・125
図版 55	SR 2 a、P109・110	図版 73	SD125・127～129
図版 56	SX104・119・121	図版 74	SR 2 a
図版 57	SI 1・3 (1)	図版 75	SX117・123、1号周溝造塹下面
図版 58	SI 1	図版 76	包含層遺物出土状況・下層トレンチ現況写真
図版 59	SI 1・3 (2)	図版 77	古墳時代の遺物 (1)
図版 60	SI 3、SK 4	図版 78	古墳時代の遺物 (2)
図版 61	北区弥生時代遺構群、弥生時代包含層	図版 79	古墳時代の遺物 (3)
図版 62	SI 9	図版 80	古墳時代の遺物 (4)
図版 63	SI10～12	図版 81	弥生時代の遺物 (1)
図版 64	SI11～14	図版 82	弥生時代の遺物 (2)
図版 65	SI15	図版 83	弥生時代の遺物 (3)
図版 66	SI 8	図版 84	石器 (1)
図版 67	1・2号周溝造塹 (1)	図版 85	石器 (2)
図版 68	1号周溝造塹	図版 86	石器 (3)
図版 69	1・2号周溝造塹 (2)	図版 87	木製品・その他の時代の遺物
図版 70	3・4号周溝造塹		
図版 71	3号周溝造塹、SK126		

第1章 序 説

1 調査に至る経緯

日本海東北自動車道（以下、「日東道」という。）は、新潟市の新潟中央ジャンクション（以下、「JCT」という。）から秋田県河辺JCTに至る高速自動車道である。新潟県内では新潟空港インターチェンジ（以下、「IC」という。）～中条IC間が平成14年度に完成している。中条IC以北は、平成元年および平成3年に基本計画が決定され、本遺跡が所在する中条IC～荒川IC間は平成10年4月に施工命令が出された。これを受け、東日本高速道路株式会社（以下、「東日本高速道路」という。）¹⁾と新潟県教育委員会（以下、「県教委」という。）との間で、法線内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

中条IC～朝日IC間の分布調査は、県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団という。）が平成11年度に実施した。その結果、道路法線内に8か所の遺跡確認地点（新発見を含む）と27カ所の遺跡推定地が存在し、これらについて試掘確認調査が必要である旨を県教委に報告した。試掘確認調査は、同じく県教委からの委託を受けた埋文事業団が、中条IC北近接地～村上IC南近接地間について平成13～15年度に実施した。その結果、本遺跡を含む20遺跡で本発掘調査が必要であることが判明し、その旨を県教委に報告した。本遺跡の試掘確認調査は平成12～14年度の3か年にわたって、58,280m²を対象として実施した。その結果、本遺跡は古墳時代前期と後期および縄文時代の集落遺跡であることが確認され、35,400m²で本発掘調査が必要であることが判明した。また、基本的に古墳時代の上層と縄文時代の下層との2面の遺構確認面が存在することから、本発掘調査が必要な面積は上層35,400m²・下層32,300m²の延べ67,700m²となった。ただし、この時点で平成13年度に8,000m²（4,000m²×2面）、平成14年度に11,000m²（上層7,000m²・下層4,000m²）が既に本発掘調査を実施していたことから、平成15年度以降に本発掘調査を要する面積は上層24,400m²・下層24,300m²の延べ48,700m²となった。

平成15年10月1日の東日本高速道路・新潟県教育庁文化行政課（以下、「文化行政課」という。）および埋文事業団の三者協議において、東日本高速道路が示した平成16年度の調査要望は膨大なものであった。しかし、この要望も「民営化」や「事業の見直し」などの諸問題を抱える東日本高速道路にあっては、その時点で確定したものではなかった。同年10月8日、文化行政課と埋文事業団は平成16年度の受託事業について協議した。そして、日東道建設が決定し要望どおりの調査量が提示された場合、この時点での調査体制ではこれに対応できることから、専門職員の増員を県に求めるが、これが認められない場合には、日東道の調査に限り民間調査機関に全面委託する、という方針を決定した。翌年の1月8日、国土開発幹線自動車道建設会議が終了し、日東道は東日本高速道路で建設することが可能になった旨が文化行政課に伝えられた。その後、2月20日に最終的な三者協議が行われ、日東道の本発掘調査を、埋文事業団の管理・監督の下に民間調査組織に全面委託することで合意した。道端遺跡の本発掘調査は平成16年度に古墳時代前期を中心とする延べ22,900m²において実施し、古墳時代後期を中心とする12,200m²を平成17年度に実施し、平成18年度以降に残りの13,600m²を実施することとなった。

¹⁾ 日本海東北自動車道の事業は、日本道路公団の分割民営化により、平成17年10月1日に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれた。本文中では日本道路公団分を含め、「東日本高速道路」と統一して表記する。

2 調査と整理

A 調査

1) 試掘確認調査

前述したように道端遺跡に関する試掘確認調査は、県教委から委託を受けた埋文事業団が、平成12～14年度の3か年にわたり、調査対象面積延べ58,280m²で実施した。調査対象面積の内訳は、平成12年度が20,340m²、13年度が29,000m²、14年度が8,940m²である。調査方法は、任意に確認トレンチを設定し、バックホー・人力により徐々に掘り下げ、土層の堆積状況、遺構・遺物の有無の確認・精査を行ったものである。以下その詳細について述べる。

平成12年度の調査では、古墳時代後期の多量の土師器・若干の須恵器、古墳時代の土坑・柱穴・溝などの遺構を検出し、当該時代の集落の存在を確認した。また、ほとんど同一の層位から弥生時代中期の遺物の出土をみたほか、厚さ30～50cmの間層をはさみ、縄文時代後期の土器・石器も出土した。両時代の遺物包含層の密度は希薄なもの、縄文時代の遺物については、調査区域の南北両端で出土していることから、調査未了の対象範囲全体に広がっている可能性もあった。その結果、古墳時代（上層）と縄文時代後期（下層）については、対象面積20,340m²全域に本調査が必要であると判断した。本書で報告する調査は、この平成12年度の試掘確認調査の対象範囲に含まれる。

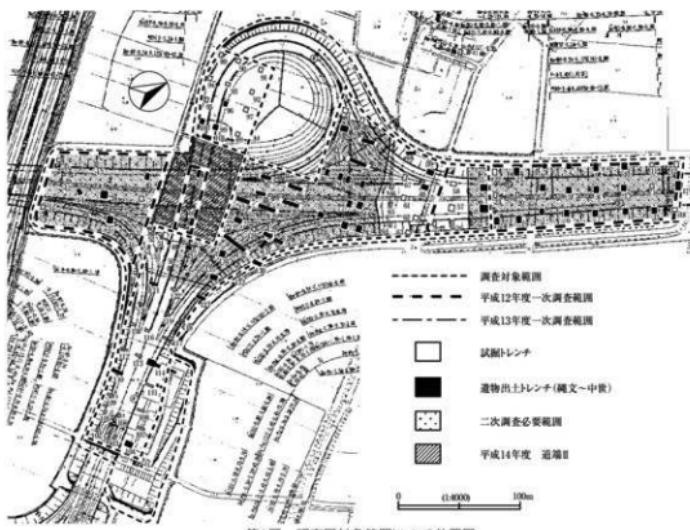
平成13年度は、上層の調査において古墳時代後期ではなく、古墳時代前期の遺物が多く出土した。縄文時代の遺物は少量で、耕作土中からは、近世・中世陶磁器・漆器・砥石などが混在して出土した。古墳時代の遺構は、76トレンチでピット1基、79トレンチで土坑1基とピット1基を確認した。また、遺跡の東側には埋没河川も検出され、その覆土中からは、古墳時代の遺物が多く出土したが、縄文時代の遺物は確認されなかった。今回の調査結果と前回（平成12年度）の調査結果を合わせると、本遺跡は、古墳時代前期・後期の良好な集落であることが判明し、29,400m²（上層・下層合わせて延べ58,800m²）について本調査が必要であると判断された。

平成14年度の調査では、148・154・164・166トレンチで古墳時代の遺物が、156トレンチで縄文時代後期の遺物が出土した。また、東側の136・140～143・145トレンチでも、古墳時代の遺物が耕作土中より出土している。最終的に3か年にわたる試掘確認調査の結果から上層35,400m²・下層32,300m²の延べ67,700m²について本調査が必要である、と判断した。

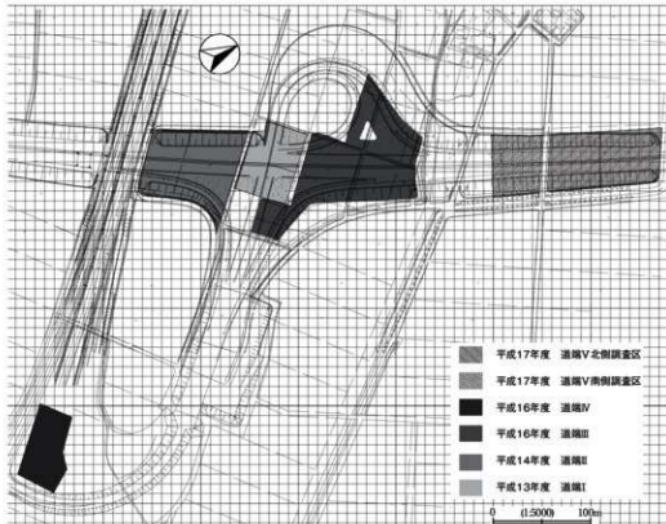
2) 本調査の経過と概要

道端遺跡は、今まで四度の本調査が行われ、報告書もすでに刊行済みである。それらが第2回に示した道端遺跡I（平成13年度、日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅲ）・道端遺跡II（平成14年度、日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅳ）・道端遺跡III（平成16年度、日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ）・道端遺跡IV（平成16年度、一般国道113号・荒川道路関係発掘調査報告書Ⅰ）である。平成17年度の本調査（道端遺跡V）は、試掘確認調査結果に基づき、当初12,200m²の予定で着手したが、調査範囲の追加変更により、最終面積は、上層（古墳時代後期・弥生時代中期）9,600m²、下層（縄文時代後晩期）2,800m²の計12,400m²であった。以下その詳細について述べる。

本年度の調査範囲は、当初 41～51 M～S グリッド列であったが、上層終了後、下層確認トレンチで調査した結果遺構・遺物が存在しないことが判明したため、52～58 L～R グリッド列も本年度調査範囲に



第1図 調査区対象範囲トレンチ位置図



第2図 調査区位置図

加えることとなった。また46グリッド列を東西に横断する町道部分も調査の対象としていたが、撤去不可能なパイプラインが埋設されており、次年度以降の日東道建設工事に伴う町道撤去の際に追加して調査することとなった。よって調査は、町道部の南側（以下南区）と北側（以下北区）に各1班を配置して行うこととなった。その後、調査の進展に伴い町道の両脇に遺構、遺物がないことが、明らかとなつたため、最終的に町道下の本発掘調査は不要と判断した。

調査区の現況は水田で低湿地であるため、まず、東側を除く三方にコの字形に暗渠を施設し、24時間の強制排水を行った。暗渠掘削は、バックホーを用いたが、その際調査員がつき、土層の観察と必要な記録をデジタルカメラなどで撮りながら、作業を進めた。

また、調査区全域の基本土層の確認と包含層の層位、遺構・遺物の検出・出土位置、全体の作業量などの情報を収集するため、調査区の大グリッドに沿って東西南北方向20m毎に、計9本のセクションベルトを設定し、そのセクションベルトの南側・西側に幅約1m、深さ約1~1.4mの確認トレントを入れた。確認トレントの掘削は、耕作土をバックホーで除去したほかは人力で行った。

遺構の精査は、これらの調査準備作業から得られた情報をもとに、調査員の指示で耕作土をバックホーで除去した後、包含層掘削を行い、出土遺物を回収しつつ慎重に行った。包含層、遺構確認面層は、粘性の強い土であるため、スコップの先端を切断し、電動サンダーなどで刃をつけたものを使用し、薄く削り作業の効率化をはかり、その後三角ホーなどを用い、遺構の有無を確認した。

遺構の図化は、断面図は手作業による実測、平面図はトータル・ステーションを用い、デジタル図化を行った。

次に調査経過の詳細を述べる。

4月11日より、プレハブ設置、暗渠掘削準備の予定であったが、工事用道路の敷設の遅れにより、4月26日より暗渠掘削を開始し、連休明けの5月9日から作業員の一部を投入し、確認トレント掘削と表土除去を並行して行った。暗渠の掘削が終了したのは、5月17日、表土除去が完全に終了したのは、5月23日のことであった。

調査は、前述したように46グリッド列を東西に横断する町道部を境に調査区を北区と南区に分け、調査員2名を一組とし、各々1班、合計2班を5月後半から投入した。大グリッドに沿った確認トレントの人力掘削を行いつつ、北区、南区ともに本格的な遺構精査に入ったのは、6月に入ってからのことであった。

南区の調査は、北区と合わせて東西・南北の大グリッドに沿った土層の検討から、古墳時代後期の包含層、確認面層を認識し、面的な人力掘削を行った。両調査区とも耕作により、古墳時代後期の包含層はほとんど残っておらず、本来の遺構掘り込み面も搅乱を受けていた。また、南区は調査区面積の1/3程度を河川跡が占めており、最終的に検出された古墳時代の遺構は、SK1~3の土坑3基のみであった。河川跡を含め、6月22日に古墳時代の調査を終了したが、確認トレントの下部から、弥生土器片（壺）がまとまって出土したことにより、急速弥生遺構の確認トレントを十数か所入れることとした。その結果、調査区の中央部からやや南西よりの42・43番グリッドに堅穴建物2軒と土坑5基が検出された。堅穴建物は、炉と小規模ながら柱穴を伴うが、周溝は確認できなかった。堅穴建物からは弥生時代中期小松式の壺口縁が出土した。南区では、北区とともに7月15日に古墳時代の遺構面の空中撮影を行い、前述した弥生時代の遺構群を対象に8月20日に現地説明会を行った。その後、遺構写真撮影、平面図化などを行い、縄文時代の下層トレント調査を経て9月初頭に南区の調査は、すべて終了した。

北区の調査も、6月以降南区同様に、土層の検討から古墳時代の遺構確認面を認識し、耕作土下部の人

力掘削から包含層掘削、遺構精査という順番で作業を進めた。遺構精査時の古墳時代の遺物は、その大部分が包含層と考えている土層からではなく、耕作土中より出土した。その7割が北区南西部から出土した須恵器片などもその例に漏れず、遺構の遺存状況が、極めて悪いことが、精査を続けることによって次第に明らかになっていった。耕作土を取り除いても、牛馬の踏み込みの足跡が、小破片に破碎された遺物とともにそこかしこに確認面に残り、遺構精査を難渋させた。その間、古墳時代の確認面層の下に面的な広がりを有する炭化物層が水田跡である可能性を検証するため、プランントオバール分析を先行して行い、炭化物層の性格を検討した。また、その上下で遺構精査・等高線測量を実施するとともに、水田面の可能性を検証した。

南区でのこの層に類似する層の下層で弥生時代の遺構が検出されたこともあり、遺物は、出土していないもののこの層が弥生時代の包含層である可能性も想定された。分析の結果、この炭化物層にクマザサ属などのプランントオバールが検出され、比較的乾燥した環境下での堆積物であることが判明した。盛夏にさしかかった8月上旬に北区の調査の目途がつき、南区と合わせて当初の調査範囲である41～51M～Sグリッド列の古墳時代の遺構を対象とした空撮を行い、その後河川跡の掘削、平面図化、等高線の測量、遺構のないか所での縄文下層トレンチ調査などを終え、8月5日に47～51M～Sグリッド列の調査を完了した。この時点まで北区の古墳時代の遺構は、50・51グリッド列に掘立柱建物1棟、土坑1基、ピット6基であった。弥生時代の遺構は、性格不明遺構1基が、50Nグリッドより検出されており、その北側に検出された河川跡からは、弥生時代中期の甕がほぼ完形で出土した。

当初の調査範囲の調査が、予定より早く終了したため、かねてからの懸案であった52～58L～Rグリッド列も新たに本年度の調査範囲に加えることとし、8月2日よりこの区域の確認トレンチの掘削、表土掘削を開始した。その結果、古墳時代の遺構と弥生時代の包含層の広がりが、52～57P～Rグリッド列に集中していることが判明した。古墳時代の遺構は、堅穴建物1軒、土坑1基、性格不明遺構2基、河川跡の北縁に古墳時代後期の6か所の土器集中か所が検出された。弥生時代の遺構は、3枚の包含層直下の遺構確認面でそれぞれ複数検出されたが、弥生土器片と各面の間に介在する炭化物を含む包含層の存在によりそれらの遺構群の面的な検出は、困難を極めた。そこで包含層の範囲に数本のサブトレンチを入れ、遺構の立ち上りと切り合を検討しながら、調査を進めた。その結果、炉・柱穴を作う周溝を有する建物跡8軒と土坑を作う長梢円形の周溝遺構4基、土坑5基、性格不明遺構4基、溝跡5条を検出した。先に述べた性格不明遺構1基を含めて、これらが北区における弥生時代の全遺構の種別と総数である。9・10月は好天に恵まれ、弥生時代の遺構の調査は、順次進展し、10月8日の豪雨の中、二度目の現地説明会を開催した。11月に入ると雨も多くなったが、貴重な好天に恵まれた11月21日、弥生時代の遺構群を中心に、二度目の遺跡全景空中撮影を行った。その後悪天候に悩まされつつも、縄文時代の下層トレンチ調査を行い、12月1日に現場撤収・引渡しを終え、約7ヶ月にわたる発掘調査をすべて完了した。

B 整 理

整理は、現場調査期間の6月以降から現場作業棟で図面修正、写真整理、遺物の洗浄を、新潟市の国際航業北陸調査事務所において図面トレース、遺物の注記・接合・復元・実測の一部を行い、現場作業終了後の12月以降、同調査事務所で本格的な整理作業を行った。遺構図面トレース・図版組み・写真図版の作成、遺物の実測・トレース・遺物図版組み、遺物写真撮影・遺物写真図版組みなどを12～1月末にかけて行い、1～2月上旬にかけて原稿執筆、編集作業を行った。

C 調査・整理体制

試掘確認調査と平成17年度の本調査及び整理作業は、以下のような期日と体制で行った。

〔試掘確認調査〕

調査期間 平成12年10月23日～11月10日、平成13年3月29日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 野本 恵雄）

調査 管理 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 野本 恵雄）

管 理 須田 益輝（専務理事・事務局長）

長谷川司郎（総務課長）

戸根与八郎（調査課長）

庶 務 椎谷 久雄（総務課主任）

調査指導 寺崎 裕助（調査課公団担当課長代理）

調査担当 小田由美子（調査課主任調査員）

調査職員 後藤 孝（調査課主任調査員）

小林 芳宏（調査課主任調査員）

尾崎 高宏（調査課文化財調査員）

調査期間 平成13年8月29・30日、9月25日～11月6日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越 鶴一）

調査 管理 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 板屋越 鶴一）

管 理 須田 益輝（専務理事・事務局長）

長谷川司郎（総務課長）

岡本 郁栄（調査課長）

庶 務 椎谷 久雄（総務課主任）

調査指導 寺崎 裕助（調査課公団担当課長代理）

調査担当 沢田 敦（新潟県教育庁文化行政課主任調査員）

石川 智紀（調査課主任調査員）

調査職員 後藤 孝（調査課主任調査員）

渡辺 弘（調査課主任調査員）

田中 一穂（調査課嘱託員）

〔本調査（平成17年度分）・整理作業〕

調査期間 平成17年4月11日～12月6日

整理期間 平成17年12月7日～平成18年3月31日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）

調査 管理 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 武藤 克己）

管 理 波多 俊二（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 専務理事・事務局長）

長谷川二三夫（同 総務課長）

藤巻 正信 (同 調査課長)
監督 鈴木 俊成 (同 調査課日東道担当課長代理)
沢田 敦 (同 調査課日東道担当班長)
山田 秀樹 (同 調査課日東道担当主任調査員)
庶務 長谷川 靖 (同 総務課班長)

調査組織 国際航業株式会社

現場代理人 大西 孝幸 (国際航業株式会社 文化事業部 主任技師)
調査担当 前川 雅夫 (同 文化事業部 主任研究員)
調査職員 辻 弘和 (同 文化事業部 研究員)
丹下 昌之 (同 文化事業部 研究員)
田村 典雄 (同 文化事業部 研究員) 平成17年4月1日～6月10日
福井 流星 (同 文化事業部 研究員) 平成17年6月13日～平成18年3月31日
片山 博道 (同 文化事業部 研究員)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的・歴史的環境

道端遺跡は、新潟県岩船郡荒川町大字南新保字道端 97 番地ほかに所在する。道端遺跡の立地する新潟平野は、新潟県北東部に位置する堆積平野で、北側は海岸に平行して、海岸砂丘が発達しており、北東部には西朝日岳(1814 m)などが連なる朝日連峰が山形県との境をなしている。南東部には北股岳(2025 m)、飯豊山(2105 m)、三国岳(1644 m)などの山々が連なる飯豊連峰がそびえている。新潟平野北東部にはこれらの山々から多くの河川が流入している。新潟平野北東部を流れる最大の河川は荒川である。荒川は大朝日岳山(1870 m)に源を発し、飯豊連峰の北麓から流れ出す沼川・大石川などと合流しながら日本海に注いでいる。第二の河川は、飯豊連峰に源流をもつ胎内川である。胎内川は古くは「たいな川」「飼の川」と呼ばれており、1888(明治 21)年に日本海に向けて開削されるまで海岸砂丘の南側に平行して北上し、荒川町海老江で荒川と合流していた。このため、洪水を繰り返し、1967(昭和 42)年の羽越水害に代表されるような大きな水害は、記録に残っているものとしては最古の平安時代後期の 1090(寛治 4)年以来、19 回余りに及んでいる。特に、江戸時代中頃の 1757(宝暦 7)年 5 月 23 日の大洪水などでは復旧に 50 数年を要したといわれている〔建設省 1975〕。

道端遺跡は胎内川扇状地と荒川扇状地に挟まれた低地に位置し、標高は約 2.0 ~ 2.7 m を測る。ここは、旧河川や湖沼跡の粘性土を主体とした堆積物の分布地帯であり、いわゆる後背湿地である。地下水は飽和して、地表面が低湿な状態になっている。この地域の地層は細砂、埋木、シルト及び泥炭などで構成され、暑さ 10 m 以上にわたって堆積している所もある。本遺跡を含めたこの付近では、伏流水も被圧地下水に転化し、幅広い自噴帯を形成している〔石橋 1977〕。このため、遺跡とその近辺の地盤は軟弱な部分が多い。

歴史的環境については〔石川・内藤 2002; 渡邊・内藤 2003〕に詳しいので、参照されたい。

2 阿賀野川以北の古墳時代の遺跡

道端遺跡が含まれる阿賀野川以北の地域には、近年の大規模な墓塋整備や日東道建設などに伴って、多くの古墳時代の遺跡が発見された。古墳時代の遺跡は砂丘、丘陵端部及び沖積低地に置ける微高地上などに分布する。

村上市内の磐舟浦田山古墳群は、浦田丘陵端部に位置し、1957(昭和 32)年に調査され「石廊堂」という名称で磐舟櫻関連の施設として認識されていたが、1994(平成 6)年に新潟大学の調査によって古墳時代後期の古墳群であることが再確認された〔甘粕 1996〕。周辺には、古墳時代後期の遺跡が存在する。神林村では圃場整備に伴い、調査された遺跡が多数存在する。衣田遺跡からは古墳時代中期～後期の遺物が発見され〔田辺 2001〕、金曲遺跡からは TK47 期の須恵器杯蓋及び杯身が出土し〔田辺 2002b〕、高田遺跡では MT15 ~ TK10 期の須恵器杯蓋及び杯身が出土している〔田辺 2003b〕。胎内市(中条町)では、日東道建設やアクセス道路の建設に伴う調査の結果、多くの遺跡が発見された。反貫目遺跡からは



第3図 弥生・古墳時代の主要な周辺遺跡（国土地理院1：200,000「村上」・「新潟」を縮小）

土坑2 基とその周辺から完形に近い土器と白玉が多量にまとまって出土した。〔寺崎・佐藤²⁰⁰⁴〕。また、は場整備関連でも多くの遺跡調査が行われた。野付遺跡からは破片ではあるが、初期須恵器杯蓋の口縁部が出土し〔水澤¹⁹⁹⁹〕、屋敷遺跡からは滑石製紡錘車が6世紀中頃～後半にかけての遺構から出土しており、その他にMT15～TK209期にかけての土器が出土している〔水澤・吉村²⁰⁰⁴〕。聖籠町周辺には、多くの古墳時代の遺跡が存在する。新潟砂丘列上に位置する山三賀II遺跡は、古墳時代前期～中期にかけての集落で、12軒の住居が検出されている〔坂井¹⁹⁸⁹〕。新発田市の曾根遺跡からは、山三賀II遺跡と同

番号	遺跡名	時代
1	城ノ内遺跡	弥生・古墳
2	野谷山遺跡	古墳
3	清水川遺跡	弥生・古墳
4	冷池山遺跡	弥生・古墳
5	角点山遺跡	古墳
6	砂山遺跡	弥生・古墳
神 市 村		
7	八幡山遺跡	弥生
8	水反遺跡	弥生
9	金曲遺跡	弥生・古墳
10	大野山遺跡	弥生
11	前原遺跡	古墳
12	高岡遺跡	弥生
13	古川千葉遺跡	弥生
14	衣田遺跡	弥生・古墳
15	中部北山跡	弥生
16	長良遺跡	弥生・古墳
東 西		
17	坂口町ノ宮山遺跡	古墳
18	柳林遺跡	古墳
19	中曾根遺跡	弥生・古墳
20	道場遺跡	弥生・古墳
物 内 市		
21	乙造跡	弥生・古墳
22	城山遺跡	弥生
23	宮岡遺跡	古墳
24	丁行野山遺跡	弥生
25	二本川遺跡	古墳
番 号		
26	六千石遺跡	古墳
27	反日山北遺跡	古墳
28	西山内北遺跡	古墳
29	西山内南遺跡	古墳
30	上原山遺跡	古墳
31	福原山遺跡	古墳
32	大原山遺跡	古墳
33	大木山遺跡	古墳
34	野上山遺跡	古墳
35	東山内中野原山遺跡	弥生・古墳
36	無名山遺跡	後期
37	一ノ割遺跡	後生
38	四の削遺跡	弥生・古墳
39	丹波山遺跡	後生
新 発 墓		
40	郡ノ口山遺跡	古墳
41	村尻遺跡	後生
42	野十子山遺跡	古墳
43	工山遺跡	後生
44	山田前山遺跡	後生
45	山田山遺跡	後生
46	山田山V遺跡	後生
47	今井遺跡	後生
48	船越遺跡	後生
49	山川西遺跡	古墳
50	福島遺跡	古墳
51	家原山遺跡	古墳
52	蛇塚遺跡	古墳
53	弓木本山遺跡	古墳
番 号		
54	丘立遺跡	古墳
55	上草野山遺跡	後生
56	小山ノ入山遺跡	後生
57	石藏山遺跡	古墳
58	鶴鳴山遺跡	後生
59	中谷内遺跡	古墳
60	中谷山遺跡	古墳
61	半根遺跡	後半・古墳
62	笠松久坂跡	古墳
63	見尻坂遺跡	古墳
64	鬼ヶ森山遺跡	古墳
型 墓		
65	山大寺遺跡	後生
66	三三郎山遺跡	後生・古墳
67	木本山山遺跡	古墳
68	一本松山遺跡	後生
新 墓		
69	殿原入山遺跡	後生・古墳
70	平尺入山遺跡	後生・古墳
71	仄尺山遺跡	後生・古墳
72	石動花崗	後生・古墳
73	東園遺跡	後生・古墳
74	小丸山山遺跡	後生
75	中山道遺跡	後生
76	城山遺跡	後生
77	黒山山遺跡	後生
阿 貝 市		
78	蘿山遺跡	後生

第1表 幽生・古墳時代の主要な周辺遺跡一覧表

じ時期の遺物が出土しており、その関係が注目される〔家田1981・1982；川上1997〕。新潟市では新潟砂丘列上に位置する松影A遺跡からTK23～TK10期の須恵器杯身・杯蓋・甕・甕などが出土している〔加藤2001〕。

3 阿賀野川以北の弥生時代の遺跡

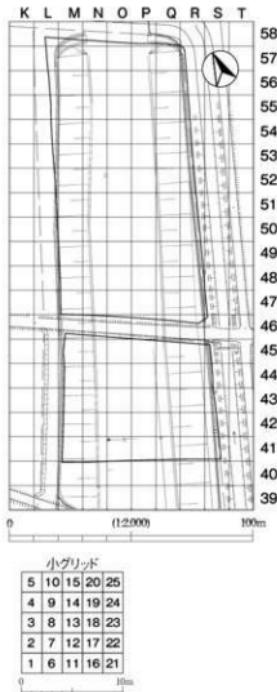
阿賀野川以北では弥生時代に登録されている遺跡の件数は少なかったが、古墳時代と同様に近年の大規模な土塁整備などに伴って、多くの弥生時代の遺跡が発見された。弥生時代の遺跡は沖積地、砂丘及び山腹部に分布している。この地域の遺跡は、ほとんどの遺跡において遺構が検出されず、遺物だけが出土する。

村上市には、瀧ノ前遺跡がある。三面川右岸の河口近くの河岸段丘上に立地しており、新潟県内で初めて天王山式の土器を伴う住居跡が確認され、環状石斧・アメリカ式石鏃なども出土した〔関 1972〕。砂丘遺跡は新潟砂丘上に立地しており、天王山式の土器やアメリカ式石鏃などが出土している〔龍沢 2003〕。神林村では、長松遺跡から天王山式、宇津ノ台式などの土器やアメリカ式石鏃、菅玉未成品などの石器が出土し〔田辺 1991〕、衣田遺跡からは後期の高杯杯部と甕が出土し〔田辺_は 2001〕、金曲遺跡からは天王山式の土器が出土し〔田辺_は 2002〕、高田遺跡からも天王山式の土器が出土している〔田辺_は 2003b〕。道端遺跡の所在する荒川町では、坂町宮ノ越D遺跡からアメリカ式石鏃や天王山式の土器が出土している。胎内市には道端遺跡に近接している乙遺跡があり、山草荷式、小松式や天王山式の土器や碧玉製菅玉未成品などが出土している〔戸根_は 1982〕。新発田市には、山草荷式の標識遺跡である山草荷遺跡などが所在する。櫛形山脈と二王子岳間にさまれた谷底平野の微高地に位置する村尻遺跡からは中期前半の再葬墓9基、土坑2基が検出されている〔田中_は 1982〕。金屋遺跡からは小松式や天王山式の土器や磨製石斧などが出土している〔鶴巣・田中 1994〕。新潟市では東園遺跡から小松式や天王山式の土器が出土し〔朝岡・諫山 2003〕、松影A遺跡からは宇津ノ台式や天王山式の土器が出土している〔加藤_は 2001〕。

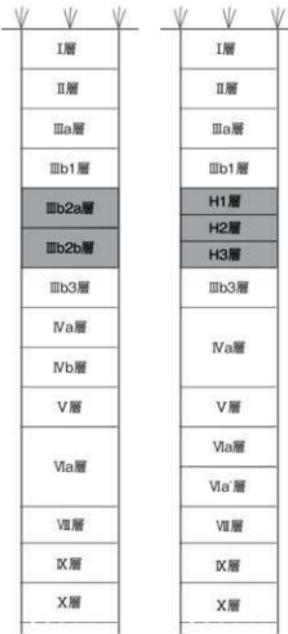
第Ⅲ章 調査の概要と経過

1 グリッドの設定

平成 14 年度調査 [渡邊・内藤 2003] で設定したグリッドを今回の調査においても使用し、日本海東北自動車道のセンター杭である STA.370+00 (日本測地系 X=235159.995, Y=80309.888) と STA.374+00 (同 X=23519.131, Y=80845.549) を結んだラインを南北方向の主軸とした。グリッド南北方向の主軸は、真北から約 26° 東偏している。主軸と直交する東西の軸は、平成 14 年度調査の STA.370+00 (11 P) を基点として、順次北へグリッドラインを設定していった (第 4 図)。



第4図 グリッド設定図



第5図 基本層序模式図

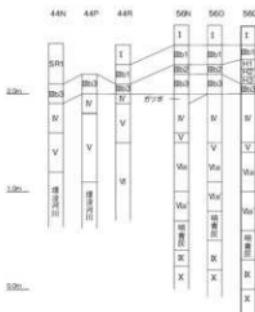
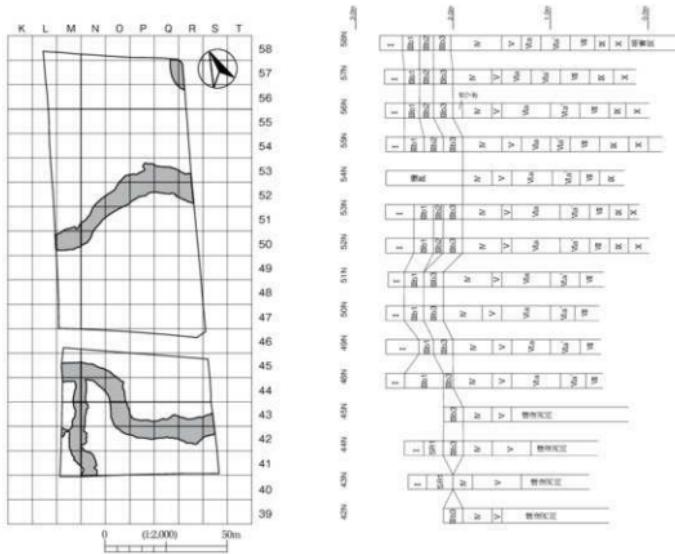
グリッドは、大グリッドと小グリッドからなり、大グリッドは、10m 四方を単位とし、小グリッドは、大グリッドを 2m 四方に 25 等分したものである。大グリッドの名称は、南西隅を基点とし、南北方向を算用数字、東西方向をアルファベットとして [41 P] のように呼称した。小グリッドは、1 ~ 25 の算用数字で表し、南西隅を 1、北東隅を 25 とした。表記は、大グリッドの後につけて [41 P 18] のように呼

称した。平成 16 年度調査区は、南北方向は、40 から 58、東西方向は、L から S までの範囲となる。

2 基本層序と包含層

本遺跡の基本土層は、第 5 図に示すとおりであるが、北区と南区でⅢ b 1 層以下の基本堆積土層・包含層に若干の相違が見られる。まず、Ⅲ b2a 層については、南区でも、観察されたものの北区のような面的な広がりは持たない。また、弥生時代包含層（H 1 ~ H 3 層）については、北区の一部（54 ~ 56 Q・R グリッド）で明確に観察され、南区においては、認識することができなかった。そのため遺構のほとんどないか所と集中するか所の二つの柱状図を第 5 図に①・②として掲載した。包含層と遺構の関係などの詳細については、第 IV 章第 3 節 A 項 2) で述べる。以下基本堆積土層と包含層について簡潔に記述する。

I 層	黒褐色粘質土。現水田耕作土。
II 層	暗褐色粘質土。腐植土層。いわゆるガツボ層で本調査区では、局部的に観察される。
III a 層	灰褐色粘質土。古墳時代包含層と推定。大半が後世の搅乱を受け局部的に観察される。
III b1 層	灰白色粘質土。古墳時代遺構検出面層。
III b2a 層	灰白色粘質土。炭化物を含む。北区の南側（48 ~ 51 L ~ R グリッド）に分布する南区にも局部的に観察される。
III b2b 層	III b2a 層に弥生土器片を含む層。遺構のはほとんどないか所に広がる。53 P ~ R グリッド区の北側、54・56 P ~ R グリッド区に局部的に分布する。後述する H 3 層に相当する。
III b3 層	灰白色粘質土。弥生時代遺構確認面層。
IV a 層	青灰色粘質土。
IV b 层	灰色粘質土。IV a 層より色調が暗く南区にのみ分布。
V 層	暗褐色粘質土。腐植土層（ガツボ層）。
VI a 層	青灰色シルト。
VI a' 層	青灰色シルト。VI a 層より若干砂質で色調が暗い。
VII 層	明青灰色粘質シルト。
IX 層	灰色粘質シルト。少量の骨片含む。
X 層	暗灰色粘質シルト。少量の骨片含む。
H 1 層	灰白色シルト。微量の炭化物粒と石器片・土器片を含む。
H I 層	明褐灰色シルト。微量の炭化物粒と石器片・土器片を含む。
H 2 - 1 層	灰白色粘質シルト。少量の炭化物粒と石器片・土器片を含む。
H 2 - I' 層	灰白色粘質シルト。中量の炭化物と石器片・土器片を含む。
H 2 - 2 層	明褐灰色粘質シルト。微量の炭化物と石器片・土器片を含む。
H 3 - 1 層	褐灰色粘質シルト。多量の炭化物と中量の石器片・土器片を含む。
H 3 - 2 層	明褐灰色粘質シルト。少量の炭化物と微量の炭化物と石器片・土器片を含む。



第6回 基本層序柱状図

第IV章 遺 構

1 古墳時代の遺構

A 遺構の概要

ここでは、確認された遺構の種別と数、位置及び全体の傾向と、遺構の平面・断面形態・主軸方位の測定方法とその特徴について述べる。

1) 概 要

今次調査においては、総じて古墳時代の遺構はあまり検出されなかった。遺構の種別ごとでは、北区で竪穴建物が1軒 (SI 6) と掘立柱建物が1棟 (SB107)、土坑 (SK) が2基、河川跡が1条 (SR 2 a)、性格不明遺構 (SX) が4基、ピット (P) が6基である。南区では土坑が3基、河川跡が1条 (SR 1) である。南北両調査区あわせて竪穴建物が1軒と掘立柱建物が1棟、土坑が5基、河川跡が2条、性格不明遺構が4基、ピットが6基である。遺構の種別を問わずに合計しても 19 に過ぎない。

遺構がない理由としては、北区・南区ともに耕地開発によると考えられる古墳時代包含層と遺構面の搅乱と削平、また水田耕作による多数の踏み抜き跡により遺構の検出が困難であったことが挙げられる。

昨年度確認できた古墳時代遺物包含層 (Ⅲ a 層) が、今年度調査においてはほとんど確認できなかつたか、確認できた場合でも、表土の耕作に伴う踏み込み跡の間に残る程度というように安定した状況の確認は出来なかつた。特に南区では古墳時代の遺構確認面を掘り込む河川跡 (SR 1) が調査区の約半分の面積を占めるという不幸も重なつた。

北区では竪穴建物と掘立柱建物が一つずつ確認できたものの、それ以外には広がりを見せなかつた。全面積に対してみると南区以上に遺構密度が希薄である。ただしおよそ 54 列以北、O 列以西の範囲では土師器の出土数より須恵器が多いという特徴と、51 ~ 54 列、N ~ O 列の範囲では遺構こそ確認できなかつたものの、躰が4個体分以上出土したことが注目される。

2) 平面・断面形態

a 平面形態

なお遺構の平面および断面形態の呼称は、和泉 A 遺跡の分類 [荒川・加藤 1999] に従つた。

円 形：長径が短径の 1.2 倍未満のもの。

稍円形：長径が短径の 1.2 倍以上のもの。

方 形：長軸が短軸の 1.2 倍未満のもの。

長方形：長軸が短軸の 1.2 倍以上のもの。

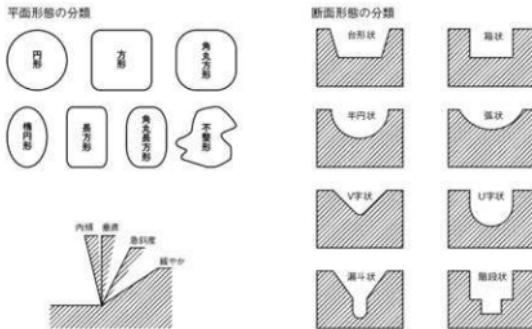
不整形：凹凸で一定の平面形を持たないもの。

b 断面形態

- 台形状：底部に平坦面を持ち、緩やか～急角度に立ち上がるもの。
- 箱状：底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
- 弧状：底部に平坦面を持たない皿状で、緩やかに立ち上がるもの。
- 半円状：底部に平坦面を持たない椀状で、急角度に立ち上がるもの。
- U字状：確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
- V字状：点的な底部を持ち、急角度に立ち上がるもの。
- 漏斗状：下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの。

3) 主軸方位

遺構の主軸方位は、長軸を基準に真北からの角度を測定し、[N - 23° - W]、[N - 16° - E] のように表記した。



第7図 遺構の平面形態と断面形態の分類図（[荒川・加藤 1999]に加筆）

B 遺構各説

1) 竪穴建物

SI 6 (図版5・26・50・51・77) 54・55 Q・Rグリッドに位置する。長径3.5m、短径3.3mの隅丸不整形で、主軸方位は、N - 60° - Wである。遺構の遺存状況は極めて悪く、壁・床面が削平・擾乱され、カマドの火床面も一部擾乱を受けた状態でⅢ b1 層下面において検出された。床面は平坦で、掘り方深さは、5～10cmを測る。住居の床面層は硬くしまった小砂利を含む灰白色シルト、掘り方層が明褐色シルトである。住居内施設は西壁中央にカマド、南部隅に地床炉が、住居内の西壁寄りに3基のピット・中央部や東寄りに2基のピットが検出されたが、周溝は検出されていない。遺存していたカマドの火床面は、長径120cm・短径48cm厚み最大4cmの不整形を呈し、主軸方位は、N - 67° - Wである。火床面の東側に炭化物の濃く分布するカマド前庭部が観察され、火床面範囲の両脇には、構築された袖の基底部が遺存していた。カマド掘り方は長径1.1m、短径0.8mの楕円形を呈し、袖掘り方は、長径80cm、短径25～30cmの内湾する長楕円形である。カマド内覆土は、火床面層が暗赤褐色シルト・カマド掘り方層が明

褐色シルト・袖基底部は明褐灰色シルトに褐色土ブロックを混入する。炉は長径30cm・短径20cmの不整形で、主軸方位はカマドに等しく、灰赤色シルトの焼土層の厚みは2cmである。ピットは、15~25cmの円形または楕円形で深さは確認面から15~20cmを測る。断面形は半円状もしくはU字状で、主な覆土は灰黄色粘質シルトである。重複関係はSII5を切り、炉の火床直上出土の砥石（1）を掲載した。

2) 掘立柱建物

SB107（国版6・26・44・52・77・87）50・51Pグリッドに位置し標高2.47m、Ⅲb1層精査中に検出した。規模・形態は桁行2間(3.44m)×梁行1間(2.92m)、面積約10m²の側柱建物跡で、主軸方位をN-1°-Eにとる南北棟の建物である。柱間寸法はP1-P2:1.9m、P2-P3:1.5m、P3-P4:2.8m、P4-P5:1.8m、P5-P6:2.9m、P6-P1:2.8mである。柱穴掘り方の平面形は円形、楕円形があり、規模は直径24~40cm、断面形はU字状で、検出面からの深さは30~50cmである。また、全てのピットで柱材を検出した。遺物はP5掘り方覆土から土師器小片が4点出土し、そのうち高杯（2）、柱材（331~335）を図示した。

3) 土 坑

SK1（国版7・26・53・77）43O1・2・6・7グリッドに位置し、Ⅲb1層上面で検出された。覆土は单層。灰白色シルトで、金雲母粒子を多く含む。すぐ東を流れるSR1の覆土にも金雲母粒子を含むことから、この遺構の埋没過程にこの旧河川が影響を及ぼしたことが伺われる。土師器壺（3・4）などが出土した。

SK2（国版7・26・53・77）43・44Q・Rグリッドに位置し、Ⅲb1層上面で検出された。覆土は2層に分層でき、1層は暗灰黄色シルト、2層は灰白色シルトである。SK2とSK3は近接して存在するが、切り合い関係はない。土師器壺（5）などが出土した。

SK3（国版7・53）43R4・5グリッドに位置し、Ⅲb1層上面で検出された。覆土は3層に分層でき、1層は灰黄色粘質シルト、2層は灰黄褐色粘質シルト、3層は灰白色シルトである。2層から土器小片1点が出土しており、壺胴部片であると推測される。

SK102（国版8・53）50Q8グリッドに位置し、Ⅲb1層上面で検出された。覆土は4層に分層でき、全ての層に酸化鉄粒を含む。1層は灰白色砂質シルト、2層は灰黄色シルトで炭化物と灰を含む。3層は赤灰色シルトで、焼土もしくは腐植土層である。4層は黄灰色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

SK116（国版8・26・54・77）54・55Qグリッドに位置し、Ⅲb1層で検出された。主な覆土は、6層に分層でき、1・2層は炭化物と土器片を多量に含む層、3層は炭化物層、4~6層は無遺物層で、腐植土に類似した土であります。1・2層は検出面から深さ15cmを測る。3層の炭化物層は厚さ約5cmを測る。遺構地山のⅢb1層より下位のⅢb2b層も土坑と同様に凹んでいる。この凹みは、人為的痕跡を確認できず、自然によるものと判断した。遺物は1・2層から多量の土器片が炭化物と一緒に出土した。炭化物の中には径5cm大の木材も確認できる。出土遺物はほぼ完形になるまでに復元できるものばかりであり、出土状況はSR2aの土器集中地点（No1~6）と類似する。SK116は日常生活での廐棄土坑と非日常生活での埋納土坑の2通りの見解がある。類似する遺構はSR2aの土器集中地点（No1~6）・SX119・50Mグリッドの土器集中地点・SK1・2を挙げることができ、どの遺構も出土遺物はほぼ完形に復元できるもので、多量の炭化物を含むことも合わせてこれらの遺構には共通性が認められる。

4) 河 川 跡

a 概 要

北区、南区ともに1条ずつ確認された。北区の河川跡 SR 2 は、50 M～53 R グリッド付近にかけて、やや北に弧を描くように調査区を東西に横断する形で認められた。幅は広いところで約 10 m である。弥生時代から古墳時代まで継続していた自然流路で、この頃で弥生時代についても触れることとする。

南区の河川跡 SR 1 は調査区西端を 45 M グリッド付近とし、45 N グリッド付近で分流する。一本はほぼ真南に流れ、41 N グリッド付近で調査区外へ延びる。この流路は前年度調査で確認された河川跡とながる可能性が高い〔前川ほか 2005〕。もう一本は一旦南へ蛇行した後東へ流れ、43 S グリッド付近で調査区外へ延びる。

いずれの河川跡も、その形成は弥生時代にあり、それ以前の時期にはおそらく基本土層の V 層（ガツボ層）を形成した、非常に広範囲に及ぶ、湿地が形成されていたと考えられる。弥生時代にはその湿地が次第に狭くなり、流路となっていた状態と想像される。その後、次第に自然堆積によって埋没していく、古墳時代にはほぼ埋まりかけた状態であったと考えられる。また、流路内に太い流木が入っていることから、自然堆積といつても土石流のように一時に流路を埋めるような洪水が何度かあったことが想定される。東方の高坪山方面から流れ出た旧胎内川の一支部ではないかと考えられ、大きく西に向かって流れていたと推定される。

b 各 説

SR 1 (国版 24・27・54・77) 5 本のトレンチセクションにより堆積状況を確認した。

セクション A 42 M・N グリッドの約 9 m の東西セクションである。最深部はほぼ中央で標高 1.2 m となる。表土（I 層）もレンズ状に堆積しており、ごく最近まで河川の名残があったようである。覆土は 4 層に分層される。1 層は上面の凹凸がかなり激しく、耕作による踏み込み跡が顕著である。褐灰色シルトで、腐植木質細片を微量に含む。2・3 層はほぼ中央が下がるレンズ状堆積を示す。2 層は黄灰色シルトで、1 層よりも大きな腐植木質片を少量含み、3 層は黒褐色腐植土層で、1・2 層でみられた腐植木質細片を多量に含むとともに、太い流木も含んでおり、土石流などの強い流れにより、この河が埋没したことを探している。4 層は、3 層覆土のほかに、粒径 1 mm 以下の砂粒を含んでいる。これらの覆土は、古墳時代遺構確認面である III b1 層を削りこんでいる。いずれの覆土からも遺物は確認できなかった。

セクション B 44・45 O グリッドの約 8 m の東西セクションである。最深部はほぼ中央で標高 1.4 m となる。ここでは表土（I 層）は、ほぼ水平堆積である。ところどころに耕作によると思われる踏み込みによる凹凸もみられる。覆土は 3 層に分層される。1 層は上面の若干凹凸があり、耕作による踏み込みにより乱れている。暗緑灰色粘質シルトで、2・3 層は黒褐色腐植土層で、太い流木を含むかどうかで分層した。2 層には太い流木が含まれる。この場所においては流路最下部には砂層が認められなかった。水平に近いレンズ状堆積を示す。いずれの覆土からも遺物は確認できなかった。

セクション C 44 M・N グリッドの約 10 m の南北セクションである。最深部は 45 O グリッド杭付近で、ほぼ中央で標高 1.6 m となる。表土（I 層）が、耕作による踏み込みのため下面が乱れている。覆土は 3 層に分層される。1 層は表土の影響により上面に凹凸がある。黄灰色シルトで、腐植木質細片を少量含む。2 層は黒褐色粘質シルト層で、流木・腐食木質細片を縞状に含む。3 層は浅黄橙色砂層で、粒径は 1 mm 程

度である。レンズ状堆積を示す。いずれの覆土からも遺物は確認できなかった。

セクションD 44 O・Pグリッドの約9mの東西セクションである。最深部は東端部で、標高1.5mとなる。表土（I層）は、耕作による踏み込みのため下面が激しく乱れている。覆土は5層に分層され、レンズ状に堆積する。1層は表土の影響により上面に凹凸がある。黄灰色粘質シルト。2層は暗緑灰色粘質シルト層。3層は黒褐色腐植土層で、木質細片を非常に多く含む。4層は黄橙色粘質シルトブロックで、基本土層の古墳時代遺構面であるⅢ b1層のブロックと考えられる。5層は同じく黄橙色で、粒径1mm程度の砂層である。金雲母をやや多く含む。いずれの覆土からも遺物は確認できなかった。

セクションE 42・43 Qグリッドの約9mの南北セクションである。最深部は南端近くで標高1.5mとなる。覆土は3層に分層され、ほぼ水平に堆積する。1層は黄灰色粘質シルトで、腐植植物を少量含む。2層は黒褐色腐植土層で、木質細片を極多量に含み、太い流木も若干混じる。3層は黄橙色で、粒径1mm程度の砂層である。金雲母を非常に多く含む。いずれの覆土からも遺物は確認できなかった。

このセクションEより東の区画の43 Rグリッドにおいて、2層最下部ないし3層上部で土師器壺部破片が出土した。そのほかには、國化できたものとして土師器碗破片（13）があげられるに過ぎない。

以上のセクションの検討からその形成について述べる。存続時期は後述する弥生時代の遺構との切り合ひの関係および、SR 2aのセクションと比較検討すると弥生時代には存在せず、古墳時代に形成されたものとみられる。43 Rグリッドで土師器が出土していることから埋没もおそらく古墳時代のある時期以降に進んだものとみられる。しかし、表土・耕作土直下で河川の輪郭を確認できたことから、完全に埋没したのは比較的新しい時期であると思われる。

直径数十cmを超える太い流木も覆土に含まれていることから、埋没は時間をかけて徐々にというよりも、何回かの土石流のような大きな流れにより、一気に埋没していた可能性が高い。河川跡の覆土にほとんど遺物が含まれなかつたのもこうした要因があるのではないかと考えられる。

SR 2a・2b（図版24・25・27～29・44・54・55・77～79） 弥生時代から古墳時代まで継続して存在した自然流路である。51 Mグリッド付近では2本の流路の切り合いとして確認でき、南側の新しい流路をSR 2a、北側の古い流路をSR 2bとした。

Aセクション SR 2aのみ確認した。弥生期の覆土まで含めて4層に分層できた。最下層の4層は灰色中粒砂層で腐植木片を多量に含み、BセクションのSR 2aの5・6層に相当すると考えられる。古墳期の覆土はI・2層である。検出面から最も深いところでも30cm程度の深さしかなく、この深くなつた部分も上部は半分ほどが、現代の攪乱により掘り込まれてしまつてゐる。このように、古墳期にSR 2aは、Aセクション付近の位置ではほとんど河川が埋まつてゐた状態であったと思われる。1層は褐灰色粘質シルトで、古墳時代の遺物のほかに、中世の陶器片なども含むことから、表土の攪乱の影響も受けているものと思われる。2層は黒褐色粘質シルトで、粒径5～10mmの大木炭を多量に含むとともに、後に詳しく述べるが、古墳時代後期の土器片を多量に含んでいた。河川の埋没の最終段階に、投棄ないしは自然の流れ込みにより堆積したものと思われる。河川の埋没時期を考える上で重要な資料である。3・4層が弥生期の河跡と考えられる。3層は砂層であるが、色調および夾雜物により2層に細分できる。3a層は黄色粗粒砂で、所々に灰黄色粘質シルトが層状に入り、この層には弥生土器が含まれる。付近の攪乱の影響もあると思われるが、若干、土師器も含まれる。3b層は灰黄色中粒砂層で、腐植木質細片堆積層が互層をなす。遺物は含まない。4層は灰色中粒砂層で、腐植木質細片堆積層を互層に含む。遺物はこの層の最下部に含まれ、大きな破片が多い。断面形は弧状を呈する。河床の4層は基本土層のV層を切る。

SR 2a の出土遺物は、弥生土器は（164～198）、石器は（281～284）、不明土製品（198）などが出土している。とりわけほぼ完形の甕（180）と大型石包丁（284）は注目される。

Bセクション SR 2a と SR 2b の切り合いを確認できた。SR 2a は、検出面から約 90 cm の深さがある。覆土は 6 層に分層できる。1 層は灰色粘質シルトで、粒径 1 mm 以下の炭化物を微量含み、金雲母をやや多く含む。2 層は灰色砂と灰色砂が混じる層。3 層は黄褐色砂と灰色粘質シルトの混砂層。堆積時の流れの影響と思われる層の乱れが認められる。4 層は浅黄色砂層に、灰色砂が塊状に入る。5・6 層は灰色砂層で、自然流木を多量に含み、Aセクションの 4 層に対応すると考えられる。径 30 cm を超えるものも含む。

SR 2b は、平面的には 51 M グリッド付近にみられ、SR 2a に切られる。覆土は 3 層に分層される。すべて砂層である。1 層は灰色砂と褐灰色粘質シルトの混層で、2 層は灰色砂質シルト、3 層は灰色砂と褐灰色粘質シルトの混層である。断面形は弧状を呈する。河床の 4 層は基本土層の V 層を切る。遺物は、3 層から出土し、河床に突き刺された状態のものも認められた。

以上のセクションの検討から、SR 2a は弥生時代以前に存在しており、弥生時代中期頃から埋没が始まったと思われる。埋没過程は SR 1 と同様に、太い流木が含まれていたことから、洪水や土石流などで埋没していき、古墳時代後期に完全に埋没したものと思われる。

土器集中か所 53 Q・R グリッドにかけて、6か所の集中か所を図示した。これは SR 2a 覆土の 2 層の上部において、多量の土師器を中心とした遺物が出土し、碎片などを検出過程で取り上げ、大きな破片およびまとまった個体になりそうな破片を残して調査を進めていった結果、このような分布状態となったものである。出土状況としては、甕などの大型の土器で完形になる個体はほとんどなく、底部のみあるいは副部破片のみという状況である。かろうじて完形に近い状態で出土したものは、杯・椀類のような小形の土器であった。このように各集中か所において、完形になる個体が限られていることなどから祭祀など意図的に廃棄したものではないと考えられる。ただし注目されるのは、須恵器罐破片が 2 点、單孔の瓶底部破片が 1 点など特殊な土器が含まれていたことである。北区の 54 列以北、O 列以西の古墳時代の包含層でも、罐破片が確認されていることとも関係があろうと推測される。椀が多く出土したか所（No.1 地点）については、出土状況を図化した。出土遺物は、椀（14～36）、高杯（37・38）、壺（39～41）、瓶（42・43）、土師器甕（44～69）、須恵器杯身ないし杯蓋（70）、甕（71）、そのほかに砥石（72）などが出土している。

5) 性格不明遺構

SX104（図版 8・44・56・87） 50 Q グリッドに位置し、Ⅲ b1 層上面で検出された。遺構下部に柱材（338）を検出したため SX104 の周りを精査したが、住居跡や掘立柱建物等の遺構を検出出来ず、単独の遺構であるため性格不明遺構とした。柱材は約 24° 傾いて打ち込んでいる。覆土は 2 層に分層でき、全ての層に炭化物と酸化鉄を含む。1 層は黄灰色砂質シルト、2 層は黄褐色粘質シルトである。

SX118（図版 8） 53 Q・R グリッドに位置し、Ⅲ b1 層上面で検出された。東端を近代の搅乱溝によつて切られる。覆土が検出面まで上がっているところもあり、遺構上部がかなり削平されているものと思われる。覆土は 1 層であり、褐灰色シルトで、粒径数 mm～10 mm 大の炭化物を含み、底部付近に層状に炭化物を多量に含む。土師器小破片が出土したのみである。

SX119（図版 8・30・56・79） 52 O グリッドに位置し、SR 2a 直上で検出された。遺構直上の北東から南西にかけて土師器小片が出土したため、東西南北に断ち割りを入れると、河川跡（SR 2）を掘り

込み数個体の土師器（甕・瓶）が充填されていた。覆土は1・2層とも部分的に木の根に搅乱されていたが、上部の土師器を取り上げつつ掘り進めると、窪みの底面に土師器の甕1個体が半分に割れ、敷かれたような状態で検出された。遺物の出土状況からこの窪みを良好な一括遺物を伴う人為的な掘り込みと考え、遺構と認定した。遺構の性格は、祭祀に伴う埋納遺構と考えられる。

SX121（図版8） 55 Rグリッドに位置し、Ⅲ b1層で検出された。遺構のほとんどが調査区外にある。平面形は残存部分より梢円形と推測できる。出土遺物は図示できるものはないが、弥生土器の破片が数点出土している。土師器は確認できないが、検出面がⅢ b1層であることから、SX121を古墳時代の遺構であると判断した。

2 弥生時代の遺構

A 遺構の概要

1) 概 要（図版4）

弥生時代の遺構群は、その大部分が、南区の42～44 Oグリッドと北区の53～56 P～Rグリッドに集中して検出されている。ここでは、調査区全体を概観しつつ、弥生時代の包含層とこれらの遺構群を中心述べる。

本調査区の現況は水田であり、過去の水田耕作および場整備により弥生遺構検出面においても搅乱がはげしい。そのため当該時代の生活環境及び原地形は、往時の面影を残していないが、弥生時代中期にこの場所に住みついた人々の選地の仕方を遺構の位置と調査区内を流れる河川跡の関係によって知ることができる。42～44 Oグリッドでは、SR 1の西岸沿いに遺構が集中し、53～56 P～Rグリッドでは、河川跡の西岸の湾曲部を居住区とし、河川跡が調査区東側に張り出す湾曲部をSD122・125などの溝によってつなぐことにより、居住区を区画しているように思える。これらの居住区の立地は、北区と南区で様相が異なる。南区の居住区の42～44 Oグリッドは、標高2.1～2.2 mで周囲とあまり変わらないが、北区の居住区は2.5～2.65 mを測り、周辺部と比較すると10～20 cm標高が高い、いわゆる微高地である。また、北区においてP列以西のM～P列においても、SD125・127～129、SR 4によって55～57 M～Oグリッド、56・57 O～Qグリッドという2か所に区画がなされているように見える。この2か所においては、遺構は検出されておらず、畦畔は確認されていないが、水田などの生産域の可能性も疑われる。なお、出土遺物の年代観・系譜については、第Ⅳ章で言及するが、これらの遺構群は、弥生時代中期後半の遺構群と考えられる。（第21図）

2) 弥生時代の包含層と遺構群（第6・21図）

a 北区の弥生時代包含層と遺構群

弥生時代の遺構群の包含層は、北区の53～56 P～Rグリッドにおいて層序の観察から3層認識されている。本報告では、これらをH 1層、H 2層、H 3層とした。土層の特徴はいずれも灰白色粘質土で下層になるほど炭化物の密度が濃く、包含する遺物も多い。それぞれの包含層の下に遺構確認面、すなわち各層の直下から掘り込まれた遺構群を確認した。これらの関係は、言わば遺構確認面相互の重複関係であり、そのことから個別の遺構間に直接的な、あるいはほかの遺構を介した間接的な切り合い関係がなくとも、

面の異なる遺構間の重複関係を認めることができる。

層序・発掘所見から各面への帰属が明らかな遺構は、以下のとおりである（第21図）。H 1層直下の遺構は、SI 9～12・15などの平地式建物、SK126・132などの土坑、屋外炉ⁱの可能性のあるSX117・123・135のほかに、SX117周辺の54 Q・Rグリッドのピット群、55・56 Q・Rグリッドのピット群である。H 2層直下の遺構は、唯一の竪穴建物であるSI 8、平地式建物のSI14、周溝墓の可能性のある1号周溝遺構、土坑のSK130・134である。また、H 3層直下の遺構は、平地式建物 SI13、2～4号周溝遺構という周溝墓の可能性のある遺構群とその付属施設の遺構である。SD122・125・127～129などのほかの遺構群を区画する溝については、確認トレンチの土層の観察からH 1層直下の遺構と考えているが、これららの溝と包含層・各遺構との関係の詳細については、第VII章で再度言及する。なお、各層直下の遺構の同一面での重複関係については、各遺構図版及び各遺構事実記載を参照していただきたい。各面への帰属不明の遺構は、土坑のSK120、性格不明遺構としたSX111とその周辺のピットであるP112・113であり、これららは、発掘所見からⅢ b3層中で検出された遺構といいうのみである。最後にⅢ b2層の無遺物層をⅢ b2a層、Ⅲ b2a層に弥生土器片を含む層をⅢ b2b層としたが、この層は、遺構の確認されないか所にその広がりを持つ層で、遺構集中か所の各包含層との色調・含有物・標高等の比較からH 3層に相当する層と考えられる。

b 南区の遺構群

南区では、SI 1・3の2軒の建物跡とSK 4～8の土坑群、SX136の炭化物集中か所が、42～44 Oグリッドで集中して検出されている。これらの遺構群は、基本土層のⅢ b3層中で検出され、包含層の存在は、確認できなかった。建物跡と推定したSI 1・3は、周溝を持たず、遺構の中央部に炭化物集中か所と小規模ながらも柱穴と杭を有する。また、SK 4は柱穴が検出されなかつたため、建物跡としなかつたが、炭化物集中か所が土坑底面に検出され、建物跡の可能性もある。SI 1・3、SK 4については、SI 1・3が浅い掘り込みを持つ平地式建物、SK 4は、深い掘り込みを持つ竪穴建物とも考えられるが、これらの遺構群は石礫・剥片の出土量にくらべ土器の出土量も少なく、住居というよりも、作業小屋もしくは簡易な構造の建物と考えるのが妥当であろう。SK 5～8については、遺物の出土も少なく遺構の性格は不明である。

B 遺構 各説

1) 周溝を有する建物跡

a 平地式建物

SI 9（図版11-33-62-81） 56 P・Qグリッドに位置する。遺構はⅠ層を除去すると、すぐに検出できた。H 1層はほとんど残っていなかったが、部分的に残っていたH 1層との関係から、H 1層下面で検出できることを確認した。検出面はSR 4の上層にみられる暗黄褐色の細砂に似ているもので、少量の炭化物を含んでいる。これはSR 4から流れてきたものと考えられ、SR 4周辺に広がっているが、そのほかの所ではみられない土である。平面形は、やや不整形な隅丸方形を呈する。規模は、周溝外径で長径7.0m（推定）、短径5.9m（推定）、主軸方位は、N-10°-Wである。付属施設は炉・柱穴4基・周溝である。炉は中央よりやや南により位置し、平面形は不整円形で、径85cm（推定）×60cm（推定）である。火床は

やや凹んだ部分にあり、被熱部は褐色に変色し、酸化している。被熱部の厚みは約10cmである。覆土は黄褐色の焼土粒・炭化物層で、上層にはH1層が部分的に確認できる。掘り方は検出面から深さ約25cmを測る。覆土は灰オリーブ粘質土で、炭化物を少量含んでおり、Ⅲ b2b層より暗い。掘り方には地山の土とほぼ同様のものが埋め戻されており、上面には粘土を貼った痕跡は確認できなかったことから、火床は埋め戻した土の直上であったと推測される。が、から北東方向にかけて炭化物の集中する部分が広がっているが、これはが、からかき出された炭化物であると考えられる。

柱穴は南東方向に4基検出できた。東側は確認トレンチにより検出できなかった。平面形はいずれも円形を呈しており、径15~25cm、深さは検出面から15~25cmを測る。検出面は旧水路跡の搅乱を受けしており、搅乱の底面となる。主な覆土は、上層が灰オリーブ色粘質土、下層が灰色粘質土で、いずれも炭化物を多少の差はあるが含んでいる。P4はが、の東側に隣接しており、規模は径約10cm、深さ15cmを測り、ほかのものより小型である。また、長さは残存部で約14cm、径約5cmの柱材を検出した。

周溝は幅30~40cm、断面形はU字状で、深さは検出面から10~15cmを測る。覆土は黄褐色粘質土を主体として、炭化物を少量含んだもので、北側では部分的に細砂を含む。西側はⅢ b3層において周溝底面のなごりと推測できる部分を検出したのみで、全形は不明確である。新旧関係では南側においてⅢ b2b層下面で3号周溝造構の周溝を確認している。SI9が直接3号周溝造構を切っていないが、Ⅲ b2b層を間層に挟んでいることから、両者は層位的に時期差を確認できる。出土遺物はが、と炭化物集中範囲から発(141)が出土している。また、SI9の上層はは場整備等により搅乱を受けており、1層に巻き上げられている可能性が高く、I層として取り上げた(254)もSI9の可能性がある。また、搅乱から出土した(255)と図示はしていないが発(216)と同様のものも出土しており、これらは類似資料と考えられる。

SI10(図版12・33・63・81) 56Qグリッドに位置する。遺構はSI9と同様に、I層直下において検出され、が、の被熱面が露出していた。H1層はわずかに確認できる程度で、H2層がほとんど見えている状況であり、は場整備等による搅乱の影響を強く受けている状況が窺える。また、SR4から流出した細砂が北側において確認できる。平面形は、やや不整な楕円形を呈する。規模は、周溝外径で長径5.35m、短径4.45m、主軸方位は、N-30°-Eである。付属施設はが、・柱穴15基・周溝である。が、はは中央に位置し、平面形は不整円形で、径約60cmである。火床は検出面と同レベルで検出され、覆土は不明である。被熱部は褐色に変色し、酸化している。被熱部の厚みは約5cmである。掘り方は検出面より深さ10cmを測り、覆土・構造等はSI9と同様である。

ピットは周溝内側に大小2種類確認できる。大きい方のP1~5の5基が柱穴と考えられ、小さい方は柱穴とは考えにくい。ピットとし、P6~10の5基である。柱穴の平面形はいずれも円形を呈しており、径20~35cm、深さは検出面から30~40cmを測る。覆土は暗灰黄色粘質土を主体として、炭化物を少量と粗砂を多量に含む。P4はSII1・12と共有している可能性がある。覆土は暗灰黄色粘質土を主体として、炭化物を少量と粗砂を多量に含む。P6~10はが、の周囲に並んでいることから、が、に開削したピットであると推測される。P12・13・15は不明である。

周溝は幅20~30cm、断面形はU字状で、深さは検出面から10~15cmを測る。覆土は黄褐色粘質土を主体として、炭化物を少量と細砂を含む。細砂はSR4から流出したものと考えられる。新旧関係はP9がSII2の周溝を切っていることと、SII1の周溝はSII1とSII2の周溝を切っていることから、SI10が古いことを確認できる。SI9とは新旧関係を確認できないが、H1層下面で検出されているので、ほぼ同時期であると考えられる。遺物は周溝中から発1点(142)を出土しているのみである。類似資料とし

では 56 Q グリッドの I 層から出土しているものを挙げることができ、SI 9 と同様である。

SI11・12（図版 13・39・63・64・84） 56 Q・R グリッドに位置する。検出面・検出状況は SI10 と同様で、H 1 層下面において検出されたと推測される。SI11 と SI12 はほぼ同じ位置で重複するが、SI11 が約 1.2 m 西方向にある。SI11 が SI12 を切っており、建物が西側へ移動したことが想定できる。東側は調査区外で未検出であるが、用水路により消失している。SI11 と SI12 は 1・2 号周溝遺構を切っている。SI12 は SX123 を切っている。平面形は、梢円形を呈する。規模は、SI11 が周溝外径で長径 5.6m（推定）、短径 4.5m、主軸方位は、N - 81° - W である。SI12 が周溝外径で長径 6.2m（推定）、短径 5.1m、主軸方位は、N - 82° - W である。付属施設は SI11 と SI12 の周溝内において炉・柱穴・ピットがある。炉は SI 9・SI10 と同様の構造である。被熱部は褐色に変色し、酸化している。被熱部の厚みは約 10 cm である。掘り方は検出面から深さ約 20 cm を測る。覆土は灰オーリープ色粘質土で、炭化物を少量含む。炉は両者とも 1 号周溝遺構の上面につくられている。

ピットは SI 9・10 と同様に大小 2 種類のものを確認できる。大型のものは柱穴とし、小型のものはピットとする。柱穴・ピットは不規則に並んでおり、どれが SI11・12 のいずれかに伴うものか断定することは困難であり、また、共有している可能性も考慮して通し番号で図示した。柱穴は P 1～5 の 5 基で、ピットは P 6～8 の 3 基である。柱穴の平面形はいずれも円形を呈しており、直径約 20～25 cm、検出面からの深さは 15～30 cm を測る。覆土は暗灰黄色粘質土を主体として、炭化物を少量、粗砂を多量に含む。ピットの平面形はいずれも円形を呈しており、直径約 10 cm、検出面からの深さは 10 cm を測る。覆土は暗灰黄色粘質土を主体として、炭化物を少量、粗砂を多量に含む。SI11 または SI12 に属する柱穴・ピットは明確に断定できないので、位置関係などから推測する。まず、周溝の重複から P 1 が SI11、P 2 が SI12 に属する。西側には P 3 のみであることから、共有している可能性がある。P 4 は SI11、P 5 は SI12 に属すると推測する。P 6 は SI11、P 7 は SI12 に属し、両者とも炉に隣接していることから、炉に関連したものと想定される。P 8 に関しては不明である。周溝は SI11 が幅 15～35 cm、SI12 が幅 20～30 cm を測る。SI11・12 の断面形・深さ・覆土は同様で、断面形は U 字状を呈しており、深さは検出面から 10～20 cm を測る。覆土は黄褐色粘質土を主体として、炭化物を少量と細砂を含む。細砂は SR 4 から流出したものと考えられる。

遺物は SI12 の周溝から石器（270）が 1 点出土しているのみである。類似資料としては、SI 9・10 と同様に 56 Q グリッドの I 层出土のものが挙げられる。

SI13（図版 16・64・65） 55 R グリッドに位置する。H 3 層直下で検出された。周溝を有する平地式建物で、東側半分が調査区外へ延びている。検出された規模と平面形は、周溝外径で南北方向の径が 4.7 m で隅丸方形を呈すと推定される。周溝区画内部は平坦で付属施設は、炉と 3 基のピットが検出されている。炉は極端に西側に寄り、平面形は東西に長い不正五角形を呈し、規模は長径 46 cm、短径 36 cm である。掘り方を持ち、炉床は灰オーリープ色粘質シルトで、炉床の上面に厚さ 1 cm の灰赤色の火床面が観察された。3 基のピットは炉の付近北側に偏在する。ピットは、径約 20 cm の円形で深さ検出面から約 30 cm を測る。周溝の幅 22～36 cm、深さ検出面から 6～10 cm を測り、断面形は浅い皿状で、主な覆土は少量の炭化物を含む明緑灰色シルトである。これらの付属施設は、SI13 に帰属させたが、平面的な位置関係から単独の遺構の可能性もある。掲載可能な遺物は、出土していないが、周溝内より柳描文系土器が出土している。重複関係は、SI14・SX121 に切られる。

SI14（図版 16・64） 55 Q・R グリッドに位置する。H 2 層直下で検出された。東側半分が調査区外

へ延びており、南側の周溝の一部は、検出できなかった。検出された限りの規模と平面形は、周溝外径で北東～南西方向の径が4mを測る隅丸方形を呈すと思われる。周溝区画部は平坦で検出された付属施設は、2基のピットのみである。ピットは周溝区画部の北部と中央やや西よりに位置すると思われる。その規模は、径約20cmの隅丸方形と楕円形を呈し、深さは検出面から12～20cmを測る。周溝の幅は16～40cmで、深さは検出面から10cmを測る。断面形は浅い皿状で、主な覆土は多量の炭化物を含む明褐色シルトである。掲載可能な遺物は出土していないが、櫛描文系土器が出土している。重複関係は、SX121に切られ、SI13を切る。

SI15（図版14・65）54Q・Rグリッドに位置する。検出面はH1層下面と考えられる。周溝を有する建物跡で平面形は楕円形を呈する。規模は周溝外径で長径4.5m、短径3.7mを測る。主軸方位はN-19°-Wである。覆土は確認できず、平地式建物と考えられる。付属施設は、炉がほぼ中央に位置し、平面形は不整形で、長径1.6m、短径1.1mである。炉の上部が大部分削平され火床部分が薄く残るのみである。掘り方の深さは2cm程度である。火床は周囲の床面に比べ、やや粗い砂が含まれていた。

柱穴は建物跡の東半部で、周溝から40cm以内の距離で内側をめぐるように、検出面において5か所確認できた。中軸線より西側では柱穴を確認できなかったが、上層で検出された54R-P5は、位置的にこの建物に伴う柱穴であった可能性もある。P1は長径23cm、短径19cmの楕円形で深さは検出面から17cmを測る。断面形は階段状を呈す。中央の一段深くなっているところが、柱痕と考えられる。柱痕部分は直径約6cmである。覆土は単層で、黄灰色粘質シルトで、粒径1mm未満の細かい砂粒を多量に含み、粒径1～3mm大的炭化物を少量含む。P2は長径35cm、短径28cmの楕円形で深さは検出面から20cmを測る。断面形は台形状を呈す。覆土は2層に分層でき、1層はP1に共通である。2層は灰白色シルトで、酸化鉄を斑文状に多量に含む。P3は長径38cm、短径31cmの楕円形で、深さは検出面から19cmを測る。断面形はU字状を呈す。覆土は2層に分層でき、P2に共通する。P4は直径28cmの円形で、深さは検出面から19cmを測る。断面形は階段状を呈す。一段深い部分が柱痕と考えられる。柱痕部分は直径10cm程度である。覆土は単層で、P1に共通する。P5は長径46cm、短径37cmの楕円形で深さは検出面から32cmを測る。断面形は漏斗状を呈し、先端部が柱痕と考えられ、直径約10cmを測る。覆土は単層で、黄灰色粘質シルトで、粒径数mm～10mm大的炭化物を多量含む。

周溝は幅27～32cm、断面はU字～半円形で深さは検出面から14～19cmを測る。覆土は単層で、にぶい褐色シルトで、やや砂質を帯びる。

出土遺物は床面で、検出作業中に土器小破片が出土したのみである

b 壁穴建物

SI1（図版9・33・57～59・81）42・43N・Oグリッドに位置する。III b3層中で検出された。浅く掘りこぼめられた建物で、竪穴建物と平地式建物の中間的なものと考えられる。西側を確認トレンチによって切られているが、平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径が残存部分で330m、短径335mを測る。主軸方位はN-63°-Wである。付属施設は炉と推定される砂と炭化物集中か所、柱穴5基、溝がある。炉と推定される砂と炭化物集中か所の平面形は楕円形で、掘り方は確認できなかった。規模は、長径が残存部分で1.90m、短径0.95m、厚さは床面より約10cmを測る。層位は2層に分層でき、1層は灰オリーブ粘質土に粗砂と径5mm程度の炭化物を含み、2層は灰オリーブ粘質土に粗砂と径1～2mm程度の炭化物を含む。砂層は炭化物を多量に含んでいる部分とそうでない部分とに分かれ、砂層全体の範囲は長径2.90

m、短径 1.80 m を測る。炭化物を多量に含んでいる砂層はひとまわり小さくなり、長径 2.20 m、短径 1.40 m を測る。炭化物を多量に含む範囲の中でも、特に炭化物が極多量に含まれていた部分が炉の中心と考えられ、2か所確認できた。範囲は長径 40 ~ 50 cm を測る。北側の炭化物の中から骨片が出土した。

柱穴は建物内の南側に 2 基 (P 4・5)、建物外に 3 基 (P 1~3) 検出した。平面形は円形で、径 10cm ~ 20cm で、深さは検出面から 10 ~ 20cm を測る。P 1・3 は掘り方を持たず、幅 5 cm 程度の杭状の木材を検

出した。P 3 の木材は図示している (339)。P 2・4 は掘り方を持ち、同様の杭状の木材を検出した。P 5 は木材が検出できず、覆土に粗砂が混入していた。溝は北側に確認できる。覆土は灰色粘質土ブロックを多量に含むものである。断面形は弧状を呈する。機能等は不明である。切り合い関係は SI 3、SX136 を切っている。出土遺物は亮 2 点 (138・139) である。

SI 3 (図版 10・33・39・44・57・59・60・81・84・87) 43 O グリッドに位置する。Ⅲ b3 層中で検出された。SI 1 と同様で、浅く掘りくぼめられた建物で、竪穴建物と平地式建物の中間的なものと考えられる。平面形は SR 1 により切られているが、残存部分は楕円形を呈する。規模は、長径 4.70 m、短径は残存部分で 2.60 m を測る。主軸方位は N - 18° - E である。施設は炉跡とそれに伴うピット・柱穴を検出した。床面は検出面から深さ約 5cm を測る。明確な貼床をもたないが、遺物が面でひろがりをもつこと、柱穴・土坑がすべてこの面において検出できることから床面であると判断した。

柱穴は 11 基検出した。平面形態はすべて円形を呈する。径約 10 ~ 25cm、深さは床面から 15 ~ 25cm を測る。P 1・2・4・6・9・11 の 7 基は断面において柱痕を確認でき、その痕跡から直徑約 12 ~ 20cm の木材を柱として使用していたと推測できる。掘り方覆土はⅢ b 相当層が主体で、灰色粘質シルトを粒状に少量含んだ土である。柱穴は不規則に並んでいる。炉跡は、平面形態が楕円形を呈しており、長径 50 cm、短径 30 cm、深さは床面から 15 cm を測る。浅い掘り方をもち、覆土は 2 層に分けることができる。1 層はⅢ b3 相当層を主体として、灰色粘質シルトを粒状または塊状に少量含んだ土の中に炭化物と遺物を多量に含んでいる。2 層は 1 层と同様の土であるが、灰色粘質シルトを多量に含む土からなり、炭化物と遺物を含まない。炉跡は浅く掘りくぼめた後、土を埋め戻し、その上に粘土を貼ったことが確認できる。また、酸化した面が 2 面確認でき、それらが西から東へずれていることから、少なくとも 2 回以上の作り替えを想定できる。ピットは炉跡の周囲に 4 基隣接して検出された。ピットは円形 (P10・12) と楕円形 (P 9・11) で、円形の方は、径 15 ~ 20 cm、深さ 5 ~ 10 cm を測る。覆土はⅢ b 相当層の中に炭化物を多量に含んだもので、炉から出た炭化物・灰などを廃棄するためのピットと考えられる。また、炉跡の南側には小石と砂粒が厚さ 5 ~ 10 cm 堆積し、長径 60 cm、短径 45 cm の楕円形に広がっている。南北断面を観察すると、小石・砂粒の層が炉から伸びていることを確認でき、これらは炉からかき出されたものであることが分かる。この建物は南東角において SI 1 に、東半分を SR 1 により切られる。また、南東には炭化物集中か所を確認でき、これを切っている。出土遺物は亮 (140) と石器 (261・262)・剝片等 (263・264・266 ~ 269) がある。SI 3 では (264) のように楔形石器が出土していることと、多量の剝片等が出土していることから、石器製作の場を想定できる。

SI 8 (図版 15・66・67) 55 Q・R グリッドに位置する。H 2 層直下で検出された。浅い掘り方を有する竪穴建物で、規模は長径 6.2 m、短径 2.5 m、平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈す。床面は厚み 0.5 ~ 3 cm の褐灰色粘質シルトでしまっており、炉を中心分布し周縁部にはない。付属施設は、炉とピットが 6 基検出されている。炉は、中央部東側寄りに検出され、規模は長径 55 cm・短径 40 cm、平面形

は隅丸不正方形を呈す。掘り方を持ち、炉床は明褐色シルト（4層）で部分的に炭化物の混入した暗赤褐色土（5層）が観察された。炉床の上面に厚さ1～2cmの厚みを持つ橙色の火床面が観察された。炉床内に径10cmの灰白色粘土の側面の焼けた円柱が2本並んで検出されているが、火床面の上の焼土層（2層）を炉の上屋根の崩落層とすれば、これらの粘土の円柱は上屋根を支えた支柱と考えられる。ピットは、2基1組で東・中央・西側にそれぞれ検出されている。各ピットは、径15～30cmの円形及び楕円形を呈し、深さは検出面から25～30cmを測る。周溝の幅は、25～35cmで深さは検出面から10cmを測る。重複関係は、SH14、SK130・134に切られ、SH13、1・2号周溝遺構を切る。掲載遺物はないが、土器は櫛描文系土器が出土している。

2) 周溝遺構

a 概要

周溝遺構は、55・56Q・Rグリッドに2基ずつが重複して計4基検出された。いずれも周溝外径で長径が8～10mの南北方向に長い長楕円形の周溝がめぐり、周溝内部に炉および上屋根を支えるに十分な柱穴を持たず、建物跡と認定しなかった周溝を有する遺構群である。これら4基のうち1号周溝遺構のみが、北部に開口部をもつことが確認されており、2・3号周溝遺構には、周溝内のやや北寄りに土坑が検出されている。

b 各説

1号周溝遺構（図版17・67・68・81・83・85） 55・56Q・Rグリッドに位置する。H2層直下で検出された。周溝の平面形・周溝区画部は長楕円形を呈し、規模は周溝外径で長径10.2m、短径5.8mを測り、主軸方位はN-50°-Eである。周溝は北部で約1.8m途切れ、開口部を有する。周溝の幅は、0.3～1.1mを測るが、南部と北部の屈曲部で最もその幅が広くなる。深さは、検出面から20～25cmを測り、断面形は逆台形状である。主な覆土は、少量の炭化物を含む灰白色粘土層だが、南部の屈曲部にはほかの層にくらべ、炭化物を多く含む層（9～11層）が観察された。周溝内は、ほぼ平坦で、明確な盛り土の痕跡は、確認されていないが、当該遺構の中央やや西よりに検出された長径1.5m、短径1mの炭化物集中範囲が周囲にくらべ若干標高が高い。この炭化物集中範囲の下には掘り込みもなく、焼土面も含め炉などの施設は検出されていない。ピット（柱穴）は2基検出され、径20～30cmの円形で深さ確認面から15～24cmを測る。柱根（痕）が遺存し、明確な掘り方を有するのは、P1のみであった。主な覆土は、炭化物を含む灰白色・褐色である。これらのピット（柱穴）は、この1号周溝遺構を建物跡と考えると、上屋根を支えるには規模が小さく、炉などの施設が検出されなかったことから建物跡としなかった。土器は周溝区画部内から（148・149）、石器は直上から出土の（296～299）を掲載した。重複関係は、SI8に周溝南部を切られ、2号周溝遺構の周溝の大部分を切っている。

2号周溝遺構（図版17・67・69・81・83・85） 55・56Q・Rグリッドに位置する。H3層直下で検出された。周溝の平面形・周溝区画部は長楕円形を呈し、検出された限りにおける規模は、周溝外径で長径8.2m、短径は計測不能。主軸方位はN-54°-Eである。周溝は、北部で約1.8m途切れ開口部を有すると思われる。周溝の幅は、30～60cm、深さは検出面から15cmを測り、断面形は浅い皿状である。主な覆土は、微量の炭化物を含む灰白色粘土である。周溝内は平坦で炉及び柱穴は検出されていないが、周溝内北部で長径1.4m、短径1.2mの不整隅丸方形の土坑が検出されている。土坑の断面形は逆台形状で

底面は平坦であり、覆土は褐灰色で中量の炭化物を板状に含む。土器は周溝区画部内から（223～237）、周溝から（150）、石器は周溝出土の石鏃（273）、直上出土の石鏃・磨製石包丁（300～305）を掲載した。重複関係は、1号周溝遺構に切られる。

3号周溝遺構（図版18・33・37・42・70・71・81・85）55・56Qグリッドに位置する。H3層直下で検出された。周溝の平面形・周溝区画部は、長楕円形を呈し、規模は周溝外径で長径10.6m、短径4mを測り、主軸方位は、N-32°-Eである。周溝の幅は24～44cmで、深さは検出面から15～20cmを測り、断面形は半円状である。主な覆土は、極微量の炭化物を含む灰白色粘質土である。付属施設は、平坦な周溝区画部内に土坑1基、ピット2基が検出された。土坑は周溝区画部中央からやや北東部に位置し、長径3.4m、短径1.5mの不正楕円形の掘り方を持ち、規模は長径1.56m、短径0.8m、平面形は長方形を呈す。断面形は、掘り方、土坑ともに逆台形状であり、掘り方部は、検出面から深さ16～24cmを測り、土坑は、16～20cmを測る。土坑は、掘り方部の中央やや北側に位置し、直上の北西から南西方向にかけて長径330cm、短径144cm、厚み約1cmの炭化物層の広がりが観察された。炭化物層の分布密度には濃淡があり、北西部が濃く土層断面で表現可能な箇所である。南北土層断面の土坑南壁には、幅2～3cmの木質腐植土が底面から上端まで直線状に観察された。土坑直上及び土坑内から掲載可能な遺物は出土しなかつたが、以上の発掘所見からこの土坑は掘り方を有する木棺と推定される。ピットは、周溝区画部中央やや南寄り、南西部隅に検出された。P1・2は、径30cmと20cmの円形及び隅丸三角形を呈し、深さは確認面から16cmと30cmを測る。炉は、検出されていない。土器は周溝区画部内から（220～222）、土坑の直上から（152）、石器は直上から出土の（306～309）を掲載した。重複関係は、4号周溝遺構を切る。

4号周溝遺構（図版18・37・42・70・83・85）55・56P・Qグリッドに位置する。H3層直下で検出された。周溝の平面形・周溝区画部は長楕円形を呈し、検出された限りにおける規模は、周溝外径で長径10.3m、短径5.2mを測り、主軸方位は、N-26°-Eである。周溝の幅は8～30cm、深さは検出面から15～18cmを測る。周溝区画部内は平坦で、付属施設は検出されていない。土器は周溝区画部内から（238～241）、石器は直上から出土した（310）を掲載した。重複関係は3号周溝遺構に切られる。

3) 土 坑

SK4（図版20・33・39・60・81・84）Ⅲb3層で検出された。層位は4層に分層でき、1層はⅢb3層相当の中に炭化物粒を少量と遺物を多量に含む。2～4層は炭化物集中範囲に堆積する。炭化物集中範囲は1層を除去した後に検出でき、確認トレンチに壊されているが、2/3程度残存する。残存部分から推測すると、平面形は楕円形で、規模は不明である。断面形は弧状で、深さは炭化物集中範囲の検出面から10cmを測る。覆土は2層が炭化物層で、厚みは5cm程度である。3層は炭化物と焼土粒の層で、厚みは5cm程度である。4層は1層と似ているが、炭化物粒をやや多量に含んでいる。同層は多量の炭化物・焼土粒などが堆積していることから浅い掘り方をもつ炉とも考えられる。周辺に柱穴などの施設を確認できないことから、建物とは考えにくく、遺構の性格等は不明である。出土遺物は亮片が東側にまとまって出土し、胴部下半を復元できた（153）。

SK5（図版20）Ⅲb3層中で検出した。平面形・規模・主軸方位は西側半分を確認トレンチに切られしており、不明である。平面形は残存部分より楕円形であると推測できる。

SK6（図版20）Ⅲb3層中で検出した。

SK 7 (国版20) III b3 層中で検出した。

SK 8 (国版20) III b3 層中で検出した。出土遺物は覆土中から確認できなかったが、この直上に人頭大の河原石が出土した。河原石の性格等は不明である。

SK120 (国版22) 55 P グリッドに位置する。III b3 層中で検出された。覆土は単層で、褐灰色砂質シルトで、粒径1mm程度の炭化物を含む。出土遺物は、小破片がわずかに出土したのみである。

SK126 (国版21・33・39・71・81・84) 53 R グリッドに位置する。検出面はH 1 層下面と考えられる。覆土は2層に分層でき、1層は浅黄色シルトで、酸化鉄を斑紋状に含む。2層は黄灰色シルトで、やや粘性を帯び、木炭を多量に含む。底面において柱穴そのほかの施設の確認を行ったが確認できず、駄目押しでさらに掘り下げて確認を行ったが施設の確認はできなかった。弥生土器(154・155)、石器(275～279)が出土した。特筆すべき点は、2層から剝片が多く出土し、その剝片の一部が接合(278)したことである。底面で施設は確認できなかったものの、何らかの特別な意味を有する土坑であった可能性が高い。SK118に切られ、SD122 を切る。

SK132 (国版21・72) 54 R グリッドに位置する。H 1 層下面で検出された。覆土は2層に分層でき、1層は灰黄色砂質シルト、2層は黄灰色シルトで、2mm程度の炭化物をやや多く含み、10mm大の大きな粒も微量含む。弥生土器破片が少量出土しているが、類別可能な破片は認められなかった。

SK134(国版22・33・72・81) 55 P グリッドに位置する。H 2 層直下で検出された。長径1.65m、短径1.2mの東西に長い不正楕円形を呈し、深さは検出面から12cmを測る。SI 8 を掘削中の床面上で検出されたが、SI 8 の周溝を切っていたため SI 8 の付属施設とはしなかった。主な覆土は、暗灰色で多量の炭化物を含む。出土遺物は、弥生土器片のうちから(156)を掲載した。加熱性の強い小形短頸壺で土坑の西壁際に出土した。検出層位は、1層の上部であり供獻・埋納土器と考えられる。当該遺構は、SI 8 の中にほぼ納まるため SI 8 が廃棄される時期に掘られた可能性もある。重複関係は、SI 8 を切るのみである。

4) 溝 跡

SD122 (国版23・72・81) 53 Q・R グリッド及び54 P・Q グリッドに位置する。H 1 層直下で検出された。53 R グリッドで約150° 折れ曲がっている。覆土は2層に分層でき、1層は灰オリーブ色シルトで炭化物を含む。2層はオリーブ黒色粘質シルトで炭化物を層状に含む。遺物は弥生土器で少破片が多く、大半が1層中から出土した。図化したものは土器(157・158)、石器(280)である。

SD125(国版23・72・81) 55 M～57 Q グリッド付近に位置する。H 1 層直下で検出された。55 O グリッドで約120° 折れ曲がっている。東側は扇状に広がり SR 4 と接する。西側は攪乱で切られているため、遺構範囲は不明である。覆土は6層に分層でき、1層は灰白色砂質シルトで炭化物を含む。2層は灰色粘質シルトで炭化物を含む。3層は灰色粘質シルトで炭化物と明黄褐色砂を含む。4層は灰色粘質シルトと灰色砂質シルトの混層で、黄褐色砂を含む。5層は黄灰色砂、6層は褐灰色粘質シルトで腐植木質片、炭化物及び灰色粘質土ブロックを含む。この層は SR 4 が埋まっている過程で同時に堆積している。断面では確認できなかったが、遺構内の落ち込み部分では SD127～129 で確認された黄灰色砂が確認できた。遺物は弥生土器の少破片が多く、56 P グリッドで下層から集中して出土した(159～162)。重複関係は SR 4 とほぼ同時期で、SD127・129 より古い。

SD127 (国版23・73) 55 M～57 Q グリッド付近に位置する。H 1 層直下で検出された。北東部分は確認トレント 57 O グリッド部分で確認出来ないため、58 N グリッドに伸びるか、57 N グリッド内で終

結すると思われる。南側は搅乱が入り込んでいるため、遺構範囲は不明である。覆土は2層に分層でき、1・2層とも褐灰色砂質シルトであるが、2層のほうがより砂質である。1層は上面の凹凸がかなり激しく、耕作による踏み込み跡が顕著である。2層は下部に黄灰色砂を含む。土層観察よりSD129と同時期のものと考えられる。遺物は出土しなかった。重複関係はSD125より新しい。

SD128(図版23・73) 57 N・Oグリッドに位置する。H1層直下で検出された。覆土は2層に分層でき、1・2層とも褐灰色砂質シルトであるが、2層のほうがより砂質である。2層の下部に黄灰色砂を含む。遺物は出土しなかった。

SD129(図版23・73・81) 56 O・Pグリッドに位置する。H1層直下で検出された。覆土は単層、褐灰色シルトで下部に黄灰色砂を含む。遺構の標高を見ると、北西から南東にかけて低くなっている。出土遺物は陶化した甕(163)のみである。重複関係はSD125より新しい。

5) 河川跡

この時期の河川跡は、すでに古墳時代の遺構で述べたSR2a・bと、弥生遺構面で確認できたSR4の計3条で、いずれも北区で確認された。ここでは、SR2a・bはすでに触れているので、SR4についてのみ触ることとする。

SR4(図版24・36・82) 57 Qグリッドを中心として確認された。東は調査区外北東方へ伸びていたとみられる。西部はSD125とつながっている。流路方向など詳細は不明である。SD125との関係は、SR4と同時に存在していたものと考えられる。SR4が埋り始めた後(覆土7層)、SD125と共に通する覆土(5層)をもっていることから同じような状況で埋没していったものと考えられる。底面まで掘り切ることはできなかったものの、断面形は緩やかな弧状を呈しているものと考えられる。出土遺物は、弥生土器甕(199)のほか、器種不明破片(200~203)、剝片などが出土している。

6) 性格不明遺構

SX111(図版22・40) 50 Nグリッドに位置し、IIIb3層精査中に検出した。検出面にて焼土を確認したが、埋没後に形成された搅乱土より新しいものであることを土層観察にて確認したため、本遺構と関連性のないものと判断した。覆土は1層でIIIb1層に近似した灰白色土が主体をなす。遺物は覆土より土器細片、石器(285~287)が出土した。

SX117(図版21・36・75・82) 54 Qグリッドに位置する。H1層下面で検出された。層位は3層から構成されており、1層は暗灰黄色粘質土で、炭化物をやや多量含む。2層は厚さ1cm程度の炭化物を含む。3層は1層とよく似ており、部分的に粗砂を含む。焼土などは確認できないが、2層の炭化物の直上には甕の副部片を確認できる。これらの土器片は炭化物の上面に内面を上方に向か、敷き並べられた状態で検出された。機能等は不明であるが、多量の炭化物などから炉跡のような機能を備えていたと考えられる。3層は掘り方覆土と考えられる。地山が粘性の強い土で、水分を多量に含むことから、一度掘り返して乾燥した土を埋め戻し、炉として使用していたと推測する。出土遺物は1層から甕(204・205)と2層上面の甕の副部片が出土した。

また、この周辺にはビットが16基検出されている。SX117は当初単独の炉跡状の遺構と考えていたが、積極的に建物として考えると、これらのビット群との関連を考慮しなくてはならない。SX117に隣接してSI6とSI15がある。P1~6はSI6に関連したビットであると考えられる。P13がP16を切っており、

これらのピットはどちらかがSI15のピットと考えられるが、明確に分けることはできなかった。SX117に属するピットはP 7～16と考えられる。規模に大小あるが、P 7とP 8は小型で柱穴とは考えにくい。主な覆土は、暗灰黄色粘質土に粗砂・炭化物を含む。PI2からは土器片（206）が出土している。SX117は周溝を確認できなかったが、周溝を有する平地式建物である可能性がある。

SX123（図版21・75・84） 56 R グリッドに位置する。H 1層直下で検出された。上部が搅乱されているが、掘り込みをもった遺構で、南西部に長径20 cm・短径15 cmの楕円形、北東部に長径1.1 m・短径0.45 mの偏平な楕円形、長径20 cm・短径15 cmの楕円形の三か所の火床面が検出されており、火床などは敷設されておらず、遺構の底面で直接火がたかれている。遺構の性格は、周間に建物群が検出されていることから、屋外炉ではないかと考えられる。掲載可能な遺物はないが、覆土内から弥生土器片が出土した。

SX136（図版4・40・85） 42 O グリッドに位置する。検出面はⅢ b3層である。炭化物と小石・砂粒の広がりを確認でき、小石・砂粒は炭化物から北側にむかって扇状に広がる。周間に建物の施設などを検出できなかったことから、建物跡とは考えにくい。これと同様のものはSI 3の炉跡周辺からも検出されていることから、屋外炉の可能性を指摘するに留める。SI 1・3とSI 1によって切られている。また、東側に炭化物集中範囲を検出したが、炭化物のみで、施設なども検出されなかつたことから、自然によるものであると判断した。出土遺物は炭化物層中から石礫（288）が出土した。

3 下層の調査

A 調査の概要

下層の調査は上層の調査が終了したグリッドから順次行った。上層の調査の前に、20 mごとにVI a層上面まで南区・北区とも東西・南北に幅1 m、深さ1 m程度の確認トレンチを掘削しており、その際繩文時代の包含層の存在は確認されず、また、遺構も平面や土層セクションの観察において検出されなかつた。それ故、下層の調査は理文事業団の指導により、調査区全体の約3割を目途とした部分調査に切り替えた。

調査は第9図のようなトレンチを設定して行った。トレンチ幅はバックホーを使用するため、6 mに設定し、約20 m間隔で調査を行った。南区で3本、北区で4本の計7本設定した。トレンチ番号は南区の東端をトレンチ1とし、西に向かって順番に番号を付け、北区も同様に東端をトレンチ4とし、西に向かって番号を付けた。トレンチ4は調査の工程上、L字状に掘削をしている。また、トレンチ5～7までは調査の工程上、2回に分けて掘削しているため、掘削深度が異なっている。トレンチの掘削深度は地表面から平均して2.0 m程度とし、X層相当層が確認できるまで掘削を行ったが、遺構・遺物の検出はなかつた。

B 調査の経過

以下、各トレンチの調査成果を列記する。

トレンチ1は41～45 R グリッドまでの約45 mを掘削した。掘削深度は平均して標高0.6 mである。遺構の検出、遺物の出土はなかつた。

トレンチ2は41～45 P グリッドまでの約45 mを掘削した。掘削深度は平均して標高0.4 mである。42 P グリッドより北側ではVI a層中に粗砂や流木などがブロック状に混入している。遺構の検出、遺物の出土はなかつた。

トレンチ3は41～45 N グリッドまでの約45 mを掘削した。掘削深度は平均して標高0.3 mである。

45 N グリッドより南へ4 m の場所から南側は VI a 層を切るように埋没河川の存在が見られた。埋没河川はトレンチの掘削深度より深いため、埋没河川の規模は不明である。土層観察では、埋没河川が埋まつた後に V 層が堆積していることを確認した。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

トレンチ 4 は 47 M ~ R グリッド、48・49 Q・R グリッド、50・51 Q グリッド部分の約 85 m を掘削した。掘削深度は平均して標高 0.9 m である。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

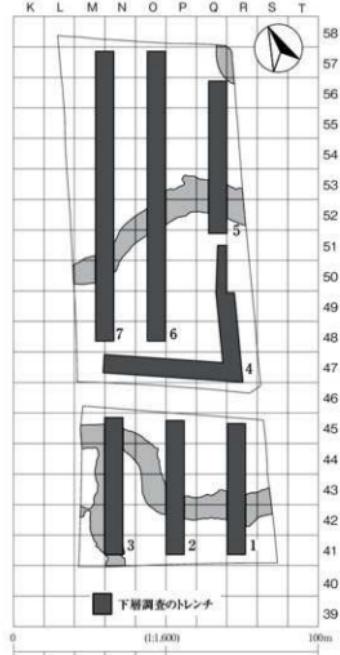
トレンチ 5 は 52 ~ 57 Q グリッドまでの約 50 m を掘削した。掘削深度は平均して標高 0.0 m である。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

トレンチ 6 は 48 ~ 57 O グリッドまでの約 95 m を掘削した。掘削深度は平均して標高 0.2 m である。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

トレンチ 7 は 48 ~ 57 N グリッドまでの約 95 m を掘削した。掘削深度は平均して標高 0.2 m である。56N グリッド付近の III b3 層と IV 層間においてガツボ層が見られた。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

すべてのトレンチにおいて V 層が確認された。そのため、この付近は広範囲に渡って V 層が広がっているものと思われる。トレンチ 3 で見られた埋没河川はトレンチ 2・4 には見られないため、調査区の東側には広がらないものと思われる。トレンチ 2 で見られた VI a 層中の粗糸や流木はほかのトレンチ内では確認できなかったため、トレンチ 2 内で収束するかもしれない、埋没河川の影響により混入したものと思われる。

トレンチ 7 で見られたガツボ層は 55・57 N グリッド及び 56 P グリッドでは確認できなかったが、56 N グリッドの西側掘削時に確認できたため、ガツボ層は西側に伸びていると思われる。



第8図 下層トレンチ位置図

第V章 遺 物

1 古墳時代の土器・石製品

A 概 要

1) 出土遺物の概要

古墳時代の遺物は、土師器・須恵器・石製品がある。遺物は主に包含層とSR 2 aから出土しており、SR 2 aからはまとまった状態で出土した。遺構ではSK116とSX119から多量の遺物が出土している。出土遺物の分布（大グリッド）をみると、土師器と須恵器ではその分布に差異がみられる。土師器の分布は遺構の分布とおよそ一致しているのに対し、須恵器では西側に集中してみられ遺構の分布と一致しない。出土量は浅箱（深10cm×幅34cm×奥行54cm）で、土師器20箱・須恵器2箱・石製品1箱である。年代は5世紀中葉から6世紀中葉を中心とする。以下では、器種分類を行い（第9・10図）、各遺構及び河川・包含層出土の遺物について記す。時期については第Ⅷ章で述べることとする。

2) 器種分類

分類の対象となるのは土師器（黒色処理を施されたものも含む）と須恵器である。分類は3段階設定し、大分類（器種）、中分類（A・B・C…）、小分類（a・b・c…）とする。大分類は椀・高杯・器台・甌・壺・甕・手づくね土器などの器種に基づき、中分類は大分類の中での器形を主たる分類とし、小分類はハケメ・ミガキ等製作技術による分類とする。また、法量により小さい方から順にⅠ・Ⅱ・Ⅲ…とする。須恵器もこれに準じる。

a 土 師 器（第9図）

椀

全体を復元できるもの少ないので、主に口縁部の形態により分類を行った。大きく分けると、①口縁部が内湾するもの、②口縁部が外反するもの、③口縁部が外反し、口縁部と体部の境に稜をもつものの3種に分類できる。

A：口縁部が内湾するもの。全体を復元できるものでは底部に不定方向のヘラケズリを施し、底部は平底に近い丸底を呈する。調整等により2種に分類できる。

a：黒色処理を施さないもの。

b：内面に黒色処理を施し、ハケメまたはヘラナデを施す。

B：口縁部が強く外反し、短いもの。調整等により3種に分類できる。

a：黒色処理を施さず、内外面ともにミガキを施すもの。

b：黒色処理を施さず、体部外面にハケメ、体部内面にヘラナデを施すもの。

c：内面にミガキと黒色処理を施すもの。法量により2種確認でき、Ⅰ類・Ⅱ類に分類できる。

C：口縁部の外反が弱く、口縁部が短いもの。調整等により2種に分類できる。

a : 内面と外面の口縁部～体部上半にミガキを施し、体部下半にヘラナデを施すもの。法量により3種確認でき、I～III類に分類できる。

b : 内面にミガキと黒色処理を施し、外面はヘラナデを施すもの。

D : 口縁部が弱く外反し、長いもの。調整等により2種に分類できる。

a : 黒色処理を施さず、外面にヘラナデを施すもの。

b : 内面と外面の口縁部～体部上半にミガキと黒色処理を施すもの。法量により3種確認でき、I～III類に分類できる。

E : 口縁部がわずかに外反し、口縁端部を丸くおさめるもの。内面にミガキと黒色処理を施す。

a : 黒色処理を施さないもの。調整等は不明。

b : 内面にミガキと黒色処理を施すもの。

F : 口縁部がわずかに外反し、口縁端部を面取りするもの。調整等は不明。

G : 口縁部は体部から直線的に立ち上がるるもの。体部外面はヘラナデ、内面にはナデを施す。

H : 口縁部～体部にかけて大きく湾曲し、断面形態がS字状を呈するもの。口縁端部は面取りする。内外面ともにナデを施す。

I : 口縁部と体部の境に棱をもち、口縁部の傾きが小さく、口縁端部を面取りするもの。

J : 口縁部と体部の境に棱をもち、口縁部の傾きが小さく、口縁端部を丸くおさめるもの。内面と外面の口縁部から体部上半にミガキと黒色処理を施す。体部外面は不明。

K : 口縁部と体部の境に棱をもち、口縁部の傾きが大きく、口縁端部を丸くおさめるもの。内面と外面の口縁部～体部上半にミガキと黒色処理を施し、体部外面にはヘラナデを施す。法量により2種確認でき、I類・II類に分類できる。

高 杯

杯部は確認できないので、脚部のみで4種に分類した。

A : 脚部が緩やかに外反し、裾部で大きく外反するもの。調整等により3種に分類でき、また、法量により、2種確認でき、小さなものをI類、大きなものをII類とする。

a : 黒色処理を施さないもの。II類のみ確認できる。

b : 杯部内面には黒色処理を施し、脚部外面にはヘラナデを施すもの。法量により2種確認でき、I類・II類に分類できる。

c : 杯部と脚部の境にはナデの痕跡を明瞭に残し、杯部内面には黒色処理を施すもの。I類のみ確認できる。

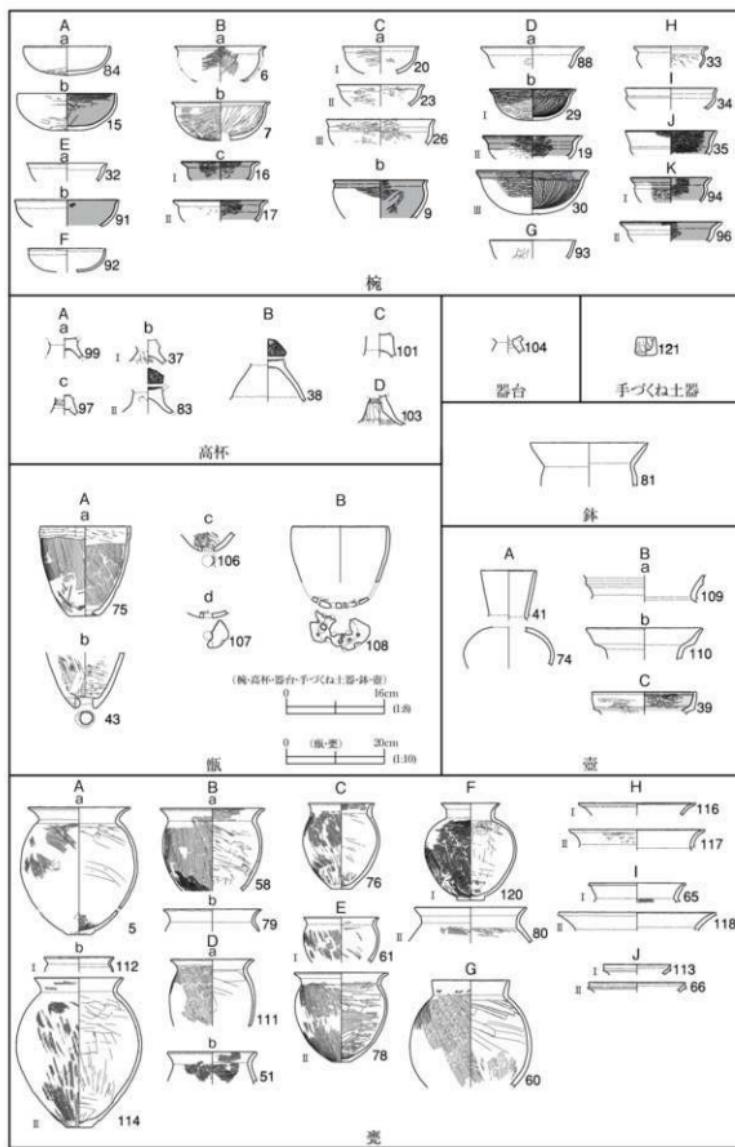
B : 杯部と脚部の境がやや大きく、脚部が中央でふくらむもの。杯部内面にはミガキと黒色処理を施す。

C : 杯部と脚部の境が筒状を呈しており、厚みのあるもの。

D : 脚部が緩やかに外反し、裾部で大きく外反するもの。A類と類似するが、脚部内面に屈曲部をもつことからA類とは別に分類した。杯部と脚部の境にはハケメ、脚部にはヘラナデ、脚部内面にはハケメを施す。

器 台

受部～脚部にかけての部分的なもので、調整等は不明である。I点確認できる。



第9図 古墳時代（土器）器種分類図

瓶

胎土は粗い。形態はU字状を呈する。底部の穿孔により2種に分類できる。

A：単孔のもの。底部・穿孔部の形態と調整により4種に細分できる。

- a：口縁部は面取りし、体部は緩やかに内湾する。穿孔部は内外面からの穿孔の痕跡を残す。孔径は大きい。調整は内外面ともに口縁部がヘラナデ、体部にはハケメを施す。
- b：穿孔部は内外面からの穿孔の痕跡を残し、底部が厚い。孔径はやや大きい。調整は内外面ともにヘラナデを施す。
- c：穿孔部は内外面からの穿孔の痕跡を残し、底部は薄い。孔径は小さい。調整は内外面ともにハケメを施す。
- d：穿孔部は内外面からの穿孔の痕跡が不明瞭で、端部は方形を呈し、底部は薄い。孔径は小さい。調整等は不明。

B：多孔のもの。口縁部はやや内湾する。内面はヘラナデ、外面は磨耗により不明。

手づくね土器

指圧痕を明瞭に残す粗雑な作りのもの。形態は箱型のもののみ確認できる。小型品。

壺

出土点数は6点確認でき、これらを3種に分類した。

A：全体を復元できるものはないが、口縁部と胴部から小型丸底壺と推定する。胴部はほぼ中央に最大径があり、口縁部は直線的にやや開いて立ち上がる。内外面ともにミガキを施す。

B：口縁部が二重口縁状を呈するもの。成形により、2種に分類できる。

- a：頸部～口縁部は二重に外反し、緩やかに外反する口縁部に断面三角形の粘土紐を外面に張り付け、二重口縁を形成するもの。
- b：頸部～口縁部は強く屈曲し、口縁部は二重に外反するもの。その際、内外面は同様に二重に外反する。

C：口縁部が受口状を呈するもの。頸部は緩やかに外反し、口縁部との境では稜をもつ。稜部からはやや内湾して口縁端部にいたる。口縁端部は面取りする。内外面ともにミガキを施し、内面には赤彩をわずかに確認できる

甕

全体を復元できるものが少ないので、主に口縁部の形態により分類を行った。その他、頸部の屈曲・胴部の形態にも注目した。

A：頸部がくの字状に屈曲し、口縁部はやや外反して立ち上がるもの。口縁端部の形態により2種に細分できる。最大径は胴部のはば中央にあり、胴部は卵倒形、底部は平底を呈する。頸部外面には強いナデにより、浅く凹む。胴部外面は斜位のハケメを施し、内面はヘラナデ、底部はハケメを施す。口縁部～頸部は部分的にハケメの痕跡を確認できるが、丁寧にナデ消されている。

- a：口縁端部を丸くおさめるもの。
- b：口縁端部を面取りするもの。

B：頸部がくの字状で、屈曲は弱くなり、湾曲ぎみとなる。内面には稜をもつ。口縁部はやや外反して立ち上がるもの。口縁端部の形態により2種に細分できる。口径と胴部最大径はほぼ同じで、胴部最大径は肩部にあり、やや肩の張った形態を呈する。底部は確認できない。胴部外面は斜位のハケ

メ、内面はヘラナデを施す。口縁部～頸部はハケメを残す割合が高い。

a : 口縁端部を丸くおさめるもの。

b : 口縁端部を面取りするもの。

C : 頸部は緩やかに外反し、内面に弱い稜をもつ。頸部は厚い。口縁端部は丸くおさめる。最大径は胴部のほぼ中央にあり、胴部は卵倒形、底部は平底を呈する。胴部外面には斜位のハケメ、内面にはヘラナデ、底部はハケメを施す。口縁部～頸部にはハケメを残す割合が高い。

D : 頸部はB類と同様であるが、内面の稜は弱くなる。また、胴部はA類とほぼ同様であるが、やや長胴化傾向が強くなる。調整では口縁部においてハケメを残す割合が高い。胴部内面の調整により2種に分類できる。

a : 胴部内面にヘラナデを施すもの。

b : 胴部内面にハケメを施すもの。

E : 全体的にはB類と同様であるが、頸部内面の稜が弱い点が異なる。底部は平底を呈する。また、法量により2種確認でき、I類・II類に分類できる。

F : 頸部は直立し、口縁部中央で強く外反する。口縁端部は丸くおさめる。最大径は胴部の中央よりや上部にあり、やや肩の張った形態を呈する。底部は平底を呈する。胴部外面はハケメ、内面はヘラナデ、底部はハケメを施す。口縁部から頸部はナデを施し、ハケメは確認できない。法量により2種確認でき、I類・II類に分類できる。

G : 頸部は直立し、口縁部はやや開くが、ほぼ直立する。口縁端部は面取りし、口縁端部内面をややつまみ出す。最大径は胴部の中央にあり、球形に近い。底部は確認できない。胴部外面には斜位のハケメ、内面上半にはヘラナデ、下半にはハケメを施す。口縁部～頸部には若干ハケメを残す。漆町分類〔田嶋1986〕のJ類に類似する。

H : 口縁部から肩部のみ確認できる。頸部はくの字状に屈曲し、口縁部はやや外反して立ち上がり、口縁端部では内側に曲げ、面取りする。頸部～肩部にかけて綫または斜位のハケメ、内面はヘラナデを施す。口縁部～頸部には若干ハケメを残す。法量により2種確認でき、I類・II類に分類できる。漆町分類〔田嶋1986〕のI類に類似する。

I : 口縁端部を外側に曲げるものの、口縁端部は面取りする。口縁部は内外面ともにナデを施す。法量により2種確認でき、I類・II類に分類できる。

J : 受口状口縁のもの。口縁端部を上下につまみ出したような形態をしており、縁帯状を形成する。法量により2種確認でき、I類・II類に分類できる。

b 須 惠 器（第10図）

杯 H 蓋

天井部は扁平なドーム状を呈しており、天井部と口縁部の境には明瞭な稜をもつ。口縁部はほぼ直線的に口縁端部にいたる。口縁端部は内傾し、面をもつ。天井部の約3分の1にヘラケズリを施す。

杯 H 身

底部は丸底状と平底状のものがあり、2種に分類できる。

A : 底部が丸底状を呈するもの。体部は内湾し、受部にいたる。受部は弱く外反する。立ち上がりは欠損する。底部～体部の約3分の2にヘラケズリを施す。

B：底部は平底状を呈するもの。体部は緩やかに内湾し、受部にいたる。立ち上がりはほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部～体部の約3分の1にヘラケズリを施す。

杯 G 蓋

口縁部内面にかえりがつくもの。天井部は平坦で、天井部～口縁部にかけて斜め下方へ直線的にびる。かえりは短く内傾する。ヘラケズリは天井部～口縁部にかけてほぼ外面の全体に施される。

無蓋高杯

口縁部は外傾し、弱く外反して立ち上がる。口縁部と体部の境には2条の突帯状のものがあり、この下部には波状文を施す。体部下半にはヘラケズリを施す。脚部は裾部で大きく広がり、ほぼ垂直に屈曲して端部にいたる。端部の断面形態は三角形を呈する。長方形の3方透かしを確認できる。

甌

形態と文様より5種に分類できる。

A：頸部の長さが短いもの。波の高さと幅が短い波状文を施す。体部は最大径が上部にあり、肩が張った形態を呈する。波状文と円形の孔は体部最大径に確認できる。波状文は緩やかな波で、上下に凹線を施す。体部下半にはヘラケズリを施す。

B：頸部の長さが長く、体部は扁平な球形のもの。波状文は口縁部・頸部・体部にそれぞれ施される。口縁部には緩やかな波状文、頸部には低く狭い波状文を粗雑に施し、体部には列点状の擬波状文を施す。体部中央よりやや下部にヘラケズリを施す。円形の孔は体部のほぼ中央に穿つ。

C：体部が肩部の張った形態を呈しており、肩部に2条の凹線を巡らす。体部中央には緩やかな波状文と円形の孔を施す。体部中央よりやや下部にヘラケズリを施す。

D：口縁部と頸部の境に突帯状の稜をもち、頸部には波の高さが高い波状文を施す。

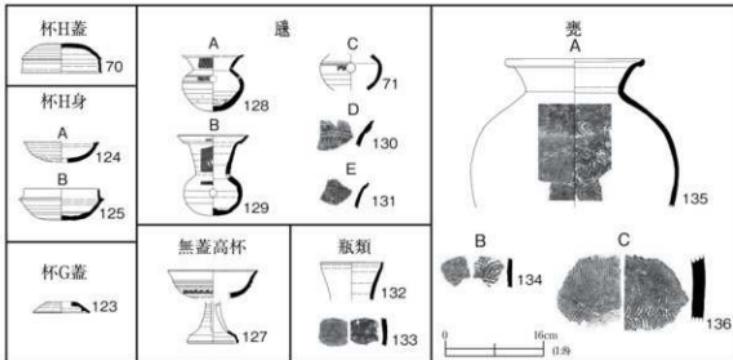
E：口縁部と頸部の境に段状の稜をもち、頸部には波の高さが高い波状文を施す。

瓶 類

口縁部と胴部片を確認できるのみで、全体を復元できるものはない。提瓶もしくは平瓶と推定する。

甌

全体を復元できるものがないので、胴部外面のタタキ痕により3種に分類した。



第10図 古墳時代(須恵器)器種分類図

A : 口縁部～胴部上半を確認できる。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は肥厚し、受口状を呈する。

頸部は球形で、外面には平行タタキ後、横ナデを施し、内面は同心円文当具痕を残すもの。

B : 胴部外面に平行タタキ後、カキメまたはハケメを施し、内面は同心円文当具痕を残すもの。

C : 胴部外面に格子目タタキを施し、内面は同心円文当具痕の上からハケメを施すもの。

B 各 説

SI 6 (図版 26・77) 砥石 1 点 (1) を図示した。全面を砥面として使用しており、6 面確認できる。その内の 1 面には 1 条の溝を確認できる。

SB107 (図版 26・77) 土師器のみ出土しており、高杯 1 点 (2) を図示した。A b I 類に分類した。全体的に磨耗を受けているが、杯部内面には黒色処理を確認できる。ミガキの単位は確認できないが、黒色処理とともにミガキを施しているものと推定する。

SK 1 (図版 26・77) 土師器のみ出土しており、甕 2 点 (3・4) を図示した。3 は G 類、4 は A b II 類に分類した。3 は頸部～口縁部にかけてほぼ直立して立ち上がり、口縁端部は磨耗により丸くなっているが、方形または隅丸方形であったと推定する。口縁部内面にはナデによる浅い凹みが生じ、口縁端部をややつまみ出したような形態を呈する。4 は頸部がくの字状に屈曲し、頸部内面には稜をもつ。口縁部はやや外反して立ち上がり、口縁端部は 3 と同様である。頸部と肩部の間にはナデによる浅い凹みが生じている。

SK 2 (図版 26・77) 土師器のみ出土しており、甕 1 点 (5) を図示した。A a 類に分類した。口縁部～胴部下半と底部は接合しないが、胎土等から一個体であると判断した。頸部はくの字状に屈曲し、頸部内面には稜を有する。口縁部はやや外反して立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。頸部と肩部の間にはナデによる浅い凹みが生じている。最大径は胴部中央よりやや上部にあり、肩部はややなで肩を呈する。胴部の形態は卵倒形を呈しており、底部は径の小さな平底で、單体で自立することは難しい感じを受ける

SK116 (図版 26・77) 土師器のみ出土しており、碗 4 点・甕 3 点 (6～12) を図示した。

碗 (6～9) 6 は B a 類、7 は B b 類、8 は C a III 類、9 は C b II 類にそれぞれ分類した。6 は一部表面に剥落があるが、内外面には全体的にミガキを施す。外面と口縁部内面に横位のミガキ、体部内面には縱位のミガキを施しており、部位によりミガキの方向を使い分けている。7 は口縁部の内外面ともにナデを施す。体部は外面に粗いハケメを不定方向に施し、内面には縱位のヘラナデを施す。8 は全体的に磨耗しており、調整等は不明確であるが、外面ともにミガキを施していると推定する。9 は内面にミガキと黒色処理を施す。ミガキは口縁部が横位、体部が縱位に施される。黒色処理は外面にまで及んでおり、口縁部と体部上半の一部に確認でき、境界は波状になる。黒色処理の部分にはミガキも確認できる。体部外面は磨耗により調整等を確認できない。7 と 8 は底部を確認することができ、平底状の丸底で、6 と 9 もこれらと同様であろう。

甕 (10～12) 10 は D a 類、11 は A b II 類に分類した。10 の頸部はくの字状であるが、屈曲が弱くなり、湾曲する。口縁部はやや強く外反し、口縁端部を丸くおさめる。最大径は胴部中央付近にあり、胴部は長胴化傾向にある。口縁部は内外面ともにナデで、部分的にハケメが残る。胴部外面は斜位のハケメを施し、内面は頸部が横位のヘラナデ、胴部が縱位のヘラナデを施す。全体的に厚みがある。11 の頸部はくの字状に屈曲し、内面には稜をもつ。口縁部はやや外反して立ち上がり、口縁端部は方形または隅丸方形を呈しており、部分的に形態が異なる。最大径は胴部中央よりやや上部にあると想定でき、5 と同様の形態と

なる。口縁部は内外面ともにナデを施す。胴部外面は斜位の粗いハケメを施し、内面では頸部付近において横位のヘラナデを施す。12は甕の底部である。胴部外面は横位のヘラケズリ、底部外面には乙状にヘラケズリを施しており、底部のつくりは丁寧である。底部内面は中心より放射状にハケメを施す。胎土等から10と同一個体と推定する。

SR 1 (図版 27・77) 土師器のみ出土しており、楕1点を図示した。C b II類に分類した。内外面ともにミガキを施し、外面と口縁部内面が横位、体部内面が縱位である。また、内外面ともに黒色処理

が施されているが、色調は黒褐色である。これは炭素の吸着が弱かったために完全に黒色とならなかつたと推定される。

SR 2 a(図版 27～29・77～79) 土師器と須恵器と石製品が出土している。土師器は、楕23点・高杯2点・壺3点・瓶2点・甕26点、須恵器は、杯口蓋1点・甕1点、石製品は、砥石1点を図示した。

土 師 器

楕 (14～36) 14はA a類、15はA b類、16はB c I類、17はB c II類、20はC a I類、21～24はC a II類、25・26はC a III類、27～29はD b I類、18・19はD b II類、30・31はD b III類、32はE a類、33はH類、34はI類、35はJ類にそれぞれ分類した。14は全体的に磨耗しており、調整等は不明確である。15は内面に黒色処理を施しているが、内外面ともにミガキではなく、ヘラナデを施しているためか、炭素の吸着は弱い。16は体部外面の上半～内面にかけて、黒色処理とミガキを施す。17は口縁端部～内面にかけて黒色処理とミガキを施し、体部外面にはヘラナデを施す。C類は図示したものはすべてa類で、b類も出土しているが、細片のみで図示できなかった。調整等が確認できるものでは、外面と口縁部内面に横位のミガキ、体部内面に縱位のミガキを施す。27は全体的に磨耗しており、調整等は不明確である。18・19・28～31は口縁部外面～内面にかけてミガキと黒色処理を施す。ミガキは口縁部内外面は横位、体部内面は縱位に施す。体部外面にはヘラナデを施す。31は口縁部が肥厚する。32の口縁部はわずかに外反し、口縁部と体部の境の内面には稜をもつ。調整等は磨耗により不明確である。33の口縁部は強く外反し、体部は強く肩が張ったような形態をしており、口縁部～体部はS字状を呈する。口縁端部はややつまみあげる。外面～口縁部内面はナデで、体部内面は粗いヘラナデを施す。I類(34)・J類(35)はほかとは様相が異なり、須恵器杯H模倣と推定する。いずれも口縁部と体部の外面の境に稜をもち、口縁部は稜から一段下ったところから立ち上がる。34は口縁部が短く、口縁端部をつまみ上げる。内外面ともにナデを施す。35は口縁部が長い。口縁部外面～内面にかけて横位のミガキと黒色処理を施す。36は楕の底部片で、内面に黒色処理を確認できる。外面にはヘラ状工具による「×」印を確認できる。

高杯 (37・38) 37はA b I類に分類した。杯部内面は黒色処理を施し、脚部外面にはヘラナデを施す。脚部の形態は83と同様と推定する。38はB類に分類した。脚部は内湾しており、端部では外反する。杯部内面にはミガキと黒色処理を確認できる。

壺 (39～41) 39はC類に分類した。口縁部は受口状を呈する。内外面ともにミガキを施し、内面にはわずかに赤彩の痕跡を確認できる。40・41はほぼ同類と推定され、A類に分類した。胴部を欠損しており、全体は不明確であるが、74のような胴部になると推定する。41は全体的に磨耗しており、調整等を確認できないが、40では内外面ともにミガキを施す。

甕 (42・43) 42は口縁部のみ確認できる。口縁部には粘土紐の痕跡を明瞭に確認でき、粗雑なつくりをしている。口縁端部は面取りする。口縁部は内外面ともに強くナデを施しており、器壁が薄くなる。体部外面にはヘラナデを施し、内面にはハケメを施す。43はA b類に分類した。全体的な形態は75と同様

と推定する。底部の穿孔径は約1.5cmである。底部の器壁は厚い。体部外面は縦・斜位のヘラナデ、底部付近はヘラケズリ、内面はヘラナデを施す。

甕 (44～66) 44・47～49はA a類、45・46はA b II類、54～58はB a類、50はB b類、52・53がD a類、51はD b類、61はE I類、62はE II類、59・60はG類、63・64はH I類、65はH II類、66はJ II類にそれぞれ分類した。A類の口縁部は内外面ともにナデを施すが、44は部分的にハケメを残し、49では口縁部内面下半に横位のハケメを残す。胴部外面は46で確認でき、斜位のハケメを施す。内面では横位のヘラナデを施す。B類の胴部の形態は58で確認でき、最大径が肩部にあるが、口径とほぼ同じになる。口縁部は内外面ともにナデを施すが、ハケメを多く残す。胴部外面は縦位のハケメを施し、58は胴部下半において目の細かいハケメを施す。内面は横位または斜位のヘラナデを施す。D類の口縁端部は丸くおさまる。口縁部は内外面ともナデを施すが、部分的にハケメを残す。胴部外面は斜位のハケメを施す。61・62の胴部外面には、縦位のハケメを施す。口縁部内面には、部分的にハケメを残す。H類は口縁端部を内側に曲げるまたはつまみあげたような形態を呈する。口縁部は内外面ともにナデを施す。胴部外面は63では斜位のハケメ、内面は横位のヘラナデを施す。65は口縁端部を外側に曲げるまたは下方につまみ出したような形態を呈する。口縁部は内外面ともにナデを施す。胴部内面は横位のハケメを確認できる。外面は不明確である。66は口縁部が受け口状を呈する。調整は内外面ともにナデを施す。

須恵器

杯口蓋 (70) 天井部がやや扁平なドーム状を呈しており、天井部と口縁部の境には稜をもち、稜部はヘラ状工具により整形される。口縁部は稜部からほぼ垂直にのび、口縁端部は内傾し、面をもつ。天井部には4～5回転の左回転のヘラケズリを施しており、それは天井部中央にも施され、天井部の3分の1程度である。天井部のヘラケズリされていない部分はロクロナデをそのまま残している。口縁部外面から天井部内面もロクロナデのままである。

甕 (71) 71はC類に分類した。体部の形態は肩の強ったもので、その部分に上が幅広く下は幅が狭い2条の凹線を施す。その下部には約2cmの幅で波状文が施文されている。波状文は1単位7～8本の櫛状工具を用いている。波状文を施文後、径約1.5cmの円形の孔を穿つ。体部下半には2回転のヘラケズリを施す。内面はロクロナデを明瞭に残す。体部外面上半と体部内面下半には自然釉が付着する。

砥石 (72) 全面を砥面として使用しており、円形の孔を穿つ。

SX119(図版30・79) 土師器と須恵器が出土している。土師器は、碗1点・壺1点・瓶1点・壺5点・鉢1点、須恵器は、壺1点を図示した。他に杯口身と考えられるものが1点出土しているが、小破片であるために図示することができなかった。

土師器

碗 (73) 73はK II類に分類した。外面の調整は磨耗を受けており不明確である。内面は、口縁部が横位のミガキ、体部が縦位のミガキを施す。

壺 (74) 74は小型丸底壺の頸部～胴部と推定する。口縁部は欠損しているので、不明確であるが、40・41のような口縁部になると推定する。胴部の最大径はほぼ中央にある。全体的に磨耗しており、調整等は不明確である。

瓶 (75) 75は瓶の中で唯一全体を確認できる資料である。A a類に分類した。全体的な形態はU字状を呈する。底部には径3.2cmの円形の孔を穿つ。体部は底部から直に立ち上がり、底径と円形の孔径がほぼ同じになる。口縁端部はヘラナデにより面取りされる。体部は縦位のハケメを施し、全体的には粗いつ

くりである。

甕 (76～80) 77はB a類、79はB b類、76はC類、76はE II類、80はF II類にそれぞれ分類した。77は頸部がくの字状を呈する。口縁部はやや外反して立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。口縁部から頸部は内外面ともにナデを施し、頸部～胴部の内面には横位のヘラナデを施す。79は頸部がくの字状を呈しており、内面では稜をもつが、外面では湾曲する。口縁部はやや強く外反して立ち上がり、口縁端部は方形～隅丸方形である。全体的に磨耗しており、調整等は不明確である。76は小型の甕である。頸部は、内面に稜をもち、外面は弱く外反する。口縁部は弱く外反して短く立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。最大径は胴部中央よりやや上部にあり、胴部は削倒形を呈する。底部は平底である。口縁部～頸部外面にはナデを施し、胴部には斜位のハケメを施す。胴部のハケメは口縁部下半にまで及ぶ。口縁部～頸部内面には横位のハケメを施し、胴部は斜位のヘラナデ、胴部下半～底部にかけては底部の中心から放射状にハケメを施す。78は全体を復元できる。頸部は外面ともに湾曲する。口縁部は強く外反し、口縁端部を丸くおさめる。最大径は肩部にあるが、口径とはほぼ同じになる。口径に対して器高が低い。底部径は小さく、単体では立てない大きさである。口縁部～頸部はナデで、胴部上半は斜位のハケメ、下半は縦位のハケメを施す。胴部のハケメは口縁部下半に及ぶ。口縁部～頸部内面はナデを施すが、部分的にハケメが残る。胴部内面は横位のヘラナデで、底部は中央から放射状のハケメを施す。80の頸部は内面に稜をもち、口縁部は頸部からほぼ直立して立ち上がり、中央付近で強く外反する。口縁端部は丸くおさめる。最大径は胴部にあるが、胴部の形態は不明確である。口縁部～頸部は内外面ともにナデを施す。肩部外面は斜位のハケメ、内面は斜位のヘラナデを施す。

鉢(81) 81は口縁部～体部上半を確認できる。体部から口縁部にかけてくの字状に屈曲し、大きく開く。調整等は磨耗により不明確である。

須恵器

甕 (82) 82は甕の胴部片で、ゆがみがある。外面は平行タタキの後、ナデを粗く施す。内面は同心円文当具痕を確認できる。135と類似する。

P101 (国版30・79) 土師器のみ出土しており、高杯1点(83)を図示した。A b II類に分類した。杯部を欠損する。脚部は中央付近までは垂直で、中央付近では強く外反し、大きく開く。杯部内面にはミガキと黒色処理を施す。脚部外面にはヘラナデを施しているが、磨耗により部分的に確認できるのみである。

遺構出土遺物 (国版30～32・79・80) 土師器と須恵器と石製品が出土している。土師器は楕13点、高杯7点、器台1点、瓶4点、壺2点、甕10点、手づくね土器2点、須恵器は杯G蓋1点、杯H身3点、無蓋高杯1点、壺4点、提瓶2点、甕3点、石製品は紡錘車1点を図示した。

土師器

楕 (84～96) 84はA a類、85はB b類、86はC a I類、88はD a類、87はD b I類、89はD b II類、90はD b III類、91はE b類、92はF類、93はG類、95はJ類、94はK I類、96はK II類にそれぞれ分類した。84は体部～口縁部は内湾し、底部は平底に近い丸底である。全体的に磨耗しているが、底部ではヘラケズリを確認できる。85の口縁部は短く、屈曲させる。全体的に磨耗をしており、調整等は不明確である。86の口縁部は短く、弱く外反させる。口縁部外面はナデで、体部はヘラナデを施す。内面はミガキのみで黒色処理を施されていない。ミガキの方向は口縁部で横位、体部が縦位である。88は口縁部外面にナデを施す。体部外面にヘラナデを施し、内面は不明確である。87・89・90は口縁部外

面～内面にかけてミガキと黒色処理を施す。ミガキは、口縁部内外面は横位、体部内面は継位である。91の口縁部はわずかに外反する程度で、口縁端部を丸くおさめる。全体的に磨耗しており、調整等は不明確であるが、内面には黒色処理と部分的にミガキを確認できる。92の口縁部は91と同様であるが、口縁端部は面取りされる。全体的に磨耗しており、調整等は不明確である。93の口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部外面～内面にかけてナデを施し、体部外面にはヘラナデを施す。95は口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部は外反して立ち上がり、傾きは小さい。口縁部外面～内面にかけて横位のミガキと黒色処理を施す。94・96は口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部は外反して立ち上がり、傾きは大きい。口縁部外面～内面にかけてミガキと黒色処理を施す。ミガキは、口縁部の内外面は横位、体部内面は斜位である。体部外面はヘラナデを施す。

高杯（97～103） 99はA a類、98はA b類、97はA c類、100はB類、101・102はC類、103はD類にそれぞれ分類した。97～99は杯部上半と脚部下半を欠損するが、脚部の形態は83と類似する。99は杯部内面に黒色処理を施さない。97・98は杯部内面に黒色処理を施しているが、97は杯部と脚部の境に継位のナデを明瞭に残す。100は杯部上半と脚部下半を欠損するが、脚部の形態は38と類似する。杯部内面には黒色処理を施す。磨耗により調整等は不明確である。101・102は杯部と脚部の境のみで、杯部と脚部の形態は不明確である。杯部と脚部の境は厚く作られている。103は杯部と脚端部を欠損する。脚部外面は継位のヘラナデを上半と下半の2段確認でき、杯部と脚部の境にはハケメを明瞭に残す。内面は下半に横位のハケメを施す。

器台（104） 104は受部と脚部を欠損する。受部の底部には径約3cmの円形の孔を穿つ。調整等は不明確である。

瓶（105～108） 105は口縁部のみである。口縁部は強いナデにより器壁は薄くなり、端部は面取りする。体部は内外面ともに斜位のハケメを施すが、内面では粘土紐の接合痕を明瞭に残し、粗雑なつくりである。106はA c類、107はA d類、108はB類に分類した。106・107は底部のみ確認できる。106は穿孔部の断面形態がくの字状を呈しており、内外面から穿孔していることを確認できる。穿孔部径は約2.2cmである。穿孔部径と底部径はほぼ同様で、体部は直に底部から立ち上がる。体部外面には継位のハケメ、内面にはヘラナデを施す。107は穿孔部の断面形態が方形を呈する。穿孔部径は約1.8cmである。体部は底部から緩やかに湾曲して立ち上がる。調整等は磨耗により不明確である。108は底部に多数の孔を確認できる多孔の瓶である。本遺跡では唯一の資料となる。一個体分と考えられるが、体部と底部は接合しない。穿孔部は15個確認できる。穿孔部の断面形態はくの字状と方形がある。穿孔部径は約0.5～1.0cmと多種にわたる。底部は平底に近い丸底であり、体部～口縁部は弱く内湾し、口縁端部を丸くおさめる。調整等は磨耗により不明確であるが、底部内面ではヘラナデ調整を確認できる。

壺（109・110） 109はB a類、110はB b類に分類した。109は口縁部内面が直線的で、外面は断面三角形の粘土を貼り付けて、二重口縁状に成形する。110は頸部が直立して立ち上がり、口縁部との境は強く外反し、斜め上方に屈曲して口縁端部にいたる。調整等は磨耗により不明確である。

甕（111～120） 112はA b I類、114はA b II類、111はD a類、120はF I類、115・119はG類、116はH I類、117はH II類、118はI類、113はK類にそれぞれ分類した。112は頸部がくの字状に屈曲し、口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は面取りする。114は頸部がくの字状に屈曲するが、112より弱い。口縁部は弱く外反し、口縁端部を丸くおさめる。胴部最大径はほぼ中央にあり、底部は径の小さな平底である。口縁部は内外面ともにナデを施すが、部分的に横位のハケメを残す。胴部外面では上半が

斜位のハケメ、下半には縦位のハケメを施す。底部付近はヘラケズリを施して整形する。111は頭部が湾曲し、口縁部は頭部から連続する。口縁端部は丸くおさまる。胴部は長胴化傾向にある。口縁部は内外面ともにナデを施す。胴部外面は粗い斜位のハケメを施す。胴部のハケメは口縁部下半にまで及び、ハケメの上端には工具痕を沈線状に明瞭に残す。胴部内面にはヘラナデを施す。120は口縁部が頭部から直立て立ち上がり、中央付近で強く外反し、口縁端部は丸くおさまる。胴部最大径は肩部にあり、やや肩の張った形態を呈する。底部は胴部との境に段をもち、底径はやや大きい。口縁部は内外面ともにナデを施す。外面は肩部が横位のハケメ、胴部下半は主に縦位のハケメで、部分的に斜位のハケメを施す。内面は胴部上半がヘラナデを施し、肩部には指頭圧痕を明瞭に確認できる。底部付近にはハケメを施す。115・119の口縁部は頭部からほぼ直立て立ち上がり、口縁端部は面取りされ、口縁端部内側をわずかにつまみ出す。口縁部は内外面ともにナデを施す。胴部外面は不明確で、内面には横位のヘラナデを施す。116・117の口縁部はやや強く外反し、口縁端部は上方に曲げ、面取りする。口縁部は内外面ともにナデを施すが、117ではハケメを部分的に残す。118は胴部を欠損する。口縁部の傾きは大きく、直線的に立ち上がり、口縁端部は下方につまみ出したような形態を呈する。内外面ともにナデを施す。113は口縁部のみ確認でき、受け口状を呈する。調整は内外面ともにナデを施す。

手づくね土器 (121・122) 121・122は全体を確認できる。底部は平底で、体部は底部からほぼ直立て立ち上がる。つくりは粗雑で、全体的に指頭圧痕を明瞭に残す。

須恵器

杯G蓋 (123) 123は天井部の中央部を欠損する。天井部は確認できる範囲において平坦で、口縁部は斜め下方に屈曲し、口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面には、短く内傾するかえりがつく。天井部～口縁部にかけて3回転のヘラケズリを確認できる。内面はロクロナデを残す。

杯H身 (124～126) 124はA類、125・126はB類に分類した。124は立ち上がりを欠損する。受部は他のものより小さい。底部～体部は内済する。底部中央はヘラ切り後未調整で、ヘラケズリは底部～体部の半分に5回転施される。その他の部分はロクロナデを施す。受部には重ね焼きの痕跡と自然釉を確認できる。125・126は底部が平坦で、体部は底部から緩やかに内済し、受部では外反する。立ち上がりはほぼ直立し、口縁端部を丸くおさめる。底部はヘラ切り後未調整で、ヘラケズリは体部の3分の1程度に左回転で3回転施される。ほかの部位はロクロナデを施す。

無蓋高杯 (127) 127の杯部と脚部は接合しないが、一個体と推定する。杯部は口縁部が外反し、体部には2条の突帯と波状文を巡らす。波状文は1単位8～9本の櫛状工具で施文される。波状文の下部には右回転で3回転分のヘラケズリを確認できる。内面はロクロナデを施す。脚部は方形の3方透かしを穿つ。裾部で下方に屈曲し、端部は断面三角形を呈する。内外面ともにロクロナデを施す。

瓈 (128～131) 128はA類、129はB類、130はC類、131はD類にそれぞれ分類した。128は口縁部と頭部の境に突帯を巡らし、頭部には波状文を施文し、頭部の高さいっぱいに使い、幅の広い櫛状工具により施文される。この波状文は体部のものとは異なり、工具を連続的に使用しているのではなく、止めながら断続的に施文する。体部は上部に最大径があり、肩の張った形態を呈する。波状文は肩部に施文され、上下に凹線を巡らし、区画を形成する。この部分に径約1.2cmの円形の孔を穿つ。波状文は1単位8～9本の櫛状工具を用いており、連続的に施文される。体部下半には2～3回転のヘラケズリを施す。内面はロクロナデを施し、底部内面には指頭圧痕を明瞭に確認できる。129の口縁部が外傾し、外面には波状文を確認できる。口縁部と頭部の境は屈曲し、頭部には波状文を施文する。この波状文は断続的なもので、

頸部全体に確認できる。施文は粗雑で、2～3回重ねて施文される。体部はやや扁平な球状を呈しており、肩部に施文、中央に径約12cmの円形の孔を穿つ。施文は1単位7～8本の櫛状工具により列点状に施され、擬波状文を作り出す。体部中央よりやや下部に2回転のヘラケズリを施す。130は口縁部から頸部のみ確認できる。全体的に火ぶくれによる亀裂が生じており、口縁部は肥厚する。口縁端部は内傾する。口縁部と頸部の境には棱をもつ。頸部には波が大きく連続的な波状文を施文する。131は口縁部と頸部の境に段を有しており、頸部には波が高く連続的な波状文を施文する。

瓶類（132・133） 132は提瓶の口縁部で、133がその体部と推定する。132はやや外反して立ち上がり、端部ではわずかに内湾させる。外面とともにロクロナデを施す。133は外面にカキメを施し、内面は指頭圧痕を確認できる。

甕（134～136） 135はA類に分類した。口縁部はやや内湾し、口縁端部は肥厚させる。外面は段を有する。頸部は直線的に外傾し、胴部は球状を呈すると推定する。口縁部～頸部はロクロナデを施す。胴部は外面に平行タタキ後ナデを施し、内面には同心円文当具痕を明瞭に確認できる。当具は4条の同心円の溝により構成される。134・136は胴部片である。134はB類に分類した。外面に平行タタキ後カキメを施し、内面は同心円文当具痕を明瞭に確認できる。136はC類に分類した。外面に格子目タタキを施し、内面には同心円文当具痕の上からハケメを粗く施す。

紡錘車（137） 137は滑石製のものである。平面形は円形で、断面形は台形を呈する。径6mmの円形孔を穿つ。全面に擦痕を確認できる。

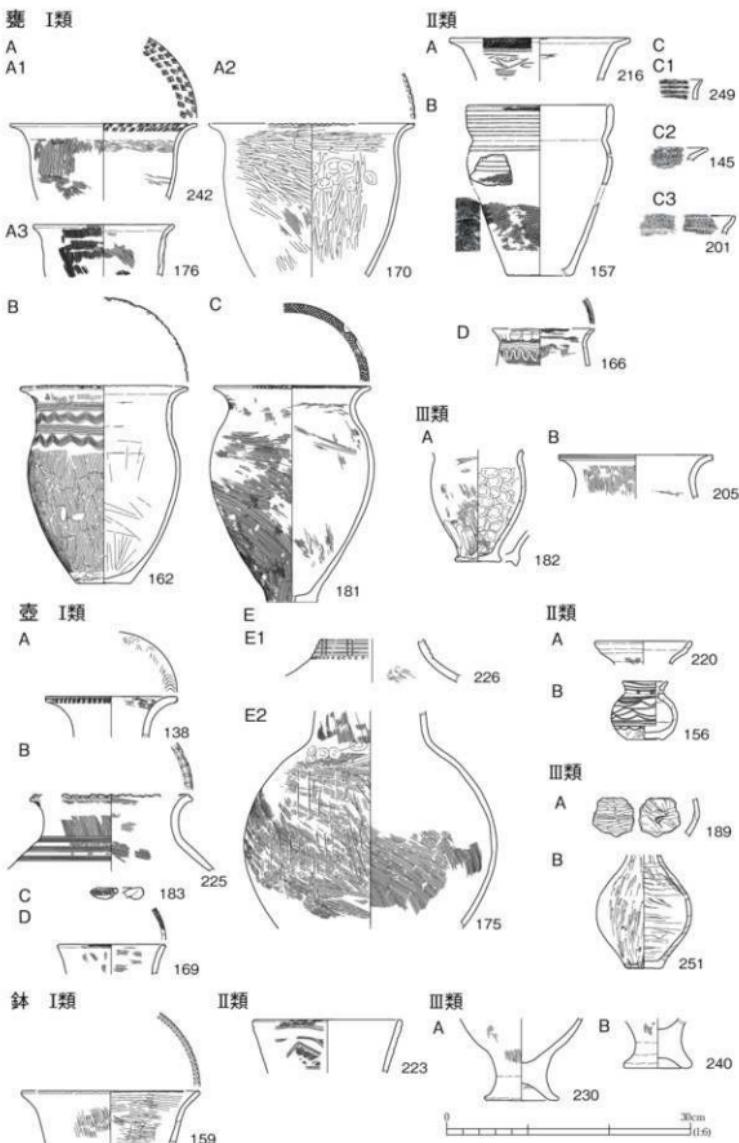
2 弥生時代の遺物

A 土器・土製品

1) 概 要

本遺跡出土の弥生土器は、三枚の包含層（H1、H2、H3層）とそれぞれの包含層直下の各遺構、河川などを中心に出土し、掲載遺物を含めその総点数は4373点である。中心となる年代は、H1・2・3層全て弥生時代中期後半であると思われる。本報告書掲載の弥生時代土器の系譜については、原則的に北陸系・東北系・中部高地系などとは呼称せず、施文方法から大別し櫛描文系と沈線文系（繩文を施文するものを含む）と呼称することとしたが、その割合は櫛描文系と無文の体部片が90%を越え、沈線文系と明確にわかるものは全体の約3%（121点）に過ぎず、遺物図版がそのまま本遺跡出土の土器のイメージをあらわしているわけではないことを断っておきたい。阿賀野川以北では弥生時代中期の遺跡の発掘例が少ないため不明な部分が多く、加えて本遺跡の出土土器は水田耕作の影響で遺存度が悪く、また当方の力不足もあって全体の器形を十分にあらわせなかった。そこで出土土器については、できる限り類似例の参考文献名、ページ数、報告番号を本文に記した。文中引用の参考文献は以下のように簡略化した。『県営ほ場整備事業関連発掘調査報告書平田遺跡』【坂上ほか2000】は「平田」、「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相」【流沢ほか2003】は「三面・2」、「関東・東北弥生土器と北海道統繩文の広域編年2005」【石川ほか2005】は「関東・東北編年」、「南関東の弥生土器」【シンポジウム南関東の弥生土器実行委員会編2005】は「南関東」と表記し、その後に該当頁・図版番号・遺物番号を付した。

以下器種分類を行い、各遺構、包含層、遺構外の出土土器について述べる。



第11図 弥生土器器種分類図

2) 器種分類

分類は壺・甕・鉢類に器種分類した後、各器種ごとに施文方法（櫛描文系・沈線文系・その他）に注目した大分類、頸部・口縁部・口唇部の形状による小分類、さらに可能なものについては細分（A 1～A 3など）を行った。なお、主な各部位の呼称は、壺、甕が、上から口唇部、口縁部、頸部、胴部、底部、鉢は胴部を体部と呼称した。

壺

I類 櫛描文系

- A : 外反する口縁を持つ長頸壺。胴部は卵倒形を呈すと思われる。
- B : 外反する口縁を持つ短頸壺。胴部は卵倒形を呈すと思われる。
- C : 外反する口縁を持つ折り返し状口縁のもの。
- D : 直立しつつ外傾する口縁を持つもの。
- E : 大型の壺。
- E 1 : 頸部に装飾のあるもの。
- E 2 : 頸部に装飾のないもの。

II類 沈線文系

- A : 受け口状口縁を持つもの。
- B : 加飾性の強い小型短頸壺。

III類 その他

- A : 胴部が強く屈曲するもの。
- B : 細首の長頸壺。

甕

I類 櫛描文系

- A : 胴部から頸部への湾曲は弱く口縁部から外反するもの。口径が最大径になると思われる。
- A 1 : 口縁の最大径と胴部最大径に開きがあり、胴部が張らずそのまま底部まで収束するもの。
- A 2 : 口縁の最大径と胴部最大径にあまり差がなく、胴部がゆるやかな弧状を呈するもの。
- A 3 : 頸部・口縁部の短いもの。口縁の外反は弱く筒状の胴部を持つと思われるもの。
- B : 頸部が直線で口縁部から屈曲・外傾し口唇部に至るもの。口径と胴部最大径がほぼ等しいと思われる。
- C : 胴部から頸部にむかって内湾し頸部が縮まり、口縁部から外反して口唇部にいたるもの。わずかに胴部が最大径になるものもある。

II類 沈線文系

- A : 頸部が直線で口縁部から屈曲・外傾し口唇部に至るもの。胴部器形は、I類 B と同様。
- B : 胴部からすぐに直立しつつ内湾する口縁部に至るもの。
- C : 頸部からわずかに外反する短い口縁に至るもの。
- C 1 : 直線状に伸びる頸部からわずかに外反し、口唇部に至るもの。
- C 2 : 外反のやや強いもの。
- C 3 : 頸部からわずかに外反し、内湾しつつ口唇部に至るもの。

D : 外反する口縁から胴部がゆるやかな弧状を呈するもの。胎土と口縁内面の羽状の連続刺突から沈線文系としたが、文様のモチーフは、柳描文系に多いものである。

Ⅲ類 その他

A : 脇部が筒形で頭部・口縁の区別がなく、口縁から軽く摘み上げて口唇部にいたるもの。

B : 外反する口縁を持ち、口唇部に面を持ち凹線を巡らしたもの。

鉢 類

I類 柳描文系

頭部が脇部に向かって内傾するもの。口縁部の外類は弱い。

II類 沈線文系

体部下半から外傾しつつそのまま口唇部に至るもの。

III類 その他 (脚台)

A : 脚台が高く底部に厚みのないもの。鉢の脚である。底部から外反しつつ頭部、口縁部からわざかに内済し口唇部に至る器形か。

B : 脚台が高く底部が厚い柱状を呈するもの。鉢の脚である。

3) 土器 各説

SI 1 (図版 33 - 138・139) 138 は体部以下を欠損する。壺 I 類 A の長頸壺である。口縁部外面に柳描刺突列を施し、口縁部内面に柳描綾杉文を巡らす。内面はハケ調整を施す。139 は甕か壺 I 類の口縁である。口縁部内面に 2 列の斜行短線文を施す。

SI 3 (図版 33 - 140) 140 は口縁部内面に 2 列の斜行短線文を施す壺 I 類である。139 と同一個体の可能性もある。

SI 9 (図版 33 - 141) 141 は甕 III 類 B である。頭部から強く外反する口縁を有する。口唇部に面を作り出し凹線を巡らしていることから弥生時代後期の可能性もあり、胎土も他の弥生時代中期の土器とは異なる (平田・図版 35 - 32)。

SI 10 (図版 33 - 142) 142 は甕か壺 I 類である。口縁部外面に柳描刺突列を施す。

SI 8 (図版 33 - 143 - 147) 143 は 142 同様甕か壺 I 類である。口縁部内外に柳描刺突列を施す。144 は口径と頭部の形状から甕 I 類 C と思われる。145 は甕 II 類 C 2 である。口縁部から口唇部にかけて L R 繩文を施し、頭部に一条の平行沈線を巡らす (三面・2・4 図 - 89・90)。146 は壺 II 類の頭部と思われるが、小片のため断定できない。沈線山形文の下に平行沈線 2 条を巡らす (平田・図版 37 - 79)。147 は甕 I 類の底部である。

1 号周溝遺構周溝 (図版 33 - 148・149) 148 は甕 I 類 B か C であろうか。口縁部外面に柳描刺突列を施す。149 は甕 II 類である。口縁部が欠損している。2 本の平行沈線による区画帯に刺突列を施し、その下にさらに 2 本の平行沈線を巡らす (三面・2・9 図 - 271・272)。

2 号周溝遺構周溝・1 号土坑 (図版 33 - 150・151) 周溝出土の 150 は甕 I 類の底部片である。1 号土坑出土の 151 は甕 I 類 A 1 か A 2 であろうか。頭部から強く外反する口縁で胎土・焼成の堅致・良好な大形の甕である。口縁部内面に柳描綾杉文を巡らす。

3 号周溝遺構 1 号土坑 (図版 33 - 152) 152 は壺 I 類の胴部が卵倒形を呈する大形の壺底部片である。外面上にハケ調整を施す。

SK 4 (国版 33 - 153) 153 は壺 I 類の底部から胴部である。内外面にハケ調整が施される。胎土は粗く焼成は悪い。櫛描文系が在地化し変容を受けた土器か。

SK126 (国版 33 - 154・155) 154 は壺 I 類の口縁である。口唇部に刺突列を巡らし内外面にハケ調整を施す。外面に煤が付着する。155 は大形の壺または壺 I 類の底部である。粘土紐接合部で欠損する。内外面に煤が付着し、意識的に打ち欠いた後、火にかけて使用するなどの二次利用をしたものかもしれない。

SK134 (国版 33 - 156) 156 は壺 II 類である。加飾性の強い小型の短頸壺である。頭部に平行沈線 2 条、体部は上位 3 条、下位 3 条の平行沈線で区画し、4 条の沈線による下向き連弧文を描き、下位の区画線の直下にさらに下向き連弧文を施す。なお、口縁部下端に 1 対 2 つ合わせて 4 つの孔が穿たれている。底部から体部が丸く張り出し、頭部から口唇部に向かってやや外傾し口唇部を丸く取める。

SD122 (国版 34 - 157・158) 157 壺 II 類 B の深鉢形のものである。平底の底部から立ち上がり胴部下位は直線状に外傾し、胴部上位でゆるやかに内湾しつつ屈折する頭部に至り、長い口縁部は直立しつわざかに内湾し、口唇部は丸くおさめる。口縁上部を沈線で区画し L R 繩文を施し、口縁部に 6 条 1 組の平行沈線を施す。一部欠損のため断定できないが、体部上位にも同様に 6 条 1 組の平行沈線を施していると思われる。体部下半には L R ・ R L 繩文を施す。(関東・東北編年・P18・4 図 - 22・5 図 - 19) にそれぞれ器形・文様のモチーフが酷似するが、これについては、Ⅶ章で詳細を述べる。158 の器種は不明である。地文に R L 繩文を施し、平行沈線と工字文の組み合わせか。

SD125 (国版 34 - 159 ~ 162) 159 は鉢 I 類 A である(平田・国版 50 - 289)。やや弱く外反する口縁部から体部があり張らず底部に収束する。口唇部に櫛描刺突列を巡らす。外面に煤が付着し内外面にハケ調整を施す。160 は壺 I 類 B か C であろうか。口唇部外面に刺突列を施すが、整然と列をなしておらず施文が雑である。内面にハケ調整を施す。櫛描文系が在地化し、変容を受けた壺か。161 は壺か壺 I 類である。口唇部に櫛描刺突列を巡らす。162 は壺か壺 I 類の底部片である。内外面にハケ調整を施す。底部中央に焼成前穿孔がある。

SD129 (国版 34 - 163) 沈線文系土器の破片である。体部外面に L R 繩文を施す。

SR 2a (国版 34 - 164 ~ 174, 国版 35 - 175 ~ 181, 国版 36 - 182 ~ 198) 164 は沈線文系の蓋である。上から 2 条の平行沈線、波状文、上向き重連弧文、1 条の平行沈線をはさんで上向き重連弧文、2 条の平行沈線を施文し、内面にハケ調整を施す(関東・東北編年・P18・5 図 - 16)。165 は、鉢 II 類 A である。体部からわずかに外傾しつつ立ち上がる。地文に R L 繩文を施し、6 条の平行沈線を施文する。166 は壺 I 類 D である。口縁部内面に沈線文系の刺突列、頭部から体部にかけてのハケ調整後に、やや幅広の棒状工具で浅い波状文を 2 条、前後にずらして重ねて施文している。口縁部外面に指頭押圧による整形、内面にハケ調整を施す。施文工具は、沈線文系、施文のモチーフは、櫛描文系であろうか。167 は壺 I 類 A である。口唇部に平坦面を作り出し沈線を巡らせる。口縁部内面に刺突による絞杉文を 2 列施文する。外面にハケ調整を施す。168 は壺 I 類 E 1 である。7 本単位の櫛歯状工具で直線文、連続斜行短線文を交互に施文する。内面にハケ調整を施す。169 は壺 I 類 D である。口唇部に連簾文を巡らせる。内外面にハケ調整を施す。170 は壺 I 類 A 2 である。口唇部に刺突列を施し、波状口縁を作り出す。内外面にハケ調整後、口縁部内外面横位・胴部縱位・斜位のヘラ磨きを施す。171 ~ 173 は壺 I 類 B か C であろうか。口唇部に刺突列を施す。172 は内外面にハケ調整を施す。174 は壺 I 類 A 1 か A 2 であろうか。口縁部外面に刺突列、内面にハケ調整を施す。175 は壺 I 類 E 2 である。大形の壺で内外面にハケ調整後、縦方向にヘラナデを施す。器形は球胴で中央部が丸く張り出し、頭部はまっすぐ上方に立ち上がる(平田・国版 68 - 503)。

176は壺I類A3である。内外面にハケ調整を施す(平田・国版68-506・507)。177は壺I類Bである。口縁部内面に7本単位の櫛歯状工具で短い連縦文を巡らす。直線的に立ち上がる頭部から強く外反する口唇部に至る。178は壺I類Cである。口縁部内面に櫛搔刺突列を施し、口唇部を小波状に作り出す。179は壺I類Aである。180は壺I類Bである。口唇部に雜な櫛搔刺突列、頸部に4本単位の櫛歯状工具で直線文、波状文の文様帯を2単位施文する。外面上位にハケ調整が施されるが、胴部下位にヘラケズリ整形を施し、内面にハケ調整はない。181は壺I類Cである。口縁部内面に櫛搔斜格子文を巡らし、外面は胴部上位に横方向のハケ調整、下位に斜方向のハケ調整、内面はハケ調整後部分的にナデ消す。底部中央に焼成前穿孔がある。182は壺III類Aである。外面は縦方向のハケ調整後ナデ消し、内面は指頭押圧による整形を施す。183-185・187は壺I類の口縁部である。183はI類Cの折り返し状口縁で外面に櫛搔刺突列を施す。184・187はI類Dである。ともに口唇部に櫛搔刺突列を施す。胎土、焼成良好で加飾性に富む。186は壺I類Aである。口縁部外側に櫛搔刺突列を施す。188は胴部下位に櫛搔刺突列を施す。器種は不明だが後期によく見られる施文である。189は壺III類Aである。外面にミガキ、内面にヘラケズリ調整を施す。胴部が強く屈曲する東海系のものか。190・191・194は、壺I類の底部で、192・193・195・196は壺I類の底部である。内面はハケ調整が施されたものが多い。190は低台状の底部である。194の底部には、焼成後の穿孔がある。197は壺II類の胴部下半から底部である。地文にRL繩文を施す。198は手づくね整形の円盤状土器品である。中央に穿孔がある。

SR 4 (国版36-199-203) 199は壺I類Aである。200は壺I類A3である。ともに口唇部に櫛搔刺突列を施す。201-203は、壺II類Cである。201はII類C3である。口唇部から口縁部外側の地文にLR繩文を施し、内外面にそれぞれ2条の平行沈線を施す(三面・2・5図-137)。202は外面の地文にRL繩文を施し、2条の平行沈線を施す。203は外面の地文にLR繩文を施し4条の沈線を施す。

SX117 (国版36-204-205) 204は壺か壺I類の口縁部である。205は壺III類Bである。口唇部に面を作り出し、沈線を巡らせる(国版33-SI9-141参照)。

54 R-P 2 (国版36-206) 沈線文系土器の小破片で、器種は不明である。2条の平行沈線を施文する。粉殻压痕がある(国版82-206参照)。

H 1層 (国版36-207-210) 207は壺I類A1である。口縁部内面に米粒形の刺突による綾杉文を施文する。208は器種不明の沈線文系のものである。胴部上位に細く浅い沈線を4条施す。209は壺I類の底部である。210は壺I類の低台状の底部か。ともに胎土、焼成が悪い。在地の粗製か。

H 2層 1号周溝構造直上 (国版36-211-216, 国版37-217-219) 211・212・214は、壺か壺I類である。211は口縁部内面に斜行短線文、口唇部に櫛搔刺突列を施し、口唇部を小波状に作り出している。212は口縁部内面に櫛搔綾杉文を施す。214は内面にハケ調整を施す。213は壺II類C2である。口縁外側に2条の平行沈線を施し、その直下と口唇部にRL繩文を施す。215は壺I類Aである。216・217は同一個体で、壺II類Aである。頭部から外傾し、口縁部で屈曲して面として作り出された口唇部に至る。口縁部外側上位から口唇部にLR繩文を施文する。頭部は平行沈線で区画し、内部に重菱形文を施す(三面・2・4図-78)。218・219は沈線文系の土器片で器種は不明である。218は地文にLR繩文を施し、平行沈線によって区画した内部に沈線山形文を施文する(三面・2・5図-145)。219は上下5条の平行沈線で区画した内部に崩れた沈線山形文を施文する(三面・2・5図-133・134)。

H 2層 (国37-220-222) 220は壺II類Aで受け口状口縁であり形状からII類としたが、I類との

折衷か。221は壺I類である。222は鉢II類Aである。口縁部外面上位にLR繩文を施し、2条の沈線による区画内に沈線菱形文を施したものか。

H3層2号周溝造構直上(図版37-223~237) 223は鉢II類Aである。地文にLR繩文を施し幅5mmの棒状工具で施した上下1条の平行沈線の区画内部に椎揃な沈線山形文もしくは菱形文を施す。区画内部の繩文は、擦り消している。224は壺I類Aである。口縁部内面に櫛描絨杉文を施す。225は壺I類Bである。頭部に3条1組の櫛描直線文を2組施する。口唇部に円周に沿った刺突列と円周に垂直方向に施した刺突列を組み合わせる。226は壺I類E1である。頭部に3条の櫛描直線文を巡らし、頭部と体部の境界に円形の刺突列を施す。外面にハケ調整を施す。227・228は壺か壺I類である。ともに口唇部に刺突列を施す。229は、器種不明の脚である。台付きの壺か鉢であろうか。230は、鉢III類Aである。外面にハケ調整を施し、胎土軟質で焼成不良である。231~235は器種不明の沈線文系のものである。231は地文にRL繩文を施し、3条の平行沈線の上下に沈線山形文を施す。壺の胴部か。232は4条の沈線を施す。233は地文にLR繩文を施し、2条の沈線を施す。234は地文の繩文を擦り消し、9条の沈線を施す。235は6条の平行沈線を施す。地文の繩文は擦り消しか。236・237は壺I類の底部である。

H3層4号周溝造構直上(図版37-238) 238は、壺I類A1である。口縁の外反はやや弱い。口縁部内面、口唇部に櫛描刺突列を施す。内外面にハケ調整を施す。

H3層(図版37-239~241) 239は壺I類Cである。胴部外面に4本1組の櫛齒状工具で上から直線文、波状文、浅い刺突を連ねて施し、波状文、直線文の順で文様帯を形成する。口縁部内面に斜行短線文を施す。口縁はゆるやかに外反する。240は鉢の脚III類Bの脚部である。胎土・焼成不良で粗雑な整形である。241は壺I類Aの底部である。

Ⅲb2b層(図版38-242~246) 242・246は壺I類A1である。口縁部内面に三列の斜行短線文を施し、胴部内外面にハケ調整を施す。243は鉢II類Aである。地文にRL繩文を施し、縱横4条の沈線で区画し内部に工字文を施すか。165と同一個体の可能性もある。244は壺II類Bである。7本の平行沈線文を施す。157と同一個体の可能性が高い。245は壺I類BかCであろうか。口唇部と内面に刺突列を加え、口唇部を波状に作り出す。内外面にハケ調整を施す。246は壺I類Aである。口唇部に櫛描刺突列、口縁部内面に絨杉文を施す。

造構外出土土器(図版38-247~260) 247は壺I類A1である。口縁内面に三列の斜行短線文を施し、口唇部に櫛描刺突列を施す。248は壺I類Aである。口唇部が肥厚し、櫛描刺突列を施す。249は壺II類C1の口縁部でミガキを施したち沈線3条を施す。250は壺か壺I類である。口唇部に櫛描刺突列、口縁部内面に櫛描絨杉文を施す。251は壺III類Bである。外面縦方向のヘラミガキの後黒漆を塗布する。内面はヘラケズリ後、ヘラナデを施す。器形は、平底の底部から胴部中央が丸く張り出し、頭部が締まる細首の器形になると思われる(南関東・P36・2図-40・42)。252~255は、器種不明の沈線文系の土器である。252は沈線3条を施す。253は208と同一個体か。細く浅い沈線や胎土が酷似する。254は2条の沈線に区画された内部に沈線山形文を施し、直下に平行沈線1条を施す。255は、沈線5条の下に重菱形文を施す。256は壺I類の高台状底部である。257・258・260は壺I類の底部である。258は、内面にハケ調整を施す。260は底面に工具によるキズがある。259は、壺II類の底部である。外面にLR・RL繩文を施す。外面に煤が付着する。

B 石 器

1) 概 要

石器は包含層から 126 点 (8830 g)、遺構内から 126 点 (5540 g) 出土した。時期は耕作擾乱により判断し難いものも含むが、石器属性や分布状況から概ね弥生時代中期に属すると思われる。器種は石鎌 (30 点)、石匙 (1 点)、石錐 (3 点)、スクレイバー (2 点)、楔形石器 (2 点)、剥片 (146 点)、石核 (2 点)、扁平片刃石斧 (1 点)、環石 (1 点)、大型石包丁 (1 点)、石包丁 (1 点)、大型直縁刃石器 (2 点)、擦切具 (1 点)、砥石 (7 点)、敲石 (7 点)、磨石 (2 点)、管玉 (1 点) があり、製品では石鎌が最も多く出土した。石材は頁岩が全体の 68% を占め、その他に凝灰岩 (9%)、チャート (5%)、流紋岩 (4%)、安山岩 (3%)、砂岩 (2%)、花崗岩 (2%)、鉄石英 (2%)、軽石 (2%)、閃綠岩 (1%)、粘板岩 (1%)、緑色凝灰岩 (0.7%)、蛇紋岩 (0.3%) がみられる。これらの多くは荒川流域にて採取可能なため、石器の多くは跡周辺で製作されたと思われる。その中で、搬入品の可能性が高い環石や、県内において出土例の少ない大型石包丁は、他地域との交流や当時の生業を知る上で貴重な資料といえる。以下、遺構内出土石器、包含層出土石器、遺構外出土石器に大別し所見を述べる。

2) 各 説

遺構内出土石器 (図版 39・40・84・85-288)

SI 3 (図版 39・84-261 ~ 269) 石鎌、石鎌未成品、楔形石器、剥片が出土しており、石鎌 2 点、石鎌未成品 1 点、楔形石器 1 点、剥片 4 点を図示した。

石鎌・石鎌未成品 (261 ~ 263) いずれも頁岩製で 261 は凸基有茎鎌、262 は比較的抉りの浅い凹基有茎鎌である。263 は石鎌未成品で両面両側縁に粗雑な剥離調整が施される。

楔形石器 (264) 頁岩製で周縁に階段状の剥離痕が密集し、側面には両極剥離による剪断面 [岡村 1983] がみられる。

剥片 (265 ~ 269) 石材は全てチャートで、267 の上端には階段状の剥離痕がみられるため、両極剥片の可能性がある。

SI12 周溝 (図版 39・84-270) 石鎌が 1 点出土した。

石鎌 (270) 流紋岩製の凹基有茎鎌で剥離面がほかに比べ大きい印象を受ける。先端部及び茎部が欠損する。

2 号周溝遺構 1 号土坑 (図版 39・84-271・272) 石鎌が 2 点出土した。

石鎌 (271・272) 271 は流紋岩製で長さが幅に比して長い平基有茎鎌、272 は頁岩製で長さが短く、平面形が正三角形に近い小型の凹基有茎鎌である。272 は左側かえしが欠損している。

2 号周溝遺構周溝 (図版 39・84-273) 石鎌が 1 点出土した。

石鎌 (273) 頁岩製の凹基有茎鎌で、抉りが浅く長さが幅に比して長い。茎部が欠損している。

SK 4 (図版 39・84-274) 剥片、石核、石鎌が出土しており、石鎌 1 点を図示した。

石鎌 (274) 頁岩製の凹基有茎鎌で長さが幅に比して長く、剥離面の大きい粗雑な剥離調整が施される。

SK126 (図版 39-275 ~ 278・40-279・84-275 ~ 279) 石鎌、石錐、剥片、磨石が出土しており、石鎌 2 点、石錐 1 点、剥片接合資料 1 点、磨石 1 点を図示した。

石鎌 (275・276) 275 はチャート製の凹基有茎鎌で、長さが幅に比して長い。先端部及び茎部が欠損

している。276 は頁岩製の凸基有茎鍬で、ほかの石鍬に比べ茎部が太く、剥離調整も粗雑な印象を受ける。

石錐 (277) 頁岩製で平面形は棒状、断面形は菱形を呈する。錐部は一端のみに作出している。

剥片接合資料 (278) 剥片が 48 点出土した。石材は色調が黒褐色で白色鉱物を斑に含む頁岩 (17 点)、色調が黄灰色で葉理構造がみられる頁岩 (21 点)、色調が褐色で灰褐色の斑点を多く含む頁岩 (5 点)、色調が灰白色の頁岩 (2 点)、320 の石材に類似する凝灰岩 (3 点) を確認したが、接合したものは色調が黄灰色で葉理構造がみられる頁岩の 4 点 1 例のみで、同一打面から同方向に剥離作業を行った後、打面を転移し剥離作業を加えたものと考えられる。

磨石 (279) 砂岩の扁平な円盤を素材とする。周縁の一部を両面より打ち欠き、底面を磨面としている。

SX122 (図版 40・84 - 280) 剥片、石鍬が出土しており、石鍬 1 点を図示した。

石鍬 (280) 頁岩製で長さが短く、平面形が正三角形に近い小型の凹基有茎鍬である。

SX 2 a (図版 40・84 - 281 - 284) スクレイパー、剥片、敲石、大型石包丁、原石が出土しており、スクレイパー 1 点、剥片 1 点、大型石包丁 1 点、敲石 1 点を図示した。

スクレイパー (281) 頁岩製で、刃部は主剥離面のみに作出される。

両極剥片 (282) 石材は頁岩で周縁が潰れており、両極剥離痕がみられる。

敲石 (283) 砂岩の扁平な円盤を素材とする。表面及び両側面に敲打痕がみられる。

大型石包丁 (284) 全面が研磨された大型石包丁である。粘板岩製で残存する大きさは長さ 23.8 cm、幅 14.0 cm、厚さ 1.6 cm で左側部が一部欠損している。刃部は両刃で長軸に平行するように研磨痕がみられ、部分的に刃こぼれがある。背部には敲打、剥離痕がみられる。

SX111 (図版 40・84 - 285 - 287) 石鍬、スクレイパー、剥片が 1 点ずつ出土しており全て図示した。

石鍬 (285) 頁岩製の平基有茎鍬で長さが幅に比して長く、両側縁がやや内湾する形状を呈す。先端部が欠損している。

スクレイパー (286) 頁岩製で両端が潰れ、両極剥離痕が残る剥片を素材とする。刃部は裏面にのみ剥離調整を加え作出する。

剥片 (287) 石材は鉄石英である。H 3 層 2 号周溝構造直上において鉄石英製の管玉 (303) が出土していることから、管玉製作時に出た剥片の可能性がある。

SX136 (図版 40・85 - 288) 石鍬が 1 点出土した。

石鍬 (288) 頁岩製の凹基有茎鍬である。最大厚が 1 cm とほかに比べ厚く、剥離面も大きく調整が粗雑なため未成品の可能性も考えられる。

包含層出土石器 (図版 41・42 - 306 - 312・85 - 289 - 311・86 - 312)

H 1 層 (図版 41・85 - 289 - 295) 石鍬 4 点、石錐 1 点、管玉工程残核 1 点、磨製石斧 1 点を図示した。

石鍬 (289 - 292) いずれも頁岩製で、289・290 は長さが幅に比して長い凹基有茎鍬、291 は長さが幅に比して短く、側縁はやや丸みを帯びる平基有茎鍬である。292 は凸基有茎鍬である。289 は右側縁が内湾して、左右非対称の形状を呈し、裏面右側縁の剥離調整が左側縁に抜け出す。

石錐 (293) 頁岩製で平面形は棒状、断面形は三角形を呈し、錐部を一端のみに作出している。

管玉工程剥片 (294) 石材は緑色凝灰岩で、大きさは長さ 3 cm、幅 2 cm、厚さ 2 cm、平面形は三角形を呈する。石材および上面一端に施溝痕を有することから、管玉製作において角柱状剥片を作る際に出た剥片と考えられる。

扁平片刃石斧 (295) 安山岩製の扁平片刃石斧で、平面形は基端のみ弧状を呈し、ほかの部位は幅に差

がなく方形を呈する。表裏面と側面の縁は明確であり、断面形は長方形を呈する。基部には剥離痕がみられ、刃部は一部欠損している。

H2層1号周溝造構直上（図版41・85～296～299）石鏃、石錐、石包丁、砥石、剥片が出土しており、石鏃1点、石錐1点、石包丁1点、砥石1点を図示した。

石鏃（296）頁岩製の凹基有茎鏃で長さが幅に比して長く抉りが深く、側縁はやや丸みを帯びる形状である。右側かえし及び茎部を欠損している。

石錐（297）頁岩製で平面形は棒状、断面形は台形状を呈する。両側剥片を素材とし、一端に錐部を作出している。

石包丁（298）凝灰岩製で体部に穿孔が施される。形状、石材からH3層2号周溝造構直上出土のもの（302）と同一個体と考えられる。

砥石（299）凝灰岩製の小型のものである。表裏面を砥面とし、中央部がやや窪む。

H3層2号周溝造構直上（図版41・85～300～305）石鏃、石包丁、管玉、敲石、礫石器が出土しており、石鏃2点、石包丁1点、管玉1点、敲石1点、礫石器1点を図示した。

石鏃（300・301）300は緑色凝灰岩製の凹基有茎鏃で他の石鏃に比べ、抉りが深く先端部の幅が狭い。また、側縁はやや内湾する形状である。301は頁岩製の凸基有茎鏃で茎部が欠損している。右側かえしの調整が粗雑なため左右非対称な形状を呈する。

石包丁（302）凝灰岩製で体部に穿孔が施され、刃部断面形は「U」字状を呈する。刃部には長軸に平行する研磨痕がみられる。先述したように形状、石材からH2層1号周溝造構直上出土のもの（298）と同一個体と考えられる。

管玉（303）鉄石英製で大きさは長さ1.5cm、直径2.5mm、孔径1mm程度である。表面には13面の研磨面が残り、断面形は円形を呈する。自然化学分析による石材产地分析を行っていないため確定性を欠くが荒川流域で採取可能な石材であること、管玉製作に関連する遺物が出土していることから本遺跡周辺で製作された可能性が高い。

礫石器（304）用途不明だが、棒状蹠を素材とし、周縁全面に敲打痕がみられる閃綠岩製の礫石器である。

敲石（305）花崗岩の円蹠を素材とする。表面、両側面に敲打痕がみられる。また、上面からの剥離も敲石として使用した際に生じたものであろう。

H3層3号周溝造構直上（図版42・85～306～309）石鏃、石核、礫石器、磨石、剥片が出土し、石鏃1点、石核1点、礫石器1点、磨石1点を図示した。

石鏃（306）流紋岩製の凸基有茎鏃で長さが幅に比して長く、丁寧な剥離調整が施される。側縁はやや丸みを帯びる形状を呈する。茎部が欠損する。

石核（307）石材は鉄石英で、分削蹠から僅かに剥片を作出した段階で剥離作業を終了している。

スクレイバー（308）砂岩製の扁平な円蹠を素材とし、両面片側に剥離調整を加え、刃部を作出している。

磨石（309）安山岩の円蹠を素材とし、表面、底面に磨面がみられる。

H3層4号周溝造構直上（図版42・85～310）石鏃が1点出土した。

石鏃（310）頁岩製の凹基有茎石鏃である。抉りは比較的浅く、長さが幅に比して長い。

III b2b層（図版41・311・312・85～311・86～312）石鏃1点、大型直線刃石器1点が出土し、いずれも図示した。

石鏃（311）頁岩製の平基有茎鏃で、長さが幅に比して長く、先端部が僅かに欠損している。

大型直線刃石器（312） 粘板岩製で刃部は外湾し、断面形は「V」字状を呈する。背部・両側縁が剥離により調整される。表面の剥落が顕著であるが、顕微鏡による刃部観察では長軸に対し、平行する研磨痕がみられ、刃部磨製と思われる。

遺構出土石器（図版 42 - 313 ~ 322・43・86 - 313 ~ 330）

石鎌（313 ~ 320） 頁岩製のものが主体をなし、全体的に基部から先端部の頸に剥離調整を施す傾向がみられる。313 ~ 316は凹基有茎鎌で長さが幅に比して長く、側縁の形状は直線的なものが多い。314は流紋岩製のもの、316は長さ 2 cm 程度小型のものである。317・318は頁岩製の平基有茎鎌で317は長さが幅に比して長く、318は長さが短く平面形が正三角形に近い形状を呈する。319は頁岩製の凸基有茎鎌で南区から出土したものである。320は唯一出土した円基鎌で、石材は凝灰岩である。他に比べ調整が大きい印象を受ける。

石匙（321） 南区 43 R グリッドから出土した。頁岩製の縱型石匙で、縱長削片を素材とする。つまみ部は両面加工で背面・裏面とも右茎部、左茎部の頸に調整を加えている。刃部は背面にのみ調整を加え作出生する。

剝片（322） 44 点出土しており、1 点を図示した。石材は頁岩で両極剥離痕がみられる。

大型直線刃石器（323） 頁岩製のもので、最大厚が約 4 cm と厚手で背面に大きく原縫面を残す。刃部は片刃で、主剥離面側には長軸に対し平行する研磨痕がみられる。なお、顕微鏡による刃部観察では使用痕を確認できなかった。

擦切具（324） 2 点出土しており、1 点を図示した。流紋岩製で方形状、台形状、三角形状の 3 個体が接合したものである。残存状況は 1/2 程度で、復元される大きさは長さ 18 ~ 20 cm、幅 7 cm、厚さ 1 cm 前後である。平面形は刃部が外湾する半月形を呈すると思われ、刃部断面形は「U」字状を呈する。層状に剥離する石材特徴を利用し、板状に加工した後、両面加工により刃部を作出したものと考えられる。なお、形状、石材から同一個体と考えられる板状片が 1・2・4 号周溝遺構直上から出土している。

環石（325） 蛇紋岩製のもので、残存状況は 1/3 程度、復元される大きさは直径 10 cm、厚さ 3 cm、孔径 2 ~ 3 cm 前後である。周縁に刃部は作出されていない。表面及び周縁には研磨痕、敲打痕がみられる。蛇紋岩は周辺流域にて採取が確認されていない石材であるため、搬入品の可能性が高い。

砥石（326 ~ 328） 6 点出土しており、3 点を図示した。326は粘板岩製で表裏面を砥面とする。327・328は凝灰岩製で、327は南区から出土しており、全面が砥面で端部に敲打痕・剥離痕がみられる。328は表面のみ砥面である。

敲石（329） 4 点出土しており、1 点を図示した。凝灰岩製で両側面には打ち欠きによる抉りが施される。表裏面に敲打痕がみられる。

打製石斧（330） 流紋岩製で全面に剥離調整を施す。刃部には磨耗痕がみられる。

3 木製品

古墳時代に属すると思われる木製品は図示できたもので、8 点出土している（図版 44 - 331 ~ 337・図版 87）。すべて北区で出土したもので、器種はすべて建築材（柱材）である。また、樅状木製品（図版 44 - 347・図版 87）は 55 Q 区の擾乱土から出土したものであるが、出土した擾乱の掘り込みが古墳時代の面より上であったこと、周辺では古墳時代より新しい遺物は出土していないこと、また、側面の加工痕

から中世以降には下らないと考えられることから、この時期に属する可能性が高いと考えられるのでこの項で触れることとする。

柱材（図版 44 - 331 ~ 337・図版 87） 今回の調査で確認された掘立柱建物は北区の SB107 のみである。1間×2間の総柱で6か所の柱穴が確認され、すべてで柱根が残存していた。比較的残りのよいものもあるが、腐植が進んではとんど土化していたものもあり、図化できたものは5点である。331 はピット 1 の柱根である。残りは良いが、表面は腐植が進んでおり、加工痕を観察するのも困難である。上端部を欠く。下端部は柱材を切断したときの加工痕がくろうじて残っている。鉄製と思われる斧で切断した後、端部を若干2次加工し、平らにしているようである。斧の刃幅は4~5cmと推定される。通直な材を使用している。332 はピット 3 の柱根である。全体的に腐植がかなり進んでおり、図化できたのは、下端部のみである。

周囲から下端に向かって切り込んだ加工痕が認められる。334 のように平坦に加工しようとした跡は認められず、丸みを帯びた尖底となっている。斧の刃幅は4cm程度と推定される。333 はピット 4 の柱根である。全体的に腐植がかなり進み、割れが入っており、表面では加工痕の観察は困難である。下端から20cm程度の部分が残るのみである。柱材を切断した時の切り込みは認められないが、底面を平坦にするための加工痕が残る。鉄製の斧によるとみられ、刃幅は5cm程度である。334 はピット 5 の柱根である。SB107 で検出された柱根の中では最も残存状態がよく、全体的に比較的残りが良いが、表面では加工痕の観察は困難である。柱材の切断痕が一部に認められ、その後、底面を平坦にした際の2次加工の痕が残る。底面の加工は2面から行っている。加工は鉄製の斧によるとみられ、刃幅は3~4cmである。樹種はヤマグワで、331 と同様に通直な材である。335 はピット 6 の柱根である。腐植が進み、表面には割れが多数入り、表面の加工痕の観察は困難である。上端部を欠く。下端部にくろうじて加工痕が認められる。柱材を切断した後に、底面を平坦に2次加工した跡が認められる。切断時は比較的水平に近い切断の仕方をしているようである。刃幅は8cm程度である。樹種はヤマグワである。

以上の柱根5本は木取りがすべて芯持ちの丸太材を利用し、しかも太さもほぼ一定していることから共通の規格を持って切り出された材木を利用していることが明らかである。さらに樹種同定は335の材のみであったが、すべて同じ樹種であると考えられる。ヤマグワは、材質が重硬で強度および耐久性が強いという特徴を有することから柱材としては適材である。また生育場所は河道沿いなどの低地であることから、遺跡周辺から伐採されてきたものである可能性が高い。

336 は P109 で検出されたものである。掘立柱建物とはならず、単独で確認されたものである。腐植が進み、非常に残りが悪く、表面の加工痕の観察は困難である。上端部を欠く。下端部には、斜めに入る加工痕が認められる。おそらく柱材を切断した際の跡と推定される。鉄斧によるとみられる鋭利な刃痕である。刃幅は5~6cm程度である。337 は P110 で検出されたものである。336 と同様に、単独で検出された柱穴から出土したものである。腐植が進み、土化してしまっており、図化できたのは下端部のみである。端面は平坦になっており、何らかの加工が加えられたとみられるが、はっきりと加工痕と断定できる痕跡は観察できなかった。338 は SX104 で検出されたものである。掘立柱建物になるのか、単独の柱穴か遺構の性格は不明である。やや曲がりのある材を利用している。上端部を欠く。下端部に立ち木の切断時の跡が斜めに明瞭に残る。2次加工は認められない。加工は鉄斧によるとみられ、刃幅は5cm以上あるとみられる。

櫛状木製品（図版 44 - 347・図版 87）

347 は 55 Q グリッドで出土したものである。残りはよいが、全体的に腐植により丸みを帯びているため、明瞭な加工痕は観察できなかった。用途としては、杓子ないし匙など食膳具としては、サイズ的に大きく、

舟の櫂のようなものではないかと考えられる。確認に乏しいことから櫂状木製品と仮称した。柾目板を厚さ1.5cmに削り、柄部と身部を肩によって区分している。柄部断面は隅丸長方形をなす。柄部上端をわずかに欠く、身部は原形を保つと思われる。先端部がやや薄く削られているようである。具体的な用途は不明である。

弥生時代に属すると思われる木製品は8点で、その内で7点が北区のSR 2 aから出土したものである。器種は建築部材・杭・加工材である。これらは全て弥生時代中期の土器の出土している4層から出土したものである。その他に、南区の弥生時代の建物跡SI 1の柱根が1点ある。

建築部材（図版44～341・342・図版87） SR 2 aから2点出土している。341は柾目の板材である。両端を欠く。断面形状は片側がやや薄く削られているようである。表面は表裏ともに平滑になっており、何らかの加工が施されたことは明らかであるが、明瞭な加工痕は観察できない。どのような建築材であるのかは不明である。樹種はトネリコ属である。AMS年代測定の結果、B.C.180 ± 40年という年代が出ている。342は柾目のやや厚手の板材である。両端を欠く。断面形状は楔状をなす。表面にはかすかに長軸方向の切削痕が認められる。341と同じくどのような建築材であるのかは不明である。

柱材（図版44～339・図版87） 339のみである。420区のSI 1に伴うと考えられる柱穴から出土した。上端部を欠く。下端部は、鉄製と思われる斧様の工具によって4面以上から切削し、先を尖らせている。形状から杭であった可能性も残る。

杭（図版44～343～346・図版87） SR 2 aより4点出土している。すべて刺さった状態で出土しており、中には新しい後世の杭も含まれる可能性もある。343は、みかん削した材の一端を尖らせたものである。上端を欠く。腐植が進み、残存状況は良くない。先端部は鉄製と思われる斧ないし鉈状の工具で切削した加工痕が残る。4面から面取りしている。344は、343と同じくみかん削した材の一端を尖らせたものである。上端を欠く。先端部の加工痕はやや不明瞭であるが、鉄製と思われる斧様の工具で切削した加工痕が残る。材の残り具合から、新しい時期のものである可能性もある。345は、344と同じく、4分割にみかん削した材の一端を尖らせたものである。表面には樹皮が残る。上端を欠く。中央より下により枝瘤が残る。先端部には、鉄製と思われる斧または鉈様の工具で切削した加工痕が認められる。材の残り具合から、比較的新しいものである可能性もある。346は、丸材の一端を尖らせたものである。表面には樹皮が残る。上端を欠く。先端部は2面から切削を施し尖らせている。非常に鋭利な鉄製の工具で切削した加工痕が認められる。材の残り具合や加工の仕方からみて、新しいものである可能性が強い。

加工材（図版44～340・図版87） 340のみである。SR 2 aより出土した。特徴的なことは、偶然と考えられるが、この加工材が出土したのは、完形の弥生時代後期の土器内から発見されたことである。小形の板目板状の材の一端に薄く尖らせるように切削が加えられている。もう一端は面をなすが、人為的なものかどうかは不明である。建築部材の一部の可能性が高い。樹種はコナラ属である。AMS年代測定の結果、B.C.109 ± 40年という年代が出ている。

4 その他の時代の遺物

本遺跡から出土した弥生時代及び古墳時代の遺物として認定し得ない遺物は、土器では繩文土器の鉢、珠洲焼の鉢、壺、擂鉢である。金属製品では銭貨である。

土器（図版46・87～348～353） 348は繩文土器で半精製の鉢もしくは台付鉢である。器形は胴部が

直線的に立ち上がり、口縁部でやや内湾し、口縁端部には刻み目が施され小波状を呈する。口縁部は7条からなる多条沈線文を施文後、2列の刺突列が施される。また、同部位には穿孔痕があり、2個1対の補修孔の可能性がある。胴部はL R原体による斜行繩文、結節繩文を地文とする。繩文時代晚期、大洞B C～C 2式の時期に帰属するものと思われる。349は珠洲焼の鉢である。口縁端部が外傾している。時期は吉岡康暢の編年区分〔吉岡 1994〕のⅡ期にあたると思われる。350は珠洲焼の鉢である。口縁端部に波状文が施されており、焼きが良好であることから、時期は吉岡編年のⅤ期にあたると思われる。351は珠洲焼の壘鉢片である。鉢目は、一単位14本で幅3.5cmを図る。鉢目が一単位しか認められないので、時期は吉岡康暢の編年区分でのⅢ期にあたると思われる。352は珠洲焼の壺である。口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は舌状である。形状から、時期は吉岡編年のⅡ期である。353は珠洲焼の壺である。内面に指頭痕、外面に平行タタキ痕が認められる。時期は不明である。

銭貨（図版46・87～354～358）354は天保通宝である。初鋤年は1835年であるが、広郭のため鋤造は弘化4年以降のものである。355は淳化元宝である。初鋤年は990年の北宋錢である。裏面は無文である。356は永楽通宝である。初鋤年は1403年の明錢である。裏面は無文である。357は皇宋通宝である。初鋤年は1039年の北宋錢である。通の文字が長い。裏面は無文である。358は寛永通宝である。所謂、古寛永である。初鋤年は1626年である。裏面は無文である。「寛」字の後足の跋の向きが上ないしは外側である。

第VI章 自然科学分析

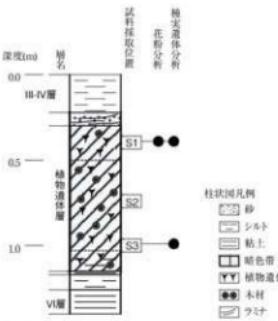
1 はじめに

道端遺跡は新潟県荒川町大字南新保字道端 97 番地ほかに所在し、胎内川扇状地北端を沿うように流れる荒川の支流である乙大日川東側の自然堤防及び後背湿地に立地している。本遺跡はこれまでにも発掘調査が実施され、繩文時代後期後葉～古墳時代にかけての遺構・遺物が多数確認されている。特に、平成 16 年度調査区からは、古墳時代前期と考えられる堅穴建物や円形周溝状遺構、掘立柱建物、杭列等が検出されたことから拠点的集落跡の可能性が示唆されている。

今回の発掘調査では、弥生時代中期及び古墳時代後期の遺構・遺物、弥生時代中期頃に集落内を流れていると考えられる河川跡が確認されている。本項では、これらの発掘調査成果から課題とされた、1) 遺構及び河川跡の年代推定、2) 弥生時代中期頃の古植生および植物利用の検討、3) 遺構内の内容物推定、の 3 点について自然科学分析を用いて検討する。

2 試 料

試料は、上記の分析目的を考慮し、各遺構及び河川内、さらに、基本土層から採取された土壤、植物遺体等からなる（第2表）。なお、上記の古植生の検討に際しては、河川跡（SR 2a）の埋積物の採取を行っている。確認トレチ地点の土層観察では、SR 2a は、基底は塊状無層理の青灰色シルト・粘土であり、その上位には不整合で流路埋積物が堆積し、下位より植物遺体層、中～細粒砂、III～IV 層相当と考えられる暗褐色を呈するシルトからなる。このうち植物遺体層は、堆積構造や砂粒の粒径、土層中の植物



第12図 SR2a模式柱状図及び資料採取位置

グリッド	遺跡名	サンプル	試料の質	備考	分析項目				
					IAC	W	P	S	PO
360	Ⅲ b1 層			051122	上層				●
370	Ⅲ b1 層			051122	上層				●
	Ⅲ b2a 細	炭化物							
380107		ビート耕作	生村	334					
37025	SL 125	4号土（耕作層）	土壤サンプル	051124	上層				●
420	SI 2	塊状サンプル			泥				
430	SI 3	土壤サンプル		050824	上層	人骨			
	2号圓筒遺構	1号土:II-3, 1号灰化物			上層				
35022	1号圓筒遺構	面層	6層	051113	上層				●
340	SI 6	カド焼土層		051101	上層				●
35022	3号圓筒遺構	1号土:灰		051126	上層				●
SI 8		剖面サンプル		051117	上層				●
SI 138	1号土:	土壤サンプル		051021	上層	土塊あり	洗浄		●
SD11	炉場土層	施工サンプル			上層	2箇所あり			●
530	SR 2a	4層			生村	342			
SR 2a	4層	180 上部			生村	340			
520	SR 2a	4層上:土			生村				
SR 2a	5層	植物遺体	S-1				植物遺体分析上部		●
SR 2a	5層	植物遺体	S-3				植物遺体分析下部		●
550	SI 62a 細	2層							●

* IAC: 放射性炭素年代測定, W: 植物同定, P: 花粉分析, 土理: 土理化分析, S: 植物遺体分析, PO: 植物遺体分析

第2表 分析試料および分析項目一覧

化石の状況から3層に細分されることから、各層を対象に3試料（上部よりS1・S2・S3）を採取している。分析では、大型植物化石の種類の変化も合せて検討するため、当層の上部（S1）と下部（S3）を対象試料としている。

3 分析方法

A 放射性炭素年代測定

土壤や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C（30分）850°C（2時間）で加热する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加热し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 95DH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて⁸13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma: 68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

B 樹種同定

剥刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（拖水クロラール、アラビアガム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、[島地・伊東1982]および[Wheeler et al. 1998]を参考にする。また、各樹種の木材組織配列の特徴については、[林1990]、[伊東1995、1996、1997、1998、1999]や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

C 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリス（無水酢酸9、濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入して

プレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類を対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料ではこの限りではない）。また、花粉・胞子量のほかに、試料中に含まれる微粒炭量も求める。炭片は20 μm 以上を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。微粒炭量は、堆積物1ccあたりに含まれる個数を一覧表として示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基準として、百分率で出現率を算出し図示する。

D 土壤理化学分析

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、腐植含量はチューリン法〔土壤養分測定法委員会 1981; 土壌標準分析・測定法委員会 1986〕による。以下に、各項目の操作工程を示す。

リン酸、カルシウム含量

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00 mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105°C、5時間）により測定する。風乾細土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO₃）約5 mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）約10 mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100 mlに定容しろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P₂O₅）濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P₂O₅ mg/g）を求める。

腐植含量

風乾細土試料の一部を粉碎し、0.5 mmのふるいを全通させる（粉碎土試料）。粉碎土試料0.100-0.500gを100 ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4N クロム酸・硫酸混液10 mlを正確に加え、約200°Cの砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2% フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N 硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org-C 乾土%)を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

E 種実遺体分析

各試料を秤量後水に一晩浸し、0.5 mm目の篩を通して水洗する。残渣を粒径別にシャーレに集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実を抽出する。現生標本および「原色日本植物種子写真図鑑」〔石川1994〕、「日本植物種子図鑑」〔中山ほか2000〕等との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を求めて表に示す。イネの穎は、基部の果実序柄の個数を数え、1000個以上は容量を表示する。分析後の種実遺体等は、種類毎に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施して保管する。

F 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタンゲステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤〔2004〕の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレバラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレバラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1gあたりの個数に換算）を求める。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレバラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレバラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位の変化から播種の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位の変化を図示する。

4 結 果

A 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果（第3表）、SI 3 燃土サンプルは 2200 ± 40 BP、SI11 焼土層は 2190 ± 40 BP、SI 8 ガササンプルは 2150 ± 40 BP、SR 2a - 4 層出土材は 2130 ± 40 BP、SR 2a - 4 層 180 土器内出土材は 2060 ± 40 BP を示す。一方、暦年校正結果（第4表）のうち測定誤差 σ として計算させた結果は、SI 3 燃土サンプルは cal BC 359-204、SI11 焼土層は cal BC 357-194、SI 8 ガササンプルは cal BC 349-112、SR 2a - 4 層出土材は cal BC 340-93、SR 2a - 4 層 180 土器内出土材は cal BC 160-2 を示す。

なお、暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過

試料名	試料の質	種類	確定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ ‰	測定年代 BP	Code No.	Measurement No.
SI 3 燃土サンプル	灰化材	コナラ属コナラ属展コナラ節	2200 ± 40	-28.88 ± 0.68	2270 ± 40	887-1	IAAA-51942
SI11 焼土層	灰化樹	庇樹樹	2190 ± 40	-25.09 ± 0.97	2100 ± 40	887-2	IAAA-51943
SI 8 ガササンプル	灰化材	ハンノキ属ハンノキ属垂葉	2150 ± 40	-19.12 ± 0.70	2050 ± 40	887-3	IAAA-51944
SR 2a 4 層	木材	トリニコ属	2130 ± 40	-33.97 ± 0.68	2270 ± 40	887-4	IAAA-51945
SR 2a 4 層 - 180 土器内 木材	木材	コナラ属コナラ属展ケヌケ節	2060 ± 40	-27.99 ± 0.95	2090 ± 40	887-5	IAAA-51946

1) 確定年代は ± 1σ、即ち ± 1 倍標準偏差を示す。

2) BP 年代は BC 1950 年を基点として算出した年齢であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の 68% を含む範囲）を年代値に換算した値。

第3表 放射性炭素年代測定結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)						相対比	Code No.
		σ	cal BC 359 - cal BC 340	cal BC 340 - cal BC 339	cal BC 339 - cal BC 338	cal BC 338 - cal BC 337	cal BC 337 - cal BC 336		
SI 3 燃土サンプル	2204 ± 41	σ	cal BC 359 - cal BC 340	cal BC 340 - cal BC 339	cal BC 339 - cal BC 338	cal BC 338 - cal BC 337	cal BC 337 - cal BC 336	0.143	887-1
		cal BC 328 - cal BC 296	cal BC 296 - cal BC 294	cal BC 294 - cal BC 293	cal BC 293 - cal BC 292	cal BC 292 - cal BC 291	cal BC 291 - cal BC 290	0.420	
		2 σ	cal BC 383 - cal BC 376	cal BC 376 - cal BC 373	cal BC 373 - cal BC 370	cal BC 370 - cal BC 367	cal BC 367 - cal BC 364	0.438	
		cal BC 357 - cal BC 282	cal BC 282 - cal BC 244	cal BC 244 - cal BC 219	cal BC 219 - cal BC 218	cal BC 218 - cal BC 214	cal BC 214 - cal BC 211	0.611	
SI11 焼土層	2187 ± 41	σ	cal BC 257 - cal BC 235	cal BC 235 - cal BC 194	cal BC 194 - cal BC 160	cal BC 160 - cal BC 160	cal BC 160 - cal BC 157	0.376	887-2
		2 σ	cal BC 383 - cal BC 160	cal BC 160 - cal BC 117	cal BC 117 - cal BC 108	cal BC 108 - cal BC 108	cal BC 108 - cal BC 107	0.982	
		σ	cal BC 349 - cal BC 313	cal BC 313 - cal BC 282	cal BC 282 - cal BC 257	cal BC 257 - cal BC 235	cal BC 235 - cal BC 229	0.545	
		cal BC 208 - cal BC 149	cal BC 149 - cal BC 122	cal BC 122 - cal BC 109	cal BC 109 - cal BC 99	cal BC 99 - cal BC 90	0.545		
SI 8 ガササンプル	2146 ± 36	σ	cal BC 357 - cal BC 284	cal BC 284 - cal BC 247	cal BC 247 - cal BC 236	cal BC 236 - cal BC 230	cal BC 230 - cal BC 224	0.279	887-3
		2 σ	cal BC 256 - cal BC 234	cal BC 234 - cal BC 185	cal BC 185 - cal BC 154	cal BC 154 - cal BC 133	cal BC 133 - cal BC 117	0.671	
		σ	cal BC 340 - cal BC 329	cal BC 329 - cal BC 313	cal BC 313 - cal BC 292	cal BC 292 - cal BC 282	cal BC 282 - cal BC 273	0.267	
		2 σ	cal BC 203 - cal BC 180	cal BC 180 - cal BC 154	cal BC 154 - cal BC 122	cal BC 122 - cal BC 109	cal BC 109 - cal BC 99	0.188	
SR 2a 4 層	2129 ± 39	σ	cal BC 353 - cal BC 292	cal BC 292 - cal BC 230	cal BC 230 - cal BC 218	cal BC 218 - cal BC 206	cal BC 206 - cal BC 197	0.010	887-4
		2 σ	cal BC 214 - cal BC 160	cal BC 160 - cal BC 133	cal BC 133 - cal BC 117	cal BC 117 - cal BC 108	cal BC 108 - cal BC 107	0.018	
		σ	cal BC 340 - cal BC 329	cal BC 329 - cal BC 313	cal BC 313 - cal BC 292	cal BC 292 - cal BC 282	cal BC 282 - cal BC 273	0.062	
		2 σ	cal BC 203 - cal BC 180	cal BC 180 - cal BC 154	cal BC 154 - cal BC 122	cal BC 122 - cal BC 109	cal BC 109 - cal BC 99	0.036	
SR 2a 4 層 - 180 土器内	2059 ± 42	σ	cal BC 353 - cal BC 292	cal BC 292 - cal BC 230	cal BC 230 - cal BC 218	cal BC 218 - cal BC 206	cal BC 206 - cal BC 197	0.039	887-5
		2 σ	cal BC 214 - cal BC 160	cal BC 160 - cal BC 133	cal BC 133 - cal BC 117	cal BC 117 - cal BC 108	cal BC 108 - cal BC 107	0.004	
		σ	cal BC 340 - cal BC 329	cal BC 329 - cal BC 313	cal BC 313 - cal BC 292	cal BC 292 - cal BC 282	cal BC 282 - cal BC 273	0.062	
		2 σ	cal BC 203 - cal BC 180	cal BC 180 - cal BC 154	cal BC 154 - cal BC 122	cal BC 122 - cal BC 109	cal BC 109 - cal BC 99	0.036	

註) RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.01 (Copyright 1986-2005 M. Stuiver and P. Reimer) を使用

第4表 暦年較正結果

去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 ± 40年）を校正することである。曆年校正に関しては、本来10年単位で表すのが通例とされるが、将来的な曆年校正プログラムや曆年校正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表記している（第4表）。

また、曆年校正については、北半球の大気中炭素に由来する校正曲線を用いて、測定誤差 $\sigma \cdot 2\sigma$ 双方の値の計算を行っている。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲であり、第4表の相対比は、 $\sigma \cdot 2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

B 樹種同定

木本は、全て落葉広葉樹で、4種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節、エノキ属、ヤマグワ・トネリコ属に同定された（第6表）。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔團部は1-3列、孔團外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら單独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-20細胞高のもとの複合放射組織がある。

エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔團部は2-4列、孔團外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-8細胞幅、1-50細胞高で精細胞が認められる。

ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で、孔團部は3-5列、晚材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。小道管の管壁厚は中庸、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。

トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で、孔團部は1-2列、孔團外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または2個が放射方向に複合し、複合部はさらに厚くなる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

種類	植物遺体類	SR 2a 試料番号
木本花粉		
モクシ属		2
マツ属被維管束系属		5
マツ属(不明)		7
スギ属		7
ヤシモモ属		1
ノルミ属		1
サルシバ属		5
クヌギ属		1
ケンシテ属-アサガ属		1
カバキ属		1
ハノキ属		37
ブナ属		11
コラム属コナラ属		40
コラム属アカガシ属		3
クル属		1
シノキ属		1
ニレ属-ケヤキ属		32
エノキ属-クノキ属		15
カラザシショウ属		1
キタダ属		1
アメルシワ属		3
アメル属		1
モクシ属		1
カシデ属		6
トネリキ属		38
ウツギ科		1
ミキモ属		1
エゴノキ属		9
イクシノキ属		1
トヨリコ属		8
草木花粉		
ミズシショウ属		1
サオモガク属		1
イモ科		2
カツフリグサ科		5
サヌエアザミ-ウナギカミ属		2
アザメ科		1
カラマツソク属		1
マツ科		5
セリ科		2
オナエシ属		1
ヨモギ属		3
不育花粉		13
シダ類孢子		
ゼンマイ属		2
施のシダ類孢子		14
合計		
木本花粉		242
草木花粉		24
不育花粉		13
シダ類孢子		16
施肥(不明を除く)		282
1ccあたりの微粒炭量(個)		5640

第5表 花粉分析結果

C 花粉分析

SR 2a S 1からは花粉化石が豊富に産出（第5表、第12図）し、保存状態も良好である。なお、図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

地層	層位	試料名	形種	時期	樹種	番号
SD107	不層	ピット柱材	板立柱植物の柱材	古墳時代中期～後期	ヤマグワ	334
SK 2a 4層	180 土器内	河川出土の甕の中の柱材	出生時代	コナラ属コナラ亜属クヌギ属	340	
SK 2a 4層	53 Q	河川出土の建築柱材	出生時代	トネリコ属	342	
SK 2a 4層柱上部	82 Q	河川出土の丸太	出生時代	エノキ属		

第6表 樹種同定結果

本試料の花粉化石群集は、木本花粉の占める割合が高い。産出した種類のうち、木本花粉は、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、トチノキ属が比較的多く産出し、マツ属、スギ属、サワグルミ属、ブナ属、エノキ属-ムクノキ属、カエデ属、エゴノキ属、トネリコ属などを伴う。一方、草本花粉は全体的に産出が少ない。カヤツリグサ科、マメ科、ヨモギ属などが検出され、水生植物に由来するミズバショウ属、サジオモダカ属などの花粉も、僅かに検出される。なお、本試料に含まれる微粒炭量は、1ccあたり5640個である。

D 土壤理化学分析

対象とした試料は、いずれもシルト質であり、国際法区分における野外土性〔ペドロジスト懇談会編1984〕はSiL（シルト質土壤）～SiCl（シルト質埴土壤）に分類される。なお、いずれの土壤もオリーブ黒～黒色を呈し、やや還元的な色調であることから、湿性な環境下におかれた経緯があることが推察される。

本分析結果（第7表）では、3号周溝造構1号土坑、SK134上と比較して、2号周溝造構1号土坑1層炭化物、1号周溝造構周溝6層の覆土で腐植含量が15%以上と著しく高く、これらの試料に多量の有機物が集積されている事が確認される。なお、集積されている有機物の本質的な性状に関しては、2号周溝造構1号土坑1層炭化物では炭化物が集中して検出されている状況から、未分解の有機物の影響が考

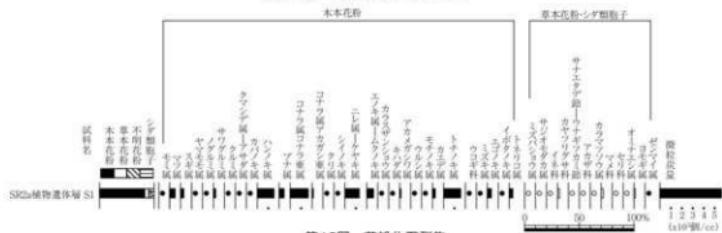
試料名	土性	土色	腐植含量(%)	PdO(mg/g)
2号周溝造構 1号土坑 1層炭化物	SiL	5Y2/1 黒	15.73	276
1号周溝造構 周溝 6層	SiL	5Y2/1 黒	17.63	429
3号周溝造構 1号土坑 1層上	SiL	5Y2/2 オリーブ黒	4.48	198
SK134 1層上	SiCL	5Y2/2 オリーブ黒	3.16	175

土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による。

SiL…シルト質土壤（粘土0～15%、シルト45～100%、砂0～35%）

SiCL…シルト質埴土壤（粘土0～15%、シルト45～80%、砂0～25%）

第7表 土壤理化学分析結果



第13回 花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉化石数、草本花粉・シダ類孢子は総孢子より不明花粉を除く数を基準として百分率で算出した。

●○は1%未満を示す。また、微粒炭量は、堆積物1ccあたりに含まれる。

分類群 個数 (n)	54 Q クリップ		43 O クリップ		55 Q クリップ		55 Q クリップ		52 O クリップ		52 O クリップ		55 R クリップ	
	遺構名 S6	SE3	2号周溝遺構 土壌サンプル	1号土坑1層炭化物 部サンプル	S8	SR2a	植物遺体層 S1	植物遺体層 S3	SR2a	植物遺体層 S1	植物遺体層 S3	III b2a 層	III b2a 層	
	地點・試料名 カマド焼土層	土壌サンプル	1号土坑1層炭化物	部サンプル	植物遺体層 S1	植物遺体層 S3	III b2a 層	III b2a 層	植物遺体層 S1	植物遺体層 S3	III b2a 層	III b2a 層	植物遺体層 S1	植物遺体層 S3
木本	ハンノキ属風 葉実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ハナノキ属 葉樹	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ゴヨウ属風 葉小	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	クワ科 桃	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	タマシキ属風 梅子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	アカガゼンカ 梅子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	カエデ属風 葉実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ツチノキ属 葉実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ツバキ属 葉実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ブドウ科 梅子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	イヌボリ科 梅子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ミズキ 桃	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	タラコ科 桃	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ツツジ科 梅子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ミズクマ属風 葉実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ヘラワセモドカ 葉実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	イネ科 稻	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	アワーヒエ 堅果	1	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-
	イネ科 稻	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	カヤツリグサ科 葉実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	カヤツリグサ科 葉実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	カヤツリグサ科 葉実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ナゾヅクサ科 葉子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	カキエンジ属風 葉子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	スレソウ属 葉子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ウド 桃	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	セリ科 葉実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	サクラソウ科 葉子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	トウクチナ属 葉実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ツリソウ 葉実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	木の実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	木材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	炭化材	50+0.5cc	多量 (cc)	20+	-	-	-	-	-	多量 (5cc)	多量 (20cc)	-	22+	-
	不純炭化物	-	-	4	-	-	-	-	-	3	5	50+0.5cc	-	-
	不純物質	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	泥炭	-	-	-	-	-	-	-	-	30+	30+	-	-	-
	動物遺存体	-	-	-	-	-	-	-	-	2	30+	-	-	-
	土壤小管 (根鉢)	-	-	2	-	-	-	-	-	7	-	-	-	-
その他の	高麗小管 (根鉢)	-	-	30+(1cc)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

第8表 種実遺体分析結果

えられるが、1号周溝遺構周溝6層に関しては土壌腐植として存在しているものであるか、あるいは未分解の有機物として存在しているものであるか、本分析結果のみから判断することはできない。

一方、リン酸含量は、3号周溝遺構1号土坑、SKI34上で2.0P₂O₅mg/g程度であるのに対し、2号周溝遺構1号土坑1層炭化物では2.76P₂O₅mg/g、1号周溝遺構周溝6層では4.20P₂O₅mg/g 2号周溝遺構1号土坑1層炭化物、1号周溝遺構周溝6層では腐植も多いことから、植物遺体に由来する可能性があり、一概に動物遺体等の遺体成分に由来する可能性を指摘することはできない。ただし、1号周溝遺構周溝6層は、2号周溝遺構1号土坑1層炭化物と比較して腐植含量はほぼ変わらないが、僅かにリン酸含量が高い傾向が認められる。

E 種実遺体分析

種実遺体分析では、被子植物29分類群1300個以上の種実等が検出された(第8表)。以下に、各試料における検出状況などを記す。

SI 6

栽培植物のアワーヒエの炭化胚乳が1個、カヤツリグサ科の果実が3個検出された他に、炭化材が確認された。カヤツリグサ科は、分析中に1個発芽するなど状態が極めて良好であり、後代からの混入と判断

される。そのため、本報告では結果表示と形態記載にとどめ、考察に関しては除外している。

SI 3、2号周溝遺構、SI 8

栽培植物のイネ、アワーヒエが炭化した状態で検出された。イネは、胚乳がSI 3から8個、2号周溝遺構から81個、SI 8から6個検出され、穎は破片がSI 3から14個、2号周溝遺構から1000個以上（約1cc）、SI 8から22個検出された。アワーヒエの胚乳は、2号周溝遺構から3個、SI 8から各1個検出された。この他に、2号周溝遺構からキケマン属が1個、SI 8からイネ科が1個検出された。種実以外では、木材、炭化材、木材組織が認められない種類・部位共に不明の炭化物、動物遺存体、昆蟲、土器、高麗小僧（褐鉄鉢）などが確認された。

なお、イネ科の果実表面には短毛が密生し、キケマン属の種子も遺存状態が極めて良好であることから、後代からの混入と判断される。そのため、本報告では結果表示と形態記載にとどめ、考察に関しては除外している。

SR 2a 植物遺体層（S 1, S 3）

本木20分類群（広葉樹のハンノキ属ハンノキ亜属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ムクノキ、クワ属、マタタビ属、アカメガシワ、カエデ属、トチノキ、ブドウ科、イイギリ、ミズキ、カラノキ、ツツジ科、エゴノキ属、トネリコ属、ムラサキシキブ属、クサギ、タニウツギ属、ニワトコ）125個、草本13分類群（ミクリ属、ヘラオモダカ、カヤツリグサ科、カラムシ属、タデ属、ナデシコ科、トウゴクサバノオ、スミレ属、ウド、セリ科、サクラソウ科、トウバナ属、キク科）33個、計158個の種実が検出された。種実以外では、木の芽、木材（多量）、炭化材、蘚苔類、昆蟲などが確認された。S 1、S 3の種類構成は、概ね同様である。

55 R グリッド III b2a 層

同定可能な種実は検出されず、木材、炭化材が確認された。

以下に、本分析にて得られた種実の形態的特徴などを、木本、草本の順に記す。

＜木　　本＞

ハンノキ属ハンノキ亜属 (*Alnus* subgen. *Alnus*) カバノキ科

果実が検出された。茶褐色、広倒卵形で偏平。径4mm程度。両側には質の薄い翼がある。

ハンノキ属 (*Alnus*) カバノキ科

果序を構成する果鱗の破片が検出された。黒褐色で木質。果序が完形ならば卵状楕円体。果鱗は扇形で背面に深い縦溝が目立つ。径5mm程度。基部はやや薄く楔形、頂部はやや厚く反りかえるように突出し、3-5つに分かれて開く。

コナラ属コナラ亜属 (*Quercus* subgen. *Quercus*) ブナ科

殻斗の破片が検出された。灰褐色、完形ならば椀状。破片の大きさは9mm程度。表面には狭卵形の鱗片が覆瓦状に配列する。

ムクノキ (*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planchon) ニレ科ムクノキ属

核（内果皮）の破片が検出された。灰黄褐色、完形ならば広倒卵形、一側面は狭倒卵形で他方は稜になつて薄く、基部に淡褐色の突起をもつ。破片の大きさは5mm程度。内果皮は厚く柔らかく脆い。表面には微細な網目模様がありざらつく。断面は柵状。

クワ属 (*Morus*) クワ科

種子が検出された。黄褐色、三角状広倒卵形。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になりやや薄い。長さ2.2mm、

径 1.7 mm 程度。一辺が鋭利で、基部に爪状の突起を持つ。表面には微細な網目模様がありざらつく。

日本に分布するクワ属は、ケグワ、オガサワラグワ、ヤマグワ、ハチジョウグワの 4 種と栽培種のマグワがある。ケグワ、オガサワラグワ、ハチジョウグワは分布地が限られており、本地域には分布していないことから、ヤマグワやマグワに由来する可能性がある。

マタタビ属 (*Actinidia*) マタタビ科

種子が検出された。茶~黒褐色、楕円形で両凸レンズ形。長さ 2 mm、幅 1.3 mm 程度。基部はやや突出し、切形。種皮は硬く、表面には円~楕円形の凹点が密布し網目模様をなす。

アカメガシワ (*Mallotus japonicus* (Thunb.) Mueller-Arg.) トウダイグサ科アカメガシワ属

種子の破片が検出された。黒褐色、完形ならば径 4 mm 程度の歪な球体。破片は基部にある Y 字形の後に沿って割れており、大きさは 3.8 mm 程度。種皮は硬く、表面には瘤状突起を密布しゴツゴツしている。種皮断面には内側に湾曲する柵状構造がみられる。

カエデ属 (*Acer*) カエデ科

果実の破片と種子が検出された。果実は灰褐色、非対称楕円体でやや偏平。頂部の翼を欠損する。径 1 cm、厚さ 1 mm 程度。基部は切形で 2 翼果の合着面は平ら。両面の正中線上に鈍稜がある。果皮表面には葉脈状の隆条模様がある。種子は黒褐色、径 7 mm 程度の左右非対称楕円形で偏平。表面には網目模様が同心円状に配列する。

トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

幼果、果実、種子の破片が検出された。幼果、果実は灰褐色、歪な倒卵形。幼果は径 9 mm、果実は径 2.7 cm 程度。頂部はやや尖り、基部は切形。基部と頂部を結ぶ 3 本の溝が走る。果皮は厚く、スponジ状で弾力があり、表面には皮目状の斑点がある。種子は、径 3.2 cm 程度の偏球体。表面には赤道面を蛇行して一周する特徴的なカーブを境に、不規則な流理状模様がある光沢の強い黒色の上部と、粗面で光沢のない灰褐色の下部の着点に別れる。種皮は薄く硬く、割れ方は不規則。

ブドウ科 (Vitaceae)

種子の破片が検出された。黒褐色、完形ならば広倒卵形で側面観は半広倒卵形、基部の臍の方に向かって細くなり、嘴状に尖る。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。破片の大きさは 4 mm 程度。種皮は柵状で薄く硬い。同定の根拠となる背面が欠損した状態であったため、ブドウ科にとどめた。

イイギリ (*Idesia polycarpa* Maxim.) イイギリ科イイギリ属

種子が検出された。灰~黒褐色、広倒卵形。径 1.7 mm 程度。頂部に円形の孔がある。頂部から基部の臍にかけて 1 本の縦隆条がある。表面はスponジ状の微細な網目模様があり、ざらつく。

ミズキ (*Cornus controversa* Hemsley) ミズキ科ミズキ属

核 (内果皮) の破片が検出された。灰褐色、偏球体。径 4.5 mm 程度。基部に大きく深い孔がある。内果皮は厚く硬く、表面にはやや深い縦溝が数本走る。

タラノキ (*Aralia elata* (Miq.) Seemann) ウコギ科タラノキ属

核 (内果皮) が検出された。灰褐色、半円形でやや偏平。長さ 2 mm、幅 1.1 mm 程度。腹面はほぼ直線状で、片端に突起が見られる。背面には数本の浅い溝が走る。表面は粗面。

ツツジ科 (Ericaceae)

種子が検出された。赤褐色。楕円形、長楕円形など不定形で偏平。長さ 1.8 mm、幅 0.9 mm 程度。種子本

体は狭楕円形で偏平。縁には膜状の翼がある。翼表面には縦長の網目模様が配列する。

エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

種子が検出された。灰・黒褐色、卵体など。長さ 1 cm、径 6-7.5 mm 程度。頂部はやや尖り、表面には頂部から基部にかけて 3 本程度の太い縦溝が走る。基部は斜切形で、灰褐色の着点がある。種皮は厚く硬く、断面は柵状。表面には微細な粒状の網目模様があり、ざらつく。

トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

果実の破片が検出された。灰褐色、線状長楕円形で偏平、長さ 1 cm、幅 4 mm 程度。頂部の翼を欠損する。果皮両面には数個の線条が縦列する。

ムラサキシキブ属 (*Callicarpa*) クマツヅラ科

核（内果皮）が検出された。黄褐色、倒卵体で偏平。長さ 2.2 mm、径 1.5 mm 程度。背面は丸みがあり、腹面中央はやや窪む。腹面方向に湾曲し、側面観は三日月形。中央部の内果皮が極めて薄く柔らかいため、破損している個体がみられる。縁部分の内果皮は厚く、やや弾力がある。

クサギ (*Clerodendron trichotomum* Thunb.) クマツヅラ科クサギ属

核（内果皮）の破片が検出された。灰褐色で広卵体、側面観は三日月形。長さ 6 mm、幅 4 mm、厚さ 3 mm 程度。背面は丸みがあり、腹面は平らで腹面方向にやや湾曲する。腹面の一端には裂け目状の発芽口がある。内果皮は厚く硬い。背面には大きな網目模様があり、腹面表面はやや平滑。

タニウツギ属 (*Weigela*) スイカズラ科

種子が検出された。淡・赤褐色、長楕円形で両凸レンズ形。長さ 1.2 mm、幅 1 mm 程度。縁にある淡褐色の翼を欠損する。頂部には稜角がある。表面には円・楕円形の凹みによる網目模様が発達している。

ニワトコ (*Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) Hara) スイカズラ科ニワトコ属

核（内果皮）が検出された。淡褐色、広倒卵体でやや偏平、長さ 2.3 mm、幅 1.5 mm 程度。基部はやや尖り、背面は円みがあり、腹面の正中線上は鈍稜をなす。腹面基部正中線上には小さな孔がある。内果皮はやや硬く、表面には横皺状模様が発達する。

<草 本>

ミクリ属 (*Sparganium*) ミクリ科

果実が検出された。淡灰褐色、紡錘状倒卵体。長さ 4.5 mm、径 2.5 mm 程度。頂部は尖り、基部は切形。果皮はスポンジ状で、表面には数本の隆条が縦列する。

ヘラオモダカ (*Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche) オモダカ科サジョモダカ属

果実が検出された。淡褐色、楕円形で偏平、基部は切形。長さ 2.2 mm、幅 1.5 mm 程度。背部に深い縦溝が 1 本走る。果皮はスポンジ状で柔らかく、中の種子が透けて見える。種子は茶褐色、倒 U 字状に曲がった円柱状で偏平。径 1 mm 程度。種皮は薄い膜状で柔らかく、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と多量の穎（果）の破片が検出された。炭化しており黒色。長楕円形でやや偏平。長さ 4.5-5 mm、幅 2-3 mm、厚さ 1.5 mm 程度。胚乳は、基部は一端に胚が脱落した斜切状凹部がある。表面には 2-3 本の隆条が縦列する。表面に穎が付着している個体もみられた。穎（果）は、基部に円柱状の特徴的な果実柄がある。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が縦列する。

アワーヒエ (*Setaria itarica* (L.) P.Beauv.-*Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno) イネ科

胚乳が検出された。炭化しており黒色。広楕円形でやや偏平。径 1.5 mm 程度。背面は丸みがあり、腹面

は平ら。基部正中線上に胚の凹みがある。表面はやや平滑。

イネ科 (Gramineae)

果実が検出された。淡褐色、半挿卵体でやや偏平。長さ 2 mm、径 0.5 mm程度。果皮は薄く柔らかく、表面には短毛が密生し、微細な網目模様が縱列する。

カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。淡・茶褐色。三稜またはレンズ状倒卵体。径 1-2 mm程度。頂部の柱頭部分がわずかに伸びる。表面には微細な網目模様がありざらつく。

カラムシ属 (*Boehmeria*) イラクサ科

果実が検出された。淡黄褐色、非対称な広倒卵形で偏平。径 1.3 mm程度。頂部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮は薄く表面はざらつく。

タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。灰褐色、長さ 4 mm、径 2.5 mm程度の三稜状広卵体で、果皮は薄く柔らかく、表面には微細な網目模様が発達しがらつく、ミゾソバ (*Polygonum thunbergii* Sieb. et Zucc.) に似る個体や、黒褐色、長さ 3 mm、径 2.5 mm程度の両凸レンズ状広卵体で、正中線上に鈍稜があり、果皮表面には明瞭な網目模様がありざらつく、ヤナギタデ (*Polygonum hydropiper* L.) に似る個体を含む。

ナデシコ科 (Caryophyllaceae)

種子が検出された。茶褐色、腎状円形でやや偏平。径 1 mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、瘤状突起が臍を取り囲むように同心円状に配列する。

キケマン属 (*Corydalis*) ケシ科

種子が検出された。黒色、腎臓状円形で両凸レンズ形。径 1.7 mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面は平滑で光沢が強く、微細な網目模様が臍を取り囲むように同心円状に配列する。

スミレ属 (*Viola*) スミレ科

種子が検出された。淡灰褐色、広倒卵体。径 1.5 mm程度。基部は尖りやや湾曲する。頂部は円形の臍がある。表面には縱方向に走る 1 本の縫合線がある。種皮は薄く、種皮表面は細い縦筋が走りざらつく。種皮内面は横長の細胞が配列する。

ウド (*Aralia cordata* Thunb.) ウコギ科 タラノキ属

核 (内果皮) が検出された。淡褐色、半広卵形で偏平。長さ 1.5-2 mm、幅 1 mm程度。腹面はほぼ直線状で、片端は突起状に伸びる。表面はスponジ状。

セリ科 (Umbelliferae)

果実が検出された。黄褐色、梢円体でやや偏平。長さ 2.2 mm、幅 1 mm、厚さ 0.5 mm程度。果実はスponジ状で、表面には数本の幅広い稜があり、その間に半透明で茶褐色の油管が配列する。

サクラソウ科 (Primulaceae)

種子が検出された。茶褐色、倒台形、背面は平らで梢円状、菱形状などの 4-5 角形。径 1 mm程度。

腹面は長軸方向に薄くなり稜状で、稜上の中央付近に広線形の臍がある。表面は 5-6 角形の凹みによる網目模様がある。

トウバナ属 (*Clinopodium*) シソ科

果実が検出された。茶褐色、倒広卵体で径 1.2 mm程度。背面は丸みがあり、下端は舌状にわずかに突出する。

腹面の正中線は鈍棱をなす。表面には微細な網目模様がありざらつく。

キク科 (Compositae)

果実が検出された。淡褐色、長楕円体で腹面方向にやや湾曲する。長さ 3.5 mm、径 1.5 mm 程度。頂部は切形で円形の鱗がある。果皮表面には微細な網目模様が縱列する。

F 植物珪酸体分析

結果を第 9 表、第 14 図に示す。各試料から植物珪酸体が検出されるが保存状態は不良であり、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、各試料の産状を述べる。

Ⅲ b1 層は、56 O グリッドと 57 O グリッドで植物珪酸体の産状や含量が異なり、56 O グリッドは植物珪酸体含量が 3000 個/g であり、57 O グリッドよりも

少ない。また、イネ属は、全く検出されず、クマザサ属を含むタケア科やヨシ属等が認められ、特にヨシ属の産出が目立つ。一方、57 O グリッドでは、イネ属の短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体が検出されるが、その含量は数百個/g 程度である。クマザサ属を含むタケア科の産出が目立ち、ヨシ属やススキ属なども認められる。

Ⅲ b2a 層は、栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、いずれも数百個/g 程度である。この他に、クマザサ属を含むタケア科の産出が目立ち、ヨシ属やススキ属なども認められる。

SD125 4 層（腐植層）は、イネ属が全く検出されない。クマザサ属の産出が目立ち、ヨシ属なども認められる。

5 考 察

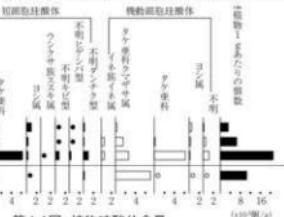
A 古 植 生

SR 2 a の植物遺体層からは、花粉化石、種実遺体等が豊富に検出された。木本類では、花粉化石ではハンノキ属、コナラ属コナラアヤ属、ニレ属-ケヤキ属、トチノキ属などが多く産出し、マツ属、スギ属、サワグルミ属、ブナ属、エノキ属-ムクノキ属、カエデ属、エゴノキ属、トネリコ属等と作る。種実遺体では、ハンノキ属ハンノキアヤ属、ハンノキ属、コナラ属コナラアヤ属、ムクノキ、クワ属、マタタビ属、アカメガシワ、カエデ属、トチノキ、ブドウ科、イイギリ、ミズキ、タラノキ、ツツジ科、エゴノキ属、ト

種類	試料区分	56O グリッド	57O グリッド	57O グリッド	57Q1 グリッド	SD125 4層
		Ⅲ b1 層	Ⅲ b1 層	Ⅲ b2a 層	Ⅲ b2a 層	
イネ科葉肉胞壁珪酸体						
イネ属	イネ属	0	143	339	0	
タケア科	クマザサ属	309	1364	1101	2,001	
タケア科	タケア科	363	1,354	6,263	339	
ヨシ属	ヨシ属	944	285	247	90	
ウシクサ族	ススキ属	0	82	0	0	
不明ヒゲンノ型	不明ヒゲンノ型	73	71	742	0	
不明ヒゲンノ型	不明ヒゲンノ型	73	71	339	0	
不明ヒゲンノ型	不明ヒゲンノ型	218	143	989	179	
イネ科葉肉胞壁珪酸体						
イネ属	イネ属	0	570	577	0	
タケア科	クマザサ属	291	1,568	2,637	6,997	
タケア科	タケア科	0	143	6,181	90	
ヨシ属	ヨシ属	309	285	165	90	
不明	不明	145	499	1,154	90	
合計						
イネ科葉肉胞壁珪酸体		2,179	3,422	10,384	3,229	
イネ科葉肉胞壁珪酸体		944	3,065	10,713	7,286	
総計		3,123	6,487	21,097	10,495	

第 9 表 植物珪酸体含量

クマザサ属を含むタケア科やヨシ属等が認められ、特にヨシ属の産出が目立つ。一方、57 O グリッドでは、



平均 1 gあたりに換算した個数を示す。●(100 mg/g 間隔の個数を示す)。

第 14 図 植物珪酸体含量

平均 1 gあたりに換算した個数を示す。●(100 mg/g 間隔の個数を示す)。

ネリコ属、ムラサキシキブ属、クサギ、タニウツギ属、ニワトコが検出された。

これらのうち、ハンノキ属（ハンノキ亜属を含む）やニレ属-ケヤキ属、サワグルミ属、ムクノキ、トチノキ、ミズキ、トネリコ属等は、河畔や低湿地などの適湿地を好む分類群であり、コナラ亜属は、ブナ属などとともに冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素である。本遺構の放射性炭素年代測定結果（SR 2 4 層 木材）を考慮すると、約 2100 年前頃の遺跡周辺では、河川沿いなどにハンノキ属、ニレ属-ケヤキ属などの湿地林や河畔林が分布し、後背の山地部や丘陵部などにコナラ亜属、ブナ属などを主体とする落葉広葉樹林が成立していたと推測される。落葉広葉樹林内では部分的にマツ属、スギ属などの針葉樹が林分を形成し、林縁部にはカエデ属、アカメガシワ、エゴノキ属などの高木類、タラノキ（ウコギ科）、タニウツギ属、ニワトコなどの低木類、マタタビ属、ブドウ科などの藤本類が生育していたことが推定される。

同様の植生は、高柳 A 遺跡（荒川町）の 2460 ± 60 BP を示す土層の花粉分析結果〔株式会社古環境研究所 1996〕や星塚遺跡・江添遺跡（胎内市）の花粉や大型植物化石を対象とした分析調査〔パリノ・サー・ヴェイ株式会社 2005c〕に認められていることから、少なくとも約 3700 年前頃から同様の植生が分布していたと考えられる。また、検出された種実遺体分類群は、過去の本遺跡における調査成果〔新山 2003；吉川・吉川 2005〕と類似しており、特に、平成 16 年度調査区の古墳時代前期（4 世紀中頃）と考えられる河川内堆積物より検出された種実遺体分類群〔吉川・吉川 2005〕に類似している。

一方、草本類では、カヤツリグサ科、マメ科、ヨモギ属などの花粉や、ミズバショウ属、サジオモダカ属などの水生植物の花粉が認められた。種実遺体ではミクリ属、ヘラオモダカ、カヤツリグサ科、カラムシ属、タデ属、ナデシコ科、トウゴクサバノオ、スマレ属、ウド、セリ科、サクラソウ科、トウバナ属、キク科が認められた。これらの多くは人里近くに開けた草地を形成する、いわゆる人里植物に属する種類であることから、調査区付近の草地などに生育していたと推測される。また、水生植物のミズバショウ属やミクリ属、ヘラオモダカ（サジオモダカ属）は、河川内や周辺の湿地などに生育していたものに由来すると考えられる。

SD125 の植物珪酸体の産状に着目すると、周囲にはクマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属などのイネ科植物が生育していたことが窺われる。なお、多産したクマザサ属を含むタケ亜科は他のイネ科と比較して風化に強いことや、生産量の多いことが指摘されており〔近藤 1982；杉山・藤原 1986〕、他の種類よりも残留しやすいとされている。また、日本海側の多雪地域では、自然状態においてはブナを中心とした森林植生となり、ブナの林床はチシマザサ（クマザサ属の一種）が発達する〔宮脇編著 1985〕。チシマザサは林床だけではなく、森林が失われた空間に侵入し、ササ林を作ることがあることから、クマザサ属は周辺の林分や林分付近の開けた場所に成立したササ林などから碎屑物と共に混入した可能性がある。

なお、古墳時代後期の遺構検出面とされるⅢ b1 層やその下位に相当するⅢ b2a 層においても、同様の植物珪酸体群集が検出されることから、当該期も同様の植生が認められた可能性がある。なお、56 O グリッドと 57 O グリッドのⅢ b1 層では植物珪酸体の産状が異なり、56 O グリッドではヨシ属の産出が目立った。ヨシ属が湿润な場所に生育することから、56 O グリッドでは湿润な状態にあった可能性があるが、この点については本地点の堆積環境と合せて再検討する必要がある。

B 植物利用状況

弥生時代中期の住居跡とされる SI 3、1 号周溝遺構、SI 8 からは、栽培植物のイネの胚乳と穎、アワヒエの胚乳が検出された。のことから、当該期にはイネやアワヒエが植物質食糧として存在し、こ

これらが利用されていたと推定される。また、全て炭化した状態であったことから、被熱の影響を受けたと考えられる。

ところで、本遺跡周辺では、反貫目遺跡や西川内南遺跡ではイネが確認され、六斗町遺跡ではイネやアワーヒエが確認されており [パリノ・サーヴェイ株式会社 2004, 2005a, 2005b]、これらはいずれも古墳時代前期と考えられる遺構から認められている。本遺跡では弥生時代中期と考えられる住居跡から、これらの植物質食糧となる種実が検出されたことから、本地域では当該期にはすでにイネやアワーヒエが存在し、利用されていたことが窺われる。

また、SR 2a から検出された種実のうち、コナラ属コナラ亜属やトチノキなどの堅果類は、アク抜きを要するが食用・長期保存が可能で収量も多いことから、古くから里山で保護してきた有用植物である。さらに、ムクノキ、クワ属、マタタビ属、ブドウ科の一部は果実が食用可能である。これらの有用植物は、上述した栽培植物と共に本遺跡周辺で入手し、利用していた可能性がある。この他に、タラノキ、ウドや、エゴノキ属、カラムシ属、タデ属、セリ科、キク科やその他の種類にも、野生品の採取、在来種の栽培、渡来種の栽培など、種実や種実以外の部位の利用形態が考えられ [青葉 1991]、今後種類の細分化が可能になれば、詳細な検討が可能となる。

また、同じく SR 2a より出土した木材は、コナラ属コナラ亜属クヌギ節、トネリコ属、エノキ属であった。このうち、建築部材とされる木材に利用されたトネリコ属は、一般に重硬で強度が高いといった材質的特徴を有する。いずれの木材も、花粉化石及び種実遺体の産状から遺跡周辺に生育していたと推定されることから、恐らくこれらを入手し、利用したと考えられる。

一方、古墳時代後期の住居跡 SI 6 のカマドからは、アワーヒエの炭化した胚乳が検出された。上述したように本遺跡周辺では古墳時代前期以降のイネやアワーヒエの利用が明らかとされており、当該期にもアワーヒエが植物質食糧として利用されていたと考えられる。

なお、古墳時代後期の遺構検出面である 57 O グリッドⅢ b1 層やその下位に相当する土層のⅢ b2a 層からは、イネ属の植物珪酸体が数百個/g 程度検出された。既存の研究によれば、稲作が行われた水田跡の土壤ではイネ属の機動細胞珪酸体が 5000 個/g 程度検出されることが多く、安定した水田稲作が行わられたと推定される [杉山 2000]。また、群馬県内の畦畔などが検出から水田と考えられる遺構を対象とした。

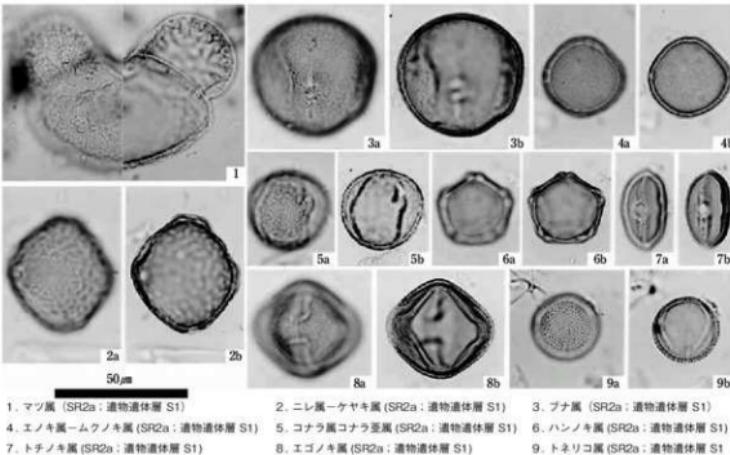
調査では、機動細胞珪酸体含量が 1000 個/g 程度の事例もある [パリノ・サーヴェイ株式会社 2001, 2002_{qq}]。本分析結果は、これらの事例と比較しても少ないことや、試料の観察では植物の根に由来すると考えられる管状・糸根状の酸化鉄が発達しており、上位の耕作土等の影響が推測されることから、本地点での稲作等の栽培の可能性を支持することはできない。

また、掘立柱建物跡 SB107 の柱材は、落葉広葉樹のヤマグワに同定された。ヤマグワは、河道沿い等の低地に生育し、木材は重硬で強度および耐朽性が高いといった特徴を有する。なお、反貫目遺跡では、古墳時代前期の立木群が検出され、これらを対象とした調査が行われている。立木は河川跡北側の低地～微高地縁辺と考えられる地点から検出され、ハンノキ亜属やコナラ節、ヤマグワ、トネリコ属、コナラ節に同定されている [パリノ・サーヴェイ株式会社 2004]。したがって、当該期の古植生は不明であるが、本遺跡周辺の低地～微高地には、ハンノキ亜属やトネリコ属、コナラ節とともにヤマグワも生育しており、木材を入手・利用していた可能性がある。

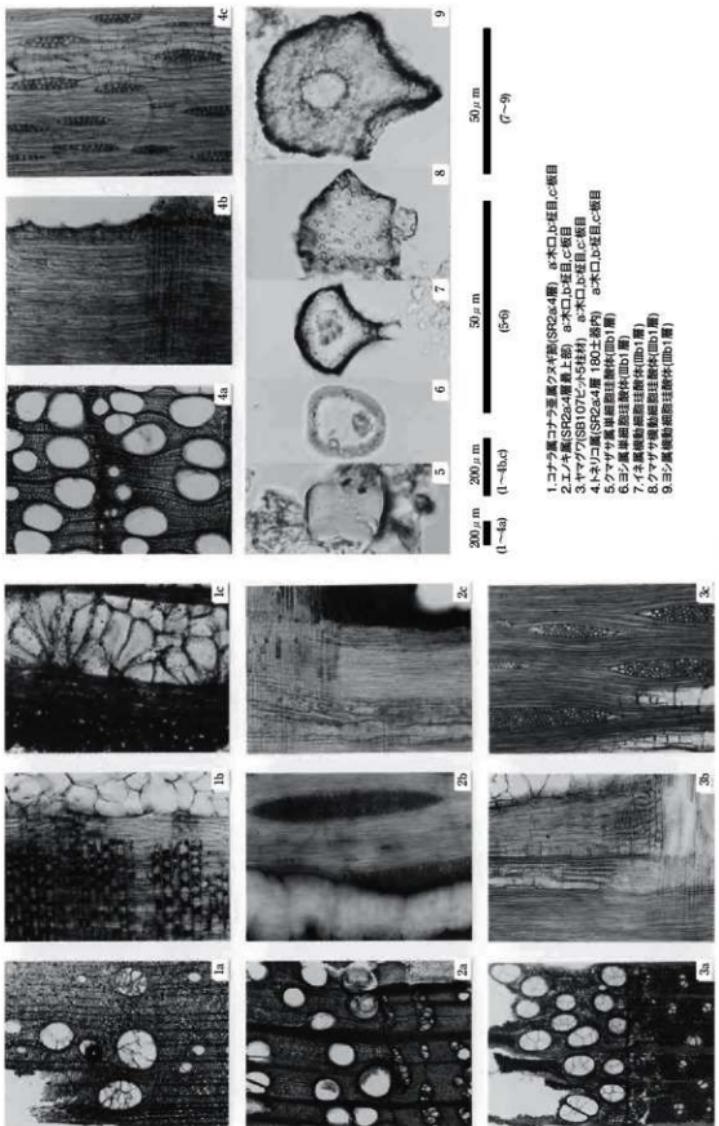
C 内容物推定

土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが〔Bowen1983 : Bolt・Bruggenwert1980 : 川崎¹²・1991 : 天野¹³・1991〕、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0P₂O₅mg/g程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5P₂O₅mg/g〔川崎¹²・1991〕という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壤では6.0P₂O₅mg/gを越える場合が多い。

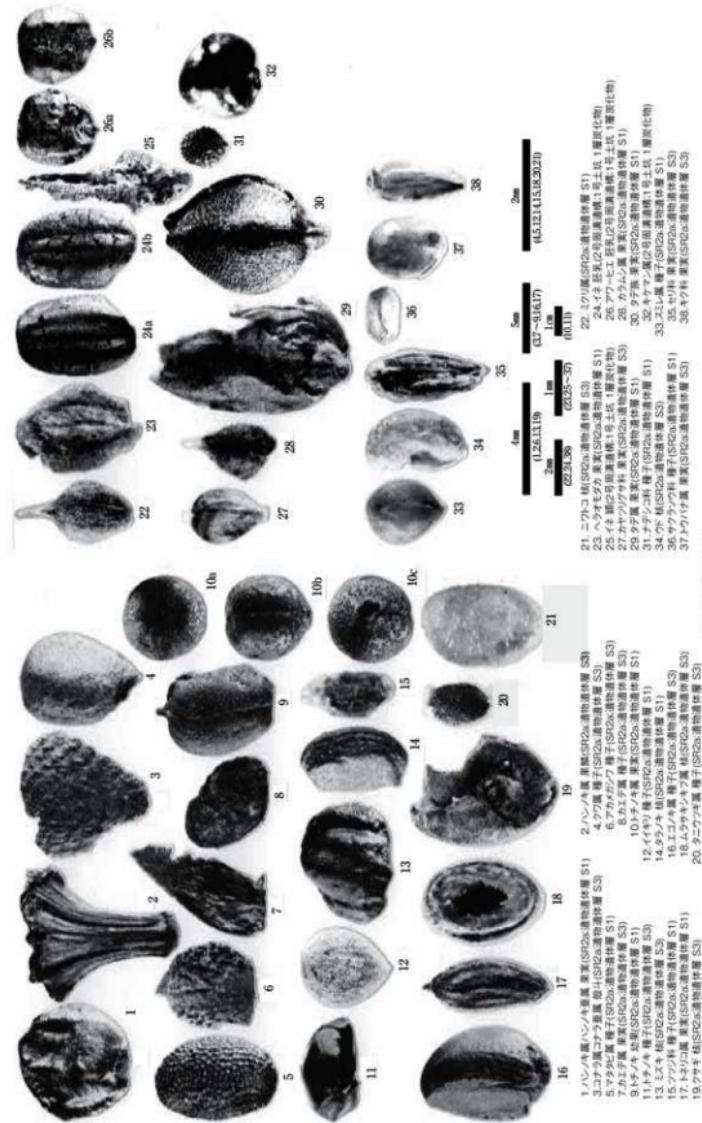
本分析試料では、1号周溝造構周溝6層から天然賦存量を超えるリン酸が検出されたことから、何らかの形でリン酸が富化されていることが指摘される。覆土に残留する動物遺体由来する成分が検出された可能性もあるが、植物遺体などに由来する可能性もある。特に、1号周溝造構周溝6層試料の観察、焼土や炭化材が多く含まれていたことや、上述したように還元状況下におかれた経緯が予想されることから、リン酸富化の要因を一概に判断することはできない。なお引用文献は巻末にまとめた。



第15図 花粉化石



第16図 木材・植物組織体



第17図 植実遺体

第Ⅷ章 まとめ

1 古墳時代の遺物

A 器種構成

本遺跡における古墳時代の遺物出土量は浅箱で24箱であり、検出された遺構数に比べて多量の遺物が出土している。その内訳は、包含層(15箱)、SR 2a(6箱)、各遺構(2箱)、搅乱(1箱)である。約6割が包含層、約3割がSR 2aで、包含層とSR 2aだけ約9割以上を占め、各遺構は1割弱である。この中で、まとまって一定量出土したのはSR 2、SK 1・2・116、SX119である。以下では、各遺構の器種構成について概観する。

SK 1・SK 2

SK 1とSK 2は壺のみ出土しており、他器種は出土していない。SK 1は壺G類1点(3)、壺A b類1点(4)の計2点出土し、SK 2aは壺A a類1点(5)のみ出土している。両遺構ともに壺が100%である。

遺構	重 量	壺		高杯	瓶	壺	手づくし		土師器 H類	須 器	計	
		無	有				手づくし	土師器 H類				
No.1	532g	92g (17%)	142g (60%)	787g	14g	54g	19g	—	—	6338g		
	857g	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
No.2	2263g	189g (8%)	2379g (91%)	609g	522g	—	—	42g (2%)	45g (2%)	134g (6%)	96g (2%)	4770g
	698g	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
No.3	1411g	469g (32%)	308g (67%)	161g	89g	—	—	—	—	—	—	1960g
	678g	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
No.4	4686g	138g (2%)	1164g (84%)	211g	—	241g	9g	—	—	—	—	6379g
	674g	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
No.5	249g	20g (8%)	100g (60%)	101g	—	75g (14%)	—	—	—	—	—	519g
	475g	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
No.6	2441g	274g (10%)	121g	153g (69%)	—	—	—	—	—	—	—	2715g
	699g	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
小計	17306g	4498g (27%)	2442g (56%)	1935g (59%)	103g	370g	70g	43g	134g	96g	22600g	
	575g	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	670g	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
52B	1568g	153g (10%)	104g	—	—	—	—	—	—	—	—	1825g
	897g	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
53Q	16089g	445g (2%)	2986g (67%)	1447g (31%)	63g	—	—	—	6g (1%)	—	—	16093g
	679g	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
53R	6479g	2002g (23%)	1056g (54%)	926g (46%)	102g	—	36g	—	—	—	—	8619g
	679g	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
小計	22136g	679g (27%)	4227g (67%)	2477g (65%)	—	—	36g	—	—	—	—	29007g
	679g	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
総合計	39000g	11152g (21%)	6669g (49%)	4483g (49%)	206g	370g	106g	43g	140g	96g	31677g	
	679g	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	679g	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

第10表 遺物集中地点1重量比率表

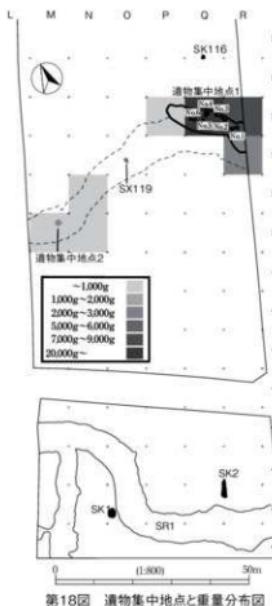
SK116

椀4点・壺2点が出土している。非掲載遺物は総破片数205点ある。椀は掲載遺物以外の個体は確認できない。壺は掲載遺物以外に2~3個体あると考えられるが、実測可能なものはない。椀はB a類(6)、B b類(7)、C a類(8)、C b類(9)、壺はA b類(11)、D a類(10)である。椀は4点中1点が黒色処理を施したものである。椀と壺はほぼ同量出土している。

SX119

土師器と須恵器が共伴しており、土師器は椀・瓶・鉢・壺・壺、須恵器は杯・壺が出土している。掲載遺物は10点あり、それ以外に非掲載遺物が総破片数279点ある。壺は掲載遺物の5点で、A a類(77)、B b類(79)、C類(76)、E類(78)、F類(80)である。椀は掲載遺物1点と非掲載遺物1点であり、掲載遺物はK類(73)で、非掲載遺物はD

類を確認でき、どちらも内面黒色処理を施す。瓶は掲載遺物1点と非掲載遺物1点である。掲載遺物はAa類(75)で、非掲載遺物は口縁部を確認でき、75とは異なるものである。その他、壺A類(74)、鉢(81)、須恵器は甕A類(82)、非掲載遺物の杯がある。SX119では土師器碗2点・瓶2点・鉢1点・壺1点・甕5点、須恵器杯1点・甕1点を確認できる。SK1・2・116とは異なり、器種が多種にわたる。その中で、甕の割合が多い。



第18図 遺物集中地点と重量分布図

SR 2a

SR 2aは調査区を東西に蛇行して検出され、層位は1・2層が古墳時代、3～5層が弥生時代に相当する。52・53 Q・Rグリッドでは河川跡の北側肩部分に列をなして多量の遺物が出土した。それらは特に6か所の集中か所があり、それぞれをNo. 1～6として取り上げた。ここでは、これらの集中か所がどういった意味をもつのか、器種構成等から検討していく。

器種構成は、遺物の重量をもとに検討を進める。重量を選択した理由は、出土遺物のほとんどが器種を判別できても細分類までは判別できない細片であるためである。SR 2aから出土した遺物についてグリッド・地点別に総重量と器種別の重量（第18図・第10表）を求めた。第18図では1,000gを基準としてトーンを変えて表示した。No. 1～6地点とグリッド出土土器の重量は別にしてカウントしている。第18図をみると、No. 1～6地点のあるグリッド・52 O・50 Mグリッドの3か所に遺物集中範囲を確認できる。52 Oグリッドから出土している遺物はSX119に限られており、その他では出土していない。50 Mグリッドでは50 M 18・19グリッドに遺物の分布が集中している。ここは甕2点（56・60）が出土したところで、遺物は甕2点の破片がその大半を占める。遺物が包含されていた覆土はNo. 1～6地点とSX119の覆土と似ていて、炭化物を多量に含んでおり、同様の性格を持っているものと考えられ、第18図では50 Mグリッドの遺物集中地点を遺物集中地点2と表示した。

次に、最も出土量の多かったのは、No. 1～6地点のあるグリッドで、53 Qグリッドが24,243gと群を抜いている。No. 1～6地点と集中地点のあるグリッドでは器種構成の重量比においてほぼ同じ様相を示している。甕が7～9割を占め、碗が残りの1～3割で、その他高杯・瓶・壺・手づくね土器が1割にも満たない程度である。No. 2では須恵器の杯口蓋1点と甕1点が出土している。しかし、碗の黒色処理有無の比率ではその分布に異なった様相がみられた。第10表では各地点とグリッド別を表示した。黒色処理の無:有の比率ではNo. 1が2:8、No. 2が6:4、No. 3が7:3、No. 4が8:2、No. 5が5:5、No. 6が4:6となる。これらの結果から、No. 2～6は黒色処理の比率が同等もしくはそれ以下で、逆にNo. 1は黒色処理の比率が高い傾向がみられる。この傾向により、No. 1・No. 6(1群)、No. 2・No. 5(2群)、No. 3・No. 4(3群)の3群に分けることができる。そして、黒色処理の割合により、3群→2群→1群といった変遷の傾向が想定できる。しかし、遺物集中範囲の周辺は擾乱を受け、その影響により遺

物が動いているものと推測され、良好な一括資料とすることはできない。よって、次項の時期設定ではこの変遷を基にしつつも、個々の土器については形態等により、取捨選択している。No. 1 ~ 6は個々を集中か所とすることはできないが、遺物の出土状況から廃棄や埋納によって形成された可能性も指摘でき、ここをひとつの遺物集中か所と考え、第20図には遺物集中地点1とし、実線で表示した。

結果として、遺物集中地点1はSR 2aの埋没後、何處かの廃棄もしくは埋納が行われたと推測される。何處かといいうのは前述した黒色処理の割合により、遺物集中地点1を3群に分かれると推定したということで、少なくとも3回以上の廃棄もしくは埋納が行われ、おおよそ3群→2群→1群の順で行われた可能性を示唆している。なお、廃棄もしくは埋納については項を改めて検討する。

以上、器種構成を中心に検討を行ってきたが、器種構成の中心は、SK 1・2・遺物集中地点2が壺、SK116は壺・瓶、SX119と遺物集中地点1は壺と瓶であるが、その他に高杯・瓶・壺・手づくね土器・須恵器が含まれる。この中に、遺物集中地点1を含めていないのは、遺物集中地点1は廃棄もしくは埋納を3回以上行っていると推測しており、3群→2群→1群もおおよその変遷であることから、器種構成をつかむことは困難であると考えたからである。器種構成はSK 1・2・遺物集中地点2→SK116→SX119の順で、器種構成のバラエティが増すことを確認できた。

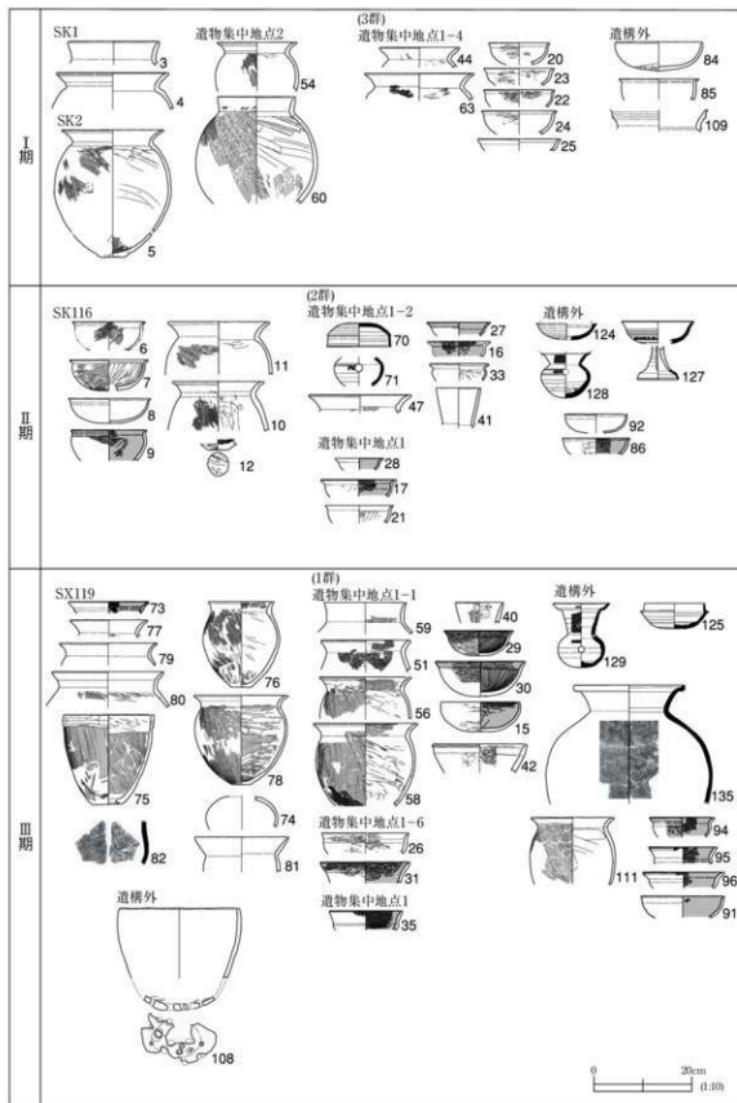
B 時期設定（第11表・第19図）

時期を設定するにあたっては、川村浩司の編年（以下、川村編年とする）[川村2000]を軸として、品田高志の編年（以下、品田編年とする）[品田1989]、相田泰臣の編年（以下、相田編年とする）[相田2004]、田嶋明人の編年（以下、田嶋編年とする）[田嶋1986・1987]を参考にした。須恵器は田辺昭三の編年（以下、田辺編年とする）[田辺1966・1981]を参考にする。

本遺跡の古墳時代の遺物は、中期後半～後期前半を中心とし、前期～中期前半の遺物も出土しているが、その量は少ない。時期設定における主要な遺物は出土量の多い瓶・壺を中心とした。遺構内のものを主体として、遺構外・遺物集中地点1は補助的に扱う。よって、本報告では中期後半～後期前半について時期設定を行った。本遺跡の出土遺物の中心である時期は、川村編年の9～14段階まで確認でき、この間にI～Ⅲ期の時期区分を設定した。第11表では本遺跡の所在する阿賀北地域の遺跡と県内の主要遺跡も合わせて掲載し、各遺跡との併行関係を示した。また、既存の編年案との対応も表中に掲載した。品田編年の列の()内は川村編年による品田編年との対比を引用したもので[川村2000前掲]、[品田1989]とは異なっており、両氏の対比案を掲載した。以下では時期ごとに概要を記す。

時期	道端遺跡		阿賀北の遺跡	県内主要遺跡	川村編年 (2000)	品田編年 (1989)	相田編年 (2004)	田嶋編年 (1986-1987)	田辺編年 (1966-1981)
I	遺物集中地点2 SK1 SK2	遺物集中地点1 3群	全曲	戸口B 北割 五分一稻場 月岡	9段階 ~11段階	II-1 (III-1)		13群	TK216 ~TK23
II	SK116		六百地	小丸山 犬山割 南原	12段階 ~13段階	II-2 (III-2)	I期	14群	TK47 ~MT15
III	SX119	1群	高田 六百地 千作り 売敷2次 浦田山2号墳	高塙B 千刈 大久保 三王山5号墳	13段階 ~14段階	III-1 (IV-1)	II期	15群	MT15 ~TK10

第11表 古墳時代中・後期における道端遺跡の変遷と編年対応表



第19図 古墳時代中・後期における道端遺跡出土土器の変遷

I 期

前期からみられる器種は一部残存するのみとなり、器種は形骸化している。本遺跡では当時期に帰属する遺構からは壺のみで、椀の確実な出土を確認できないが、当時期の壺が川村編年9～11段階の資料と類似していること、9段階以降確実に椀を確認できることから、本来は椀が当時期に存在すると想定する〔川村 2000 前掲〕。よって、当時期は川村編年の9～11段階と併行させ、椀が確実に確認されるが、黒色処理を施さず、まだ一般的ではない時期とし、続くⅡ期への準備段階と想定する。

I期の基準となる土器はSK 1・2・遺物集中地点2出土土器である。SK 1・遺物集中地点2は同様の土器組成で、壺A類とG類で構成される。SK 2は壺1点で、A類である。その他、遺物集中地点1ではおおよそ3群がこの時期に相当する。第19図には遺物集中地点1～4の資料を掲載した。I期の特徴は次のとおりである。壺は胴部に最大径があり、胴部の張りが前期からみられる壺より弱くなる。頭部はくの字状に屈曲し、口縁端部は丸形がやや優勢であるが、面取りも一定量確認できる。椀は遺構内出土の資料を確認できないが、川村編年では本報告の分類A類・B類・C類を確認できることから〔川村 2000 前掲〕、当時期も同様であると考えた。椀は口縁部が弱く外反し、黒色処理を施されないことが特徴としてあげられる。109は二重口縁が形骸化したもので、この時期以降みられなくなると推定する。本遺跡ではI期の須恵器を確認していないが、県内では大角地遺跡〔青梅町教委 1981〕・五分一稻場遺跡〔戸根 1978〕からTK208併行期の須恵器が確認されており、須恵器導入期とされている〔川村 2000；品田 1989〕。本報告でも県内の須恵器導入期を当時期とし、本遺跡での須恵器が確実に確認できるのはやや遅れてⅡ期となる。神林村金曲遺跡〔田辺 2002b〕では椀に黒色処理を施しておらず、須恵器は黒色処理とともに確認できることからも、「椀」→「椀に黒色処理を施す・須恵器」といった変遷を想定できる。黒色処理は富山県境野新遺跡〔藤田 1974〕において田嶋編年の12～13群併行期に確認されている。当時期は黒色処理導入の動向により、2段階に分けられる可能性があり、また、川村編年ではこの時期を9～11段階の3段階に分けられているが、本遺跡では資料が不足しているため、細分を行なわず、1時期とした。

II 期

本遺跡において須恵器が確認でき、椀に黒色処理を施す時期。当時期をもって後期的土器様式の成立と考える。椀が遺構内から確実に確認でき、SK116からは椀4点・壺2点が出土している。遺物は1・2層から出土し、層位では明確に分けることはできず、出土状況から一括遺物と判断した。しかし、壺(10・11)では10が11より新しい様相を示している。10は頭部の屈曲が弱く、器壁は厚い。椀では古い様相を示している中に、黒色処理を施すもの(9)が含まれている。このことは、SK116が2時期に分かれる可能性を示唆しているが、ここでは出土状況から一括遺物として取り扱う。その他、遺物集中地点1ではおおよそ2群が当時期に相当する。第19図には遺物集中地点1～2出土土器を掲載した。また、遺物集中地点1の中には、遺物番号を付さずにグリッド単位で取り上げたものよりも、その中から当時期に相当すると考えられる資料も合わせて掲載した。

当時期の特徴は次のとおりである。壺は最大径が胴部にあるが、胴部の張りがより弱くなり、長胴化傾向にある。頭部はくの字状に屈曲するが、屈曲は弱くなる。口縁端部は丸形が大半を占めるが、面取りも少量ながら確認できる。口縁部はナデが粗くなり、ハケメが一部残存する。椀は内面に黒色処理を施すもののを確認できるが、その量は少ない。種類は豊富になり、比較的小型のものが多くみられる。33と類似するものが福島県佐平林遺跡〔福島県教委 1978〕から出土しており、報告ではTK47併行期とされている。

遺物集中地点1-2では小型丸底壺(41)が出土しており、この器種は前期からみられるものであるが、屋敷跡2次〔水澤ほか2004〕の28号造構から小型丸底壺が後期の遺物と共に伴しておらず、報告では一括遺物としている。よって、報告においても、小型丸底壺が後期までみられることが推定され、41をこの時期のものと判断した。須恵器はTK47とMT15の両方の型式を合わせてもつもので、TK47~MT15併行期とした。遺物集中地点1-2では杯口蓋(70)・縁(71)が出土しており、形態等からも当時に相当するもので、遺物集中地点1の2群がおよそ当時に相当するということと一致する。杯口身はヘラケズリが丁寧に施され、口径はやや小さい。杯口蓋の縁はやや明瞭である。高杯は脚部がやや長く、3方に透かしがある。口縁部はやや開き気味となる。縁は頸部が短く、体部は肩の張った形状を呈する。孔は中央よりやや上部にある。

III 期

椀の多様化と黒色処理を施す土器の最盛期に相当する〔品田1989〕。当時はII期で成立した土器様式が展開していく段階であると想定する。本遺跡ではSX119出土土器を基準とする。椀1点・瓶1点・壺1点・鉢1点・甕6点・須恵器壺1点で、本遺跡では土師器と須恵器が共存する唯一の造構である。SX119はSK116と同様で、出土状況から一括遺物と判断した。73は椀K類で、須恵器模倣と考えられ、当時期をもって須恵器模倣の土師器を確実に確認できる。また、瓶は当時期から確実に確認でき、單孔・多孔がある。108は造構外であるが、SX119と同様の52O12グリッドから出土しており、SX119と関連するものと推定される。82は胴部片であるが、外面の調整痕が135と類似していることから、135と類似するものと推定される。その他、遺物集中地点1ではおよそ1群が当時に相当する。第21図には遺物出土地点1-1・6出土土器を掲載した。また、遺物集中地点1の番号のない資料も合わせて掲載した。

当時の特徴は次のとおりである。甕は最大径が胴部にあるが、口径とはほぼ同様になり、より長胴化が顕著となる。頸部は湾曲化する。口縁部はナデが粗くなり、ハケメを残す割合が高くなる。椀はJ類・K類といった須恵器模倣と考えられるものが増加し、合わせて黒色処理を施したものと大型のものが増加する。須恵器はMT15とTK10の両方の特徴が見られ、MT15~TK10併行期とした。杯口身はヘラケズリが粗くなり、底部はヘラ切りのまま未調整である。口径はやや大きく、口縁端部は丸くおさめる。縁は頸部が長くなり、体部は扁平な球状を呈する。孔はほぼ中央に穿つ。129は口縁部・頸部・体部の3ヶ所に波状文を施すもので、県内ではあまり類例はないが、山形県では多数確認されている〔小野1980〕。135は保内三王山5号墳出土のものと類似している〔荒木ほか1989〕。第11表では高塙B遺跡〔坂井1983〕を当時に含めているが、高塙B遺跡でみられるような椀を確認できず、高塙B遺跡よりや古く位置づけられる可能性がある。

以上、本遺跡における時期設定を行ってきたが、既存の編年との対応により、土器変遷の大枠を把握することができたのではないかと思う。器種構成では、SK1-2・遺物集中地点2→SK116→SX119の順で器種が増加していることを確認し、時期設定を行った結果、器種の増加傾向がほぼ土器の変遷と一致することを確認できた。

本遺跡の成果としては、「黒色処理を施した土師器椀と須恵器の導入期」「中期~後期への移行期」に相当する資料を提供できたことがあげられる。黒色処理については昨年度調査した道端遺跡において古墳時代前期の鉢などに多く確認でき、もともとこの地域で持っていた技術であると推定できる。黒色処理の技術は中期になると衰退し、須恵器の導入と共に盛行し、椀・高杯に施される。本遺跡では黒色処理を施した椀と須恵器が同時に出現していることから、黒色処理と須恵器との関連性が示唆される。

C 遺構の性格

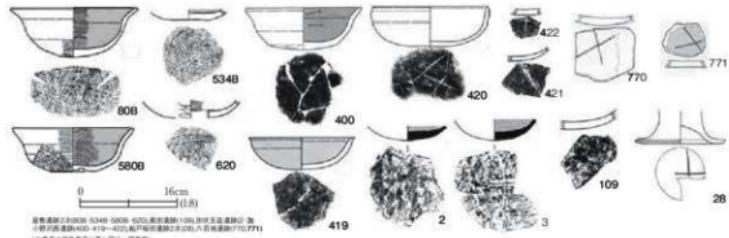
古墳時代の遺構が遺物の出土量に対して少ないことは前述したとおりである。その中で、注目される遺構は土器がまとめて出土したところで、SK 1・2・116・SX119・遺物集中地点1・2がある。ここでは各遺構の性格についてみていくこととする。

建物跡はSI 6・SB107のみで、遺物が集中するまとまりは6か所ある（第18図）。このことは何を意味しているのだろうか。遺物が出土していることから、少なくとも人が近くに居住していたことは推測できる。集落がどこであるかは今後の調査に期待するとして、本遺跡は集落の端もしくは集落から離れたところに位置していると想定できる。この想定に基くと、遺物が集中するまとまりの性格は、日常生活で使用したもののが廃棄場所と、もうひとつは祭祀に伴う埋納の2つの見解がある。各遺構に共通している点は、ほぼ1個体分残存する土器が多い点、覆土に炭化物を多量に含んでいる点、遺物のそばには自然木を確認している点である。炭化物を多量に含んでいる点では、近くで火を焚き、使用しなくなった土器といっしょに廃棄・埋納したと考えられる。SK116・土器集中地点1では大きな炭化した木材が原型を留めて出土していることからもそのことが窺われる。以上の見解から、これらの遺構は、本遺跡周辺の集落からこの地に訪れて、木の近くで祭祀を行い、そこで使用したものを使い終えたと想定し、ひとつの見解としたい。埋納の変遷はSK 1・2・遺物集中地点2→SK116→SX119であると推測される。

D ヘラ記号「×」のある土器

最後に、1点はあるが、椀の底部外面にヘラ記号「×」を確認できた資料を紹介し、若干の考察を述べていくこととする。本遺跡では遺物集中地点1・No. 2より椀の底部外面に「×」印を刻んだものが1点確認できた。県内での類例（第20図）は屋敷遺跡2次〔水澤ほか2004〕・船戸桜田遺跡2次・高田遺跡〔田辺1990〕・六百地遺跡〔田辺ほか2002〕・小野沢西遺跡〔土橋2004〕・田伏玉作遺跡〔関1972〕をあげることができる。すべて道端三期に帰属し、およそ6世紀前半に位置づけられる。ヘラ記号は須恵器において窯・工人の記号などと考えられているが、それでは、ヘラ記号が土師器に確認できるということはどういった意味をもつたのだろうか。まず、各遺跡から出土したものをみていく。

本遺跡のものは内面に黒色処理を施すことで、全体の形態は不明である。田伏玉作遺跡では2点確認でき、どちらも内面に黒色処理を施すことで、丸底の底部に「×」印を確認できる。底部のみで全体を把握できないが、他の報告遺物から椀と推定できる。高田遺跡では1点確認でき、黒色処理は施さず、底部外



第20図 新潟県におけるヘラ記号のある土師器

面に「×」印を確認できる。屋敷遺跡2次では4点確認でき、そのうち2点は全体を確認できるものである。80 B・580 Bは道端分類のD b類で、80 Bは底部外面、580 Bは体部外面に「×」印を確認できる。残りの2点は内面に黒色処理を施さないもので、底部片である。いずれも底部外面に「×」印を確認できる。六百地遺跡は2点確認でき、どちらも底部片である。770は黒色処理を施さず、底部外面に「×」印を確認できる。771は内面に黒色処理を施し、底部内面に「×」印を確認できる。小野沢西遺跡は5点確認でき、そのうち3点は全体を確認できるものである。400は道端分類のD b類、419はE b類、420は道端分類にはないので、口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部はやや内溝するタイプである。ここでは便宜的にX類としておく。残りの2点は内面に黒色処理を施さないもので、底部片である。いずれも底部外面に「×」印を確認できる。船戸桜田遺跡2次は1点確認でき、短脚の高杯脚部内面に「×」印を確認できる。

以上、各土器の共通点は、船戸桜田遺跡2次を除いてすべて碗であり、現在確認できる限りでは、器種が碗と高杯に限られていることが分かる。また、ヘラ記号を確認できる部位は底部外面がほとんどであるが、屋敷遺跡2次の580 Bは体部外面に、また、六百地遺跡の771は底部内面に確認されている。屋敷遺跡2次・小野沢西遺跡では器形を確認でき、D b類3点、E b類1点、X類1点と3タイプにヘラ記号を確認できる。現在のところ、黒色処理を施したものに多く確認できる傾向はあるが、黒色処理を施さないものにも確認でき、多種にわたって「×」印を確認できると想定する。また、6世紀前半は、県内において須恵器が多くの遺跡で確認できる時期であり、類例の遺跡からも須恵器が出土している。ヘラ記号が須恵器において多くみられることも合わせ、須恵器と黒色処理された土師器碗が極めて密接な関係にあることを指摘しておきたい。

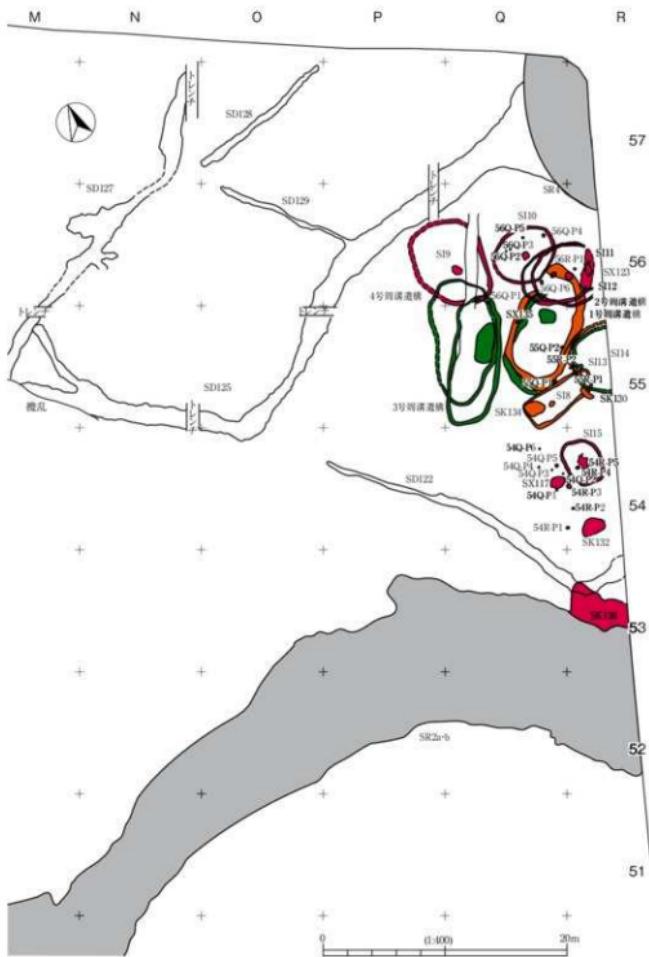
2 弥生時代の遺構と遺物

A 低地の発掘調査の問題点と自然科学分析の成果について

本遺跡の景観・往時の住民の選地の仕方・包含層別の遺構群については第IV章2節で述べたが、ここでは自然科学分析の結果を踏まえ、再度南区の遺構群及び北区の包含層別の遺構群に言及しつつ、遺構周辺の景観・調査の仕方・発掘所見と照合しながら現地調査担当者の視点からいくつかの問題点について具体的に述べてみたい。

Ⅲ章・Ⅳ章で述べたように本発掘調査においては、南区と北区によって基本土層・包含層の堆積状況及び遺構の検出状況が若干異なっている。

南区で検出された弥生時代の主な遺構はSI 1・3、SK 4（図版9・10・20・58～60参照）であり、この地区では包含層の存在を確認できなかった。いずれも遺構よりも新しい時期に形成された河川SR 1によって切られ、搅乱を受けていることがわかっている。SR 1の直下にはガツボ層（植物腐食土層）が確認されているが、南区の三つの遺構は、このガツボ層の上に堆積したⅢ b3層、Ⅳ層の振削中に検出されたものである。これらの発掘所見から、本遺構群は比較的周囲の環境が安定した時期に、小河川の自然堤防上に築造されたものと推察できる。調査方法は平面的な確認に加えて全体の平面形を損なわない程度に、可能な限りのサブトレンチを入れつつ断面を観察しながら立ちあがりを探し、切り合いの有無を検討した。その結果遺構はすべて5～10cmの浅い窪みであり、かろうじて竪穴建物として認定することができた。周溝は検出されず柱穴の規模も数も不十分であったが、SI 1・3からは北陸系櫛描文系（小松系）の壺（図版33・138～140）が出土しており、小松期の平地式建物には周溝を伴う例が多いということも、



第21図 包含層(H1層・H2層・H3層)別遺構分布図

これらの遺構を堅穴建物と判断した少なからぬ根拠となっている。なお、自然科学分析の種実遺体分析によってSI3の炉と考えられる炭化物集中か所から、イネ・アワ・ヒエが炭化した状態で検出されたことは、当時の食料利用を明らかにする上で貴重な分析結果と言える。

北区では、最終的に弥生時代中期と考えられる三枚の包含層(H1～H3層)を認定したが、調査中に最も判断に苦慮したのは、これらの包含層が平地式あるいは堅穴建物跡や周溝遺構群の覆土である可能性

についてであった。それはまず第一に第21図に見られるようにこれらの遺構群が調査区東側に偏在し、これらの包含層も遺構群の集中区にしか観察されなかったこと、第二にこの遺構群が南区と同様非常に浅い掘り込みを持っている可能性があり、調査者が立ち上がりをみのがしてしまう可能性があること、第三に周辺の河川（SR 2aとSR 4が同じ河川ならばこれらの遺構群は河川の西岸の微高地にあることになる）の増水時の冠水により遺構の上に土砂が流入していることに加えて、各遺構間で激しく重複していることである。調査は住居の場合なるべく主軸となる部分、つまりががあれば²の中軸線に沿ってサブトレーンチを入れ、ない遺構の場合は、遺物の集中する領域の中心にサブトレーンチを入れ、断面を観察し周溝を検出する方法をとった。北区の遺構は、幸いにもすべて周溝を有していたため、なんとかその領域を決定することができ、主な遺物も覆土内遺物の可能性を考慮して、単に包含層内遺物として取り上げるだけでなく、各遺構直上の遺物として区別することができた。率直に言えば、平面確認が可能であるとは思えないほど難度を持った遺構群であった。だが、どの調査地でも低地の調査は常にこうした遺構との格闘であろう。調査者は、あらゆる可能性を考慮しつつ、諦めず調査を続ける必要がある。及川は、弥生時代前期・中期の遺構調査に言及して「編年の基準となる資料のはほとんどが、墓跡や土坑資料、包含層資料からなり、住居跡資料が少ないので、調査者に住居跡と言えば深い掘り方の堅穴建物であるという思い込みがあることによる」〔及川2002〕と調査者の思い込みからくる遺構の見逃しについて、厳しく指摘している。本調査においても当初そういう思い込みが、私たち調査者の目を蒙らせていたことは否定できない。考古学研究には、なにより確かな資料の蓄積が必要であるが、確実に遺構であると各調査者が明確に認定できるものだけを調査対象としていけば、特に低地の調査では、重要な見落としをしてしまうという認識を新たにした。

次に包含層直下の遺構群と自然科学分析結果及びそれにかかわる問題点をあげてみる。包含層直下で検出した遺構を第21図に色分けして掲載した。H 1層とした主な遺構は、SI 9～12・15、SK126、SX117と周辺のピット群などである。SD122・125・127・129の各溝は、検出状況からその廃絶時期をH 1層の遺構が機能していた時期と考えたが、H 2・H 3層の各遺構が機能していた時期にもこれらの溝が開口しており、H 1層の時期と同様に居住域を区画する溝として機能していた可能性もある。溝は、同じ場所でなんども渡されて利用されるからである。H 2層直下で検出された主な遺構は、SI 8・14、1号周溝遺構、SK134である。H 3層直下で検出された主な遺構はSII13、2～4号周溝遺構である。

北区ではAMS放射線炭素年代測定をH 1層に属するSII1の³、H 2層に属するSI 8の⁴の炭化物、SR 2a～4層出土の建築部材と小松期の完形甕（図版35～180）の中に入っていた炭化材の4点について行った。各資料は σ （確率68%）でSII1がBC357～194、SI 8がBC349～112、SR 2～4層出土の建築部材がBC340～93、甕内の炭化材がBC160～2という年代幅を示し、2 σ （確率95%）の相対比の高いものでは、SII1がBC383～160（相対比98.2%）、SI 8がBC234～85（相対比67.1%）、SR 2aの建築部材がBC214～46（相対比82.5%）甕内の炭化材が：BC186～AD26（相対比99.6%）という年代幅を示した。この資料の解釈については、資料の履歴が明確で肉眼で観察できる大きな個体の数値のほうが信頼するに足る、という分析者の意見がある。それは資料の選択の段階で、より伐採年代に近い部分を採取することが可能だからである。具体的に述べれば、³の中の材は、複数の伐採年代を持つ材の、どの個体を選んだかという偶然が生み出すあいまいさに加えて、樹木のどの部分なのかということが判断不能であるため、たとえば柱穴に遺存する柱根のような丸太材に比べれば、相対的にあいまいな資料とならざるを得ないということである。発芽して1000年後に伐採された樹木の幹が資料に混入していた場合、芯の

部分と表皮に近い部分では、極端な言い方をすると約1000年の年代差を生じるわけである。その意味で当該資料のうち、相対的に信頼するに足りるのは、肉眼で観察可能な大きな個体つまり殻層のより明確な、SR 2a - 4層出土の建築部材と甕の中の炭化材である。これら二つの資料の示す最大年代幅は、 $\sigma : 2\sigma$ でBC340 ~ 2 : BC214 ~ AD26である。よって確率95%の 2σ の資料を合わせたBC214 ~ AD26という最大年代幅のどこかに、北区の遺構群が機能した年代が重なる部分を持つ可能性は高いと言えよう。ここでの問題点は、調査段階での資料選択の重要さである。より良い資料を選択するためには、調査者が分析者であることが最も望ましいが、そうでない場合は、調査者が自然科学分析の各項目に対する理解を深めることが肝要で、このことを以後の課題としたい。

種実分析においては、SI 8の炉、1号周溝遺構周溝炭化物層から炭化したイネ・アワ・ヒエが、相当数検出された。南区同様北区においても食料利用について貴重な情報が得られた。本遺跡では、大型石包丁を含む収穫具としての直線刃石器、初殻压痕の残る土器片（図版36・82～206）が出土しており、上記分析結果はこれらの出土遺物と合わせて、この時代の阿賀野川以北における稲作を含めたこれらの穀物栽培を証明する極めて重要な資料と言える。

土壤理化学分析においては、対象資料の2号周溝遺構1号土坑、1号周溝遺構周溝の覆土において自然状態より15%以上も多い腐植含量が認められた。このことは、覆土直上で土器集中や管玉の出土した2号周溝1号土坑に墓坑の可能性を示唆する。また1号周溝遺構のサンプル採取場所である周溝部は、そこだけ幅も深さもあり、遺体などの埋葬部とも考えられるが、検出された腐植が植物遺体などに由来する可能性もあり、分析結果から墓坑とは断定できない。

植物珪酸体分析においては、SD122・125・127～129によって区画された範囲に、水田などの生産域がある可能性を考慮し分析を試みたが、この場所における水田耕作の可能性は低いことが判明した。ただ当該時代の表土にあたるⅢ b1層、Ⅲ b2a層においてタケ亜科クマザサ属、タケ亜科、ヨシ属の類に産出が多く、これらのことから周囲にヨシなどの生えた湿地があるクマザサなどの繁茂する河川の自然堤防上を切り開いて、平地式建物や堅穴建物を築造し、人々が生活を営んでいたという往時の風景を思い描くことも可能である。

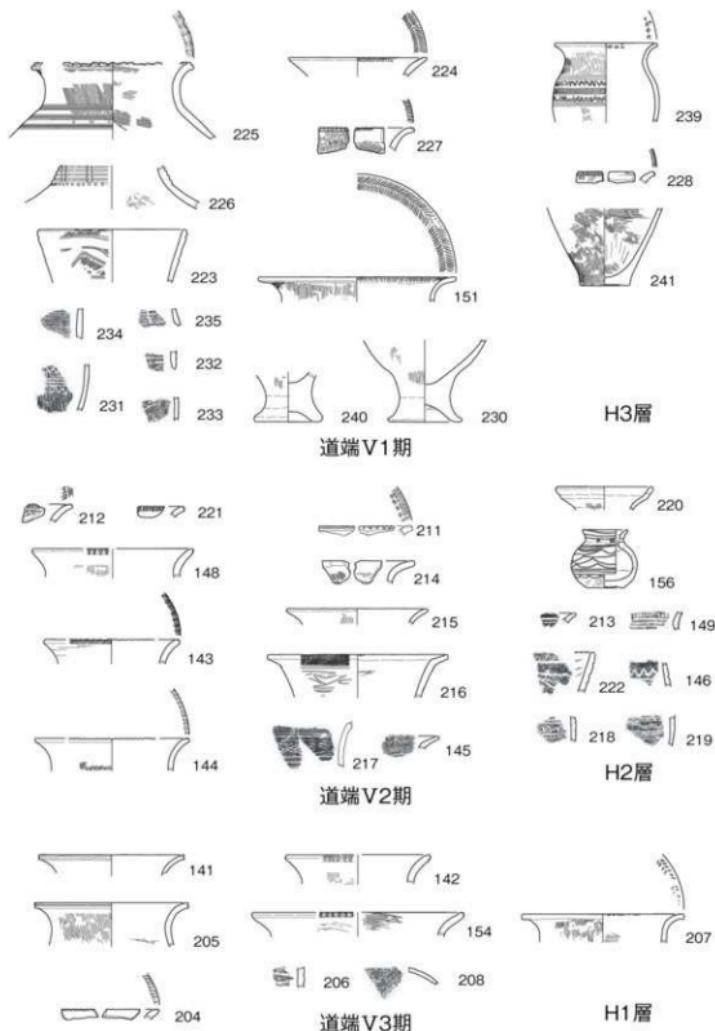
以上のことから本遺跡は、SR 2a・4などの河川の大きく東側に湾曲する自然堤防上を選地し、生産域は、確定できなかったが、稲作農耕を行い居住地を数条の溝で区画し生活を営んでいた、阿賀野川以北における弥生時代中期後半の集落跡と規定することができる。

B 遺 器

1) 土 器

a はじめに

本遺跡出土の弥生土器片の総数は、4373点を数える。そのうち掲載遺物点数は、123点である。口縁を中心に器形のわかる限り、また施文されているものは、小破片を含めそのほとんどを掲載したが、これらの掲載遺物が本遺跡全体の土器のイメージを示しているわけではない。これは、牛馬を使用した水田耕作や場整備により土器が、細かく破砕されていたことに加え、中心となる土器片の9割以上が内外面ハケ調整のみの無文の体部片であったことによる。沈文系と明瞭にわかるものは、前述したように全体の約3%に過ぎない。第22図は、遺構出土のものを含めて北区の遺構集中か所(53～56P～Rグリッド)



第22図 包含層別弥生土器

の出土土器（特徴の乏しい底部片は除く）を時期別に掲載したものである。以下これらの土器群について言及し、本遺跡出土弥生土器の時間系列的な問題及び空間系列的な問題に触れてみたい。なお引用文献は、第V章で触れたもののはか以下のように簡略化した。「柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5 剣羽大平・小丸山」〔品川 1985b〕は「小丸山」、「南御山2式土器の成立と小松式土器の接触」〔石川 2000〕は「北越・11」、「金沢市戸水B遺跡」〔中屋 1994〕は「戸水B」と表記した。

b H3層に帰属する出土土器について

当該包含層の弥生土器は、櫛描文系の壺と壺8点、沈線文系の鉢と器種不明の土器片6点、その他としたハケ調整のあるやや軟質の胎土を有する鉢2点である。本遺跡出土の弥生土器の内でも最も古い相貌を持つ土器がみられる。櫛描文系の壺（225・226）は、いずれも胴部上位から頸部にかけて加飾があるものである。225は口縁部内面と口唇部外面に交差する刺突列を巡らし、外面はハケ調整の後、櫛描直線文を3条一組で3組施文する。226は頸部に3条の平行沈線を棒状工具により巡らし、それに直交する沈線を加え、さらに直下に円形刺突列を巡らす、という本遺跡出土土器のなかでも凝った施文を行っている。両者とも胎土・焼成があまりよくなく、丁寧な施文に比べ整形が雑である。239の壺も明らかに古い相貌を持つ。胴部上位に櫛描直線文・波状文を交互に施文し文様帶を形成する。本遺跡の櫛描文系土器を観察すると口縁部以外に施文されたもの自体が極めて少なく、その意味で包含層最下層であるH3層から出土した225・226・239は、本遺跡の遺構群機能年代の上限を決める重要な資料の一つと言える。他の壺類・壺類は口縁のみであるが、151は、焼成・胎土良好で、口縁部内面の綾杉文も丁寧にしっかり施文されている。沈線文系の鉢223は、平行沈線の区画帯に沈線山形文あるいは崩れた重菱形文を施文し、区画内の地文の繩文を擦り消している。当該土器の施文のモチーフは宇津ノ台式によく見られるものである。その他の沈線文系土器は、器種不明土器片231～235であるが、9条の沈線を施した234は繩文を擦り消しており、6条の沈線を施した235もその可能性がある。磨消繩文は、繩文以来の伝統的な施文技法と考えられるが、この手の土器群を時間系列の中でとらえ、山草荷式、下谷地式の前段階におく見解〔小丸山:P324〕がある。これ以外にも「南御山2式土器の成立と小松式土器との接触」〔北越・11:P10・2～6行〕で石川が、「磨消繩文をもつ一群を型式学的に古い」とする小滝の見解〔小滝 1956〕を優れたものとして披瀝している。遺跡の性格や地域性など空間分布からの観点を検討する必要はあるが、本遺跡出土の磨消繩文を施した土器の一群に、古層の可能性を考える根拠のひとつとしてここにあげる。230・240は、整形の雑な台付きの鉢である〔平田：図版50～288；図版60～418；図版64～458参照〕。

H3層下の遺構の機能した時期は、櫛描文系の土器が、盛行期をやや過ぎた時期であろうか。225・226・239などをみると盛行期櫛描文系土器の一種の華麗さの名残があるが、それでもこの手の相貌を持った土器片の数が少なすぎるからである。沈線文系の土器に至っては非掲載のものはただ1点に過ぎず、櫛描文系の土器を主体とする本遺跡の土器群に接触はじめた時期と考えてよいと思われる。

c H2層に帰属する出土土器について

櫛描文系の壺、壺類（143・144・148・211・214・212・221）は、頸部の一部、胴部が欠損しているためこの図からは頸部や胴部の施文の有無は不明であるが、非掲載の土器片にも文様のある頸部・胴部片は見出されなかった。施文は口縁部に集約され、211（斜行短線文）212（綾杉文・刺突列）のほか、214・215などは無文である。しかし、注目すべきは、沈線文系土器片の出現率であり、本遺跡の沈線文系土器片・

出土総点数 121 点中 73 点がこの層の出土である。216・217 は同一個体である。砂山遺跡出土の壺で、宇津ノ台 2 式とされているものと酷似する。145・218・219 も砂山遺跡出土の壺の小片に類似する。いずれも宇津ノ台 2 式とされているものである。146 は、平田遺跡出土の壺片に酷似する。宇津ノ台式とされている。149 は沈線文による区画部に刺突列が施文されている。220 は器形から沈線文系の壺の受け口状口縁としたが、調整をみると櫛描文系との折衷かもしれない。156 は、沈線文系小形短頸壺である。このようすに沈線文系では宇津ノ台式などに類似する東北系の土器の出現率が H 1 層、H 3 層に比べ格段に高い。

本遺跡では、H 2 層下の遺構の機能していた時期に、最も多く東北系の土器が、北陸系の土器に混入してくる。といっても遺跡全体の出土総量から言えばわずかな量（16%）に過ぎず、あくまで櫛描文系の土器が主体であることには変わりない。H 2 層下の遺構の機能した時期は、施文が口縁部に集約されるもの、口縁部無文の壺などが共存していることからすでに櫛描文系の土器群が衰退期に入っている時期にあたることは確実であろう。

d H 1 層に帰属する出土土器について

142・154・204・207 などが、櫛描文系の壺・壺類である。やはり施文は口唇部のみに集約されており、142・154 は口縁部外面の刺突列、204 は、口縁部内面の刺突列である。いずれも雑な感じで簡略化されたものである。207 の壺なども、口縁部内面に綾糸状の施文がなされるが、H 3 層の 224・151 などと比べると明らかに刺突が雑で稚拙な印象を与え、すでにこの施文が形骸化していることが伺われる。しかし、この包含層に帰属する土器のうちで最も新しい様相をみせるものは、141・205 である。器形は、頭部が上方に立ち上り気味で口縁部に至りそこからやや強く外反する。特徴的なのは口唇部に面を作り出し沈線を運らせており、焼成も他の櫛描文系土器にくらべ良好であり、胎土も堅致である。整形は、胴部以下が欠損のため不明で、頭部外面は綾糸のハケ調整、頭部内面は磨耗のためやや不明瞭ではあるが、横位のハケ調整を施していると思われる。口唇部の沈線に着目し、他遺跡出土土器の類例をあげると第 V 章 2 節 A 2) 土器各説あげたもののほかでは、戸水 B 遺跡の F 型〔戸水 B : P25・第 6 図〕によく似ている。ただし、こうした口唇部の沈線は小松式併行期にも見られるもので、即断は出来ない。206・208 は沈線文系の器種不明の小片である。206 は焼成良好、胎土緻密で本遺跡出土の同系の土器群のなかで、やや異質な感じを受ける。なお、この破片には初期圧痕が観察された（図版 82 - 206 の拡大写真）。208 は、二ツ釜式の土器片で弥生時代中期後半に比定されるものである。

H 1 層下の遺構の機能した時期は、櫛描文系土器の衰退期が極まった時期にあると考えて差し支えなかろう。ただし、新潟県の弥生時代中期後半～末にかけての編年は、調査事例の少なさもあって未だ流動的である。本遺跡出土の口唇部に沈線を運らせるものと戸水 B 遺跡の F 型が同型式とすれば、H 1 層の時期は、戸水 B の時期に重なる部分があるのか、ここでは可能性を指摘して、今後の調査事例の蓄積を待ちたい。

e まとめ～道端遺跡の調査成果と編年的な位置について

新潟県内における弥生時代中期後半～末にかけての土器の様相は、櫛描文系については下谷地遺跡・小丸山遺跡、松ノ脇遺跡・平田遺跡、沈線文系については山草荷遺跡・砂山遺跡・滝ノ前遺跡などの調査・報告によって次第に判明しつつあるが、阿賀野川以北の弥生時代中期後半以降の遺跡の調査例が少ないことから当該地域の土器様相は、未だ判然としていない。本遺跡は、県内でも当該地域の弥生時代中期後半以降の遺構・遺物の検出例及び出土例として極めて重要な位置を占めると思われる。阿賀野川以北における

る弥生時代中期後半の土器群の従来のイメージは、沈線文系の土器群がその中枢を占めていた。ところが、本遺跡では、明らかに櫛描文系の土器群がその中心である。そういう意味では、本遺跡は、櫛描文系の土器群を中心とするべき遺跡といえよう。以下前出の他遺跡出土土器と本遺跡出土土器を比較つつ、本遺跡の編年的位置に触れてみたい。

新潟県内の櫛描文系土器中心の本格的な編年は、下谷地遺跡〔高橋 1979〕出土土器によるものをその基準とするだろう。高橋はその後調査された小丸山遺跡〔品田 1985〕の品田の報告とその編年観を受ける形で、下谷地遺跡出土土器と後続の小丸山遺跡出土土器を、下谷地Ⅰ期・Ⅱ期、小丸山Ⅰ・Ⅱ期とそれぞれ二段階に分け、下谷地Ⅱ期と小丸山Ⅰ期を同時期とし、増山の編年案〔増山 1989〕も考慮に入れ、県内の弥生時代中期後半を下谷地Ⅰ期（増山編年4期並行）→下谷地Ⅱ期=小丸山Ⅰ期（増山編年5期並行）→小丸山Ⅱ期（増山編年5期並行）の三段階に区分した。〔高橋 1990〕。さらにその後、小丸山遺跡に後続すると考えられる松ノ脇遺跡〔丸山 1998〕が調査され、丸山によって前出の高橋の編年観を受け、久田の編年案〔久田 1993〕を一部改変する形で県内の弥生時代中期の越後の土器編年が、提示された。それによると畿内第Ⅲ様式並行に下谷地（増山編年4期並行）→小丸山（増山編年5期並行）を置き、畿内第Ⅳ様式並行に松ノ脇を置いている。また本報告で沈線文系とした東北系土器は、畿内第Ⅲ様式並行に山草荷・宇津ノ台式（増山編年4・5期並行）、畿内第Ⅳ様式並行に天王山式を置く。

ここで丸山が増山編年4期並行の下谷地段階としているのは、下谷地Ⅰ期のことである。本段階は越後における櫛描文系土器の盛行期で、施文に加飾性が強く多様である。壺は最大径が口徑にあり器形は長胴で、胴部上位、口縁部内面、口唇部に施文されている。壺も長胴で頭部に装飾されているものがある。文様は、口縁部内面・口唇部に綾杉文・斜行短線文・円形及び三角状刺突列・押圧による波状口縁の作り出し、刻みなどを施文し、頭部・胴部上位には直線文・簾状文・扇状文・波状文などを施文する。またそれら多士済々な文様を組み合わせ、全体として非常に華麗な印象を与える土器群である。本遺跡出土土器の全体的印象では無文の小片が多く、下谷地Ⅰ期を過ぎつつある時期と考えられるが、壺の239（H 3層出土）・180（SR 2a 出土）、壺の225・226（H 3層出土）などが、本期に属するものである。180は口唇部の施文が、226は整形が難で、また前述したごとくH 3層出土土器片の多数は櫛描文盛行期にあるとは言い難いが、これらの土器は下谷地Ⅰ段階の土器群の名残をとどめつつ、次段階の小丸山段階（増山編年5期並行）に移行していく時期のものと考えたい。

小丸山段階の土器群は、櫛描文の衰退傾向が顕著で口縁部に加飾が集約される。本遺跡のH 3～H 1層出土土器の施文に関して言えば、胴部・頭部に簾状文・扇状文が見られるものがほとんどなく、口縁部内面・口唇部に施されるその大部分が刺突列・綾杉文・斜行短線文であり、それらの施文も上層にいくにつれ、簡略化され難になっていく傾向がある。そういう意味でH 3層のものが櫛描文盛行期から衰退期に向かう第Ⅰ段階・H 2層のものがその第Ⅱ段階・H 1層のものがその第Ⅲ段階に相当すると考えられる。次に本遺跡のH 1層に属する中心的な造構から出土した口唇部に沈線を巡らした壺の口縁2点（141・205）に対する評価であるが、これらの壺片は口唇部の刺突を簡略化したものであり、櫛描文衰退期の象徴的な土器と言えよう。本遺跡の櫛描文系土器のうち、他に新相のものを探すと SR 2a 出土の188がある。胴部に櫛描刺突列を施文したもので小丸山遺跡Ⅱc層出土壺の第132図14・27、戸水B遺跡のSK717出土壺の第41図-42などに類例があり、弥生時代中期以降によく見られるようになる施文である。

以上のことから本遺跡の土器群は、櫛描文系土器を中心に見る限り、衰退期の過程をたどるばかりであるが、沈線文系土器と口唇部に沈線を巡らした壺などの本遺跡への搬入またはそれらの土器の背景にある



第23図 弥生時代中期の仙台平野の壺と本遺跡の出土の壺

異なる系譜の文化と柳描文系の文化との交流を考えれば、少し違った様相が見えてくる。上述したごとくH2層においては、沈線文系の出現率が、H3・H1層に比べ極めて高いといえる。宇津ノ台2式と思われる145・146、216～219、小形短頸壺156などのほかに、SD122出土の157などがある。特に157は、口縁から頸部に沈線を施し、胴部以下に繩文を施し、器形は口縁部が長く上方に立ち上がる特異なものである。類例を探すと仙台平野の高田B遺跡・中在家南遺跡出土の壺に酷似するものであることがわかった。第23図の1・2が高田B式の壺、3・4・5が中在家南式の壺である。1・2・4・5の施文部の濃い部分は、赤彩の施されたか所である。石川は、高田B式を南御山2式並行、中在家南式を二ツ釜式並行としており、第25図には掲載していないが、他に類似する施文・器形を持ったものは、福島県須賀川市土

取場B遺跡出土の壺〔阿武隈地区遺跡分布調査報告(II) : 第19図・4〕がある。壺157は、本遺跡の櫛描文系土器の様相から弥生時代中期中葉の所産であろう。そうすると断定はできないが、中在家南遺跡(二ツ釜式並行)の背景または周辺地域の文化との交流や人の移動などがあった可能性も浮上する。いずれにしろH2層下の造構の機能した時期に複数の系譜の沈線文系の文化との交流があったという点で、この時期にもひとつの特徴を指摘できる。ただし、下層のH2層からは宇津ノ台式に類似する沈線文系土器が出土し、上層のH1層から二ツ釜式の土器群が出土しているとすれば、現在の編年観に合わないことであり、調査事例の蓄積を待って今後の検討を要すると思われる。

櫛描文系・沈線文系以外の系譜については、南区IVb層出土の261、SR2a出土の189の壺があるが、261は南関東第II様式、宮ノ台式もしくは小田原式の細首の長頸壺と酷似する。これも弥生時代中期後半の所産である。189は、頸部の屈曲の仕方から東海系の壺と思われるが、器形は不明である。また上記261以外の南区出土の残りの掲載遺物にも触れておく。138の壺は、口縁部外面の刺突列と口縁部内面の櫛描綾杉文である。内面ハケ調整がある。139・140の壺もしくは壺は、2列の斜行短線文を施す。壺153の底部は内外面ハケ調整で、頸部から下の非接合の破片にも施文はなく頸部下無文のものである。これらの土器はすべて弥生時代中期後半の所産としてさしつかえなく、南区の土器群も北区の三枚の包含層とその下の造構群出土の土器群の時期幅を出る可能性はないと思える。

最後に上述の所見を土台として本遺跡の編年の位置を以下のように設定する。越後の弥生時代中期を前葉・中葉・後葉の3期に分けると、本遺跡出土土器の中心となる時期は、弥生時代中期後葉と考えられる。これは畿内の編年、高橋と丸山及び増山の編年案を下敷きにするとおおよそ畿内編年の第III様式後半から第IV様式にさしかかる頃と考えられ、越後では、下谷地I段階の最末期から下谷地II段階(=小丸山I期段階)・小丸山II期段階(合わせて小丸山段階と総称する。)を経て松ノ脇段階に入ろうかという時期である。北陸では増山編年の5期を中心に次段階に入る頃、北加賀では、磯部運動公園段階から専光寺養魚場段階を経て戸水B段階にさしかかる時期に重なってくると思われる。よって弥生時代中期後葉を3段階に区分すると、本遺跡出土の弥生時代の土器群は、櫛描文系土器が衰退し始めた段階と考えられるH3層とH3層下の造構出土土器群の「道端V1期」、衰退期の過程をたどる櫛描文系の土器群に沈線文系の土器群の混入してくるH2層とH2層下の造構出土土器群の「道端V2期」、櫛描文系の土器の衰退期が極まり、弥生時代末から次段階の土器の新しい様相がほの見えてくるH1層とH1層下の造構出土土器群の「道端V3期」の3段階に分けることができる。

畿内	北陸	北加賀	越後	河賀野川以北		会津	仙台
III様式	増山4期	寺中II次	下谷地	(+)		南御山2	高田B
	増山5期	磯部運動公園	小丸山	山草荷	道端V 長松	二ツ釜 中在家南	川原町口 (+)
IV様式	(+)	専光寺養魚場 戸水B	松ノ脇	春山	(+)	御山村下 三百瓦	十三塚

第12表 弥生時代編年対応表

2) 石器使用痕分析

a 分析の目的と対象資料

道端遺跡からは弥生時代中期の石器がまとめて出土し、いわゆる大型石包丁を含む大型直縁刃石器が含まれている。大型直縁刃石器は斎野裕彦によって設定された石器で、弥生時代の日本列島に広く分布し、除草や残葉刈りを含んだ根刈り具と推定された〔斎野 1993: 1994〕。さらに、使用痕分析例も蓄積され、この推定を裏付ける結果が得られている〔御堂島 1989 など〕。新潟県内では柏崎市下谷地遺跡、長岡市（旧小国町）水上遺跡で使用痕分析が行われた〔沢田 1995a: 2005〕。道端遺跡は県内最北の出土例となり、阿賀北地方における当該期の稲作農耕の証拠としても注目され、機能推定は重要な課題と考えられる。そこで、道端遺跡出土石器の農具としての機能を検証するため、使用痕分析を行う。分析対象は大型直縁刃石器3点（312・284）、磨製石包丁1点（302）の3点である。

b 分析方法

ここでは高倍率法による観察を行う。高倍率法は主に100倍以上の倍率で石器表面を観察するもので、使用痕光沢面（ボリッシュ）、線状痕などの使用痕が観察対象となる。観察された使用痕から使用実験にもとづいて石器の運動方向や使用対象物が推定される。

今回は、落射照明金属顕微鏡（オリンパス製）を使用し、100倍・200倍・500倍で観察を行い、必要に応じてデジタルカメラで写真撮影した。観察時の前処理は、エタノールによる油脂等の除去のみ実施した。使用痕光沢面の記述は梶原洋・阿子島香による頁岩におけるタイプ分類〔梶原・阿子島 1981〕と沢田による属性〔沢田 1995b〕を併記した（第13表）。あわせて、使用痕光沢面分布図を作成した（第24図）。使用痕の強度はR、グレースによる発達度分類の発達度A（光沢綿のパッチが点在するもの）とA+（パッチが発達して大きさ密度が増すが、お互い連結していないもの）を弱、B（パッチが連結したもの）を中心、B+（連結した単位が発達し、単位同士がさらに連結するなどしたもの）を強とした〔G r a c e 1989〕。

c 観察結果

大型直縁刃石器2点、磨製石包丁1点で使用痕光沢面を確認した。以下、観察結果を記す。

1 (312) 刃部のみ磨製と思われるが、石器表面の剥落が著しく、詳細は不明である。石器には光沢を持つ鉱物と研磨痕を確認でき、その特徴は未使用の表面で明瞭に確認できる。鉱物は表面が虹色に干涉し、研磨痕は表面の粗い弱く鈍い光沢面である。鉱物は石器全面、研磨痕は残存する研磨面で一様に見られ、いずれも光沢面との識別は可能であった（第25図写真1）。

刃部付近の表面残存部で使用痕光沢面を確認した。残存部のみではあるが、光沢面は刃部縁辺中央付近でもっとも強く、最大で刃部から約1.5cm内側まで分布する。分布型（パターン）は刃部縁辺から離れるほど弱くなり、漸移的である。最大発達部における発達度はB+である（第25図写真2）。光沢面の特徴は、パッチ縁辺が表面の微細な凹部に侵入するため、断面形が丸くしばしばドーム状となる。表面はなめらかである。線状痕は刃部と平行しており、「埋められた」と形容される微細なものや線状光沢が認められた。刃部磨耗度も高く、縁辺断面形は丸い。これらの特徴から、光沢面はBタイプに分類される。

2 (284) 全部磨製の大型直縁刃石器で、表面には研磨痕を確認できるが、1と同様の特徴を持ち、使用痕光沢面との識別は可能であった（第25図写真4）。

刃部縁辺を中心に使用痕光沢面を広範囲に確認した。光沢面の分布範囲は刃部縁辺の大半に及び、中央付近でもっとも強く、刃部から最大で約2.8cm内側まで広がる。分布型は漸移的で、最大発達部における発達度はB+で視野の大部分が光沢に覆われる所もある（第25図写真5）。光沢面の断面形は丸くしばしばドーム状となる。表面がなめらかなか所と、光沢面表面に微小な凹凸がありややなめらかさに欠けるか所があり、後者は研磨痕上で光沢面が形成されたことが要因であろう。線状痕は刃部と平行し、種類は「埋められた」線状痕を主体とする。刃部摩耗度は高く、刃縁断面は丸い。これらの特徴から、光沢面はBタイプに分類されるが、視野の大半が光沢面で覆われる最大発達部では、Aタイプとする。

3（302）当初この石器は、石材などの特徴から擦切具としていたが、使用痕分析の結果を考慮して、磨製石包丁とした。表面には研磨痕が確認できるが、使用痕光沢面との識別は可能であった（第25図写真7）。

刃部縁辺を中心に使用痕光沢面を確認したが、破損により大半が失われており、全体的な分布状況は不明である。光沢面はa面刃部左側でもっとも強く、最大で刃部から約2.2cm内側まで広がる。最大発達部における発達度はBで（第25図写真8）、分布型は漸移的である。断面形が丸く、表面はなめらかで、線状痕は線状光沢が主体で刃部と平行している。b面側の刃縁付近ではa面に比べて光沢面の発達が弱く、研磨による刃部再生が行われたと考えられる。Bタイプに分類される。

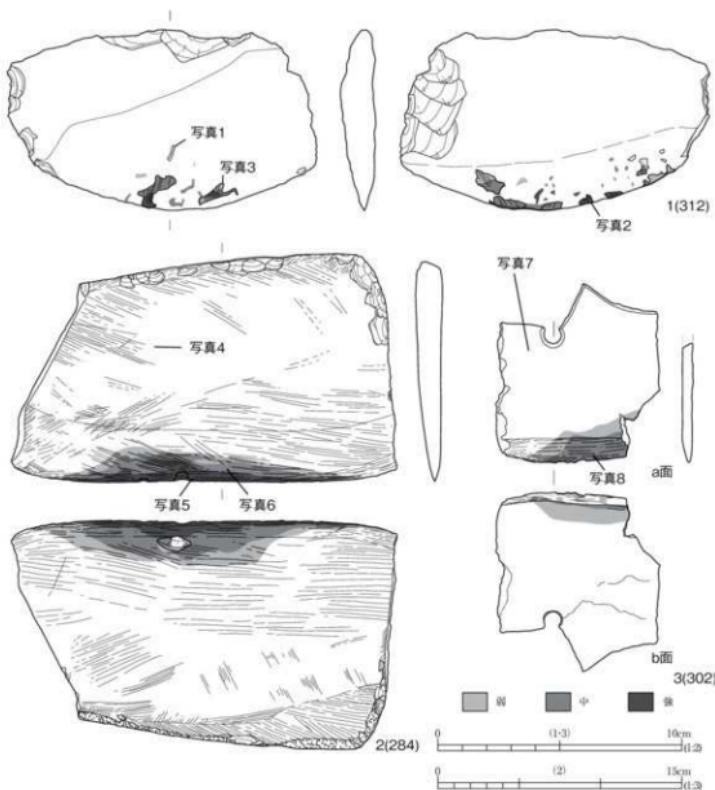
d 機能推定

観察結果から石器の用途を推定する。前述のとおり推定は使用実験に基づいている〔範原・阿子島前掲など〕。1・2の大型直縁刃石器と3の磨製石包丁でBタイプを中心に一部Aタイプの使用痕光沢面を確認した。表裏両面对称に刃縁中央を中心として広範囲に分布しており、線状痕は刃縁に平行している。Aタイプは穀科植物を対象とする作業で生じ、Bタイプは主に木の作業で生じるが、穀科植物の作業でも生じるとされている。今回確認された光沢面がきわめて広範囲に刃縁から奥まで分布することも考慮すると、3点とも使用対象物は株などの厚みのある穀科植物と考えられる。また、光沢面の分布状況や線状痕の方向から、石器は刃縁に平行な方向で操作されたと推定する。

今回の大型直縁刃石器の分析結果は、これまでの事例と調和的で、斎野の機能推定を支持している。一方、磨製石包丁は一般に穀詰み具とされており、これまでの使用痕分析もおおむねこれを支持している。しかし、今回の分析では磨製石包丁も大型直縁刃石器と対象物・運動方向が同じであった。これについては、石器の大半が破損していたため、全体の形態が明確でないため、器種分類そのものに問題のある可能性もある。実際、3は刃部断面形が片刃でなく比較的刃角の小さい両刃であり、磨製石包丁よりはむしろ大型直縁刃石器と共通する特徴をもつ。分析例を蓄積してさらなる検討が必要であろう。

e まとめ

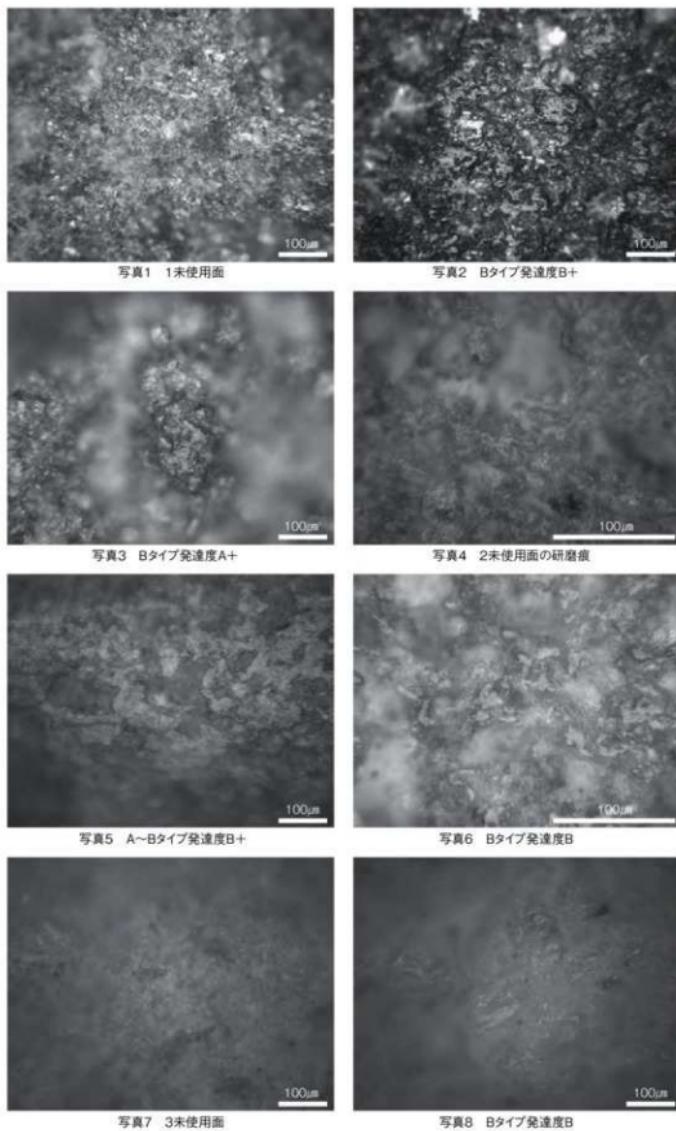
今回の分析により穀科植物を使用対象とした3点の石器を抽出することができた。ここでいう穀科植物とは珪酸体に富む穀科に代表される草本類の総称であり、スキヤシなども含んでおり栽培植物としてのイネに限定することはできない。しかし、稲作農耕社会という時代背景と県内外の他遺跡の出土例を考慮すると、これらを石製農具とみなすことが妥当である。搬入品の可能性を考慮する必要はあるが、今回道端遺跡から出土した初痕土器や炭化米と並んで、阿賀北地方における弥生時代中期の稲作農耕の証拠と見なすことができそうである。



第24図 使用痕光沢面分布図

	光沢面 タイプ	刃部からの 侵入度	巨視的 削面形	微視的 削面形	底部への 侵入度	分布形	発達度	端型	なめらかさ	ピット量	溝状痕 類別	溝状痕 方向	刃部 摩耗度
1 (312)	B	1cm以上	丸い	丸い	中	広範	B+	漸移的	なめらか	少ない	埋められた	平行	大
2 (284)	AB	1cm以上	丸い	丸い	中	広範	B+	漸移的	なめらか	少ない	埋められた	平行	大
3 (302)	B	1mm以上	丸い	丸い	低	広範	B	漸移的	なめらか	少ない	埋・溝状光沢	平行	大

第13表 観察された光沢面のタイプと特徴



第25回 使用痕光沢面写真

総 括

本遺跡は、越後平野北東部を流れる荒川の支流の自然堤防上に位置する古墳時代中期から後期にかけての集落跡、および弥生時代中期後半の集落跡である。

古墳時代の主な遺構は、竪穴建物1軒、掘立柱建物1棟のほかに良好な一括遺物の出土した土坑、性格不明遺構、河川の北縁に検出された遺物集中か所である。遺構は、深い掘り込みを持つ柱穴以外の遺構は、ほとんど激しい後世の搅乱を受けており全容が明瞭ではないが、竪穴建物・掘立柱建物も検出されており、集落の一部と考えて良いと思われる。古墳時代の出土遺物は、当該時代の須恵器・土師器のほかに木製品・石製品などが、I層（耕作土）・Ⅲa層（古墳時代包含層）・Ⅲb1層（遺構確認面層）・遺構内・河川跡から出土している。須恵器は、50～57L～RグリッドのI層・Ⅲa層に出土した杯身・蓋・壺・無蓋高杯・甕・瓶・土師器は、遺構集中地点の遺構確認面・遺構内から出土した椀・鉢・甕・壺・手づくね土器などである。出土土器の年代幅は須恵器の型式幅であらわすと、TK216～TK10型式で5世紀後半～6世紀前半と思われる。特に須恵器は1層から出土するものが多く、遺構に伴わない個体がほとんどであるが、4個体の甕の出土は、本遺跡の性格に何らかの関係を有するものと推定される。木製品は柱材・樋状木製品・石製品は紡錘車・砥石である。

弥生時代の主な遺構は、平地式建物7軒、竪穴建物3軒、溝5条のほかに土坑、性格不明遺構、ピットであるが、南区・北区でその検出状況が異なる。南区の遺構群検出か所では包含層が確認されておらず、主な遺構である浅い掘り込みを持つ竪穴建物（SI 1・3）からの出土遺物の量も北区に比べて少なく、相対的に土器より石器・剥片の割合が多い。北区では、遺構集中か所に三枚の包含層が確認され、それぞれの包含層下に平地式建物・竪穴建物など各遺構群が検出され、それらの遺構群は河川跡と連結する4条の溝によって囲繞され区画されている。出土遺物は弥生土器が甕・壺・鉢・蓋・石器が管玉・大型直線刃石器（大型磨製石包丁を含む）・磨製石包丁・扁平片刃石斧・環石・石鐵・磨石・敲石・砥石・礫石器などである。弥生土器は從来の阿賀野川以北の出土例と異なり櫛文系を中心とする土器群で、その時期幅は、畿内編年のⅢ様式後半にあたる弥生中期後葉と考えられ、県内の遺跡では下谷地遺跡に続く小丸山遺跡・松ノ脇遺跡の出土土器の時期に対応するものと思われる。石器の使用痕分析による穀物植物（スキやアシも含む）の刈り取りに使用されたという所見から、大型直線刃石器・磨製石包丁を石製農具と規定し、本遺跡での穀作農耕が行われたことを妥当と結論した。また土器片のイネの糊痕（図版82～206拡大写真）や周溝や炉の炭化物層を対象資料とした種実同定結果から認められる相当量の炭化したアワ・ヒエ・イネは、この石器の使用痕分析を裏付けるものである。

ほかに自然化学分析からの情報のなかで興味深いものは、炉や周溝など覆土内炭化物や当該時代の甕のなかの炭化材などを対象とした放射性炭素年代測定であった。上述（第Ⅷ章2節A）したようにBC214～AD26年の年代幅のなかに、本遺跡の遺構の存続年代が重なる可能性は高く、放射線炭素年代測定と弥生時代中期以降の土器編年の整合性に一石を投じる分析結果となっている。

本遺跡は、阿賀野川以北における古墳時代中期から古墳時代後期及び弥生時代中期後葉の集落跡の調査事例として豊富な情報量を有する遺跡である。これらの情報が、当該時代の考古学研究の一助となれば、調査スタッフ一同それ以上の喜びはない。本遺跡の調査・報告が可能となったのは、新潟県内はもとより県外の多くの方々や機関からいただいた様々なご教示・ご協力のお陰である。この旨再度文末に記して厚く御礼を申し上げ、本稿の結びとしたい。

要 約

- 1 道端遺跡は、新潟県岩船郡荒川町大字南新保字道端 97 番地ほかに所在する。
- 2 現況は水田で標高 2.0 ~ 2.7 m である。
- 3 発掘調査は日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、平成 17 年度に実施した。
- 4 調査面積は 12,400 m²（上層 9,600 m²、下層 2,800 m²）である。
- 5 本遺跡は荒川支流、乙大日川（旧船内川）の自然堤防縁辺の後背湿地に位置する。
- 6 北区における遺構分布範囲は、法線内にとどまらず東側に広がっている。
- 7 本遺跡は、小河川に沿って營まれた古墳時代中期～後期、弥生時代中期後半の集落跡である。
- 8 古墳時代の遺構は、竪穴建物 1 軒、掘立柱建物 1 棟、土坑 5 基、性格不明遺構 4 基、河川跡 2 条、ピット 7 基である。
- 9 北区の河川跡北縁部に古墳時代の遺物集中か所が検出された。
- 10 古墳時代の遺物は、須恵器・土師器・石製品・木製品が出土した。
- 11 須恵器は杯身・蓋・壺・無蓋高杯・壺・瓶が出土し、壺は 4 個体を確認した。
- 12 土師器は椀・壺・瓶が出土した。
- 13 弥生時代の遺構は、竪穴建物 3 軒、平地式建物 7 軒、周溝遺構 4 基、土坑 9 基、性格不明遺構 5 基、溝 5 条、ピット 24 基である。
- 14 北区の弥生時代の遺構は、H 1 ~ H 3 層の 3 枚の包含層にそれぞれ帰属し、その直下から掘り込まれ、居住区は数条の溝と河川跡によって囲繞されている。
- 15 弥生時代の遺物は弥生土器・土製品・石器・木製品が出土した。
- 16 弥生時代の土器は壺・壺・鉢・蓋が出土した。
- 17 弥生時代の石器は管玉・石礫・大型石包丁・大型直縁刃石器・環石・扁平片刃石斧などが出土した。
- 18 弥生時代の木製品は建築部材が出土した。
- 19 その他の時代のものは、中世の珠洲焼・錢貨・繩文晩期の土器が出土した。
- 20 弥生土器片に耕痕が観察された。
- 21 種実同定により大豆、土坑の覆土内から相当量の炭化したアワ・ヒエ・イネが検出された。
- 22 弥生時代の石器には、大型石包丁・大型直縁刃石器などの農耕具がある。
- 23 22 の石器使用痕分析により穀科植物を刈り取った痕跡を確認した。
- 24 20 ~ 23 から本遺跡の弥生時代中期後半に稲作農耕が行われていたことが証明された。

引用・参考文献

- 相田泰臣 2004 「越後における古墳時代後期を中心とした土器の一様相—頸城・魚沼地域の土師器を中心として—」『新潟考古』第 15 集新潟県考古学会
- 青葉 高 1991 『野菜の日本史』八坂書房
- 朝岡政康・諫山えりか 2003 「東開遺跡」 新潟県新潟市教育委員会
- 阿部明彦 1989 「山形県における黒色土器出現の様相と展開」『東国土器研究』第 2 号 東国土器研究会
- 甘粕 健¹³ 1992 「古津八幡山古墳測量調査報告書」 新潟県新潟市教育委員会
- 甘粕 健¹³ 1996 「磐舟浦田山古墳群発掘調査報告書」 新潟県村上市教育委員会・新潟大学考古学研究室
- 天野洋司・太田 健・草場 敏・中井 信 1991 「中部日本以北の土壤型別蓄積量の形態別計量」
- 「土壤蓄積量の再生循環利用技術の開発」農林水産省農林水産技術会議事務局編
- 新井市教育委員会編 1985 「月岡遺跡 観測確認緊急調査報告書」 新潟県新井市教育委員会
- 荒井 格¹³ 2000 『仙台市文化財調査報告書 第 242 集 高田 B 遺跡』 宮城県仙台市教育委員会
- 荒川隆史・加藤 学 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 93 集 和泉 A 遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川町 1974 「荒川町郷土史」新潟県荒川町
- 荒川町教育委員会編 1991 「あらかわ歴史散歩」新潟県荒川町
- 荒川町史編纂委員会編 1988 「荒川町史」資料編 3 新潟県荒川町
- 荒木勇次¹³ 1989 「新潟県三条市保内三王山古墳測量・発掘調査報告書」 新潟県三条市教育委員会
- 家田順一郎 1981 「曾根遺跡 I」新潟県豊浦町教育委員会
- 家田順一郎 1982 「曾根遺跡 II」新潟県豊浦町教育委員会
- 石川茂雄 1994 「原色日本植物種子写真図鑑」石川茂雄図鑑刊行委員会
- 石川智紀・内藤真一¹³ 2002 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 112 集 道端遺跡 I」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川日出志 2000 「南鋼山 2 式土器の成立と小松式土器の接触」『北越考古学』第 11 号 北越考古学会
- 石川日出志 2005a 「関東・東北弥生土器を北海道続縄文土器の広域編年」明治大学文学部考古学研究会
- 石川日出志 2005b 「南関東の弥生土器」六一書房
- 石野博信¹³ 1994 「古墳時代の研究」第 2 卷 雄山閣
- 石橋輝樹¹³ 1977 「Ⅲ 地下資源 4 水資源 4・2 地下水」新潟県地質図説明書 新潟県
- 磯崎正彦 1979 「新潟・燕線特殊改良工事にかかる緒立遺跡第 1 次発掘調査報告書」新潟県黒崎町教育委員会
- 磯崎正彦編 1980 「新潟・燕線特殊改良工事にかかる緒立遺跡第 2 次発掘調査報告書」新潟県黒崎町教育委員会
- 伊藤廉倫¹³ 1993 「二本松東山遺跡」新潟県聖籠町教育委員会
- 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I」『木材研究・資料 31』京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 II」『木材研究・資料 32』京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 III」『木材研究・資料 33』京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV」『木材研究・資料 34』京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 V」『木材研究・資料 35』京都大学木質科学研究所
- 青梅町教育委員会編 1979 「大内山遺跡—備王ヒスイの工房址—」新潟県青梅町教育委員会
- 大阪府立弥生博物館 2001 「弥生クロスロード—再考・信濃の農耕社会—」大阪府立弥生博物館
- 大阪府立弥生博物館 2005 「北陸の玉と鉾 弥生王権の光と影」大阪府立弥生博物館
- 岡村道雄 1983 「ビエス・エスキュー楔形石器」「縄文文化の研究」7 雄山閣
- 岡本淳一郎 2003 「周溝をもつ建物」の基礎的研究」「蟹氣樓」秋山進午先生古稀記念富山大学考古学研究室集 富山大学考古学研究室
- 及川良彦 1998 「関東地方の低地遺跡の再検討」『青山考古』第 15 号 青山学院大学
- 及川良彦 1999 「関東地方の低地遺跡の再検討 (2)」『青山考古』第 16 号 青山学院大学

- 及川真彦 2001 「関東地方の低地遺跡の再検討(3)」「青山考古」第18号 青山学院大学
- 及川真彦 2002 「住居と掘立柱建物跡」「静岡県における弥生時代集落の変遷」静岡県考古学会
- 小瀬利意 1956 「南御山遺跡出土の土器に就いて」孔版
- 小野 忠 1980 「山形県における古式須恵器」「一酒井忠一氏還暦記念特集—庄内考古学」第17号 庄内考古学研究会
- 梶原 洋・阿子島香 1981 「貝岩製石器の実験使用痕研究—ボリッシュを中心とした機能推定の試み—(東北大
学使用痕研究チームによる研究報告その2)」「考古学雑誌」第67巻第1号
- 片野徳藏 2004 「胎内川流域のわが郷上」私家版
- 加藤 学^{12a} 2001 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第106集 松影A遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋
蔵文化財調査事業団
- 金子正典・滝沢規則・丸山一昭 1999 「第3章2節 土器 第3項弥生後期」「新潟県の考古学」高志書院
- 神林村史編纂委員会 編 1985 「神林村誌」通史編 新潟県神林村
- 唐古・健考古学ミュージアム 2005 「唐古・健遺跡と周辺の弥生道路」「唐古・健考古学ミュージアム
- 川上直雄 1997 「曾根遺跡Ⅲ」新潟県豊浦町教育委員会
- 川上直雄・木村宗文・鈴木郁夫 1989 「新津市史」資料編第1巻 原始・古代・中世 新潟県新津市教育委員会
- 川崎弘・吉田涉・井上恒久 1991 「九州地域の土壤型別蓄積量の形態別計量」「土壤蓄積量の再生循環利用技
術の開発」農林水産省農林水産技術会議事務局編
- 川村浩司 1988 「(第18回発表要旨) 越後の古墳時代中・後期の土器について」「新潟考古学談話会会報」第
1号 新潟考古学談話会
- 川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相—関川右岸下流を中心に—」「上越市史研究」第5号新潟県上
越市
- 木本元治 1989 「福島県内の黒色土器(古墳時代～奈良時代)」「東国土器研究」第2号 東国土器研究会
- 工藤哲司^{12a} 1996 「仙台市文化財調査報告書 第213集 在中家南遺跡他」仙台市教育委員会
- 建設省北陸地方建設局羽越工事事務所 編 1975 「羽越災害復旧工事誌」「建設省北陸地方建設局羽越工事事務所
- 小池邦朋・碓塚 明 1993 「新潟市市場遺跡」新潟県新潟市教育委員会
- 小林青樹 2004 「東海以東」「季刊考古学」86号 雄山閣
- 駒形敏朗 2001 「五斗田遺跡一県営は場整備事業に伴う発掘調査—」「新潟県長岡市教育委員会
- 近藤鍊三 2004 「植物ケイ酸体研究」「ペドロジスト」48
- 近藤鍊三 1982 「Plant opal 分析による黒色腐殖層の成因究明に関する研究」「昭和56年度科学研究費(一
般研究C)研究成果報告書」
- 坂上有紀・田海義正・高橋 保 2000 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第98集 県営は場整備事業関連発掘調査報告書
平田遺跡」「新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 齊藤基生・高橋 保 1979 「新潟県埋蔵文化財調査報告 第19 北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 下谷地遺跡」
新潟県教育委員会
- 齊野裕彦 1993 「弥生時代の大型直線刃石器(上)」「弥生文化博物館研究報告」2 大阪府立弥生文化博物館
- 齊野裕彦 1994 「弥生時代の大型直線刃石器(下)」「弥生文化博物館研究報告」3 大阪府立弥生文化博物館
- 坂井秀弥 1983 「新潟県刈羽郡西山町高塙B遺跡発掘調査報告書」新潟県西山町教育委員会
- 坂井秀弥 1989a 「新潟県の黒色土器—6～8世紀を中心に」「東国土器研究」第2号 東国土器研究会
- 坂井秀弥^{12a} 1989b 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第53集 新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡」
新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所
- 沢田 敦 1995a 「下谷地遺跡出土「石笠刀」の使用痕分析—収穫具からみた弥生時代の越後における稲作農耕
の形態—」「新潟考古」6 新潟県考古学
- 沢田 敦 1995b 「五丁歩道跡出土板状剥片石器の使用痕分析」「研究紀要」財團法人新潟県埋蔵文化財調査
事業団

- 沢田 敦 2005 「水上遺跡出土大型磨製石包丁の使用痕分析」「水上遺跡」 新潟県小国町教育委員会
- 品田高志 1985a 「柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第4 吉井遺跡群—新潟県柏崎市・吉井遺跡群発掘調査報告書一」 新潟県柏崎市教育委員会
- 品田高志 1985b 「柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第5 炉羽大平・小丸山—東京電力新潟原子力発電所建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書一」 新潟県柏崎市教育委員会
- 品田高志 1987 「柏崎市史」資料集考古編2 新潟県柏崎市史編さん室
- 品田高志 1987 「柏崎市埋蔵文化財発掘調査報告書 第7 西岩野—新潟県柏崎市長崎西岩野遺跡発掘調査報告書」 柏崎市教育委員会
- 品田高志 1987 「柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第8 帝国石油新長岡ライン埋蔵文化財発掘調査報告書(試掘確認調査報告・吉井水上I遺跡・戸口遺跡)」 新潟県柏崎市教育委員会
- 品田高志 1989 「越後における古墳時代土器の変遷—柏崎平野の中期～後期を中心に—」『柏崎市博物館報』4 新潟県柏崎市立博物館
- 品田高志 1990 「越後の後期弥生土器とその諸相—柏崎平野における北陸系土器群と人の移動—」『新潟県考古学談話会会報』第6号 新潟県考古学談話会
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 「国説木材相識」 地球社
- 上越市史編さん委員会 2003 「上越市史」資料編2 考古 新潟県上越市
- 杉山真二 2000 「植物珪酸体(プラント・オパール)」[辻誠一部編著 考古学と自然科学3 考古学と植物学] 同成社
- 杉山真二・藤原宏志 1986 「機動細胞珪酸体の形態によるタケア科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—」『考古学と自然科学』19
- 鈴木俊成・春日真実¹⁴⁶ 1994 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第60集 1ノ口遺跡東地区」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 聖籠町史編纂委員会 2004 「聖籠町史」資料編4 近現代 新潟県聖籠町
- 閔 雅之 1972a 「滻ノ前遺跡」 新潟県村上市教育委員会
- 閔 雅之 1972b 「田伏玉作遺跡」 新潟県糸魚川市教育委員会
- 閔 雅之 1982 「新発田市埋蔵文化財調査報告第4 村尻遺跡I」 新潟県新発田市教育委員会
- 閔 雅之 1999 「葛塚遺跡」 新潟県豊栄市教育委員会
- 胎内川沿岸土地改良区編 2002 「胎内川沿岸土地改良区50年のあゆみ」 新潟県胎内川沿岸土地改良区
- 滝沢規朗¹⁴⁷ 2002 「元星敷遺跡II(上段)」 新潟県朝日村教育委員会
- 滝沢規朗・野田豊文 2002 「新潟県北部地域の弥生時代中期後半から後期の土器について」『新潟県考古学談話会会報』第26号 新潟県考古学談話会
- 滝沢規朗¹⁴⁸ 2003 「新潟県岩船郡における弥生時代中期～後期にかけての様相—村上市砂山遺跡・滻ノ前遺跡を中心にして—」『三面川流域の考古学 第2号』 三面川を考える会
- 高橋 保 1990 「県内の弥生中期の土器—橢円分系土器を中心として」『新潟県考古学談話会会報』第6新潟県考古学談話会
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡I」 石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1987 「永町ガマノマガリ遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
- 辰巳和弘 1997 「古墳社会の信仰」『季刊考古学』59号 雄山閣
- 田中 靖・丸山一昭 1999 「第3章2節 土器 第2項弥生中期後半」『新潟県の考古学』 高志書院
- 田辺早苗 1990 「神林村埋蔵文化財調査報告 第2高田道路発掘調査概報」 新潟県神林村教育委員会
- 田辺早苗 1991 「神林村埋蔵文化財調査報告 第3長松道路発掘調査報告書」 新潟県神林村教育委員会
- 田辺早苗¹⁴⁹ 2001 「神林村埋蔵文化財調査報告 第9衣田遺跡・道上遺跡」 新潟県神林村教育委員会
- 田辺早苗¹⁴⁹ 2002a 「神林村埋蔵文化財調査報告第13六百地遺跡」 新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
- 田辺早苗¹⁴⁹ 2002b 「神林村埋蔵文化財調査報告第14金曲遺跡」 新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
- 田辺早苗 2003a 「神林村埋蔵文化財調査報告第16千作り遺跡・平林城跡・千眼寺跡・持体遺跡」 新潟県神

林村教育委員会

- 田辺早苗¹⁰ 2003b 「神林村埋蔵文化財調査報告第 17 高田遺跡」 新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
- 田辺昭三 1966 「陶邑古窯址群」 I 平安学園考古学クラブ研究論集 第 10 集
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」 角川書店
- 田村浩司 2004 「三条市吉津川遺跡・藤ノ木遺跡の調査概要」『新潟県考古学会第 16 回大会研究発表会発表要旨』 新潟県考古学会
- 鶴巻康志・田中耕作 1994 「新発田市埋蔵文化財調査報告第 15 平成 5 年新発田市遺跡範囲確認調査報告書 金屋遺跡 佐々木山遺跡 上車野 E 遺跡」 新潟県新発田市教育委員会
- 寺崎祐助・佐藤優一¹¹ 2004 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 135 集 反貫目遺跡」 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 寺島文隆・長島雄一 1982 「土取場塚群・土取場 B 遺跡」「阿武隈地区遺跡分布調査報告(Ⅱ)」 福島県教育委員会
- 東海考古学フォーラム 1996 「鍋と甕 そのデザイン」「第 4 回 東海考古学フォーラム」 東海考古学フォーラム
- 富樫秀之¹² 2002 「アチャヤ平遺跡上段」 新潟県朝日村教育委員会
- 戸根与八郎 1978 「国道 116 号埋蔵文化財発掘調査報告書 五分一橋場遺跡」 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 14 新潟県教育委員会
- 戸根与八郎¹³ 1982 「中条町史」資料編第 1 卷 新潟県中条町教育委員会
- 土壤標準分析・測定法委員会編 1986 「土壤標準分析・測定法」 博友社
- 土壤養分測定法委員会編 1981 「土壤養分分析法」 養賢堂
- 土橋由理子 2004 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第 131 集 上信越自動車道関係発掘調査報告書 小野沢西遺跡」 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 豊栄市史編纂委員会 1988 「豊栄市史」資料編 1 考古編 新潟県豊栄市
- 中島栄一¹⁴ 1973 「千刈遺跡調査報」 新潟県加茂市教育委員会
- 中屋克彦 1994 「金沢市戸水 B 遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 「日本植物種子図鑑」 東北大学出版会
- 新潟県北蒲原郡役所 1916 「新潟縣北蒲原郡是」 新潟県北蒲原郡役所
- 新潟県教育委員会・村上市教育委員会 1962 「新潟県文化財調査報告書第 9 箕舟 - 箕舟橋跡推定地調査報告書 -」 新潟県教育委員会・新潟県村上市教育委員会
- 新山雅広 2003 「種実定同」「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 127 集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 IV 道端遺跡 II」 新潟県教育委員会
- 日本貨幣商協同組合 2004 「日本貨幣カタログ」 日本貨幣商協同組合
- 布尾和史・布尾幸惠 2002 「藤江 C 遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 1967 「新版標準土色帖」
- 橋本正博・福海貴子 2003 「千代・能美遺跡」 石川県小松市教育委員会
- 林 昭三 1991 「日本古木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2001 「亀里平塚遺跡の自然化学分析」「群馬県立埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 280 集 亀里平塚遺跡 主要地方道前橋・長瀬線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 群馬県立埋蔵文化財調査事業団
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2002 「横手南川・横手湯田遺跡の自然化学分析」「財団法人群馬県立埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 292 集 横手南川・横手湯田遺跡 北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 11 集 第 1 分冊(本文編)」 財団法人群馬県立埋蔵文化財調査事業団
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2004 「自然化学分析」「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 135 集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 VI 反貫目遺跡」 新潟県教育委員会
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2005c 「自然化学分析」「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 143 集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅷ 六斗荷遺跡」 新潟県教育委員会
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2005b 「自然化学分析」「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 146 集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 X 西川内北遺跡・西川内南遺跡」 新潟県教育委員会

- パリノ・サーヴェイ株式会社 2005c 「自然文化分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第147集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書X I 景塚遺跡I・江添遺跡』 新潟県教育委員会
- 久田正弘 1991 「能登における弥生時代中期の一様相(1)」『石川県考古学研究会会誌 第34号』 石川県考古学研究会
- 久田正弘 1993 「能登における弥生時代中期の一様相(2)」『石川県考古学研究会会誌 第36号』 石川県考古学研究会
- 平田秋 2005 「珠洲・珠洲系」全国シンポジウム「中世窯業の諸相~生産技術の展開と編年~」 全国シンポジウム「中世窯業の諸相~生産技術の展開と編年~」実行委員会
- 広瀬和雄 1998 「弥生時代の神殿」「都市と神殿の誕生」 新人物往来社
- 廣野耕造 1996 「石動遺跡 平成7年度発掘調査概報」 新潟県新潟市教育委員会
- 福海貴子 2003 「八日市地方遺跡」 石川県小松市教育委員会
- 福島県教育委員会 1978 「福島県文化財調査報告書 第67集 母畠地区遺跡発掘調査報告書II」 福島県教育委員会
- 福田聖 2004 「方形周溝墓と周溝を有する建物跡」「方形周溝墓の再発見」 同成社
- 藤野富士夫 1974 「富山市境野新遺跡発掘調査報告書 古墳時代住居跡」 富山県富山市教育委員会
- 古澤安史 2003 「弥生時代前半期の土器」「三面川流域の考古学 第2号」 奥三面を考える会
- ペドロジスト懇談会編 1984 「土壤調査ハンドブック」 博友社
- 前川雅夫^著 2005 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第142集 道端遺跡III」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 増山仁 1989 「北陸の考古学 II 小松式土器の再検討」『石川県考古学研究会会誌 第32号』 石川県考古学研究会
- 町田勝則 1995 「石器の研究法 -報告文作成に伴う観察・記録法②-」「長野県埋蔵文化財センター紀要」4 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 町田勝則 1996 「石器の研究法 -報告文作成に伴う観察・記録法③-」「長野県の考古学」1 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 丸山一昭 1998 「松ノ脇遺跡」 新潟県と島村教育委員会
- 水澤幸一 1999 「中条町埋蔵文化財調査報告書第17集 町内遺跡V」 新潟県中条町教育委員会
- 水澤幸一^著 1999 「中条町埋蔵文化財調査報告書第22集 主要地方道中条紫雲寺線改築工事に伴う発掘調査報告書1 船戸桜田遺跡2次」 新潟県中条町教育委員会
- 水澤幸一 2002 「中条町埋蔵文化財調査報告書第24集 船戸川崎遺跡4次」 新潟県中条町教育委員会
- 水澤幸一・吉村光彦 2002 「中条町埋蔵文化財調査報告書第25集 船戸桜田遺跡4次・5次 船戸川崎遺跡6次」 新潟県中条町教育委員会
- 水澤幸一・吉村光彦 2004 「中条町埋蔵文化財調査報告書第31集 星置遺跡2次」 新潟県中条町教育委員会
- 御堂島正 1989 「有肩扁状石器の使用痕分析-南信州弥生時代における打製石器の機能-」「古代文化」41.3 考古學協會
- 宮脇昭編著 1985 「日本植生地図 中部」 至文堂
- 村上市史編纂委員会 1999 「村上市史」通史編I 原始・古代・中世 新潟県村上市
- 村上市史編纂委員会 2000 「村上市史」別編 絵図・地図、年表 新潟県村上市
- 安英樹 2002 「北陸の弥生集落概観」「静岡県における弥生時代集落の変遷」 静岡県考古学会
- 山田隆一 2004 「近畿-大型建物の変遷とその性格について-」「季刊考古学」86号 雄山閣
- 吉川昌伸・吉川純子 2005 「道端遺跡の河川内堆積物から産出した植物化石群」「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第142集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅱ 道端遺跡III」 新潟県教育委員会
- 渡邊明和 1990 「新潟県における繩文時代晚期終末から弥生時代中期前葉の土器」「新潟県考古学談話会報」第6号 新潟県考古学談話会
- 渡邊裕之 1999 「第3章2節 土器 第1項弥生前期・中期前葉」「新潟県の考古学」 高志書院
- 渡邊裕之・内藤真一^著 2003 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第127集 道端遺跡II」 新潟県教育委員会・(財)

- 新潟県埋蔵文化財調査事業団
渡邊裕之・辻 茂朗 2005 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第145集 道端遺跡IV」 新潟県教育委員会・(財)
新潟県埋蔵文化財調査事業団
- Bolt,G.H. & Bruggenwert,M.G.M. 1976 「SOIL CHEMISTRY」【岩田進午・三輪容太郎・井上隆弘・陽捷行(訳)
1980 「土壤の化学」 学会出版センター】
- Bowen,H.J.M. 1979 「Environmental Chemistry of Elements」【浅見輝男・茅野 光男(訳) 1983『環境無機化学.
元素の循環と生化学』 博友社】
- G race, R . 1989 *Interpreting the Function of Stone Tools: The Quantification and Computerization of
Microwave Analysis. BAR International Series 474.Oxford.*
- Wheeler E.A.Bass P. and Gasson P.E.(編) 1998 「広葉樹材の識別 I AWAによる光学顕微鏡的特徴リスト
伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修)】 海青社

樹立植物 (SB107)

柱番号	平均形	断面形	風速(m/s)	風速(m/s)	風速(m/s)	風速(m/s)	風速(m/s)
P1	楕円形	U字状	—	40	34	50	67
P2	楕円形	U字状	30	30	46	64	N-E
P3	楕円形	U字状	32	30	30	64	—
P4	楕円形	U字状	36	30	20	64	南東
P5	楕円形	U字状	36	28	48	67	—
P6	楕円形	U字状	25	25	40	64	100.5°d

土坑

地質名	地質記述	方向	Y	方向	Y	方向	Y	方向	Y	方向	Y	方向	Y	方向	Y
SK1	33	4301-2-6-7	北東	楕円形	楕状	270	210	13	1号	N1-E	165-273	無	—	—	—
SK2	33	4301-25, 4301-5, 44021, 4411	楕円形	楕状	楕状	300	150	15	2号	N1-E	164	無	—	—	—
SK3	33	4301+5	楕円形	楕状	楕状	100	80	11	3号	S90-E	161	無	—	—	—
SK4	20	4301-0	楕円形	楕状	—	265	10	1号	N15-E	153-274	無	—	—	—	—
SK5	20	—	楕円形	楕状	—	—	—	5	1号	—	163	無	—	—	—
SK6	20	—	楕円形	楕状	—	80	5	5	1号	N7-E	163	無	—	—	—
SK7	20	—	楕円形	楕状	—	50	5	5	1号	N1-E	163	無	—	—	—
SK8	20	—	楕円形	楕状	—	60	5	5	1号	N24-E	163	無	—	—	—
SK9	33	43008	楕円形	楕状	64	27	16	4号	S72-E	161	無	—	—	—	—
SK10	8	54Q	楕円形	楕状	115	110	30	1号	N28-E	161	無	—	—	—	—
SK11	22	—	4301-25	楕円形	楕状	110	70	8	2号	S74-E	163	無	—	—	—
SK12	21	71	4301-4-7-9	楕円形	楕状	260	120	15	2号	N38-W	111	無	154-165-275-279	SB122 + SK105	SB122
SK13	22	—	55Q	楕円形	楕状	120	45	8	1号	N22-W	H2 鋼筋 F	—	—	—	—
SK14	21	72	5401-2-6-7	楕円形	楕状	170	120	12	2号	N68-E	111	無	—	—	SB12
SK15	22	72	5301-6	楕円形	楕状	165	120	1号	N43-W	H2 鋼筋 F	136	SB12	—	—	—

溝跡

地質名	地質記述	方向	Y	方向	Y	方向	Y	方向	Y	方向	Y	方向	Y	方向	Y
SK122	23	72	33Q-P, 34P-Q	Y1-Y2	—	—	—	—	—	西-N	112-138-280	SB122	—	—	—
SK125	23	73	33M-37Q	台形	—	—	—	—	—	西-N	159-162	SB127 + 229	—	—	—
SK127	23	73	33M-37Q	楕状	620(1)	904	358	N75-E	111	無	—	SB125	—	—	—
SK128	23	73	37N-0	台形	125	622	84	N75-E	111	無	—	SB125	—	—	—
SK129	23	73	36Q-P	楕状	—	415	63	N128-E	111	無	163	SB125	—	—	—

性格不明遺憾

通称名	通称地	所在位置	アリの形	巣の形	巣の大きさ (cm)	巣の高さ (cm)	巣の幅 (cm)	巣の厚さ (cm)	方底	側面	巣の形	出合位置
S3104	6	95	300G×9	アリの形	梅円柱	V字型	2	16	37	2号	N-67-E	無
S3111	22	—	306	不規形	不規形	不規形	204	76	16	1号	N-67-E	無
S3117	21	75	540	梅円柱	気孔	128	96	20	2号	N-3-E	311号	
S3118	8	—	500H×5, 538H×1±9	不規形	不規形	220	190	8	1号	—	—	
S3119	8	56	520	梅円柱	気孔	1239	406	69	S2E21-L	—	—	
S3121	6	—	560	不規形	不規形	200	220	13	3号	N-17-W	73~82	
S3122	6	—	560	不規形	不規形	200	220	13	3号	N-17-W	178~180, 209~211, 369~376	
S3123	21	75	558	梅円柱	不規形	243	90	10	3号	N-34-E	111号	
S3125	4	—	550	不規形	不規形	55.6	22	—	—	N-34-E	—	
S3126	4	—	480	不規形	不規形	63.6	56	—	—	N-38-E	312号	
S3127	5	—	480	不規形	不規形	63.6	56	—	—	N-38-E	325号	

地名	坐标 (°)	平面图	断面图	高程 (m)	海拔 (m)	标高 (m)	植被带	动植物	特征
54Q 53	56Q23	断层带	U74K	211	210	180	山地灌木林		
54Q 52	56Q24	断层带	U74K	210	180	180	山地灌木林		
54Q 53	56Q24	断层带	U74K	210	180	180	山地灌木林		
54Q 54	56Q19	山地带	U74K	217	222	180	山地灌木林		
54Q 55	56Q24	山地带	U74K	215	222	180	山地灌木林		
54Q 56	56Q20	山地带	U74K	198	205	110	山地灌木林		
54B21	56B11	断层带	U74K	198	205	90	山地灌木林		
54B 52	56B12	断层带	U74K	264	273	220	山地灌木林		
54B 53	56B13	断层带	U74K	262	258	160	山地灌木林		
54B 54	56B14	断层带	U74K	477	411	510	山地灌木林		
54B 55	56B15	断层带	U74K	303	285	460	山地灌木林		
54B 56	56B16	断层带	U74K	318	276	210	山地灌木林		
55Q11	56Q22	山地带	U74K	608	293	240	山地灌木林		
55Q 52	56Q15	山地带	U74K	260	258	200	山地灌木林		
55B 51	56B16	断层带	U74K	306	270	270	山地灌木林		
55B 52	56B17	断层带	U74K	231	230	180	山地灌木林		
56Q 51	56Q16	山地带	U74K	211	225	210	山地灌木林		
56Q 52	56Q13	山地带	U74K	195	171	110	山地灌木林		
56Q 53	56Q18	山地带	U74K	192	166	60	山地灌木林		
56Q 54	56Q19	山地带	U74K	303	227	250	山地灌木林		
56Q 55	56Q25	山地带	U74K	249	231	200	山地灌木林		
56Q 56	56Q17 + 21	山地带	U74K	378	297	310	山地灌木林		
P010	56Q18	山地带	U74K	210	255	120	山地灌木林		
P011	56Q19	山地带	U74K	95.4	90.2	12.5	山地灌木林		
P012	56Q20	山地带	U74K	45.6	36.8	16.7	山地灌木林		
P013	510P	山地带	U74K	32.8	21.6	9.2	山地灌木林		
P014	56Q29	山地带	U74K	41.2	26.4	20.0	山地灌木林		
P015	56Q10	山地带	U74K	32.0	20.0	42.0	山地灌木林		
P110	56Q10 + 510E	山地带	U74K	34.4	28.0	14.0	山地灌木林		
P112	56Q11 + 17	山地带	U74K	37.6	31.6	13.4	山地灌木林		
P113	56Q12	山地带	U74K	36.0	24.4	13.3	山地灌木林		

古墳時代の土器觀察表

凡例
1. 種 別
2. 法 形
3. 色 調
4. 物 質
5. 滅 壓
6. 尺 例
7. 地 方

土：土器部、灰：灰化部
1段階：標準化度（少目：半目：半目2段階）
笠：笠形、底：底盤形状、石：石底、長：長径、廣：廣径、厚：厚度、灰：灰度、滅：滅度、「—」は測量の部位を示す。且、黑色地質
11：1寸1分1厘、圓：圓錐形、球：球形、削：削頭形、錐：錐頭形、体：体形、底：底盤、蓋：蓋形、「△」は測量の部位を示す。

古墳時代の土器觀察表（1）

番号	形別	法形	色調	出土位置		法形	底盤	長径	短径	厚度	灰度	内面	外面	地質	測量	備考
				No.	寸	尺	（cm）	（cm）	（cm）	（cm）	（cm）	（cm）	（cm）	（cm）	（cm）	（cm）
2	土	直井	50P	S51075	1号	—	650	6.6	500	—	53.0	73Y6.4灰黄色	23Y7.2灰白色	今灰良	灰：1.5分1厘、薄：無灰	無灰
3	土	直	50I	S511	1号	0.88	—	639	6.6	500	6.6	73Y6.8灰黄色	73Y8.6灰黄色	今灰良	灰：1.5分1厘、薄：無灰	無灰
4	土	直	50J	S512	1号	0.81	—	610	6.6	500	6.6	10YR14.7灰白色	10YR14.7灰白色	良	稍灰	無灰
5	土	直	43R	S512	1号	0.86	—	620	6.6	500	6.6	10YR14.7灰白色	10YR14.7灰白色	良	無灰	無灰
6	土	直	54Q	S5116	2号	0.53	—	650	6.6	500	6.6	57Y7.4灰白色	57Y7.4灰白色	良	無灰	無灰
7	土	直	54Q	S5116	1-2号	1.59	—	63	6.6	500	6.6	23Y7.2灰白色	23Y7.2灰白色	良	無灰	無灰
8	土	直	54Q	S5116	1-2号	0.78	—	53	6.6	500	6.6	10YR17.3灰白色	10YR17.3灰白色	良	無灰	無灰
9	土	直	54Q	S5116	1号	0.59	—	620	6.6	500	6.6	10YR13.0灰白色	10YR13.0灰白色	良	無灰	無灰
10	土	直	54Q	S5116	2号	0.88	—	610	6.6	500	6.6	10YR17.3灰白色	10YR17.3灰白色	良	無灰	無灰
11	土	直	54Q	S5116	2号	0.88	—	610	6.6	500	6.6	35Y6.5灰白色	35Y6.5灰白色	良	無灰	無灰
12	土	直	54Q	S5116	2号	—	4.3	6.6	500	6.6	73Y6.8灰白色	10YR13.0灰白色	良	無灰	無灰	
13	土	直	45Q	S512	3号	0.79	—	627	6.6	500	6.6	10YR13.0灰白色	10YR13.0灰白色	良	無灰	無灰
14	土	直	54Q	S522a	2号	0.59	—	619	6.6	500	6.6	10YR17.3灰白色	10YR17.3灰白色	良	無灰	無灰
15	土	直	54R	S522a	2号	0.59	4.0	61	6.6	500	6.6	10YR14.7灰白色	10YR14.7灰白色	良	無灰	無灰
16	土	直	54Q	S522a	2号	0.52	—	610	6.6	500	6.6	10YR17.3灰白色	10YR17.3灰白色	良	無灰	無灰
17	土	直	55R	S522a	2号	0.59	—	615	6.6	500	6.6	52.0灰白色	52.0灰白色	良	無灰	無灰
18	土	直	54Q	S522a	2号	0.68	—	632	6.6	500	6.6	52.0灰白色	52.0灰白色	良	無灰	無灰
19	土	直	54Q	S522a	2号	0.64	—	616	6.6	500	6.6	10YR17.3灰白色	10YR17.3灰白色	良	無灰	無灰
20	土	直	54Q	S522a	2号	0.52	—	619	6.6	500	6.6	51Y6.6灰白色	51Y6.6灰白色	良	無灰	無灰
21	土	直	54Q	S522a	2号	0.18	—	617	6.6	500	6.6	51Y6.4灰白色	51Y6.4灰白色	今灰良	無灰	無灰
22	土	直	54Q	S522a	2号	0.48	—	635	6.6	500	6.6	10YR16.3灰白色	10YR16.3灰白色	良	無灰	無灰
23	土	直	54Q	S522a	2号	0.44	—	639	6.6	500	6.6	10YR17.3灰白色	10YR17.3灰白色	良	無灰	無灰
24	土	直	54Q	S522a	2号	0.51	—	638	6.6	500	6.6	10YR17.3灰白色	10YR17.3灰白色	良	無灰	無灰
25	土	直	54Q	S522a	2号	0.72	—	620	6.6	500	6.6	10YR17.3灰白色	10YR17.3灰白色	良	無灰	無灰

番号	標題	出土地點	出土位置	出土日付	出土深度 (cm)	器種	形質	尺寸	地質	色調		地質	測量	地圖	備考
										内面	外面				
26	土 壤	S30	S32a	2層	0.75	—	(4.2)	小口 石・油	7.20/6.3に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	櫛状・黑	11: 1: 1: 有孔 体: へつすり	1
27	土 壤	S30	S32a	2層	0.32	—	(6.9)	裏 石・油	7.20/7.3に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	櫛状・黑	11: 1: 1: 有孔 体: へつすり	5
28	土 壤	S30	S32a	2層	0.24	—	(6.0)	小口 石・油	5.20/0.3有孔	1.青白	1.青白	良	櫛状・黑	11: 1: 1: 有孔 体: へつすり	5
29	土 壤	S30	S32a	2層	1.39	4.0	5.2	裏 石・油	5.20/0.3有孔	1.青白	1.青白	良	櫛状・黑	11: 1: 1: 有孔 体: へつすり	1
30	土 壤	S30	S32a	2層	1.81	3.6	7.2	裏 石・油	5.20/0.3有孔	1.青白	1.青白	良	櫛状・黑	11: 1: 1: 有孔 体: へつすり	8
31	土 壤	S30	S32a	2層	0.85	—	(4.3)	裏 石・油	10/9/7.3に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	櫛状・黑	11: 1: 1: 有孔 体: へつすり	7
32	土 壤	S30	S32a	2層	0.13	—	(6.9)	小口 石・油	7.20/7.3に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	櫛状・黑	11: 1: 1: 有孔 体: へつすり	3
33	土 壤	S30	S32a	2層	0.22	—	(6.9)	裏 石・油	7.20/8.6に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	ナフ	1
34	土 壤	S30	S32a	2層	0.15	—	(6.9)	小口 石・油	10/9/7.3に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	ナフ	2
35	土 壤	S30	S32a	2層	0.15	—	(6.9)	裏 石・油	5.20/0.3有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	ヘラナフ	4
36	土 壤	S30	S32a	2層	—	—	—	裏 石・油	5.20/0.3有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	ヘラナフ	—
37	土 壤	S30	S32a	3層	—	—	(6.9)	裏 石・油	5.20/0.3有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	ヘラナフ	—
38	土 壤	S30	S32a	2層	—	—	(6.9)	裏 石・油	5.20/0.3有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	ヘラナフ	—
39	土 壤	S30	S32a	3層	0.75	—	(6.7)	小口 石・油	7.20/6.6に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	1: 有孔	4
40	土 壤	S30	S32a	2層	0.99	—	(6.9)	小口 石・油	23/6/2有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	1: 有孔	5
41	土 壤	S30	S32a	2層	0.99	—	(6.9)	小口 石・油	23/6/1有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	1: 有孔	1
42	土 壤	S30	S32a	2層	0.96	—	(6.9)	小口 石・油	23/7/3有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	6
43	土 壤	S30	S32a	2層	—	—	(6.9)	小口 石・油	10/9/7.3に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	—
44	土 壤	S30	S32a	2層	0.64	—	(4.3)	小口 石・油	7.20/7.3に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	10
45	土 壤	S30	S32a	2層	0.85	—	(6.9)	小口 石・油	10/9/7.3に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	5
46	土 壤	S30	S32a	2層	0.75	—	(6.9)	裏 石・油	10/9/6に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	6
47	土 壤	S30	S32a	2層	0.21	—	(6.7)	小口 石・油	10/9/7.3に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	5
48	土 壤	S30	S32a	2層	0.19	—	(6.9)	小口 石・油	10/9/6に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	5
49	土 壤	S30	S32a	2層	0.14	—	(6.9)	小口 石・油	10/9/7.3に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	7
50	土 壤	S30	S32a	2層	0.14	—	(6.9)	小口 石・油	10/9/6に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	9
51	土 壤	S30	S32a	2層	0.15	—	(6.9)	小口 石・油	10/9/6に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	4
52	土 壤	S30	S32a	2層	0.19	—	(6.9)	小口 石・油	10/9/6に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	6
53	土 壤	S30	S32a	2層	0.19	—	(6.9)	小口 石・油	3/6/4に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	6
54	土 壤	S30	S32a	2層	0.16	—	(6.9)	裏 石・油	2/6/2有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	4
55	土 壤	S30	S32a	2層	0.19	—	(6.9)	小口 石・油	10/9/6に小口 有孔	1.青白	1.青白	良	11: 1: ナフ 体: ヘラナフ	11: 1: 1: 有孔 体: ヘラナフ	3

古墳時代の土器類解説(3)

番号	地名	施主	墓別	出土位置	出土地面	表面	内面	色調	測量		備考		
									1面	2面			
56	土 墓	S3R	S2S2	2号	105.5	—	6.0	青・白	5705.3灰褐色	R.	11:ナガ 面・ハゲ	8	
57	土 墓	S3R	S2S2	2号	620.0	—	6.0	青・白	753W7.4に灰・黄褐色	11:ナガ 面・ハタチテ 11:セリ 面・ハタチテ	5		
58	土 墓	S3R	S2S2	2号	621.1	—	6.0	青・白	753W7.4に灰・黄褐色	R.	11:ナガ 面・ハタチテ 11:セリ 面・ハタチテ	2	
59	土 墓	S3R	S2S2	2号	616.0	—	6.0	青・白	753W6.4に灰・黄褐色	R.	11:ナガ 面・ハタチテ 11:セリ 面・ハタチテ	9	
60	土 墓	S3M	S2S2	2号	210	—	6.0	青・白	5707.6灰褐色	R.	11:ナガ 面・ハタチテ 11:セリ・ナガ 面・ハタチテ	26	
61	土 墓	S3R	S2S2	2号	115.1	—	6.0	青・白	107W6.4に灰・黄褐色	R.	11:ナガ 面・ハタチテ 11:セリ 面・ハタチテ	27	
62	土 墓	S3R	S2S2	2号	116.0	—	6.0	青・白	107W6.4に灰・黄褐色	R.	11:ナガ 面・ハタチテ 11:セリ 面・ハタチテ	5	
63	土 墓	S3R	S2S2	2号	224.0	—	6.0	青・白	753W7.4に灰・黄褐色	R.	11:ナガ 面・ハタチテ 11:セリ 面・ハタチテ	9	
64	土 墓	S3R	S2S2	2号	623.0	—	6.0	青・白	107W6.4灰褐色	R.	11:ナガ 面・ハタチテ 11:セリ 面・ハタチテ	6	
65	土 墓	S3R	S2S2	2号	619.0	—	6.0	青・白	107W6.4灰褐色	R.	11:ナガ 面・ハタチテ 11:セリ 面・ハタチテ	4	
66	土 墓	S3R	S2S2	2号	119.0	—	6.0	青・白	235Y7.4灰褐色	N.0灰褐色	ナ.ナガ	2	
67	土 墓	S3R	S2S2	2号	—	5.5	6.0	青・白	107W7.4に灰・黄褐色	R.	11:ナガ 面・ハタチテ 11:セリ 面・ハタチテ	—	
68	土 墓	S3R	S2S2	2号	—	4.6	6.0	青・白	107W7.4に灰・黄褐色	R.	11:ナガ 面・ハタチテ 11:セリ 面・ハタチテ	—	
69	土 墓	S3R	S2S2	2号	—	6.5	6.0	青・白	107W7.4に灰・黄褐色	R.	11:ナガ 面・ハタチテ 11:セリ 面・ハタチテ	—	
70	田 木H墓	S3Q	S2S2	2号	013.1	—	4.8	青	—	753Y7.4灰褐色	N.0 灰褐色	ロコロナ ロコロナ	15
71	新 棚	S3P・Q	S2S2	2号	—	—	6.0	青・白	—	N.0灰褐色	ナ.ナガ	—	
73	土 墓	S3N19	S3N19	1号	106.0	—	6.0	青・白	52Y7.4灰褐色	107W7.4に灰・黄褐色	セリ	1	
74	土 墓	S3N19	S3N19	1号	—	—	6.0	青・白	107W7.4に灰・黄褐色	753W7.4に灰・黄褐色	セリ	—	
75	土 墓	S3N19	S3N19	2号	186.5	57	8.5	青・白	107W7.4に灰・黄褐色	107W7.4に灰・黄褐色	セリ	—	
76	土 墓	S3N19	S3N19	2号	13.1	40	17.6	青・白	107W7.4に灰・黄褐色	107W7.4に灰・黄褐色	セリ	—	
77	土 墓	S3N19	S3N19	2号	106.0	—	6.0	青・白	—	73W6.4に灰・黄褐色	セリ	4	
78	土 墓	S3N19	S3N19	2号	105.0	3.5	6.0	青・白	107W7.4に灰・黄褐色	R.	11:ナガ 面・ハタチテ	20	
79	土 墓	S3N19	S3N19	1号	620.1	—	6.0	青・白	51Y7.4に灰・黄褐色	753W7.4に灰・黄褐色	セリ	9	
80	土 墓	S3N19	S3N19	2号	622.7	—	6.0	青・白	107W7.4に灰・黄褐色	107W7.4に灰・黄褐色	セリ	34	
81	土 林	S3N19	S3N19	2号	618.2	—	6.0	青・白	51Y7.4に灰・黄褐色	51Y7.4に灰・黄褐色	セリ	3	
82	土 墓	S3N19	S3N19	1号	—	—	—	青	—	50W6.1灰褐色	セリ	—	
83	土 林	S3R	F3H	1号	—	—	6.0	青・白	—	107W7.4灰褐色	11:ナガ 面・ハタチテ 11:セリ 面・ハタチテ	—	
84	土 林	S3R	急傾斜	1号	048.0	—	6.0	青・白	51Y7.6灰褐色	51Y7.6灰褐色	セリ	13	
85	土 林	S3R	急傾斜	1号	013.1	—	6.0	青・白	51Y6.6灰褐色	51Y6.6灰褐色	セリ	2	
86	土 林	A3R	カタチ	—	010.0	—	6.0	青・白	753W6.4に灰・黄褐色	753W6.4に灰・黄褐色	セリ	5	

用意 No.	地名	基盤	アリヤフ	出土位置	出土層	層厚 (cm)	層序	層名	断面	外因	地質	測量	備考
87	土	木	S2R	急合替	1層	0.24	—	G40	2.5mに於ける黄色	N20.0風化	2.5mに於ける黄色	無	無
88	土	木	S2R	急合替	1層	0.72	—	G55	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
89	土	木	S2R	急合替	1層	0.53	—	G73	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
90	土	木	S2R, S7	急合替	1層	0.92	—	G73	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
91	土	木	S1D	急合替	1層	0.72	—	G40	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
92	土	木	S4P	急合替	1層	0.29	—	G58	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
93	土	木	S4D	急合替	1層	0.42	—	G40	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
94	土	木	S2R	急合替	1層	0.34	—	G40	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
95	土	木	S2Q, S9	急合替	1層	0.42	—	G59	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
96	土	木	S4P	急合替	1層	0.60	—	G38	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
97	土	木	S1P	急合替	1層	—	—	G23	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
98	土	木	S2R	急合替	1層	—	—	G23	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
99	土	木	S4E, S2Q, S9	急合替	1層	—	—	G40	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
100	土	木	S4E, S2Q, S11	急合替	1層	—	—	G40	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
101	土	木	S7D	急合替	1層	—	—	G40	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
102	土	木	S4E, S2Q, S6	急合替	1層	—	—	G49	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
103	土	木	S4S, S2Q, S9	急合替	1層	—	—	G49	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
104	土	木	S1D	急合替	1層	—	—	G40	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
105	土	木	S6Q	急合替	1層	—	—	G40	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
106	土	木	S6Q	急合替	1層	—	—	G49	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
107	土	木	S6Q, S8	急合替	1層	—	—	G49	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
108	土	木	S2Q, S12	急合替	1層	0.18	—	G41	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
109	土	木	S6Q	急合替	1層	—	—	G45	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
110	土	木	S2Q	急合替	1層	0.18	—	G41	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
111	土	木	S4P, S6Q	急合替	1層	0.16	—	G45	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
112	土	木	S4P	急合替	1層	0.13	—	G41	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
113	土	木	S1Q	急合替	1層	0.18	—	G41	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
114	土	木	S2Q	急合替	1層	0.17	—	G37	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
115	土	木	S4R	急合替	1層	0.20	—	G49	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ
116	土	木	S5P	急合替	1層	0.23	—	G49	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	2.5mに於ける黄色	A	11:ナフ 体:ヘタナフ

古墳時代の土器組合(15)

組合 No.	器種 別別	計種	アリヤフ	出土位置	法面 (m)	法面 形状	軸向	軸物	軸土	色調	測量	
											内面	外周
118	土	美	51N	急合窓	1層	0.776	—	(4.0)	小口窓	109YR2/2に近い黄褐色	—	ナゲ
119	土	美	51Q	急合窓	1層	0.724	—	(3.7)	直・石	25Y7/2灰褐色	—	ナゲ
120	土	美	500N・500P	急合窓	1層	0.549	—	(6.0)	直・石	109YR7に近い黄褐色	5YR8/4灰褐色	ナゲ
121	土	基	500P	急合窓	1層	1.18	5.3	200	小口窓	109YR7に近い黄褐色	109YR7に近い黄褐色	ナゲ
122	土	基	500N	急合窓	1層	0.70	3.4	20	直	25Y7/2灰褐色	25Y7/2灰褐色	ナゲ
123	土	HG・基	502P	急合窓	1層	0.73	—	(3.6)	小口窓	25Y7/2灰褐色	25Y7/2灰褐色	ナゲ
124	土	杯形身	525N	急合窓	1層	—	(1.8)	(3.0)	直	SR6E1灰褐色	SR6E1灰褐色	ナゲ
125	土	杯形身	500P・500Q	急合窓	1層	0.70	(1.0)	(4.0)	直	SR6E1灰褐色	SR6E1灰褐色	ナゲ
126	土	杯形身	500・R	急合窓	1層	—	(1.8)	(4.0)	直	SR6E1灰褐色	SR6E1灰褐色	ナゲ
127	土	基	500・R	急合窓	1層	0.70	(1.6)	(5.6)	直	SR6E1灰褐色	SR6E1灰褐色	ナゲ
128	土	基	500・R	急合窓	1層	0.70	(1.6)	(5.6)	直	SR6E1灰褐色	SR6E1灰褐色	ナゲ
129	土	基	500L・500・M	急合窓	1層	0.70	(1.6)	(5.6)	直	SR6E1灰褐色	SR6E1灰褐色	ナゲ
130	土	基	51N	急合窓	1層	—	—	—	直	SR6E1灰褐色	SR6E1灰褐色	ナゲ
131	土	基	51N	急合窓	1層	—	—	—	直	SR6E1灰褐色	SR6E1灰褐色	ナゲ
132	土	基	54N	急合窓	1層	0.72	—	(6.2)	直	SR6E1灰褐色	SR6E1灰褐色	ナゲ
133	土	基	53M	急合窓	1層	—	—	—	直	SR6E1灰褐色	SR6E1灰褐色	ナゲ
134	土	基	109YR8・49-	急合窓	1層	—	—	—	直	SR6E1灰褐色	SR6E1灰褐色	ナゲ
135	土	基	52M・52N?	急合窓	1層	—	(2.2)	(4.0)	直	SR6E1灰褐色	SR6E1灰褐色	ナゲ
136	土	基	51N	急合窓	1層	—	—	—	直	SR6E1灰褐色	SR6E1灰褐色	ナゲ
137	土	基	51N	急合窓	1層	0.63	—	(1.8)	直	109YR2/3灰褐色	109YR2/3灰褐色	ナゲ
138	土	基	51I	急合窓	1層	0.63	—	—	直	109YR2/3灰褐色	109YR2/3灰褐色	ナゲ
139	小町	450	S1I	急合窓	1層	—	—	—	直	109YR7に近い黄褐色	109YR7に近い黄褐色	ナゲ
140	小町	450	S1I	急合窓	2層	—	—	—	直	5YR8/6褐色	5YR8/6褐色	ナゲ
141	土	基	56Q	急合窓	1層	0.63	—	(0.8)	直	25YR6/4灰褐色	25YR6/4灰褐色	ナゲ
142	小町	56Q	S1II	急合窓	1層	0.63	—	(0.8)	直	25YR6/4灰褐色	25YR6/4灰褐色	ナゲ
143	小町	562Z	S1B	急合窓	1層	0.63	—	(0.8)	直	25YR6/4灰褐色	25YR6/4灰褐色	ナゲ
144	土	基	58Q	急合窓	2層	0.70	(0.9)	(4.0)	直・石	25YR7/3灰褐色	25YR7/3灰褐色	ナゲ

崩生跡付の土器組合(1)

組合 No.	器種 別別	計種	アリヤフ	出土位置	法面 (m)	法面 形状	軸向	軸物	軸土	色調	測量	
											内面	外周
139	土	基	51I	急合窓	1層	0.63	—	—	直	109YR2/3灰褐色	109YR2/3灰褐色	ナゲ
140	小町	450	S1I	急合窓	2層	—	—	—	直	109YR7に近い黄褐色	109YR7に近い黄褐色	ナゲ
141	土	基	56Q	急合窓	1層	0.63	—	—	直	5YR8/6褐色	5YR8/6褐色	ナゲ
142	小町	56Q	S1II	急合窓	1層	0.63	—	—	直	25YR6/4灰褐色	25YR6/4灰褐色	ナゲ
143	小町	562Z	S1B	急合窓	1層	0.63	—	—	直	25YR6/4灰褐色	25YR6/4灰褐色	ナゲ
144	土	基	58Q	急合窓	2層	0.70	(0.9)	(4.0)	直・石	25YR7/3灰褐色	25YR7/3灰褐色	ナゲ

発生時代の土器群新義(2)

番号	器種	マリヤド	出土位置	層位	柱径 (cm)	断面	形状	施工	部物	色調	地成		測定	外因	内因	成因	備考
											内因	外因					
145 瓶 S5Q S5S 区	S5Q	1層	—	—	—	G字	直・長	XYG2.1 施工地	10YR3.1 黄褐色	R.	ナゲ	11: 頭文：頭：次頭	—	—	—	—	
146 今印 S5Q S5S	S5Q	1層	—	—	—	Q字	直・長	XYG1.1 施工地	10YR3.6 2 黄褐色	R.	ナゲ	洗縮文	—	—	—	—	
147 瓶 S5Q S5S	S5Q	2層	—	0.8	Q字	直・長	XYG1.1 施工地	10YR3.5 黄褐色	今今良	ナゲ	ケギリ	—	—	—	—	—	
148 今印 S5Q S5S	S5Q	1層	(G)D	—	Q字	直	XYG1.1 施工地	7.5Y7.7 白褐色～	R.	等級	11: デ型：ハゲ	3	—	—	—	—	
149 瓶 S5Q S5S	S5Q	1層	—	—	Q字	直	XYG1.1 施工地	7.5Y7.7 白褐色～	R.	等級	洗縮文：脚次文	—	—	—	—	—	
150 今印 S5Q S5S	S5Q	1層	—	—	Q字	直	XYG1.1 施工地	10YR4.2 2 黄褐色	R.	ナゲ	—	—	—	—	—		
151 瓶 S5Q S5Q203	S5Q	2号用具层	1層	(G)A	—	Q字	直	XYG7.3 (1)小・直	黄褐色	R.	ナゲ	11: デ型：ハゲ	20	—	—	—	
152 今印 S5Q S5Q3	S5Q	3号用具层	1層	(G)B	—	Q字	直	XYG7.3 (1)小・直	黄褐色	R.	ナゲ	脚下：ハゲ	—	—	—	—	
153 瓶 S5Q S5Q4	S5Q	1層	—	—	Q字	直	XYG7.3 (1)小・直	黄褐色	R.	ナゲ	—	—	—	—	—	—	
154 今印 S5Q S5Q205	S5Q	1層	(G)B	—	Q字	直	XYG7.3 (1)小・直	黄褐色	R.	ナゲ	ヘタナゲ	—	—	—	—	—	
155 今印 S5Q S5Q205	S5Q	2層	—	—	Q字	直	XYG7.3 (1)小・直	黄褐色	R.	ナゲ	ヘタナゲ	—	—	—	—	—	
156 今印 S5Q S5Q416	S5Q	1層	(G)B	4.4	7.2	直	XYG5.2 白褐色	2.5Y7.2 白褐色	R.	ナゲ	11: デ型：ナゲ	18	—	—	—	—	
157 今印 S5Q S5Q22	S5Q	1層	(G)B	—	Q字	直	XYG5.2 白褐色	10YR7.11 小・黄褐色	今今良	ナゲ	11: デ型：頭付：洗縮	4	—	—	—	—	
158 不印 S5Q S5Q22	S5Q	2層	—	—	Q字	直	XYG5.2 白褐色	10YR5.6 黄褐色	今今良	等級	洗縮文	—	—	—	—	—	
159 瓶 S5Q S5Q225	S5Q	5層	(G)B	—	Q字	直	XYG4.2 白褐色	10YR4.1 黄褐色	今今良	ナゲ	ヘタナゲ	—	—	—	—	—	
160 瓶 S5Q S5Q23	S5Q	3層	(G)B	—	Q字	直	XYG4.2 白褐色	10YR4.1 黄褐色	今今良	ナゲ	ヘタナゲ	—	—	—	—	—	
161 不印 S5Q S5Q23	S5Q	5層	—	—	Q字	直	XYG5.2 白褐色	10YR5.2 白褐色	今今良	ナゲ	ヘタナゲ	—	—	—	—	—	
162 小印 S5Q S5Q235	S5Q	5層	—	—	Q字	直	XYG5.2 白褐色	10YR5.2 白褐色	今今良	ナゲ	ヘタナゲ	—	—	—	—	—	
163 不印 S5Q S5Q235	S5Q	5層	—	—	Q字	直	XYG5.2 白褐色	10YR5.2 白褐色	今今良	ナゲ	ヘタナゲ	—	—	—	—	—	
164 瓶 S5Q S5Q235	S5Q	1層	(G)B	—	Q字	直	XYG5.2 白褐色	10YR5.2 白褐色	今今良	ナゲ	ヘタナゲ	—	—	—	—	—	
165 瓶 S5Q S5Q235	S5Q	4層	(G)B	—	Q字	直	XYG5.2 白褐色	10YR5.2 白褐色	今今良	ナゲ	ヘタナゲ	—	—	—	—	—	
166 今印 S5Q S5Q235	S5Q	1層	(G)B	—	Q字	直	XYG5.2 白褐色	2.5Y7.1 黄褐色	11: 洗縮文：洗縮文	4	—	—	—	—	—	—	
167 今印 S5Q S5Q235	S5Q	1層	(G)B	—	Q字	直	XYG5.2 白褐色	2.5Y7.1 黄褐色	11: 洗縮文：洗縮文	4	—	—	—	—	—	—	
168 今印 S5Q S5Q235	S5Q	1層	—	—	Q字	直	XYG5.2 白褐色	2.5Y7.1 黄褐色	11: 洗縮文：洗縮文	4	—	—	—	—	—	—	
169 今印 S5Q S5Q235	S5Q	1層	(G)B	—	Q字	直	XYG5.2 白褐色	10YR5.2 白褐色	今今良	ナゲ	ヘタナゲ	—	—	—	—	—	
170 今印 S5Q S5Q235	S5Q	1層	(G)B	—	Q字	直	XYG5.2 白褐色	10YR5.2 白褐色	今今良	ナゲ	ヘタナゲ	—	—	—	—	—	
171 今印 S5Q S5Q235	S5Q	1層	(G)B	—	Q字	直	XYG5.2 白褐色	2.5Y7.1 黄褐色	11: 洗縮文：洗縮文	5	—	—	—	—	—	—	
172 今印 S5Q S5Q235	S5Q	1層	(G)B	—	Q字	直	XYG5.2 白褐色	2.5Y7.1 黄褐色	11: 洗縮文：洗縮文	5	—	—	—	—	—	—	
173 今印 S5Q S5Q235	S5Q	1層	(G)B	—	Q字	直	XYG5.2 白褐色	2.5Y7.1 黄褐色	11: 洗縮文：洗縮文	5	—	—	—	—	—	—	
174 今印 S5Q S5Q235	S5Q	1層	(G)B	—	Q字	直	XYG5.2 白褐色	2.5Y7.1 黄褐色	11: 洗縮文：洗縮文	5	—	—	—	—	—	—	

(3) 洪水時代の土器觀察表

順位 No.	器種	出土位置		目録番号	目録 (1件)	経緯	形状	色調	地紋	測量		備考
		層位	層次							外因	内因	
175	盃	22~53P	S5223	4層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2375.2 鮎床灰褐色	R	底一輪上：ナデ 縁：ナラ	底：ナラ 縁：ナラ	—
176	盃	22P	S5223	4層	—	(G70)	今手柄 茎・海・石	2376.2 鮎床灰褐色	R	11~12P 縁：ナラ	底：ナラ 縁：ナラ	3
177	盃	22R	S5223	4層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	11~12P 縁：ナラ	底：ナラ 縁：ナラ	4
178	盃	22Q	S5223	3層	—	(G70)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	11~12P 縁：ナラ	底：ナラ 縁：ナラ	3
179	盃	22R	S5223	4層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナデ	ナラ	6
180	盃	22P	S5223	4層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	丁口上：ナラ 底：ナラ	丁口上：ナラ 底：ナラ	16
181	盃	22Q	S5223	3層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	11~12P 縁：ナラ	底：ナラ 縁：ナラ	9
182	盃	22R	S5223	4層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
183	盃	22P	S5223	4層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
184	盃	22R	S5223	4層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
185	盃	22Q	S5223	3層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
186	盃	22Q	S5223	2層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
187	盃	22P	S5223	4層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
188	小壺	22R	S5223	4層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
189	盃	22R	S5223	4層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
190	盃	22Q	S5223	2層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
191	盃	22Q	S5223	3層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
192	盃	22R	S5223	4層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
193	盃	22Q	S5223	4層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
194	盃	22Q	S5223	4層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
195	盃	22R	S5223	4層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
196	盃	22Q	S5223	4層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
197	盃	22R	S5223	4層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
198	円底土器	22Q	S5223	4層	極	(G58)	極・58 底・50 身・51 口・50	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
199	盃	22Q	S5223	5層	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—	
200	盃	22Q	S5223	2層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
201	盃	22Q	S5223	5層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
202	盃	22Q	S5223	5層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
203	盃	22Q	S5223	5層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—
204	小壺	22Q	S5223	1層	—	(G58)	今手柄 茎・長	2376.2 鮎床灰褐色	R	ナラ	ナラ	—

余生群化した器類序表(4)

用件	記号	タグ	出土日程	場所	基準	基準(cm)	基準	形状	地城	色調	測量	内面	外面	備考
205 瓢	56Q	S5R17	1月	(8月)	11時	—	6.5cm	今や管	R.	10YR7.3.2.6.5.黄褐色	R.	11:チヤド 面、ヘチダテ	11:チヤド面、ハナ	3
206 飴 43H	54R12	1月	—	—	—	—	—	今や管 2.段	R.	10YR8.2.6.白	R.	ハナ	模文無(2番)	—
207 瓢	56Q10	混合物	H.1月	G.1月	—	6.5cm	今や管	2.段	R.	10YR8.3.2.黄褐色	R.	11:チヤド 面、ハナ	11:チヤド 面、ハナ	4
208 今柄	56Q10	混合物	H.1月	—	—	—	—	今や管	R.	10YR6.2.6.黄褐色	R.	ハナ	模文無	—
209 瓢	56Q10	混合物	H.1月	—	—	0.9cm	0.9cm	2.段、直	R.	10YR4.1.6.5.灰褐色	R.	ハナ	模文無	—
210 盆	54P	混合物	H.1月	—	—	6.5cm	6.5cm	今や管 2.段、直	R.	10YR7.4.2.6.5.黄褐色	R.	ハナ	模文無	—
211 43H	56Q25	混合物	H.2月	—	—	—	—	今や管 2.段	R.	10YR6.2.6.黄褐色	R.	ナゲ	模文無	—
212 今柄	56Q	混合物	H.2月	—	—	0.2cm	0.2cm	2.段	R.	10YR3.1.6.白	R.	ナゲ	模文無	—
213 瓢	56Q25	混合物	H.2月	—	—	0.1cm	0.1cm	今や管 2.段	R.	10YR7.3.2.6.5.黄褐色	R.	ナゲ	模文無	—
214 今柄	56Q	混合物	H.2月	—	—	0.2cm	0.2cm	今や管 2.段	R.	2.5YR6.2.6.白	R.	11:チヤド 面、ハナ	11:チヤド 面、ハナ	—
215 盆	56Q25	混合物	H.2月	—	—	0.1cm	0.1cm	2.段、直	R.	2.5YR6.2.6.白	R.	ナゲ	模文無	1
216 23H	56Q22	1号羽根器	H.2月	—	—	0.2cm	0.2cm	2.段	R.	2.5YR7.3.6.黄褐色	R.	ナゲ	模文無(2番)	3
217 瓢	56Q24	1号羽根器	H.2月	—	—	0.5cm	0.5cm	2.段、直、五	R.	10YR6.2.6.5.黄褐色	R.	ナゲ	模文無(2番)	—
218 今柄	56Q	1号羽根器	H.2月	—	—	0.3cm	0.3cm	今や管 2.段	R.	10YR6.2.6.5.黄褐色	R.	ナゲ	模文無	—
219 43H	56Q	1号羽根器	H.2月	—	—	0.3cm	0.3cm	今や管 2.段	R.	N/A.6.6.5.黄褐色	R.	ナゲ	模文無	—
220 盆	56Q8	混合物	H.2月	6.5cm	—	6.2cm	6.2cm	今や管 2.段	R.	7.5YR6.3.2.6.5.黄褐色	R.	ナゲ	模文無	4
221 瓢	56Q9	混合物	H.2月	—	—	0.1cm	0.1cm	今や管 2.段	R.	10YR6.4.2.6.5.黄褐色	R.	ナゲ	模文無	—
222 盆	56Q14	混合物	H.2月	—	—	0.1cm	0.1cm	今や管 2.段	R.	10YR3.1.6.白	R.	ナゲ	模文無	—
223 盆	56Q24	2号羽根器	H.3月	17.28	—	6.6cm	6.6cm	今や管 2.段	R.	N/A.2.6.2.白	R.	ナゲ	模文無	4
224 盆	56Q17	2号羽根器	H.3月	17.28	—	6.2cm	6.2cm	今や管 2.段	R.	10YR3.1.6.白	R.	ナゲ	模文無	—
225 盆	54/5%、56Q14	2号羽根器	H.3月	18.0cm	—	6.6cm	6.6cm	今や管 2.段	R.	10YR7.2.6.5.黄褐色	R.	ナゲ	模文無	4
226 盆	56Q	2号羽根器	H.3月	—	—	6.3cm	6.3cm	今や管 2.段	R.	10YR8.3.2.6.白	R.	ナゲ	模文無	—
227 今柄	56Q21	2号羽根器	H.3月	—	—	0.2cm	0.2cm	今や管 2.段	R.	N/A.6.6.5.黄褐色	R.	ナゲ	模文無	—
228 今柄	56Q20	2号羽根器	H.3月	—	—	0.1cm	0.1cm	今や管 2.段	R.	10YR4.1.6.5.黄褐色	R.	ナゲ	模文無	—
229 今柄	56Q14	2号羽根器	H.3月	—	—	—	—	今や管 2.段	R.	2.5YR6.2.6.白	R.	ナゲ	模文無	—
230 盆	56Q	2号羽根器	H.3月	—	—	0.2cm	0.2cm	今や管 2.段	R.	2.5YR8.3.2.6.白	R.	ナゲ	模文無	—
231 43H	56Q25	2号羽根器	H.3月	—	—	0.5cm	0.5cm	今や管 2.段	R.	10YR5.2.6.白	R.	ナゲ	模文無(2番)	—
232 今柄	56Q17	2号羽根器	H.3月	—	—	—	—	今や管 2.段	R.	10YR5.2.6.白	R.	ナゲ	模文無	—
233 今柄	56Q	2号羽根器	H.3月	—	—	0.2cm	0.2cm	今や管 2.段	R.	10YR2.1.6.5.黄褐色	R.	ナゲ	模文無	—
234 今柄	56Q24	2号羽根器	H.3月	—	—	今や管 2.段	—	今や管 2.段	R.	10YR7.3.2.6.5.黄褐色	R.	ナゲ	1.5%~1.9%の模文	—

秀生時代の土器觀察表(5)

組別 No.	分類 名	出土位置		層位 No.	基盤 厚	底面 形	底面 色調	底面 地質	内面 色調	内面 地質	測量 (E-N)	測量 (E-W)	編號
		地點	Y										
225 小字	ダリヤ F	通路	—	138	1.8	平	10Y86.1 地灰色	10Y87.1 地白色	やや白	ナゲ	—	—	—
226 小字	56QJ3	1 号用具 鍋底上	1.3 厘米	—	—	平	10Y86.2 黄褐色	10Y86.2 黄褐色	良	ヘタナ?	ナゲ	—	—
226 美	56QJ5	2 号用具 鍋底上	1.3 厘米	—	1.8	0.3	今や青 笠・石	NS.3 地灰地	2.5Y86.6 地色	良	ナゲ	—	—
227 美	56QJ3	2 号用具 鍋底上	1.3 厘米	—	5.2	0.8	今や青 笠・具	10Y86.3 地黄褐色	10Y86.3 地黄褐色	良	ナゲ	—	—
228 美	56QJ3+13	混合型	1.3 厘米	G319	—	0.2	青	10Y86.3 地黄褐色	10Y86.3 地黄褐色	やや白	ナゲ	—	—
229 美	56QF	4 号用具 鍋底上	1.3 厘米	—	0.7	今や青 笠・石	10Y86.3 地黄褐色	10Y86.3 地黄褐色	やや白	ナゲ	—	—	
240 朴	56QJ2	混合型	1.3 厘米	—	0.8	今や青 笠・石	10Y86.3 地黄褐色	10Y86.3 地黄褐色	やや白	ナゲ	—	—	
241 美	56QJ12	混合型	1.3 厘米	—	6.2	0.8	今や青 笠・石	7.5Y86.2 地灰褐色	7.5Y86.2 地灰褐色	良	ナゲ	—	—
242 美	56QJ1	混合型	NS.20 地	G219	—	0.8	青 笠・具	10Y87.2 地灰褐色	10Y87.2 地灰褐色	良	ナゲ	—	—
243 朴	56Q8	混合型	NS.20 地	G219	—	6.2	今や青 笠・具	7.5Y87.6 地灰褐色	10Y87.6 地灰褐色	良	ナゲ	—	—
244 朴	56Q1	混合型	NS.20 地	G219	—	1.3	今や青 笠・具	10Y87.2 地灰褐色	10Y87.2 地灰褐色	良	ナゲ	—	—
245 美	56Q25	混合型	NS.20 地	G219	—	0.7	今や青 笠・具	10Y87.2 地灰褐色	10Y87.2 地灰褐色	ナゲ	ナゲ	—	—
246 美	56QJ23	混合型	NS.20 地	—	—	今や青 笠・具	—	2.5Y86.4 地白色	2.5Y86.4 地白色	ナゲ	ナゲ	—	—
247 美	56QJ3	混合型	1 厘米	G318	—	4.8	今や青 笠・石	2.5Y7.7 地黄褐色	10Y87.1 地灰褐色	良	ナゲ	ナゲ	ナゲ
248 朴	56Q5	カタツン	—	193.2	—	—	今や青 笠・石	10Y86.3 地黄褐色	10Y86.3 地黄褐色	良	ナゲ	—	—
249 美	56QJ8	カタツン	—	—	—	今や青 笠・石	10Y86.2 地黄褐色	10Y86.2 地黄褐色	ナゲ	ナゲ	—	—	
250 朴	56P1	—	NS.1.1 地	—	—	今や青 笠・石	10Y87.1 地灰褐色	10Y87.1 地灰褐色	ナゲ	ナゲ	—	—	
251 朴	43N	—	万 b 鋸	—	4.1	0.10	青	2.5Y7.4 地黄褐色	2.5Y7.4 地黄褐色	良	ヘタナ?	—	—
252 全明	43N	—	万 a 鋸	—	—	0.75	青	2.5Y7.2 地黄褐色	2.5Y7.2 地黄褐色	ナゲ	ナゲ	—	—
253 全明	56QJ11	—	NS.3 地	—	—	—	青	10Y85.1 地灰地	10Y85.1 地灰地	良	ナゲ	—	—
254 全明	56Q	—	1 厘米	—	—	Q28	今や青 笠・石	10Y84.4 地灰地	10Y84.4 地灰地	ナゲ	ナゲ	—	—
255 全明	56Q	カタツン	—	—	—	0.10	青	10Y86.3 地黄褐色	10Y86.3 地黄褐色	ナゲ	ナゲ	—	—
256 朴	43N	—	万 b 鋸	—	—	今や青 笠・石	10Y86.6 地白	7.5Y86.6 地白	ナゲ	ナゲ	—	—	
257 美	43N	—	1 厘米	—	6.9	0.10	今や青 笠・具	10Y85.2 地黄褐色	10Y85.2 地黄褐色	良	ナゲ	—	—
258 美	56QJ1	—	1 厘米	—	6.7	0.68	今や青 笠・石	10Y86.6 地白	2.5Y7.2 地黄褐色	良	ナゲ	ナゲ	—
259 美	56QJ1	—	NS.3 地	—	5.0	0.10	今や青 笠・石	10Y87.1 地灰褐色	10Y87.1 地灰褐色	良	ヘタナ?	—	—
260 美	56Q9	カタツン	—	—	6.9	0.38	今や青 笠・石	5Y86.6 地白	—	良	ナゲ	ナゲ	—

古墳時代 石製品目録

復元番号		器種		寸引×幅		底十面点		底五面点		縦5cm		横5cm		注記		石材		備考	
1		石劍		54R		SISカマツ	1面	1面	1.1	35	35	35	35	227	御衣冠	滑石	滑石	滑石	滑石
72		石劍		53R		SISカマツ	2面	2面	0.95	36	2	96	35	227	御衣冠	滑石	滑石	滑石	滑石
通欄内付石器觀察表																			
復元番号	器種	寸引	幅	寸引	幅	寸引	幅	寸引	幅	寸引	幅	寸引	幅	寸引	幅	寸引	幅	寸引	幅
261	石劍	430	SIS	2面	2面	2面	2面	2面	2面	1.5	0.4	1	1	1	1	1	1	1	1
262	石劍	430	SIS	2面	2面	2面	2面	2面	2面	1.6	0.4	1	1	1	1	1	1	1	1
263	石劍未製品	430	SIS	4面	4面	4面	4面	4面	4面	2.35	1.0	9	9	9	9	9	9	9	9
264	櫛形石器	430	SIS	2面	2面	2面	2面	2面	2面	2.9	0.6	8	8	8	8	8	8	8	8
265	刮削	430	SIS	2面	2面	2面	2面	2面	2面	4.1	0.9	11	11	11	11	11	11	11	11
266	刮削	430	SIS	2面	2面	2面	2面	2面	2面	5.6	0.4	12	12	12	12	12	12	12	12
267	刮削	430	SIS	2面	2面	2面	2面	2面	2面	4.9	3.2	14	14	14	14	14	14	14	14
268	刮削	430	SIS	2面	2面	2面	2面	2面	2面	5.65	1.15	26	26	26	26	26	26	26	26
269	刮削	430	SIS	2面	2面	2面	2面	2面	2面	5.45	2.95	17	17	17	17	17	17	17	17
270	石劍	50R	SIS12刻痕	1面	1面	0.4	0.4	2.2	2.2	0.6	0.6	3	3	3	3	3	3	3	3
271	石劍	550	SIS12刻痕	1号上杭	1面	1面	1面	1面	1面	3.9	1.8	35	35	35	35	35	35	35	35
272	石劍	550	SIS12刻痕	1号上杭	1面	1面	1面	1面	1面	1.60	0.25	1	1	1	1	1	1	1	1
273	石劍	550	SIS12刻痕	2号羽根槽	2面	2面	2面	2面	2面	0.070	1.2	0.25	1	1	1	1	1	1	1
274	石劍	41N	SIS4	1面	1面	2.9	1.5	0.4	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
275	石劍	50R	SIS126	2面	2面	0.4	0.4	1.35	1.35	0.45	1	1	1	1	1	1	1	1	1
276	石劍	50R	SIS126	2面	2面	2.4	1.0	0.3	0.3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
277	石劍	50R	SIS126	2面	2面	2.2	2.2	0.7	0.7	0.5	0.5	1	1	1	1	1	1	1	1
278	刮削	50R	SIS126	2面	2面	6.3	5.9	3.9	3.9	116	116	116	116	116	116	116	116	116	116
278-a	刮削	50R	SIS126	2面	2面	4.5	4.7	1.6	1.6	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
278-b	刮削	50R	SIS126	2面	2面	6.15	3.85	1.9	1.9	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50
278-c	刮削	50R	SIS126	2面	2面	2.0	2.0	0.65	0.65	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
278-d	刮削	50R	SIS126	2面	2面	4.15	3.7	1.8	1.8	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
279	石劍	50R	SIS126	2面	2面	3.7	8.7	2.4	2.4	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120
280	石劍	50Q2	S0122	1面	1面	1.8	1.2	0.5	0.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
281	ミタレバハマ	50P	S022a	4面	20	3.95	0.7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
282	圓錐刮削	50P	S022a	4面	3.6	1.6	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3
283	敲石	50R	S022a	4面	11.2	9.2	4.05	4.05	4.05	4.05	4.05	4.05	4.05	4.05	4.05	4.05	4.05	4.05	4.05
284	大體石器	50R	SIS2a	4面	62.8	14	1.6	1.6	1.6	1.6	1.6	1.6	1.6	1.6	1.6	1.6	1.6	1.6	1.6
285	石劍	50N	SIS111	1面	6.0	1.8	0.45	0.45	0.45	0.45	0.45	0.45	0.45	0.45	0.45	0.45	0.45	0.45	0.45
286	ミタレバハマ	50N	SIS111	1面	4.75	1.45	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7
287	刮削	50R	SIS111	1面	3.4	2.3	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
288	石劍	430	SIS126	2面	4.1	2.3	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0

包含器出土器物列表表

报告参考号	芯片	出土地点		尺寸(cm)		厚度(cm)		厚度(cm)		备注		编 号
		尺寸(cm)										
280	石质	3102	3112	3112	3112	3.4	1.7	0.6	3	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
280	石质	50019	51119	51119	51119	0.70	1.1	0.65	1	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
281	石质	51124	51124	51124	51124	0.70	2.3	1.5	0.3	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
282	石质	61023	61119	61119	61119	2.3	3.1	0.6	0.5	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
283	石质	30016	31119	31119	31119	1.9	1.9	0.6	0.5	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
284	带盖陶罐	5102	51119	51119	51119	9.3	6	1.7	1.60	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
285	扁平小口陶片	3410	31119	31119	31119	1.65	0.4	1	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐	1号带盖陶罐
286	石质	51020	51210	51210	51210	4.0	1.5	0.9	6	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
287	石质	50014	51210	51210	51210	0.70	0.70	0.45	6	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
288	石质	51021	51210	51210	51210	7.3	1.6	0.9	4.9	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
289	石质	50019	51319	51319	51319	3.5	1.85	0.5	1	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
300	石质	51023	51319	51319	51319	2.7	1.3	0.5	2	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
301	石质	51023	51319	51319	51319	0.70	0.55	0.7	0.4	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
302	石质	51023	51319	51319	51319	1.5	0.3	0.3	27	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
303	骨质	51025	51319	51319	51319	1.5	0.3	0.3	0.5	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
304	磨石	51021	51319	51319	51319	1.5	0.3	0.3	0.5	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
305	磨石	51024	51319	51319	51319	0.70	0.70	0.70	2.32	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
306	石质	50016	51319	51319	51319	0.70	1.2	0.4	2	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
307	石质	51012	51319	51319	51319	3.5	2.5	0.5	25	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
308	石质	51012	51319	51319	51319	0.70	7.4	1.9	245	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
309	石质	51021	51319	51319	51319	0.70	6.7	0.3	321	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
310	石质	50013	51319	51319	51319	2.35	1.45	0.5	2	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
311	石质	50017	51319	51319	51319	0.70	1.4	0.6	2	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
312	大型带盖陶器	51023	51319	51319	51319	7.3	1.3	1.3	13.3	直口	凹底有凸缘	1号带盖陶罐
遗物外出土器物列表表												
报告参考号	芯片	出土地点		尺寸(cm)		厚度(cm)		厚度(cm)		备注		编 号
		尺寸(cm)										
313	石质	53011	53121	53121	53121	0.65	1.5	0.6	1	直口	凹底有凸缘	先周灰陶
314	石质	53011	53121	53121	53121	0.65	1.5	0.65	1	直口	凹底有凸缘	先周灰陶
315	石质	53017	53121	53121	53121	0.65	1.5	0.6	1	直口	凹底有凸缘	先周灰陶
316	石质	50020	53121	53121	53121	2.1	1.4	0.65	1	直口	凹底有凸缘	先周灰陶
317	石质	50020	53121	53121	53121	3.9	1.5	0.6	2	直口	凹底有凸缘	先周灰陶
318	石质	54015	53121	53121	53121	1.60	1.5	0.65	1	直口	凹底有凸缘	先周灰陶
319	石质	54013	53121	53121	53121	1.60	1.5	0.6	1	直口	凹底有凸缘	先周灰陶
320	石质	53017	53121	53121	53121	1.60	2.4	0.65	2	直口	凹底有凸缘	先周灰陶
321	石质	53017	53121	53121	53121	5	3.4	0.69	12	直口	凹底有凸缘	先周灰陶
322	滑石	51014	53121	53121	53121	3.5	2.2	0.69	8	直口	凹底有凸缘	先周灰陶
323	大型带盖陶器	51021	53121	53121	53121	0.70	0.70	0.70	5.62	直口	凹底有凸缘	先周灰陶
324	石质	53018	53121	53121	53121	0.70	0.70	0.65	6.2	直口	凹底有凸缘	先周灰陶
325	磨石	53025	53121	53121	53121	1.60	0.70	0.65	2.8	直口	凹底有凸缘	先周灰陶
326	石质	53025	53121	53121	53121	1.60	0.70	0.65	8.1	直口	凹底有凸缘	先周灰陶
327	石质	4711	41118	41118	41118	1.60	0.70	0.65	2.2	直口	凹底有凸缘	先周灰陶
328	石质	50018	51118	51118	51118	1.60	0.5	0.65	13.2	直口	凹底有凸缘	先周灰陶
329	石质	51017	51118	51118	51118	0.70	0.70	0.65	21.5	直口	凹底有凸缘	先周灰陶
330	打制石器	56042	51118	51118	51118	1.60	1.20	0.59	20.0	直口	凹底有凸缘	先周灰陶

建築材料類別

相出番号	部位	面積	時期	出土地點			法面 (cm)	幅・高さ (cm)	保存状況	木柱 (cm)	附標	備考	
				アリヤツ K	アリヤツ P	相手橋							
331	柱根	51P	—	SH07-P1	SH07-P3	相手橋	長さ (cm)	幅・高さ (cm)	—	上端欠損	丸柱	—	
332	柱根	50P	—	SH07-P4	SH07-P5	相手橋	(12.1)	(0.8)	—	上端欠損	丸柱	—	
333	柱根	51P	—	SH07-P4	SH07-P5	相手橋	(20.5)	(11.2)	—	上端欠損	丸柱	—	
334	柱根	51P	—	SH07-P5	SH07-P6	相手橋	(61.2)	(14.0)	—	上端欠損	丸柱	—	
335	柱根	51P	—	SH07-P6	P109	相手橋	(34.5)	(17.5)	—	上端欠損	丸柱	—	
336	柱根合	50Q	—	P110	SH07-P6	相手橋	(44.9)	(11.0)	—	両端欠損	丸柱	—	
337	柱根合	50Q	—	P110	SH07-P6	相手橋	(12.9)	(10.3)	—	上端欠損	丸柱	—	
338	柱根	50Q	—	SH07-P6	SH07-P6	相手橋	(40.4)	(14.6)	—	両端欠損	丸柱	—	
339	柱根合	42Q	—	SH07-P7	SH07-P7	相手橋	(25.9)	(4.7)	—	上端欠損	丸柱	—	
340	加工柱	52P	—	SH07-P7	SH07-P7	相手橋	4 番	(12.3)	4 番	上端欠損	柱目	コナク属	
341	建築部材	53Q	—	SH07-P7	SH07-P7	相手橋	4 番	(58.1)	(6.9)	4 番	柱目	柱目と柱脚	
342	建築部材	53Q	—	SH07-P7	SH07-P7	相手橋	4 番	(77.9)	(6.3)	4 番	柱目	柱目と柱脚	
343	軋	53Q	—	SH07-P7	SH07-P7	相手橋	4 番	(40.2)	(6.0)	—	柱根切妻	—	
344	軋	53Q	—	SH07-P7	SH07-P7	相手橋	4 番	(18.1)	(5.1)	—	柱根切妻	—	
345	軋	53Q	—	SH07-P7	SH07-P7	相手橋	4 番	(45.7)	(4.1)	—	柱根切妻	—	
346	軋	53Q	—	SH07-P7	SH07-P7	相手橋	4 番	(44.4)	5.1	—	柱根切妻	—	
347	研状木造	55Q	—	SH07-P7	SH07-P7	相手橋	1 番	(42.0)	5.8	1.5	上端欠損	柱目	—

その他の時代の土器類留置

相出番号	相別	面積	時期	出土地點			法面 (cm)	幅・高さ (cm)	外側	内側	地底	調査
				アリヤツ	アリヤツ	相手橋						
348	陶文器	林	縄文時代	52P	SH07-P	相手橋	4 番	—	—	10Y16-2	丸柱	1号柱: 1.2m×1.0m 多孔性・斜面・直立柱、縫合部有り、縫合部有り、縫合部有り
349	直筒甌	林	須恵器	51 Q	—	相手橋	1 番	20.0	—	54.0	丸柱	ロコロナゲ
350	直筒甌	林	須恵器	52 Q	—	相手橋	1 番	—	—	59.95±1	丸柱	ロコロナゲ
351	直筒甌	林	須恵器	50 N-25	—	相手橋	1 番	—	—	59.95±1	丸柱	ロコロナゲ
352	直筒甌	要	須恵器	50 R	—	相手橋	1 番	—	—	39.5±1	丸柱	平行セラミック
353	直筒甌	要	須恵器	—	—	相手橋	1 番	—	—	39.5±1	丸柱	平行セラミック

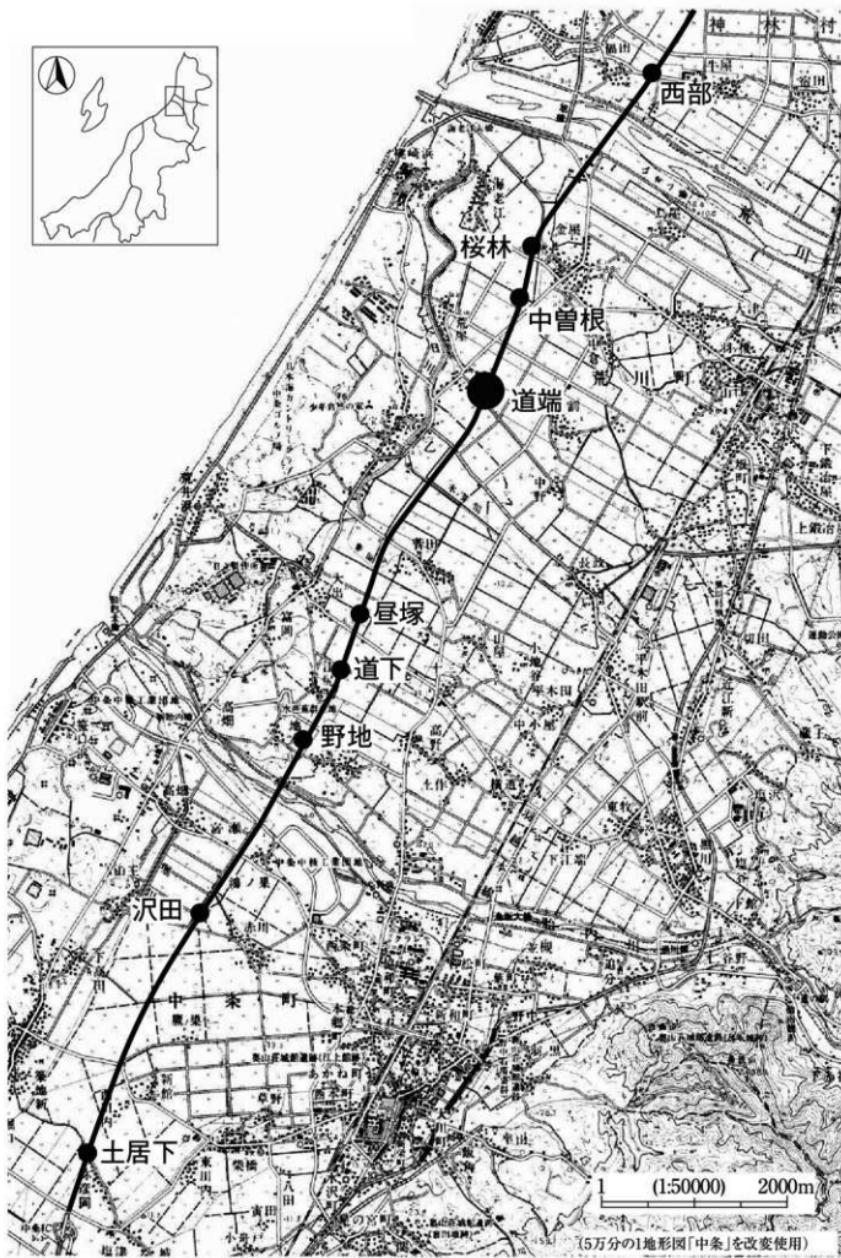
埴装材料類別

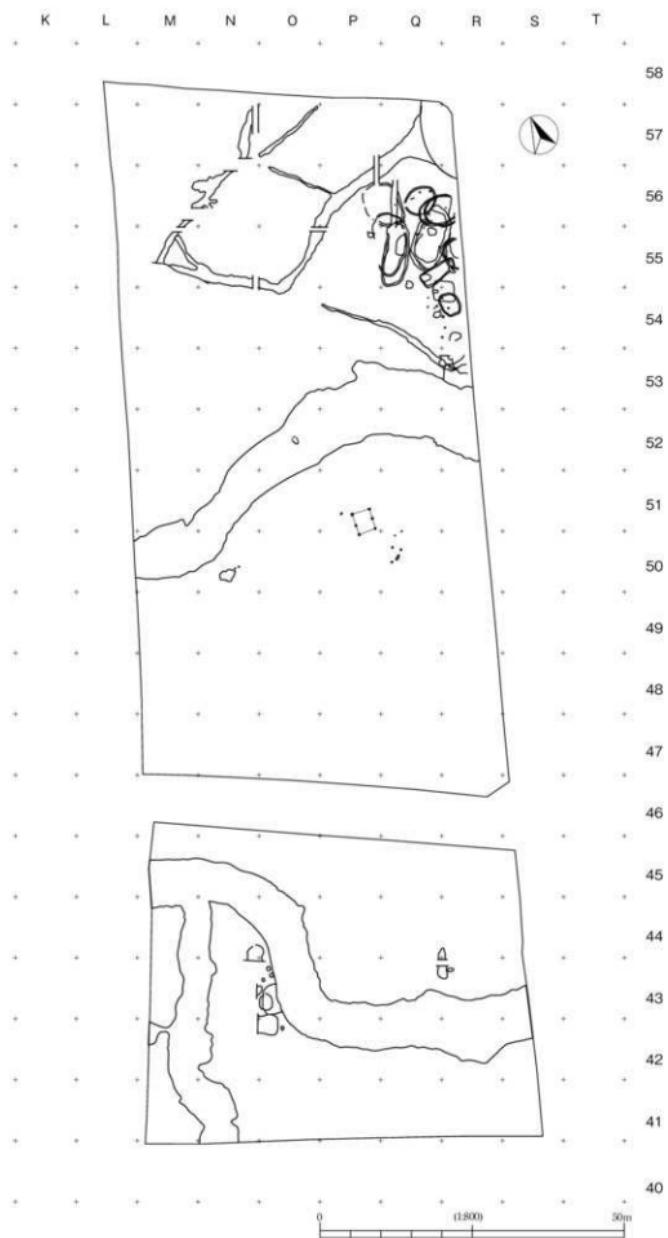
相出番号	相別	面積	時期	出土地點			法面 (cm)	幅・高さ (cm)	外側	内側	地底	調査
				アリヤツ	アリヤツ	相手橋						
354	瓦質	56 Q-5	天保唐衣	46.9	5.5	丸柱	46.9	35.0	22.2	14.05	天保4年1月22日	—
355	瓦質	47 P-36	洋化式衣	—	—	丸柱	25.0	30.0	3.6	9.00	9.00	9.00
356	瓦質	45 Q	水着唐衣	24.9	5.5	丸柱	24.9	30.0	0.7	14.03	—	—
357	瓦質	45 Q	笠衣唐衣	—	—	丸柱	24.6	30.0	0.6	10.00	10.00	10.00
358	瓦質	52 P	寬衣式衣	—	—	丸柱	25.0	30.1	0.9	16.09	16.09	16.09

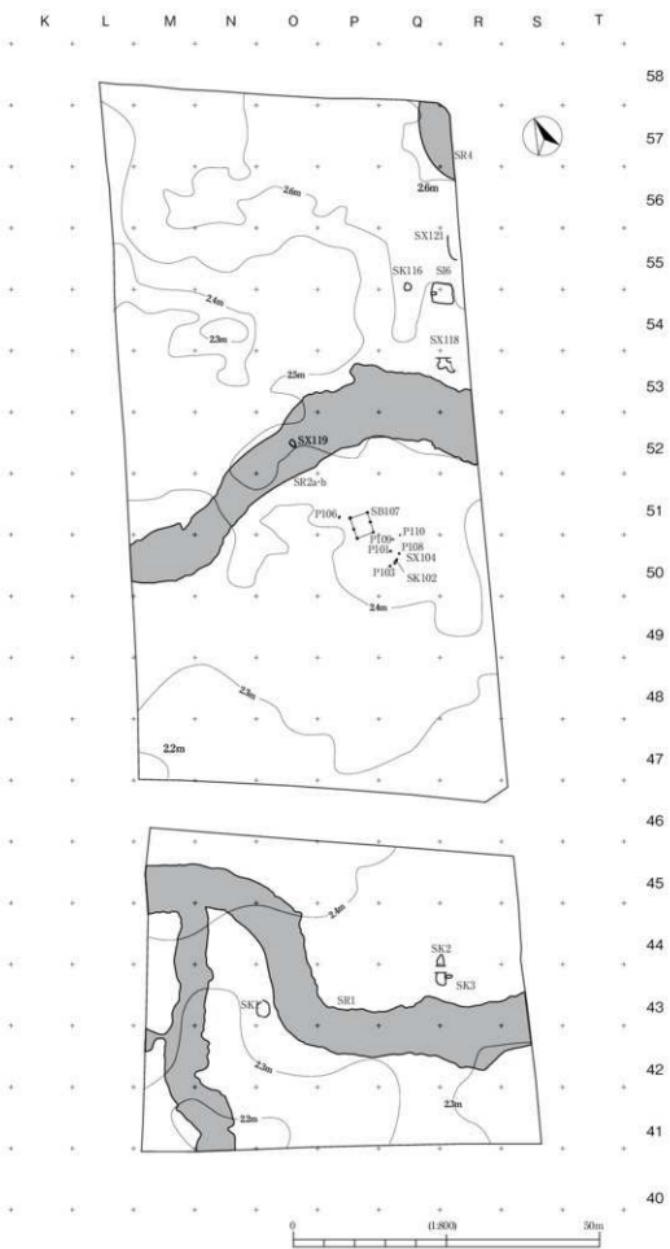
図 版

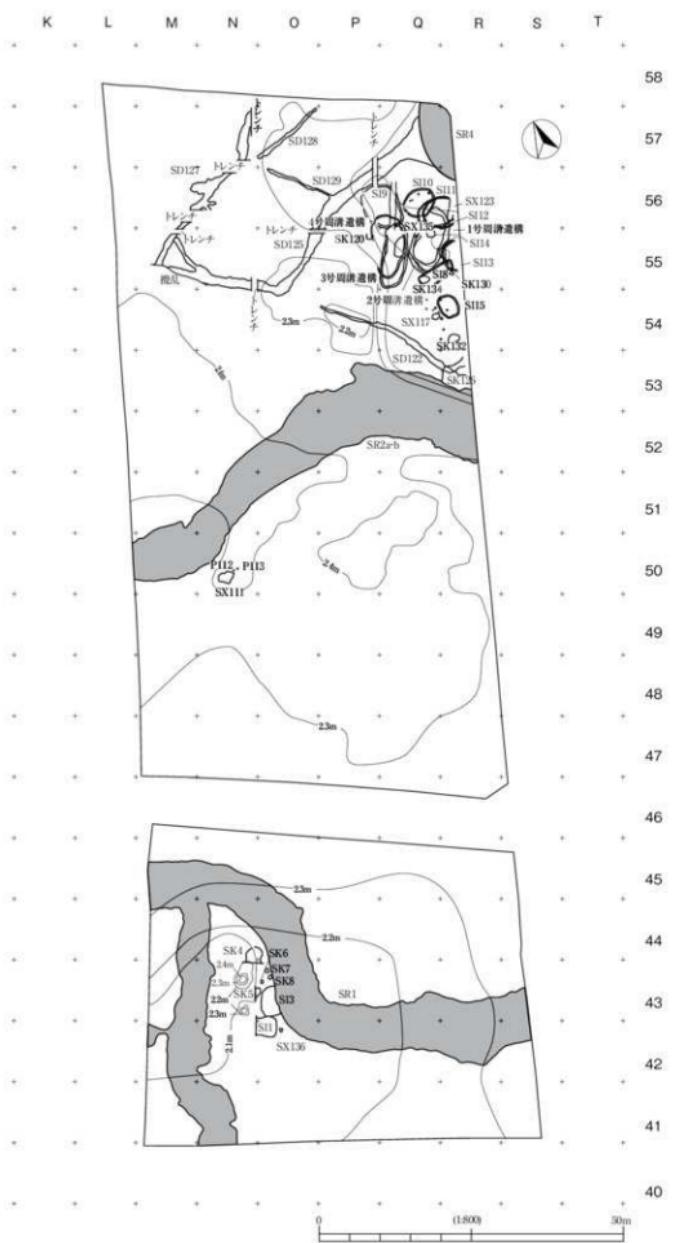
凡 例

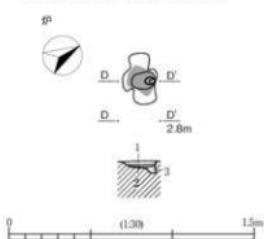
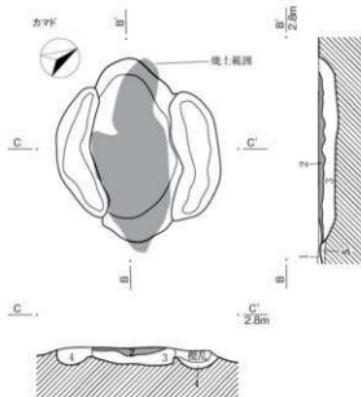
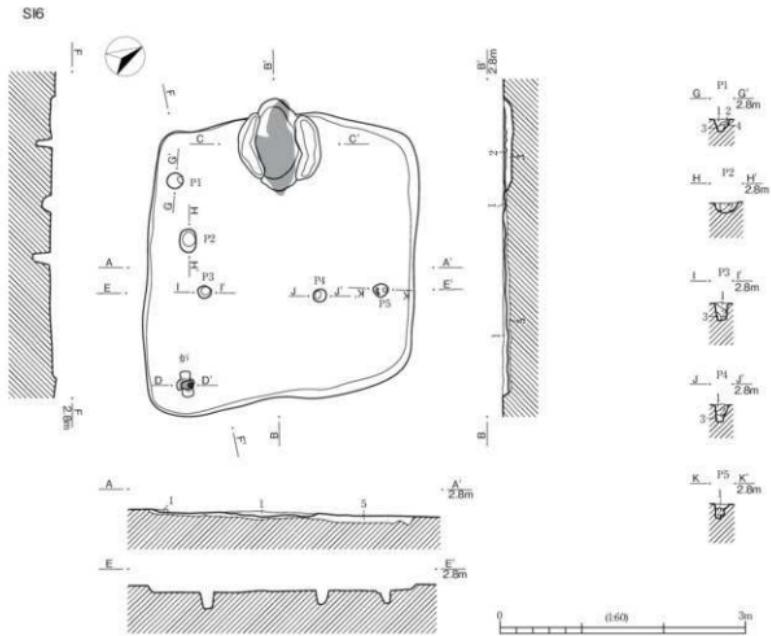
- 1 焼土は  のスクリーントーンで示した。
- 2 炭化物範囲は  のスクリーントーンで示した。
- 3 柱痕は  のスクリーントーンで示した。
- 4 土師器の赤彩範囲は  のスクリーントーンで示した。
- 5 土師器の黒色処理範囲は  のスクリーントーンで示した。
- 6 石器の磨面は  のスクリーントーンで示した。
- 7 石器の敲打面は  のスクリーントーンで示した。











SI6

- (2SY7-2)灰白色砂質シルト
径1mmの炭化物を微量含み、小砂利を少量含む。床面解
け10mm。(2SY7-6)灰白色シルト
径1~5mmの炭化物を少量含む。層方
解10mm。(2YR7-1)明暗灰色シルト
径1mmの炭化物を微量含み。
解1mm以下の炭化物を微量含む。
- (2SY7-1)灰白色砂質シルト
径1mmの炭化物を微量含み、小砂利を少量含む。

SI7

- (2SY7-1)灰白色砂質シルト
径1mmの炭化物を微量含み、小砂利を少量含む。
- (2SYRS-2)灰赤色シルト
径10~20mmの灰白色シルトブロックを少量含む。

P1

- (2SY4-2)暗灰黄色粘質土
径1~2mmの炭化物を多量含み、粗砂を多量含む。
- (2SY4-2)暗灰黄色粘質土
径1~2mmの炭化物を多量含み、粗砂を多量含む。
- (2SY4-2)暗灰黄色粘質土
径1~2mmの炭化物を多量含み、粗砂を多量含む。
- (2SY4-2)暗灰黄色粘質土
径1~2mmの炭化物を多量含み、粗砂を多量含む。

P2

- (2SY4-2)暗灰黄色粘質土
径1~2mmの炭化物を多量含み、径10mmの炭化物を少量含む。
- (2SY4-2)暗灰黄色粘質土
径1~2mmの炭化物を多量含み、粗砂を多量含む。

P3

- (2SY4-2)暗灰黄色粘質土
径1~2mmの炭化物を多量含み、粗砂を少量含む。
- (SY4-1)灰色粘質土
径1~2mmの炭化物を多量含み、粗砂を多量含む。
- (SY4-1)灰色粘質土
径1~2mmの炭化物を多量含み。

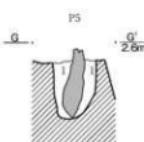
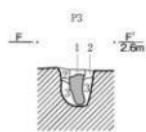
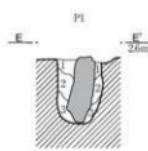
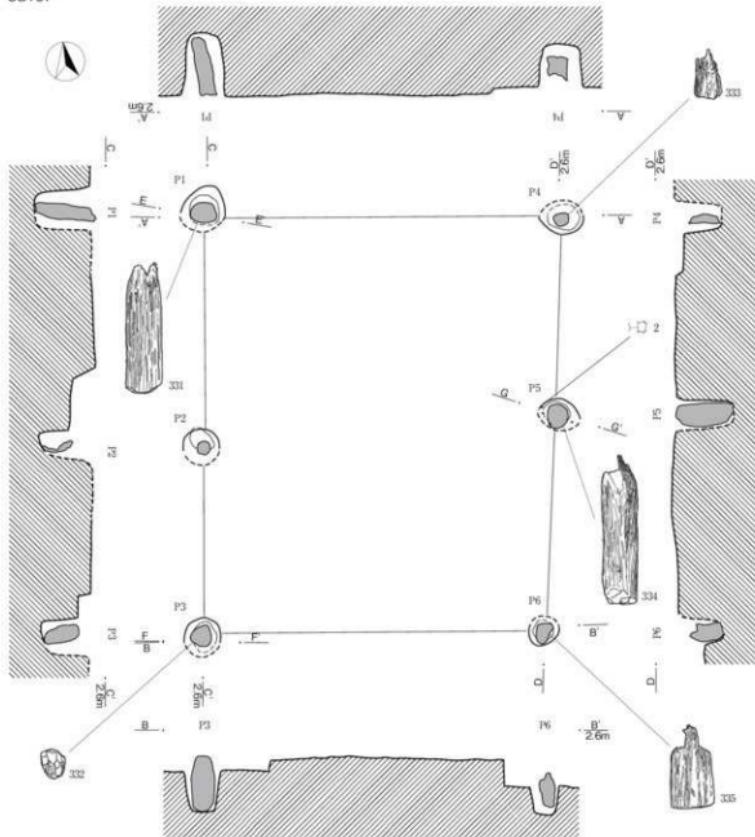
P4

- (2SY4-2)暗灰黄色粘質土
径1~2mmの炭化物を多量含み、粗砂を少量含む。
- (SY4-1)灰色粘質土
径1~2mmの炭化物を多量含み、粗砂を多量含む。
- (SY4-1)灰色粘質土
径1~2mmの炭化物を多量含み。

P5

- (2SY4-2)暗灰黄色粘質土
径1~2mmの炭化物を多量含む。
- (SY4-1)灰色粘質土
径1~2mmの炭化物を多量含む。

SB107

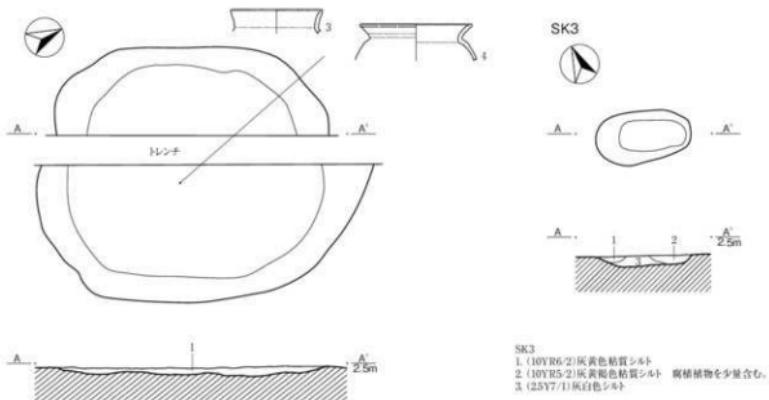


- P1
 1. (10Y6/1)灰白色粘質シルト
 粒1mm以下の炭化物を極微量含む。
 2. (10Y6/1)灰白色粘土
 粒1mm以下の炭化物を含み、灰白色粘土を微量含む。
 3. (10Y5/1)灰白色粘質シルト
 粒1mm以下の灰白色粘土を微量含む。

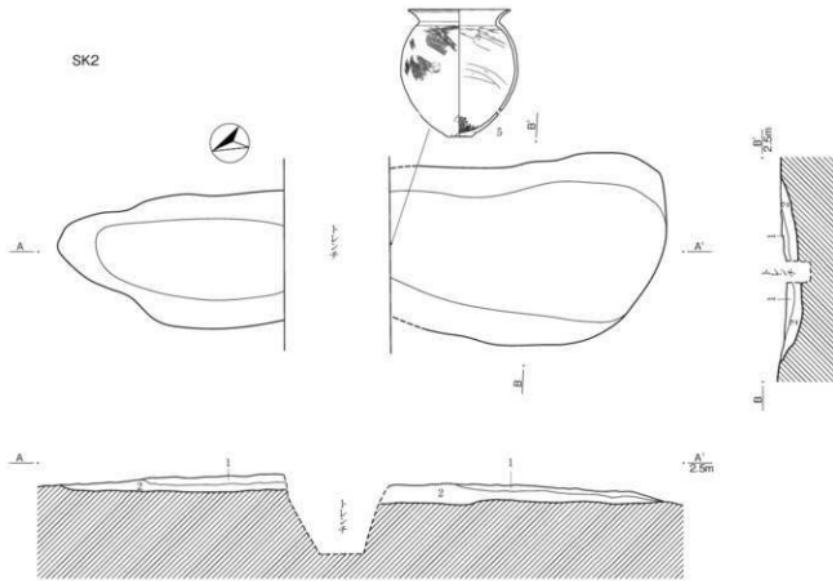
- P3
 1. (10Y6/1)灰白色粘質シルト
 粒5mm以下の炭化物含み、灰白色粘土を少量含む。
 2. (10Y6/1)灰白色粘質シルト
 粒1mm以下の炭化物微量含む。
 3. (10Y5/1)灰白色粘質シルト
 粒5mm以下の灰白色粘土を微量含む。

- P5
 1. (10Y5/1)灰白色粘質シルト
 粒2mm以下の灰白色粘土を微量含む。

SK1

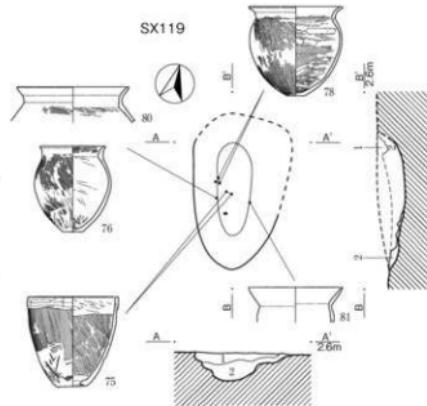
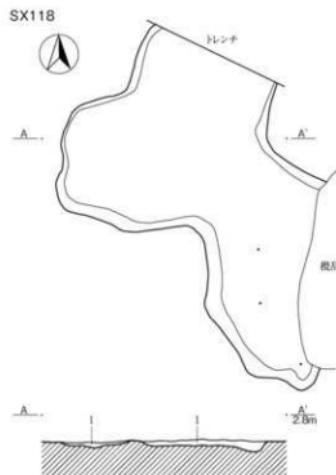


SK2

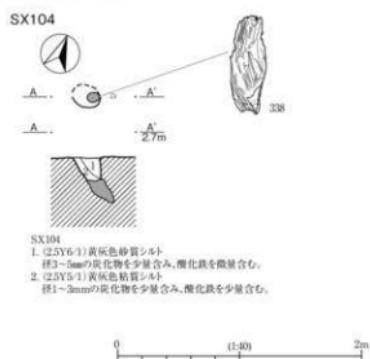
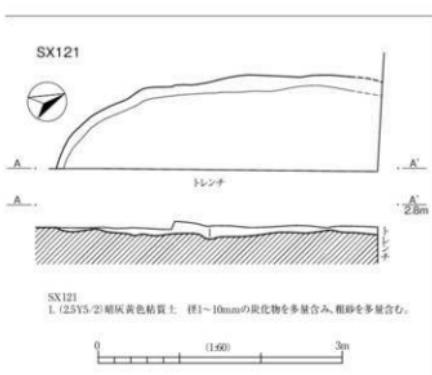
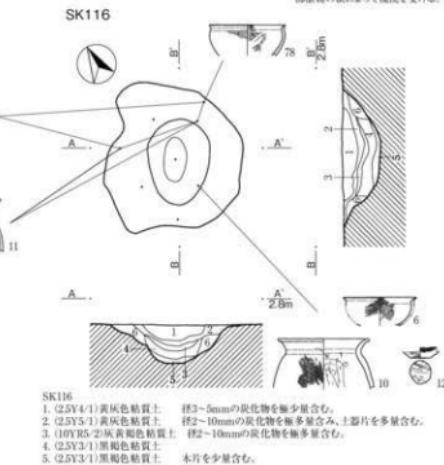
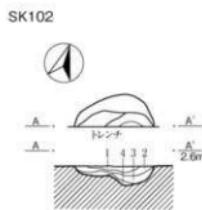


SK2
1. (25Y5/2) 暗灰黄色シルト
2. (5Y7/1) 灰白色粘質シルト

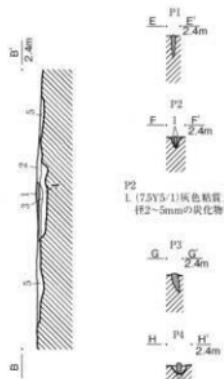
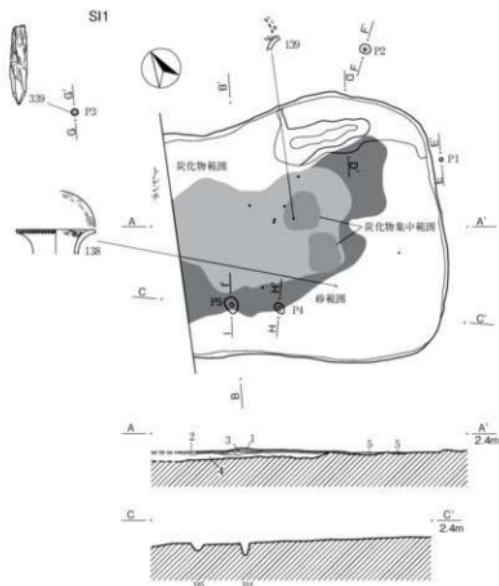
0 1:40 2m



SX119
1. (2.5Y5/1) 黄褐色シルト 径1mmの炭化物を微量含む。
2. (2.5Y4/1) 黄褐色粘質シルト 径2~5mmの炭化物を少量含む。
一部植物の根によって根乱を受ける。



0 (1:60) 3m



1. (7SY5/1) 灰色粘質土
2~5mmの炭化物を微量含む。

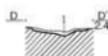


1. (7SY5/1) 灰色粘質土
2~5mmの炭化物を微量含む。



1. (7SY5/1) 灰色粘質土
2~3mmの炭化物を微量含む。

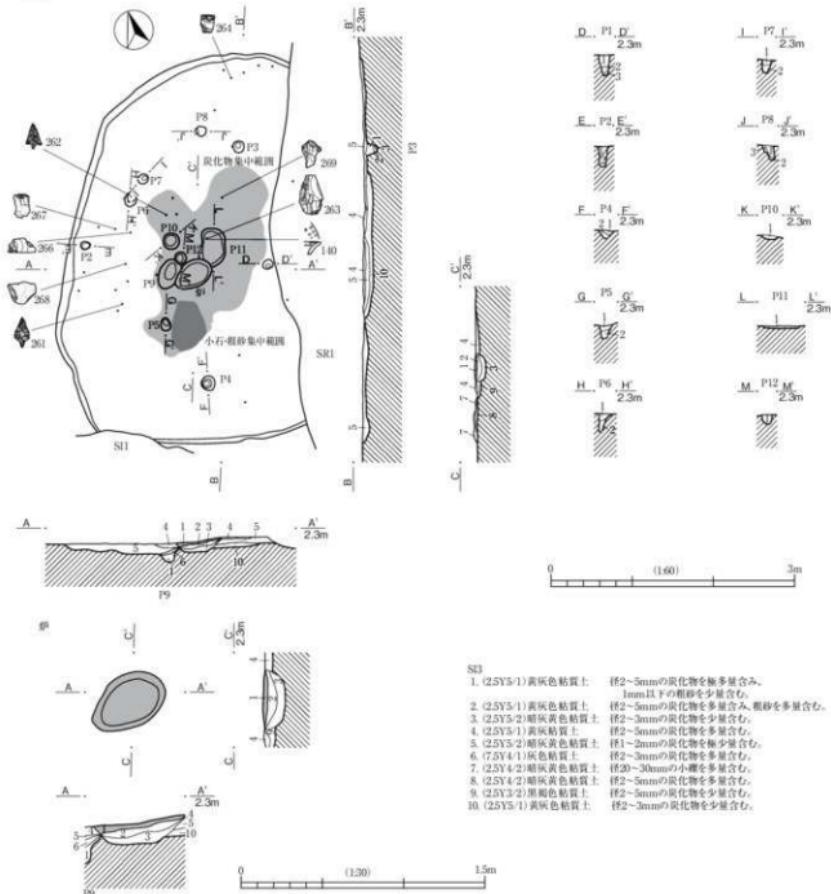
- SI1
- (5Y5-2) 灰オリーブ粘質土
(10YR5-4)にない黄褐色粗砂を多量含み、径5mmの炭化物を多量含む。
 - (5Y5-2) 灰オリーブ粘質土
(10YR5-4)にない黄褐色粗砂を多量含み、径2~5mmの炭化物を少量含む。
 - (5Y5-2) 灰オリーブ粘質土
(10YR5-4)にない黄褐色粗砂を少量含み、径5mmの炭化物を少量含む。
 - (5Y5-2) 灰オリーブ粘質土
(10YR5-4)にない黄褐色粗砂を微量含み、径1~2mmの炭化物を少量含む。
 - (2.5Y4-2) 鮎灰黄色粘質土
(10YR5-4)にない黄褐色粗砂を多量含み、径2~5mmの炭化物を微量含む



鉱床

- (7SY5/1) 灰色粘質土
径1~50mmの(7SY6/1) 灰色粘質土ブロックを多量含み。
径2~5mmの炭化物を少量含む。

SI3



P1

1. (SY5/4) 黄褐色粘質土 径2~3mmの炭化物を少量含む。
2. (SY5/4/1) 黄褐色粘質土 径2~3mmの砂粒を多量含み、径2~5mmの炭化物を少量含む。
3. (SY5/4/2) 黄褐色粘質土

P2

1. (SY5/3) 黄褐色粘質土 径5~10mmの炭化物を多量含む。
2. (SY5/1) 黄褐色粘質土 径2~3mmの炭化物を少量含む。

P3

1. (SY4/4) 黄褐色粘質土 径2~3mmの炭化物を多量含む。
2. (SY4/4/1) 黄褐色粘質土 径1~2mmの炭化物を多量含み、鉢分を多く含む。
3. (SY4/4/2) 黄褐色粘質土

P4

1. (SY4/4) 黄褐色粘質土 径2~3mmの炭化物を少量含む。
2. (SY4/4/1) 黄褐色粘質土 径1~2mmの炭化物を極少量含む。

P5

1. (SY4/2) 底オリーブ粘質土 径3~5mmの炭化物を多量含み、粗砂を少量含む。
2. (SY4/2) 底オリーブ粘質土 径1~3mmの炭化物を少量含む。

P6

1. (SY4/4/2) 嫌灰黄色粘質土 径2~3mmの炭化物を多量含む。
2. (SY4/4) 嫌灰黄色粘質土 径1~2mmの炭化物を多量含み、径10mmの炭化物を少量含む。

SI3

1. (2SY5/1) 黄褐色粘質土 径2~5mmの炭化物を極少量含む。
1mm以上径の粗砂を少量含む。
2. (2SY5/1) 黄褐色粘質土 径2~5mmの炭化物を多量含む、粗砂を多量含む。
3. (2SY5/2) 嫌灰黄色粘質土 径2~3mmの炭化物を多量含む。
4. (2SY5/2) 嫌灰黄色粘質土 径2~3mmの炭化物を多量含む。
5. (2SY5/2) 嫌灰黄色粘質土 (1)~1mmの炭化物を極少量含む。
6. (2SY5/1) 黄褐色粘質土 径2~3mmの炭化物を多量含む。
7. (2SY5/2) 嫌灰黄色粘質土 径20~30mmの小礫を多量含む。
8. (2SY5/2) 嫌灰黄色粘質土 径2~5mmの炭化物を多量含む。
9. (2SY5/2) 黑褐色粘質土 径2~5mmの炭化物を少量含む。
10. (2SY5/1) 黄褐色粘質土 径2~3mmの炭化物を少量含む。

P7

1. (2SY4/2) 黄褐色粘質土 径2~5mmの炭化物を多量含み、粗砂を少量含む。
2. (2SY4/2) 黄褐色粘質土 径1~2mmの炭化物を少量含む。

P8

1. (SY4/1) 黄褐色粘質土 径5~10mmの炭化物を多量含む。
2. (SY4/1) 黄褐色粘質土 径2~3mmの炭化物を多量含む。
3. (SY4/2) 底オリーブ粘質土 径1~2mmの炭化物を少量含む。

P9

1. (SY4/4/2) 嫌灰黄色粘質土 径2~3mmの炭化物を少量含む。

P10

1. (2SY4/2) 嫌灰黄色粘質土 径2~5mmの炭化物を少量含む。

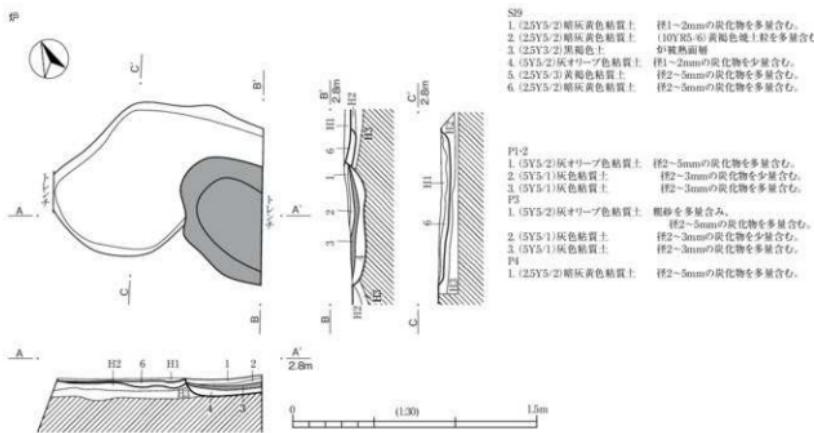
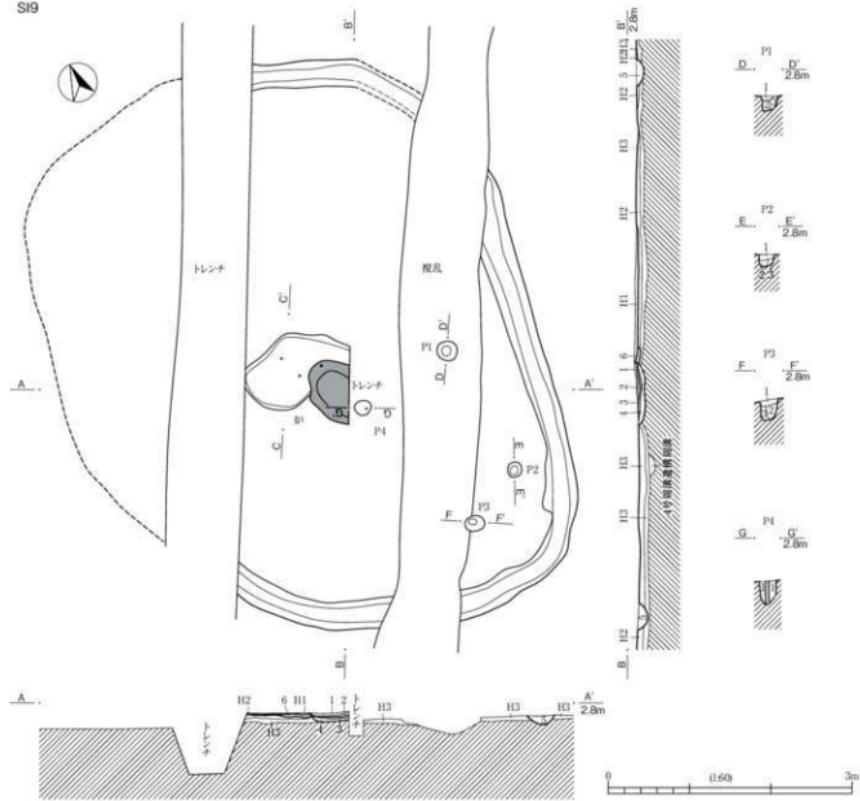
P11

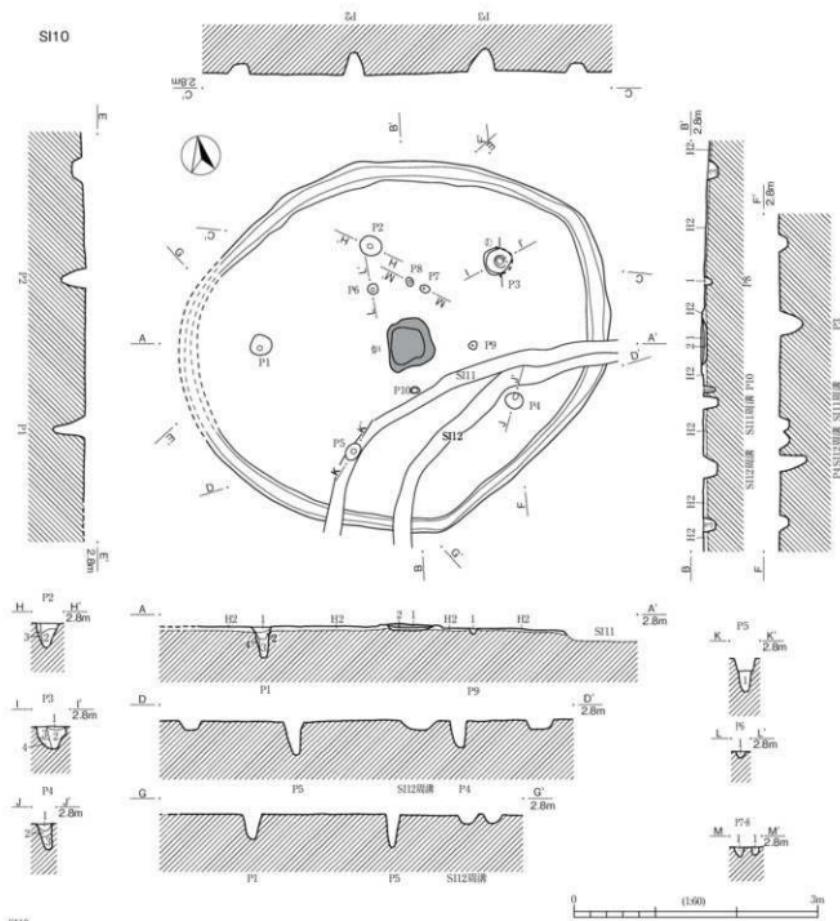
1. (SY4/1) 黄褐色粘質土 径2~5mmの炭化物を中量含む。

P12

1. (SY4/1) 黄褐色粘質土 径2~5mmの炭化物を少量含む。

SI9





-5110

1. (25Y2/2) 黑褐色土 剥離熱帶雨林
 2. (5V4/1) 紫灰褐色粘土 徑1~2mmの炭化物を少含む。
 3. (25Y3/2) 噴灰黃褐色粘土 徑1~2mmの炭化物を少量含み、細鈍を含む。

16

- P2
 1. (25Y5/2)暗灰黄色粘質土
 2. (25Y5/1)黄灰色粘質土
 3. (25Y5/2)暗灰黄色粘質土

径2~3mmの炭化物を多量含む。
 径2~5mmの炭化物を多量含み。
 径5~10mmの炭化物を少量含む。

1

- IP3
 1. (SY4-1)灰色粘質土
 2. (SY5-1)灰色粘質土
 3. (SY5-2)灰オリーブ粘質土
 4. (SY5-3)灰オリーブ粘質土

種3~5mmの炭化物を多量含み、粗砂を少量含む。
 種2~5mmの炭化物を多量含む。
 種2~6mmの炭化物を多量含む。
 種2~3mmの炭化物を少量含む。

P4

1. (SY4/2)灰オリーブ色粘質土 径1~2mmの炭化物を少量含む。
 2. (SY5/1)灰色粘質土 径2~3mmの炭化物を少量含む。
 3. (SY5/2)灰オリーブ色粘質土 径2~3mmの炭化物を少量含む。

P₃

- P6-7-8-9-10
1. (25Y4/2)暗灰褐色粘膜上　様3~5mmの炭化物を多量含む。

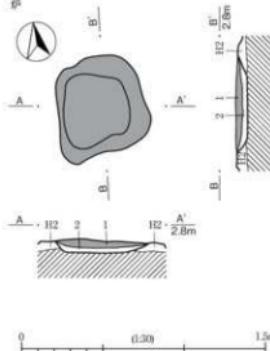
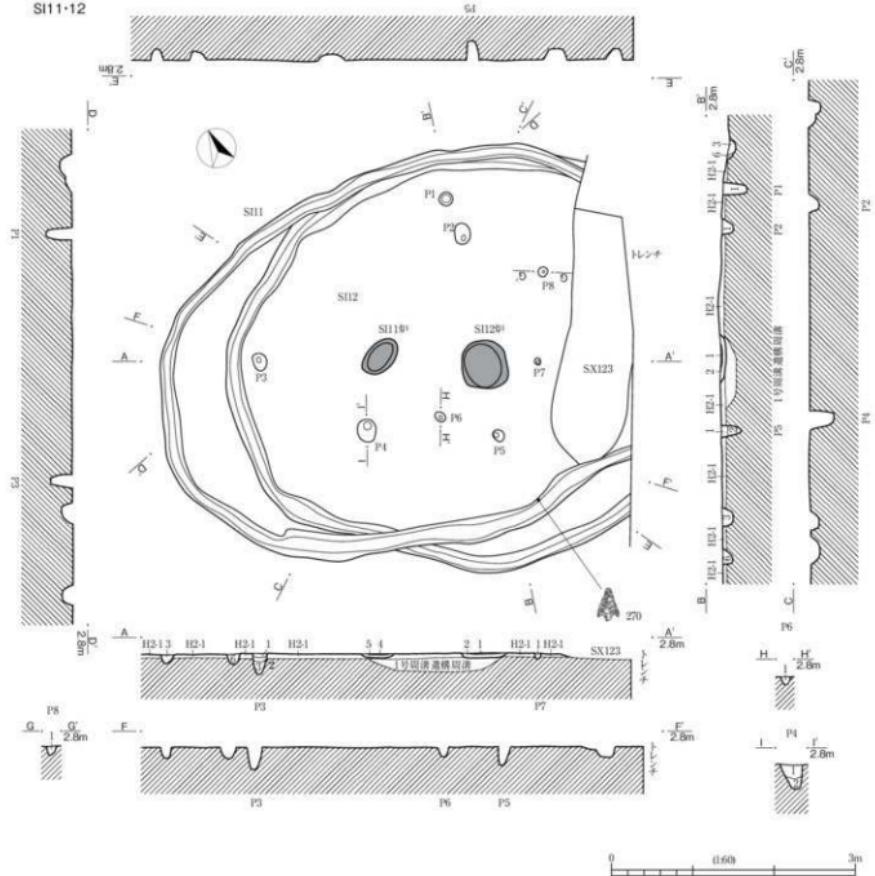
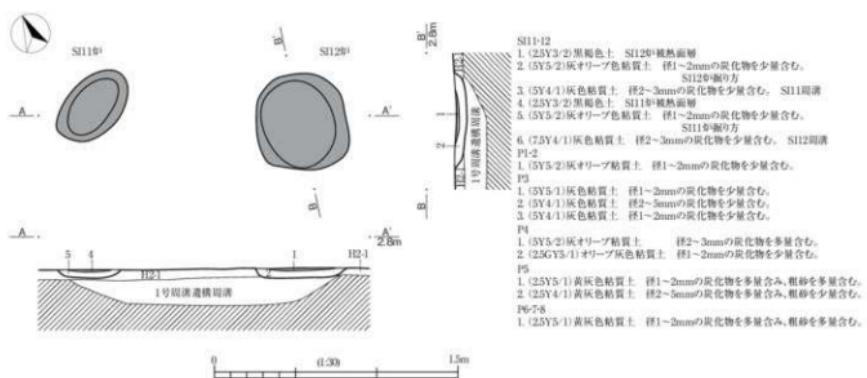


圖 版 13

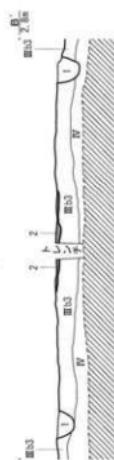
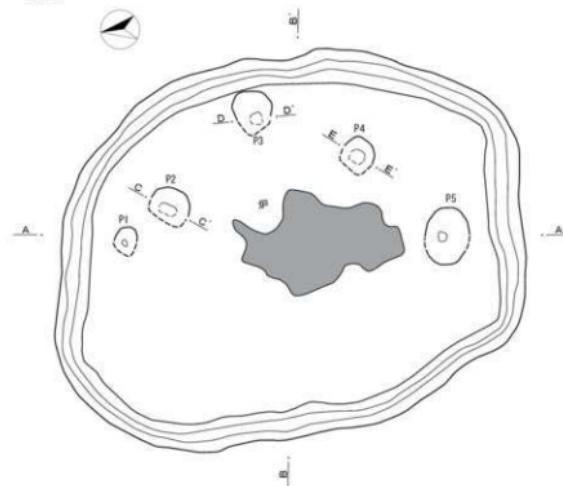
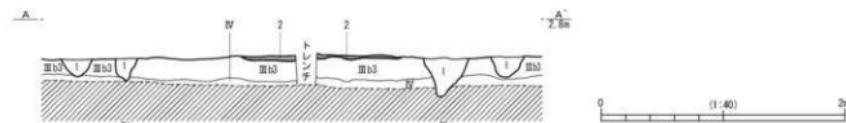
SI11-12



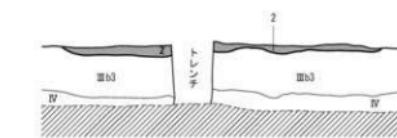
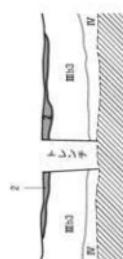
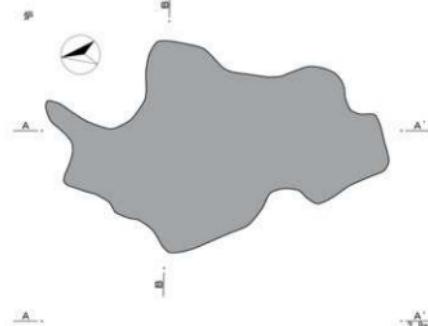
S11-12沪



SI15

C1
P2
C2
Z. 8mD1
P3
D2
Z. 6mE1
P4
E2
Z. 6m

0 (1:40) 2m

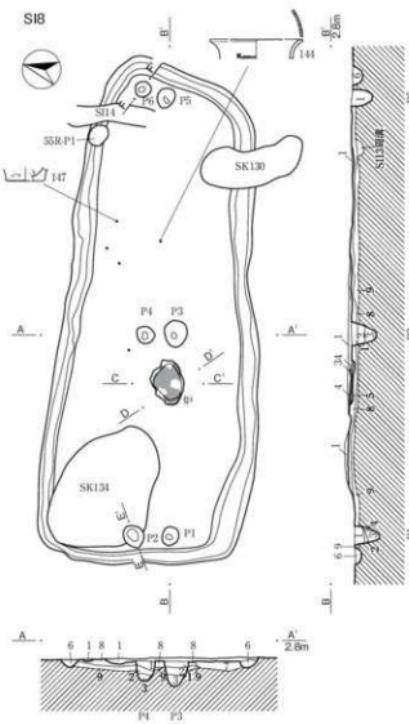


0 (1:20) 1m

SI15

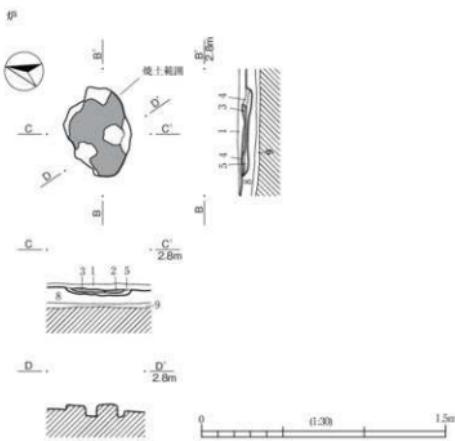
1. (2.SYR5/4) にぶい褐色シルト
2. (2.SY4/1) 黄灰色粘質シルト
やや砂質を帯びる。
径1mm未満の細かい砂粒を多量含み。
径1mmの炭化物を多量含み、
腐土粒を少量含む。

- P1
1. (2.SYR5/1) 黄灰色粘質シルト
径1mm未満の細かい砂粒を多量含み、
径1~3mmの炭化物を少量含む。
P2, P3, P4
1. (2.SY5/1) 黄灰色粘質シルト
径1mm未満の細かい砂粒を多量含み、
径1~3mmの炭化物を少量含む。
2. (2.SY8/2) 反白色シルト
鉄分を斑状に多量含む。
P5
1. (2.SYR5/1) 黄灰色シルト
数mm~10mmの炭化物を多量含む。

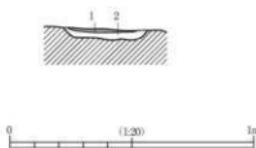
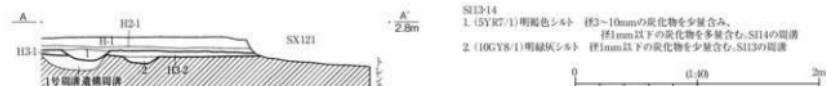
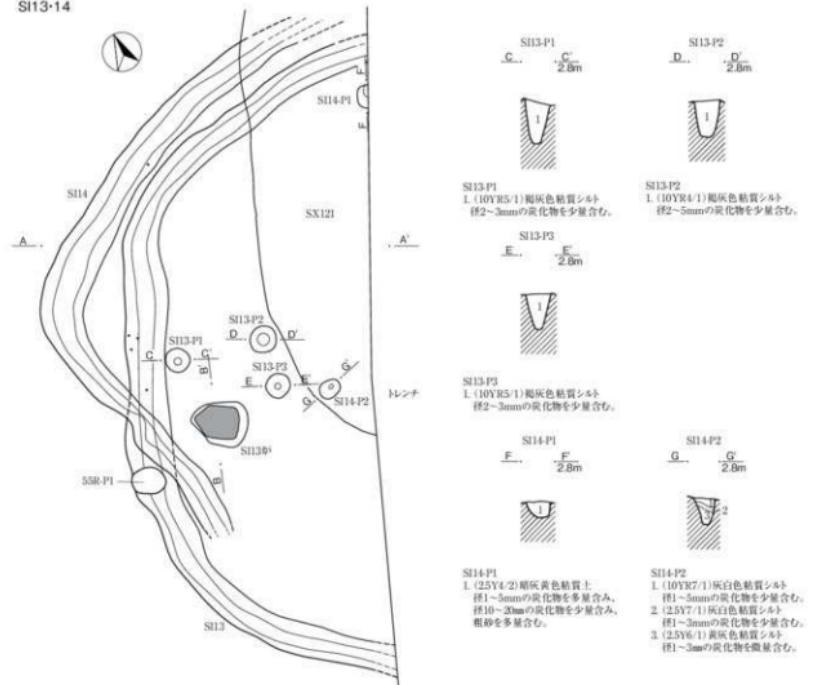


- S18**
1. (SYR4/1) 黄灰色砂質シルト 深1~3mmの炭化物を多量含む。
 (SYR8/1) 白色シルトブロックを少量含む。
 15mm以下の大化物を多量含む。
2. (SYR7/6) 灰色シルト
 1mm以下の炭化物を微量含む。
3. (SYR7/6) 灰色シルト
 1mm以下の炭化物を微量含む。
4. (SYR7/2) 明褐色シルト
 2~3mmの炭化物を板状に多量含む。
5. (SYR3/3) 暗褐色シルト
 1mm以下の炭化物を微量含む。
6. (SYR7/1) 明白色シルト
 1~2mmの炭化物を少量含む。
7. (SYR7/1) 灰白色砂質シルト
 2~5mmの炭化物を少量含む。
8. (SYR7/1) 暗褐色シルト
 1~3mmの炭化物を少量含む。
9. (SYR7/1) 明灰色シルト
 1mm以下の炭化物を微量含む。
- P1
 1. (2.5Y6/1) 黄灰色粘土
 1mm以下の炭化物を微量含む。
2. (2.5Y1/1) 黄灰色粘土
 1mm以下の炭化物を微量含む。
3. (2.5Y3/1) 黑褐色砂質シルト
 柱状岩と想われる炭化物塊が残る。
4. (2.5Y3/2) 黑褐色砂質シルト
 1mm以下の炭化物を微量含む。
- P2
 1. (2.5Y6/1) 黄灰色粘土
 1mm以下の炭化物を微量含む。
- P3
 1. (2.5Y6/1) 黄灰色砂質シルト
 1~3mmの炭化物を少量含む。
 1mm以下の炭化物を微量含む。
2. (2.5Y7/1) 白色シルト
 3mm以下の炭化物を微量含む。
3. (SY8/1) 灰白色シルト
 1mm以下の炭化物を微量含む。
- P5~6
 1. (2.5Y6/1) 黄灰色粘土
 1mm以下の炭化物を少量含む。

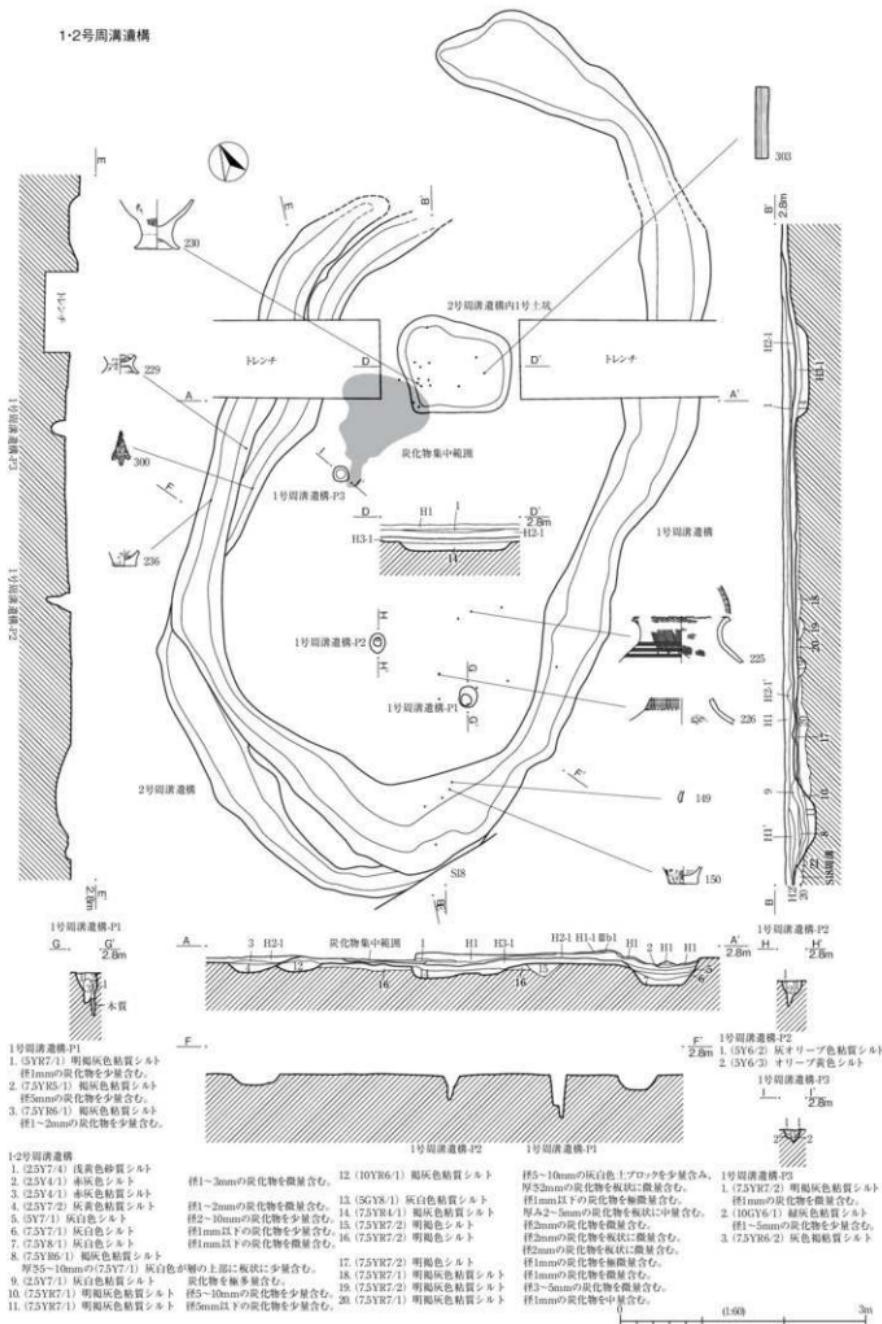
0 (1.00) 3m



SI13-14

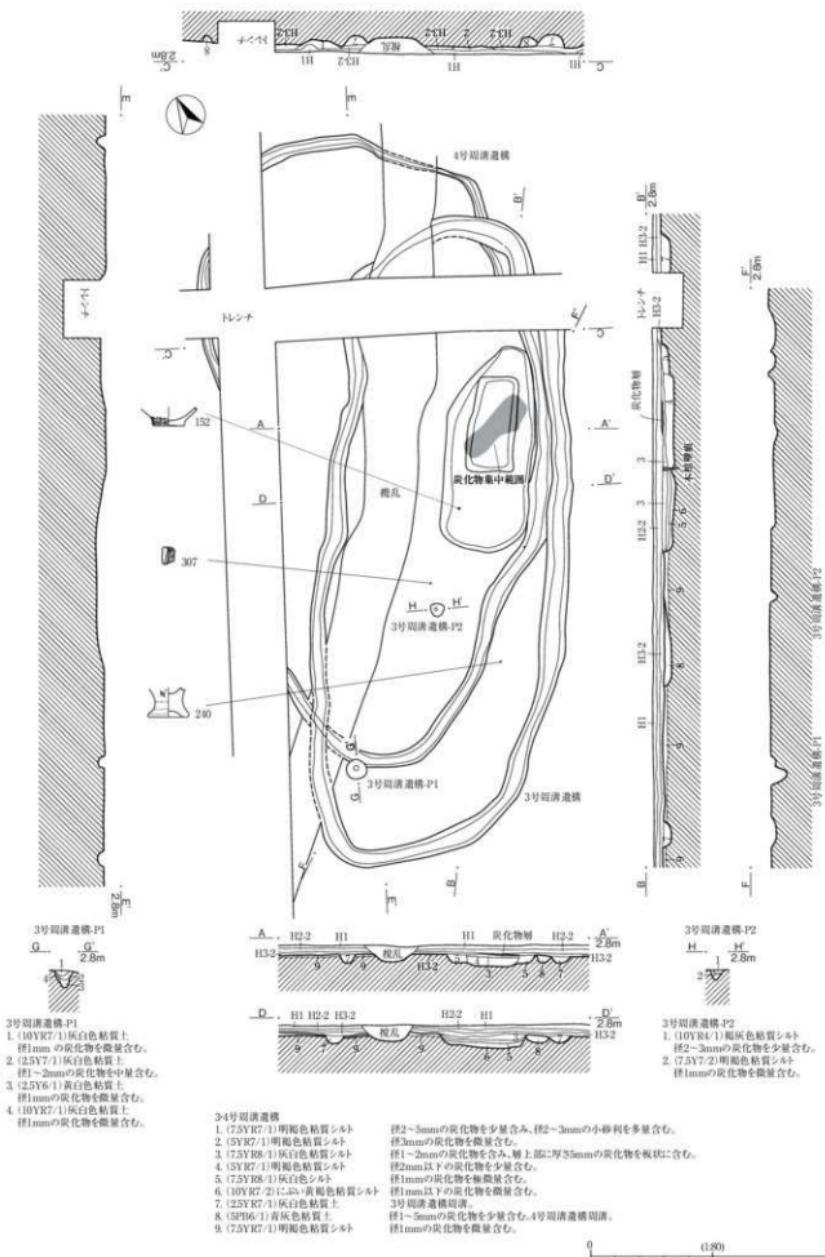


1・2号周溝遺構

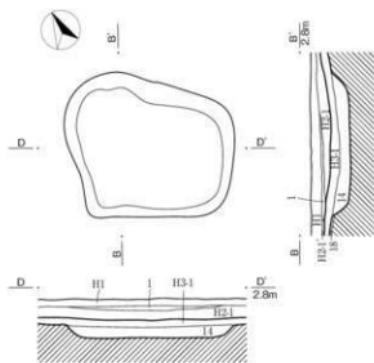


3-4号周溝造構

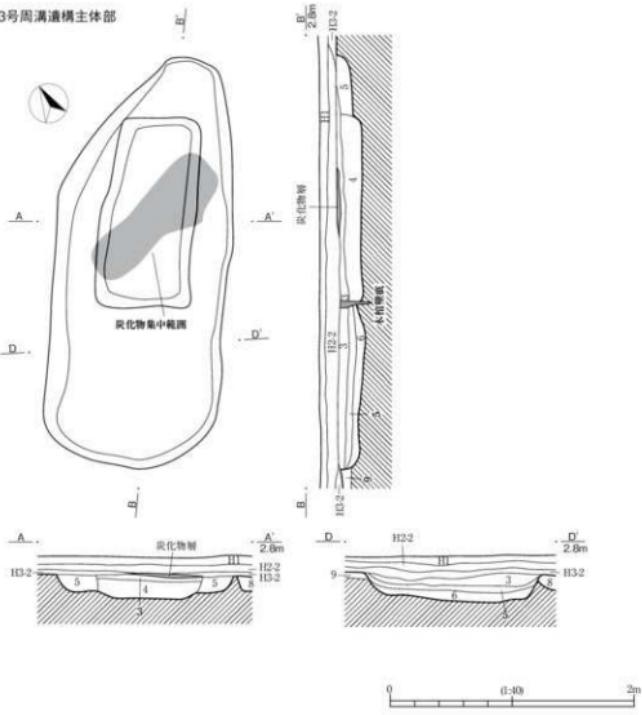
3-4号周溝造構



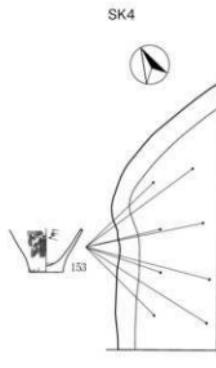
2号周溝造構内1号土坑



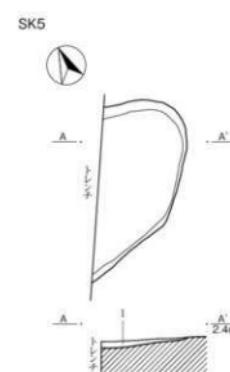
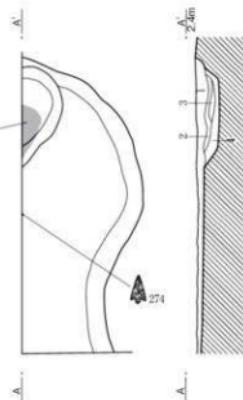
3号周溝造構主体部



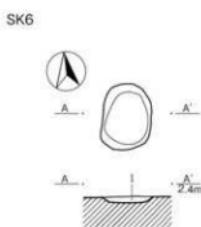
0 (1=10) 2m



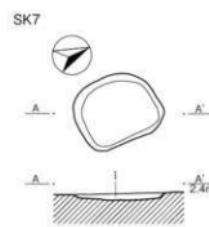
- SK4
 1. (2.5Y4/1) 黄灰色粘質土
 2. (2.5Y4/2) 順灰黄色粘質土
 3. (2.5Y3/2) 黑褐色粘質土
 4. (2.5Y4/1) 黄灰色粘質土
 5. 10~20mmの炭化物を少量含む。
 6. 1~10mmの炭化物を少量含む。
 7. 20~30mmの小礫を少額含む。
 8. 5~10mmの炭化物を少額含み。
 9. 5~5mmの(2.5Y4/4)オリーブ褐色堆土を多量含む。
 10. 1~2mmの炭化物を極少額含む。



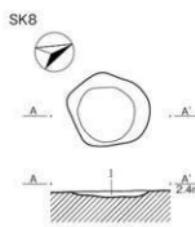
- SK5
 1. (2.5Y4/1) 黄灰色粘質土
 2. 10~20mmの炭化物を少量含む。



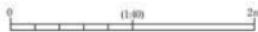
- SK6
 1. (2.5Y4/1) 黄灰色粘質土
 2. 10~20mmの炭化物を少量含む。

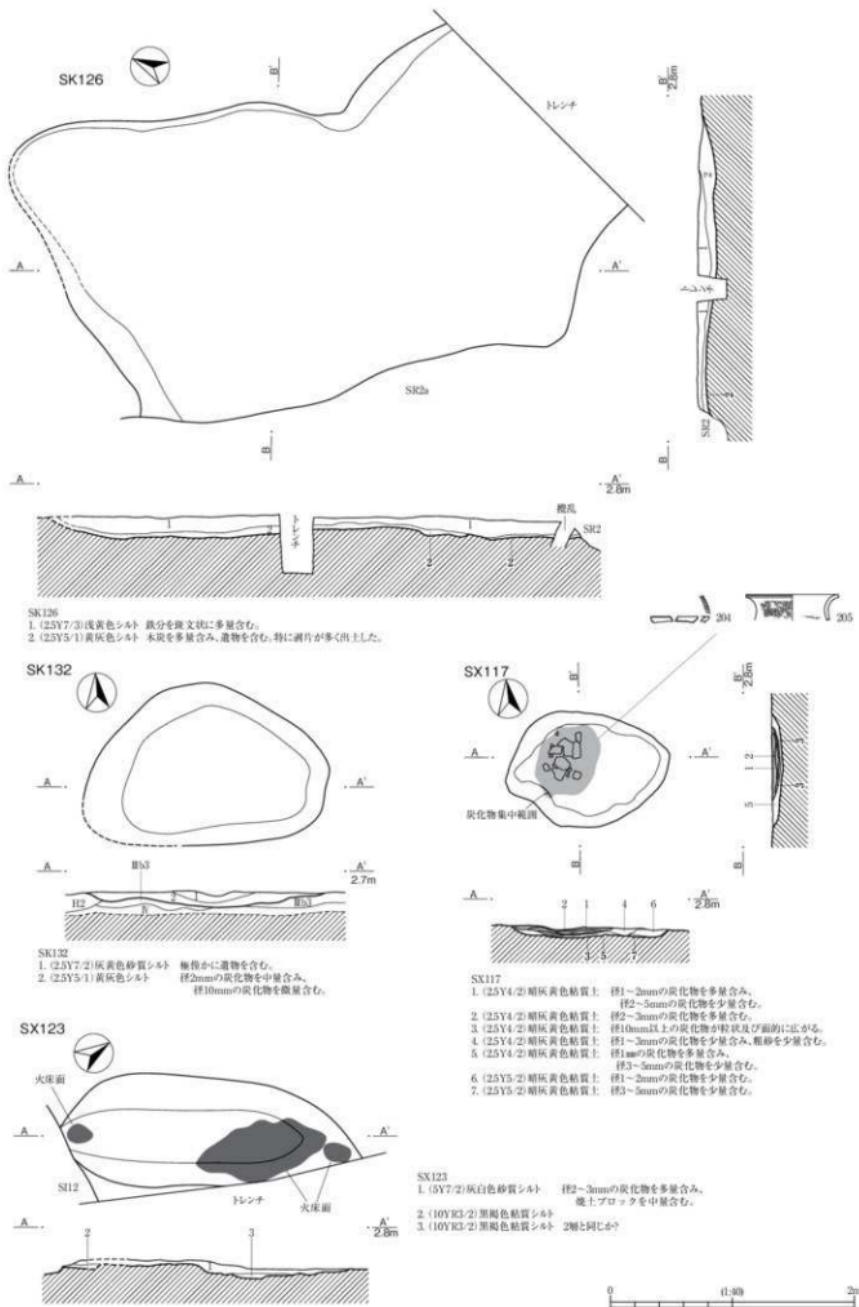


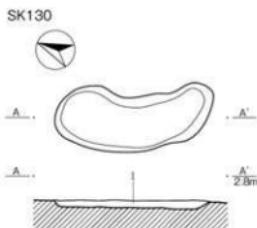
- SK7
 1. (2.5Y4/1) 黄灰色粘質土
 2. 10~20mmの炭化物を少量含む。



- SK8
 1. (2.5Y4/1) 黄灰色粘質土
 2. 10~20mmの炭化物を少量含む。



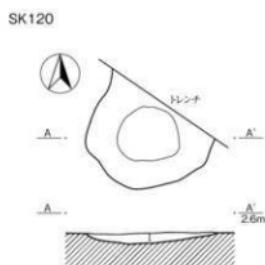




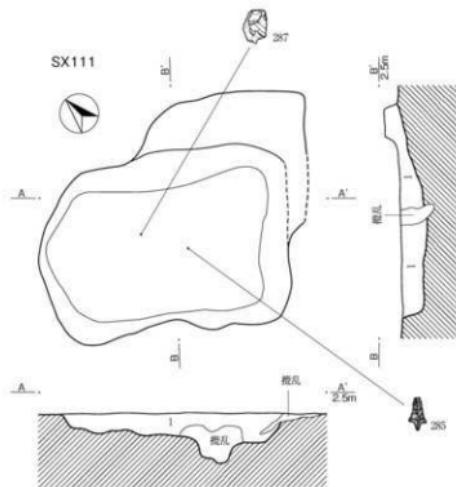
1. (10YR5/1) 褐色灰色シルト 粒2~10mmの炭化物を少量含む。
(2.5Y8/1) 灰白色シルトブロックを少量含む。



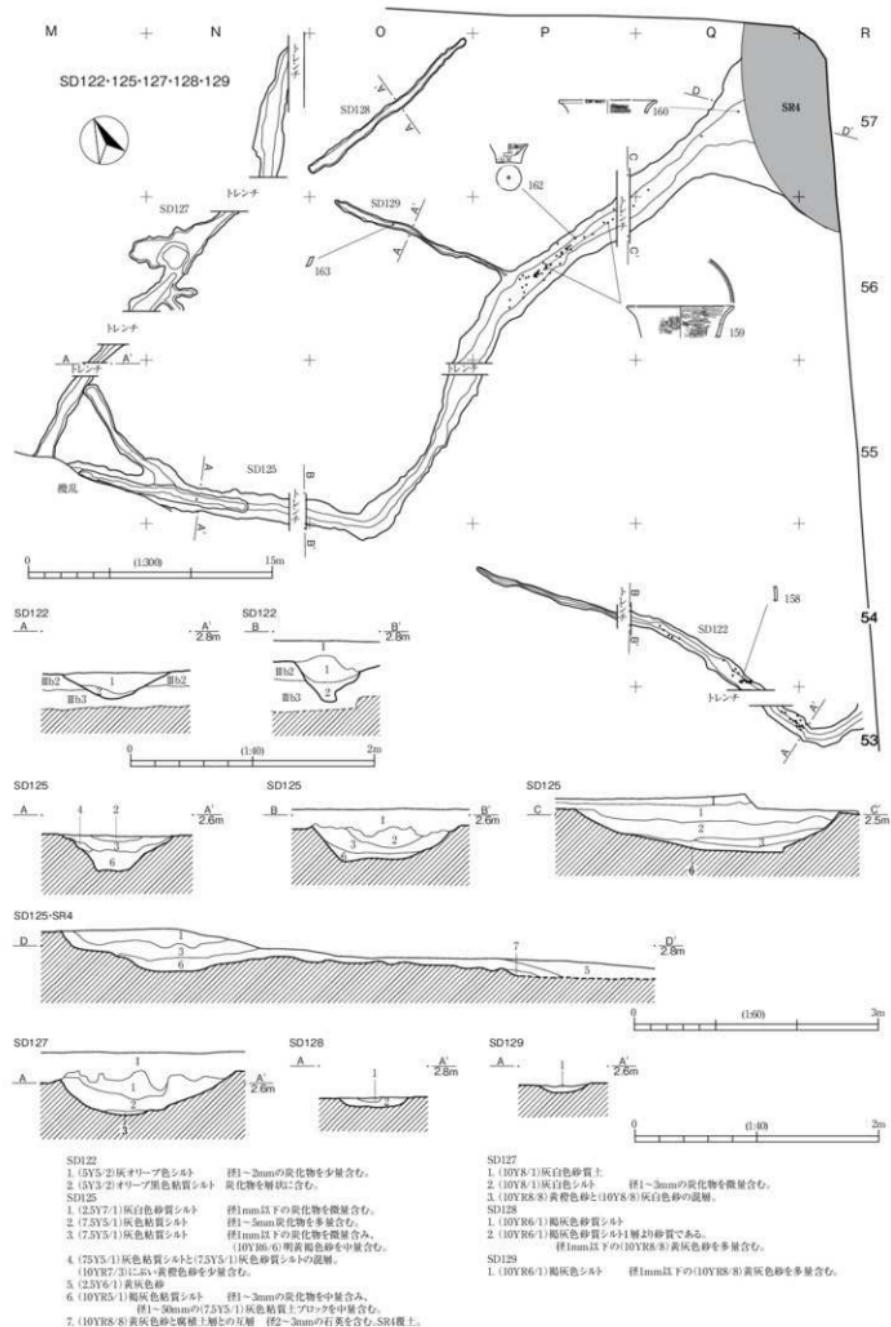
1. (N3-0) 褐灰色砂質シルト 粒1~2mmの炭化物を多量含む。
2. (N3-0) 褐灰色シルト 粒2~10mmの炭化物を多量含む。
3. (7.5Y7/2) 灰白色シルト 粒1~2mmの炭化物を少量含む。

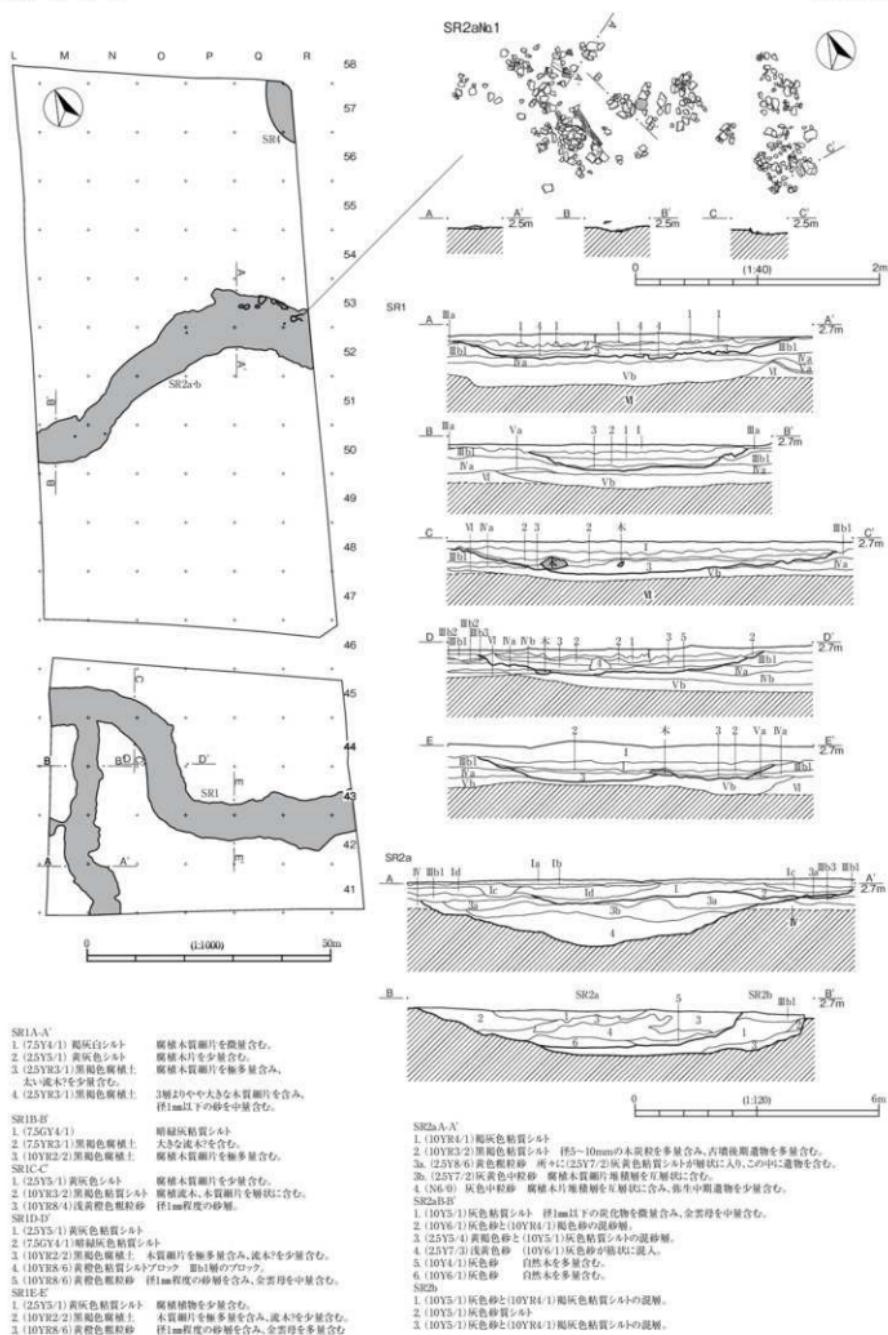


1. (10YR5/1) 褐灰色砂質シルト 粒1mmの炭化物を微量含む。

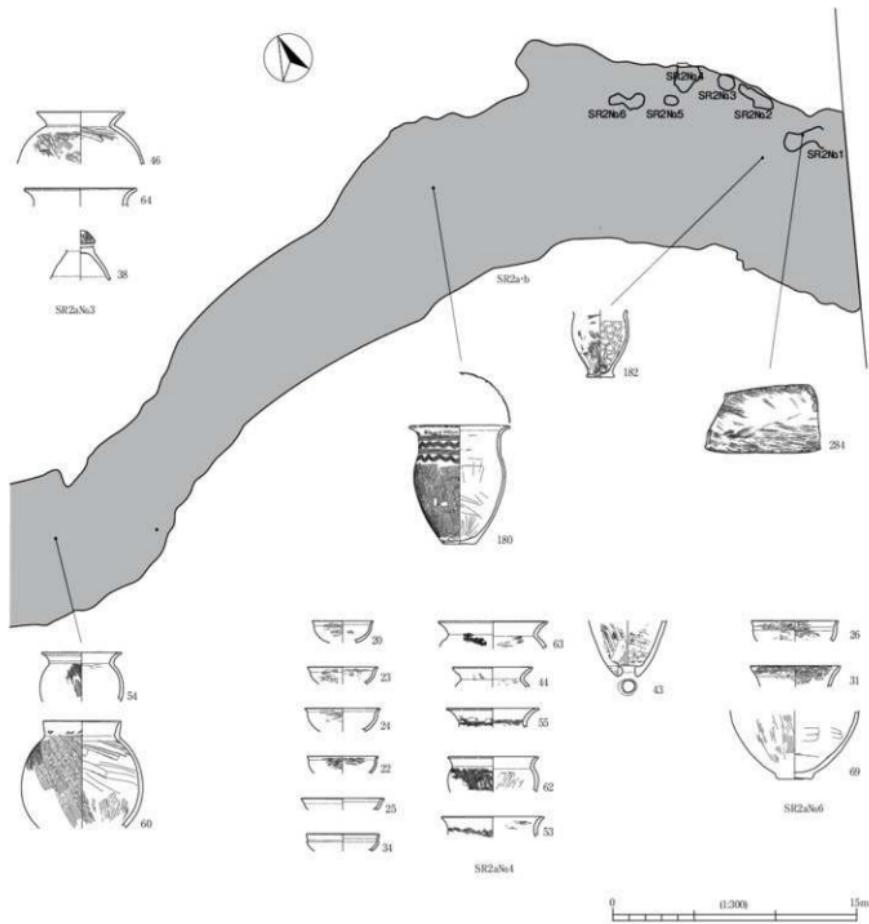
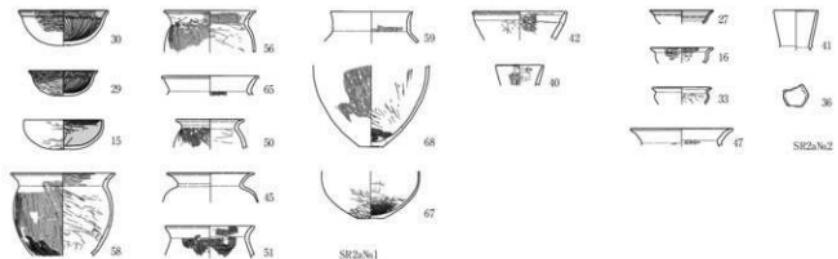


1. (7.5Y6/1) 灰白色粘質シルト 粒1~2mmの炭化物を少量含む。

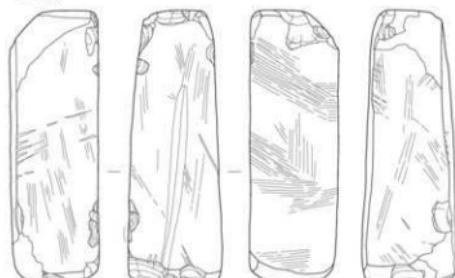




SR2遺物接合図



SI6(1)

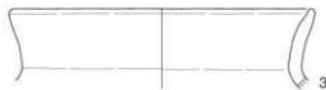


1

SB107-P3(2)



SK1(3・4)

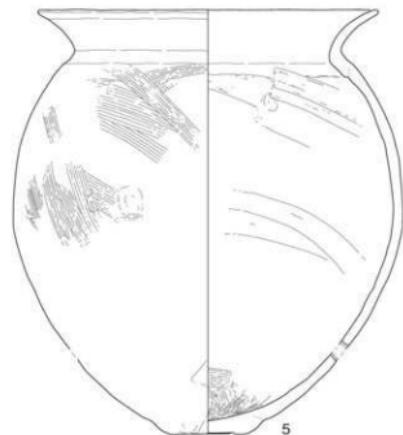


3

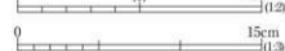


4

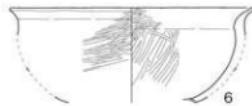
SK2(5)



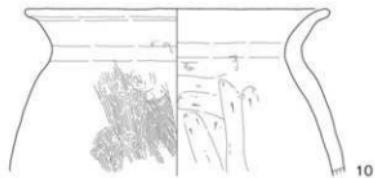
5



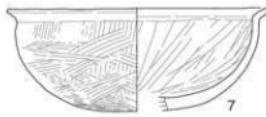
SK116(6~12)



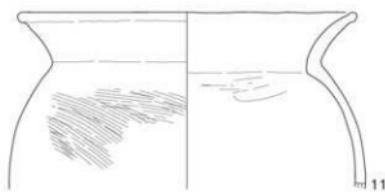
6



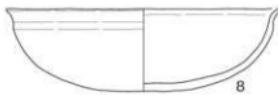
10



7



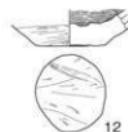
11



8



9

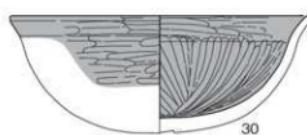
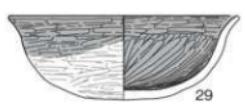
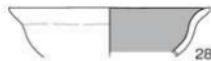
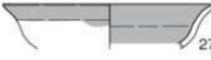
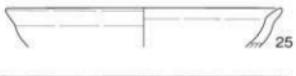
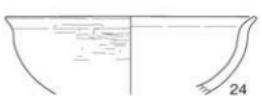
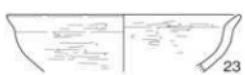
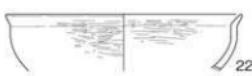
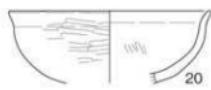
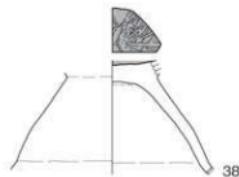
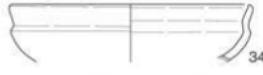
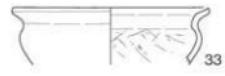
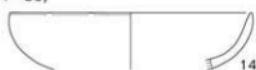


12

SR1(13)

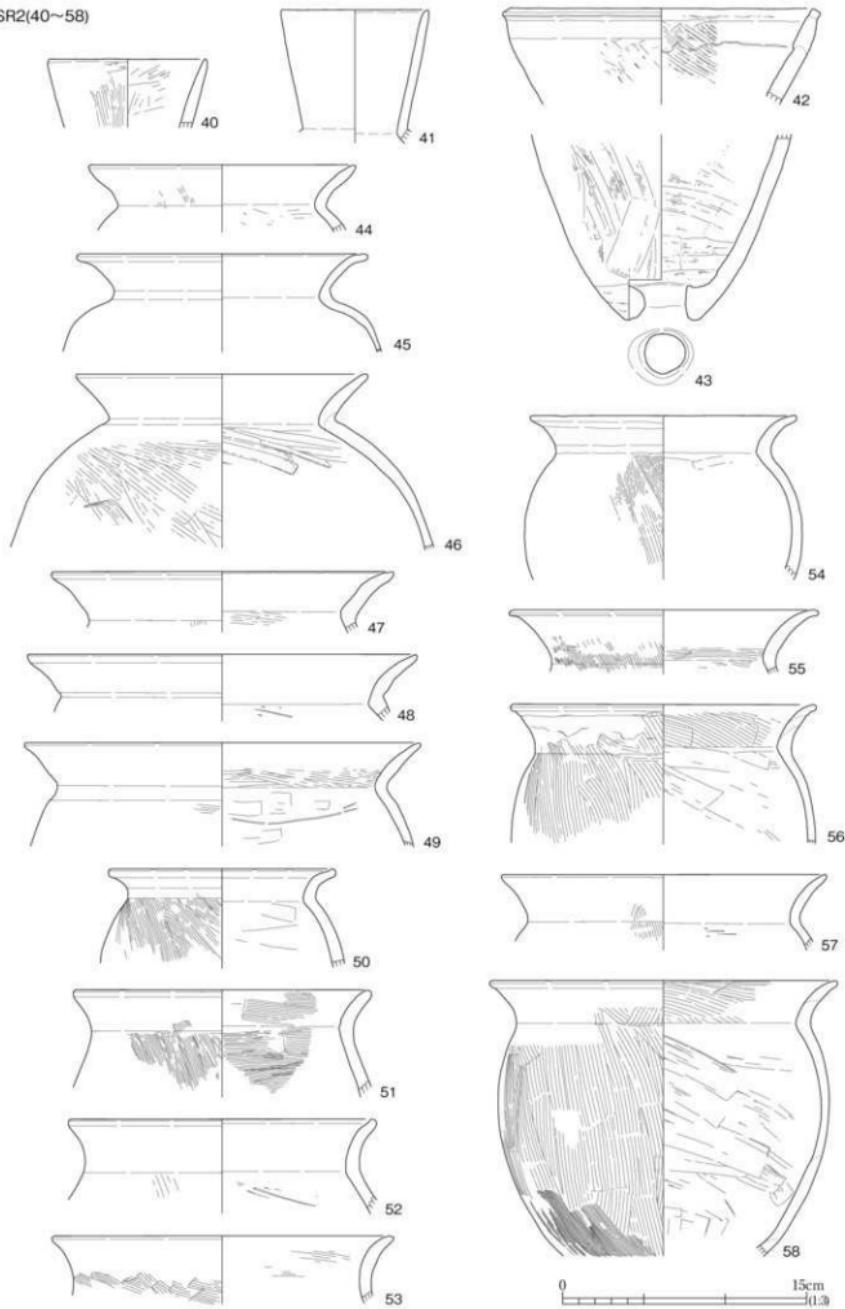


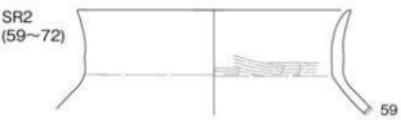
SR2(14~39)



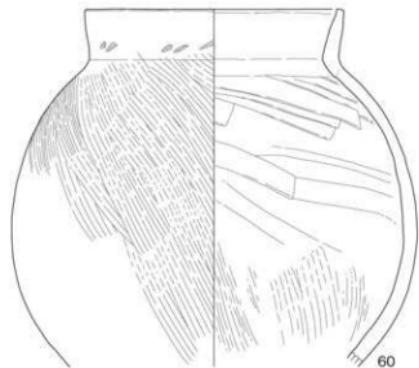
0 15cm
— (1.0)

SR2(40~58)



SR2
(59~72)

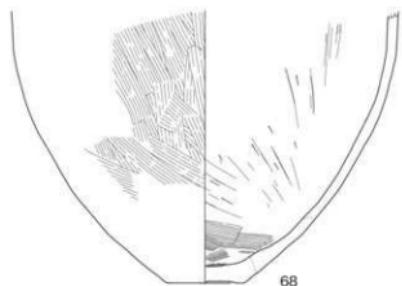
59



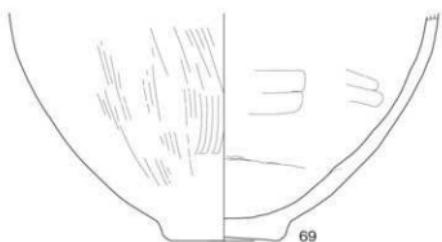
60



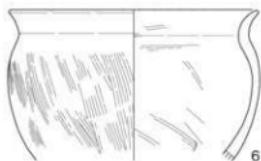
67



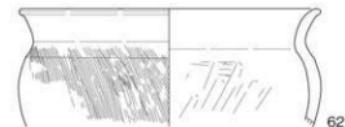
68



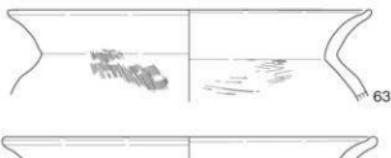
69



61



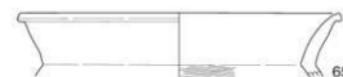
62



63



64



65



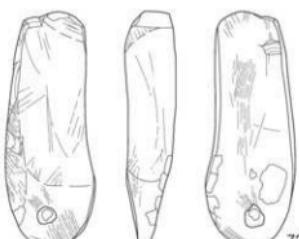
66



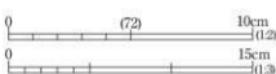
70

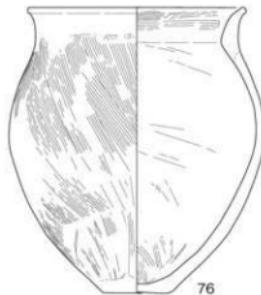
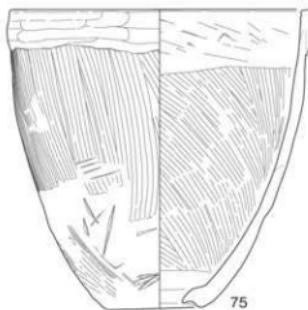
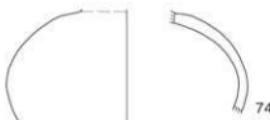


71

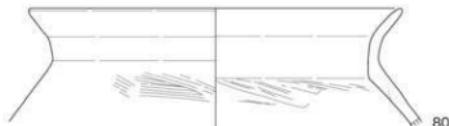
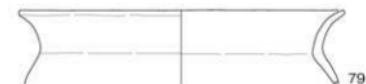
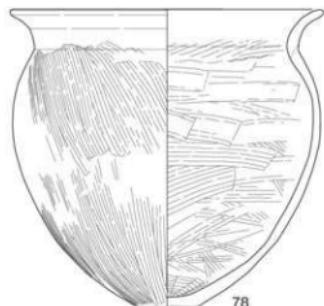
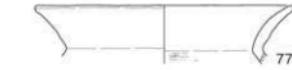
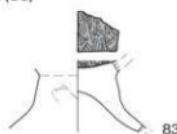


72

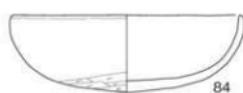




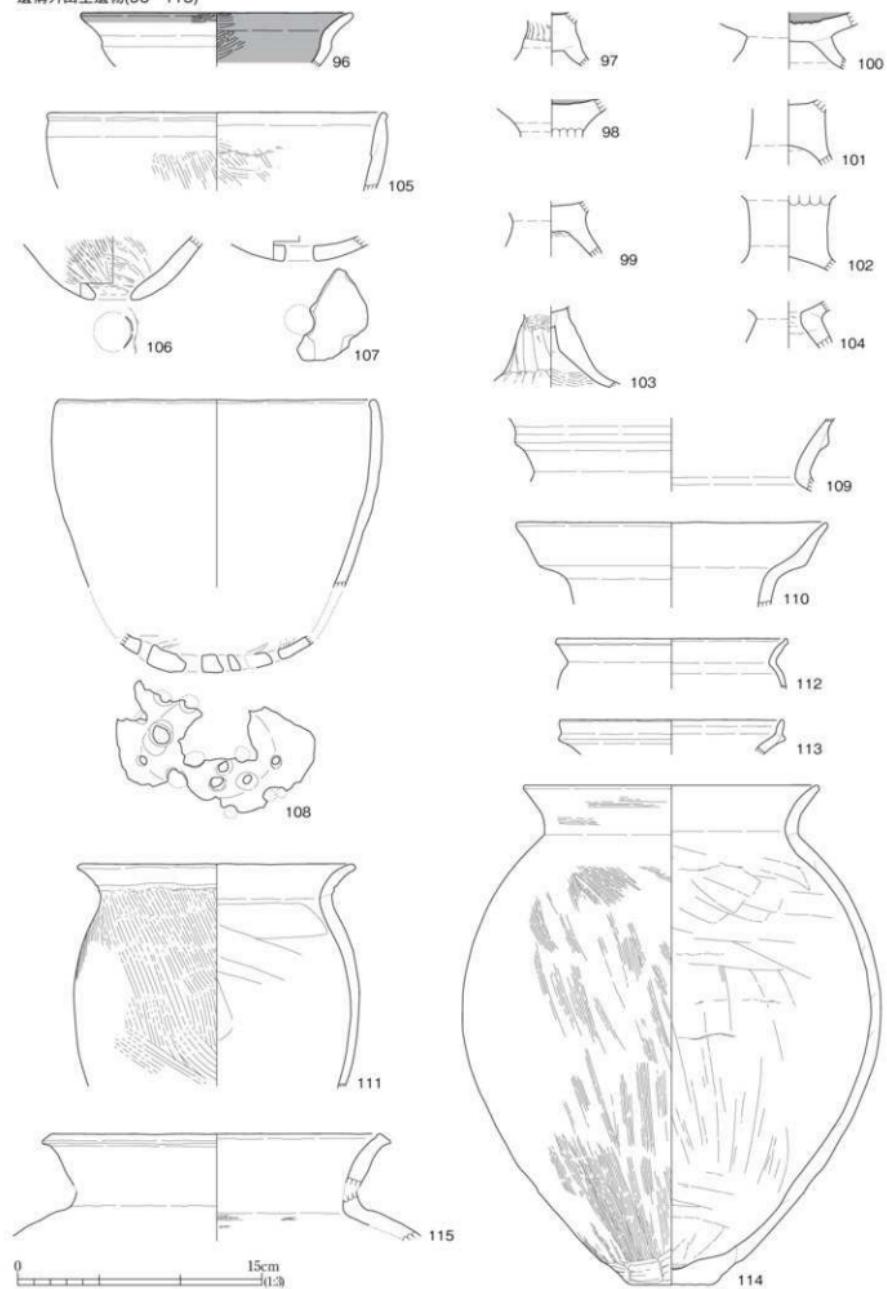
P101(83)



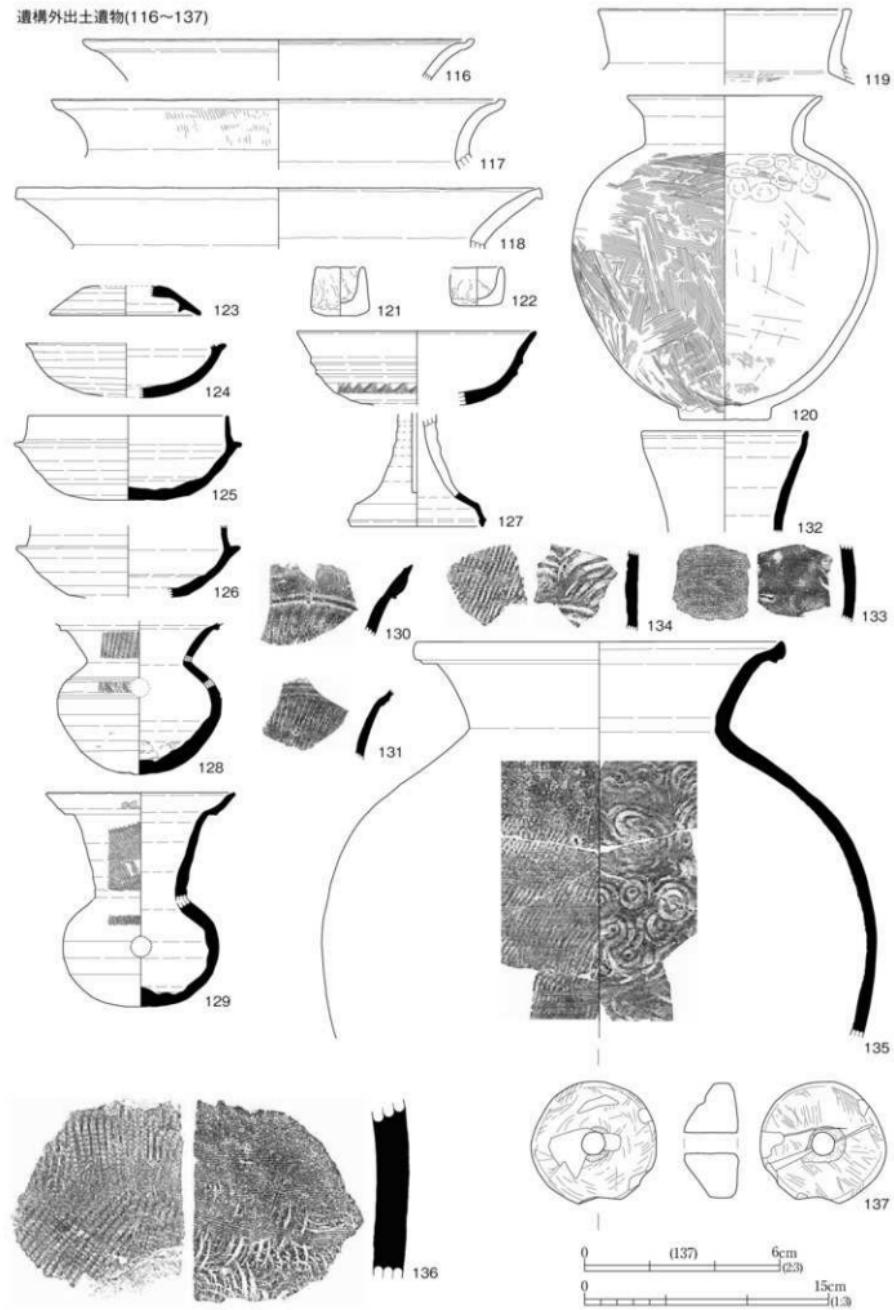
遺構外出土遺物(84~95)



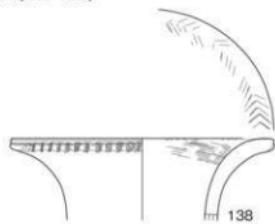
遺構外出土遺物(96~115)



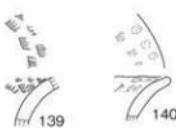
遺構外出土遺物(116~137)



SI1(138・139)



SI3(140)



SI9 爐(141)



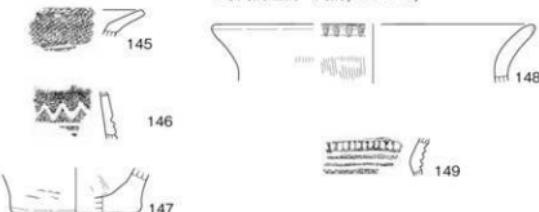
SI10 周溝(142)



SI8(143～147)



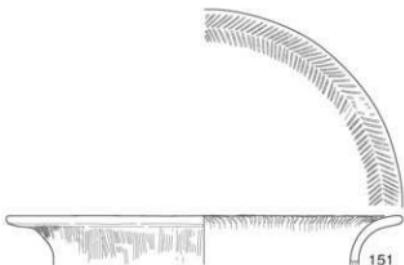
1号周溝遺構 周溝(148・149)



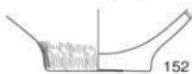
2号周溝遺構 周溝(150)



H2 2号周溝遺構 1号土坑(151)



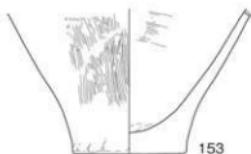
3号周溝遺構 1号土坑(152)



SK126(154・155)



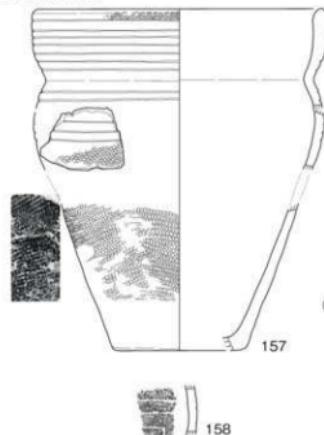
SK4(153)



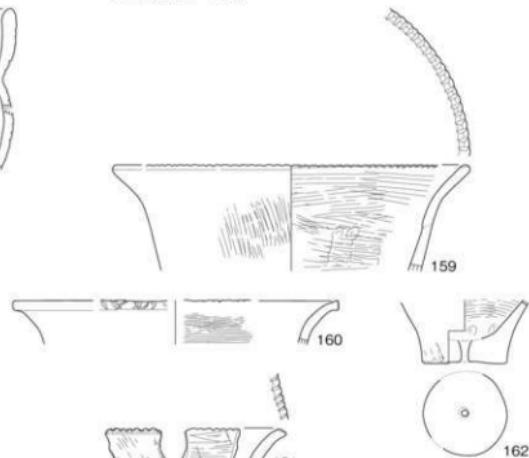
SK134(156)



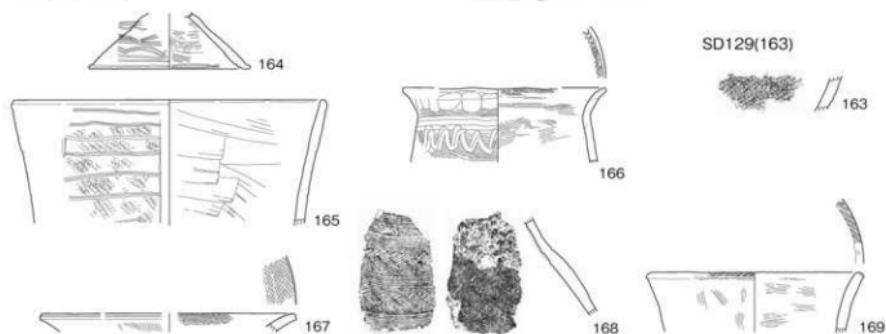
SD122(157・158)



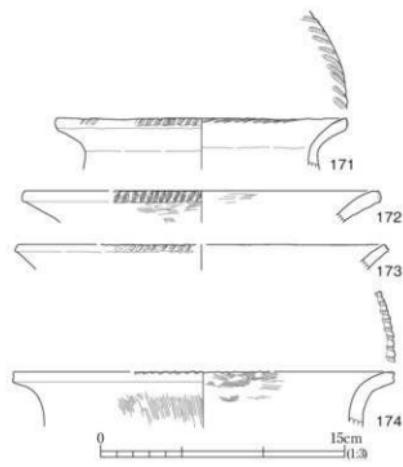
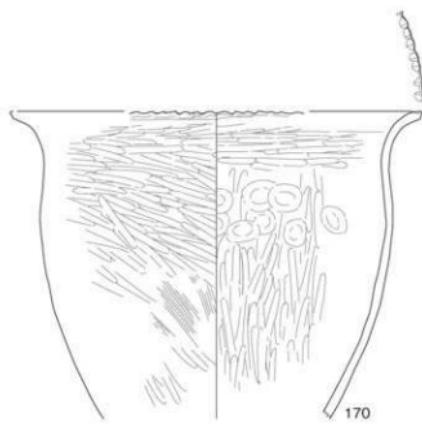
SD125(159~162)



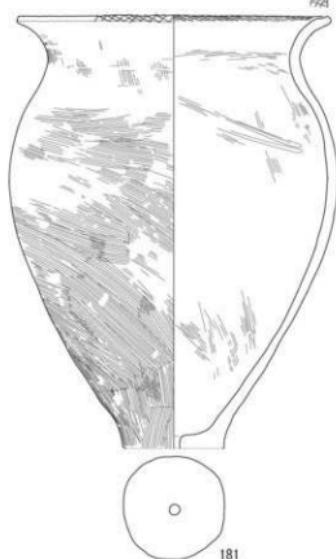
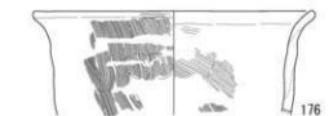
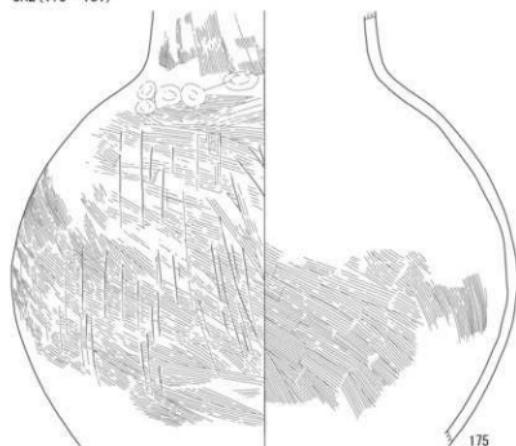
SR2(164~174)



SD129(163)

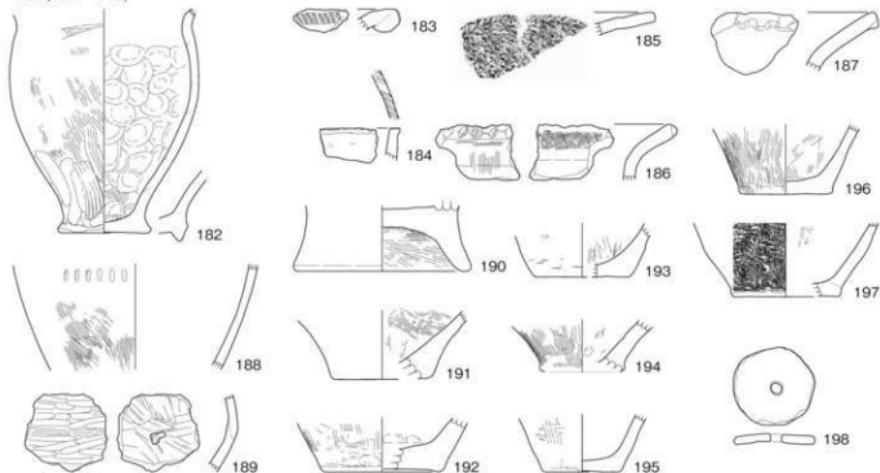


SR2(175~181)

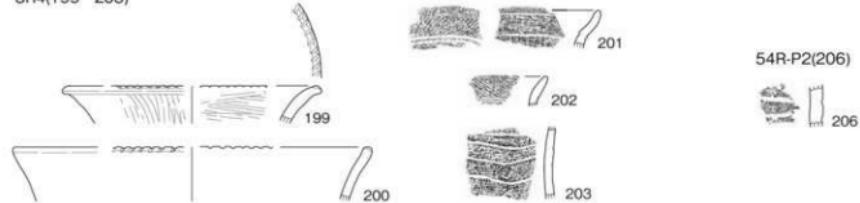


0 15cm (1:3)

SR2(182~198)



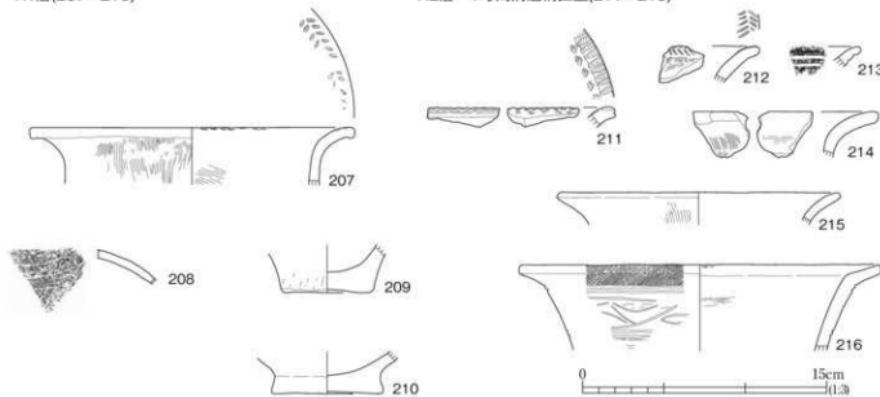
SR4(199~203)



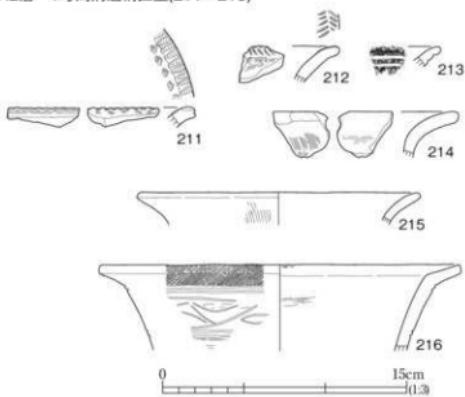
SX117 炉(204~205)



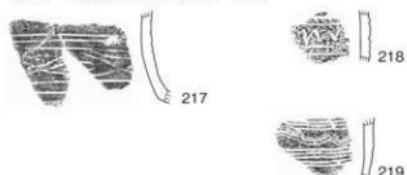
H1層(207~210)



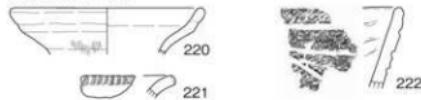
H2層 1号周溝遺構直上(211~216)



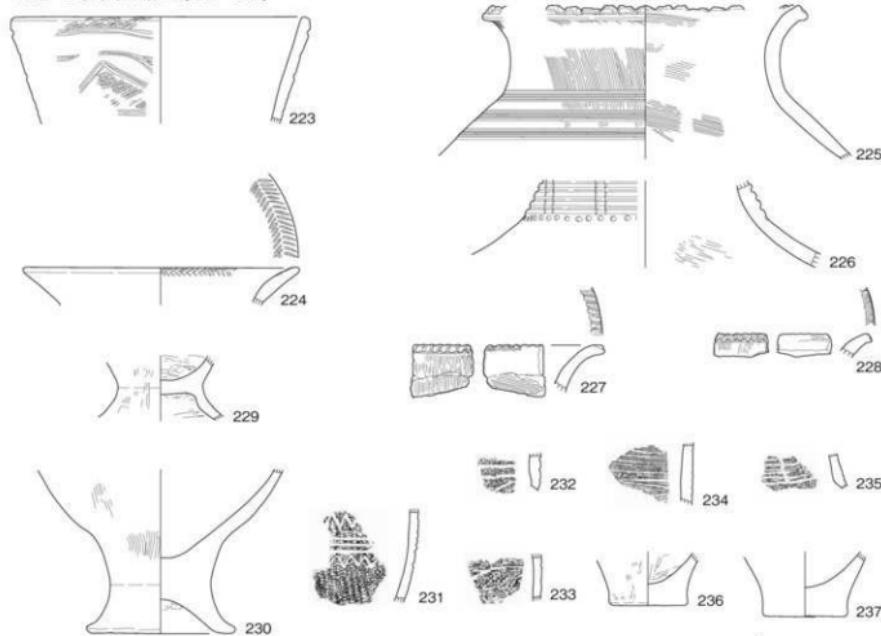
H2層 1号周溝造構直上(217~219)



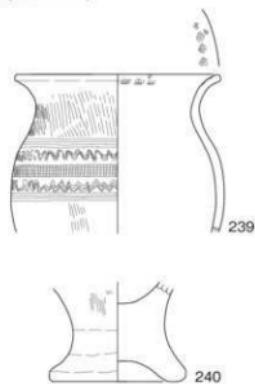
H2層(220~222)



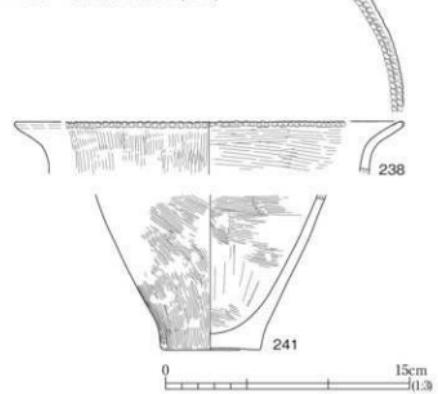
H3層 2号周溝造構直上(223~237)



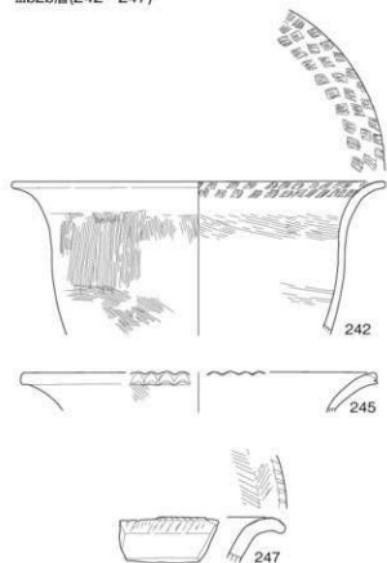
H3層(239~241)



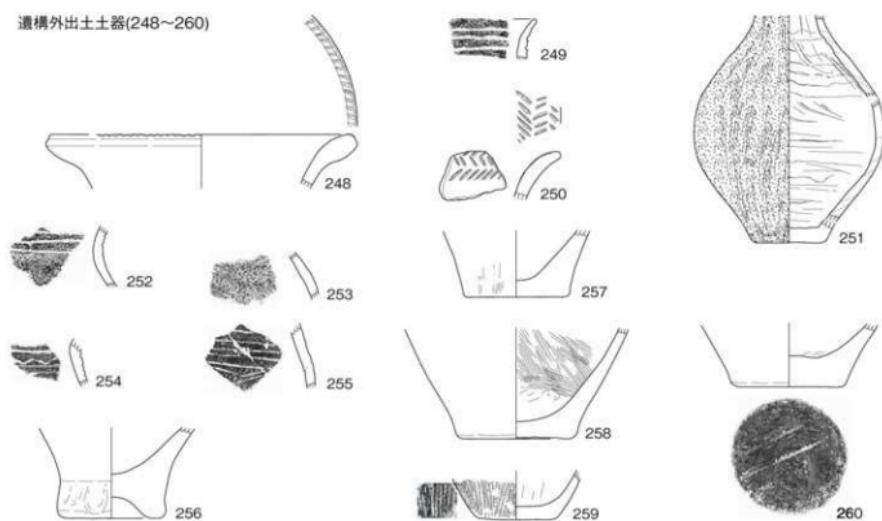
H3層 4号周溝造構直上(238)



IIIb2b層(242~247)

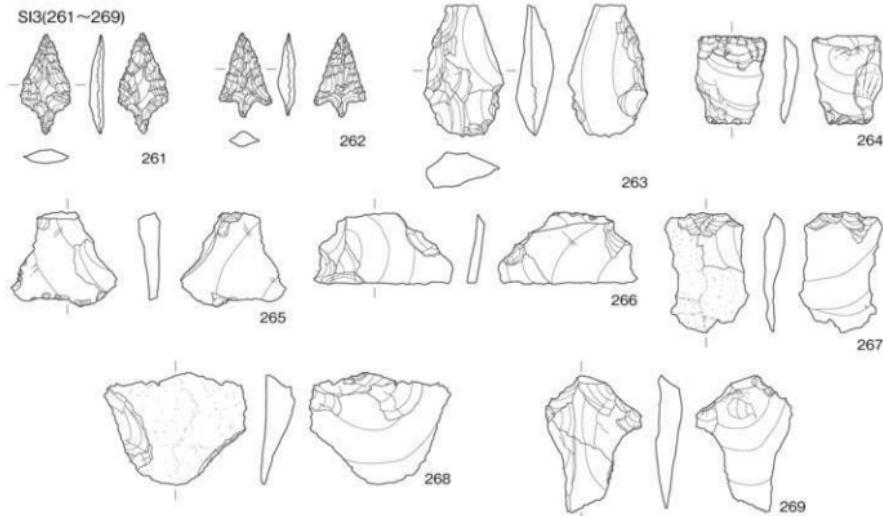


遺構外出土土器(248~260)

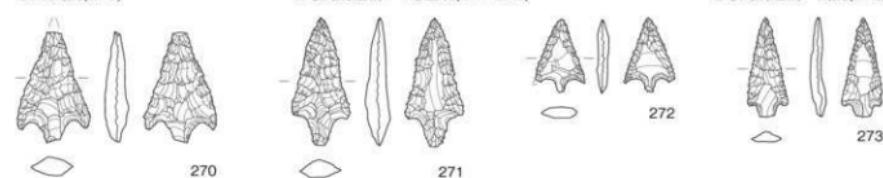


0 15cm (1.3)

SI3(261~269)



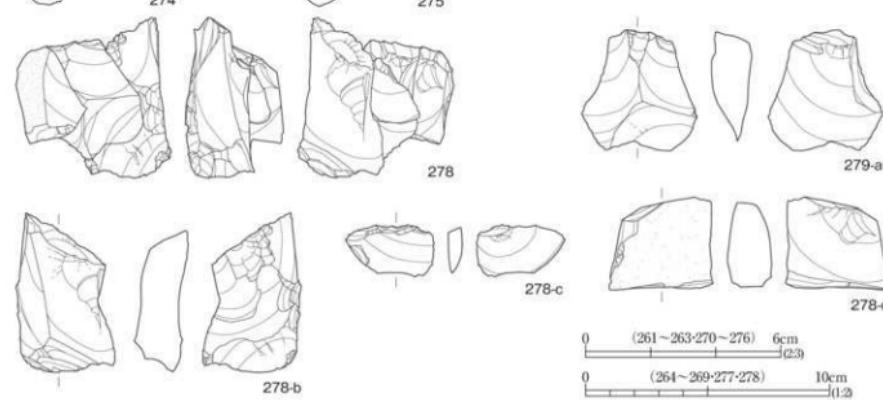
SI12周溝(270)



SK4(274)



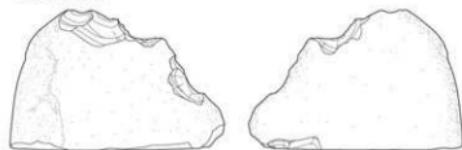
SK126(275~278)



0 (261~263-270~276) 6cm (2.3)

0 (264~269-277-278) 10cm (3.9)

SK126(279)



279

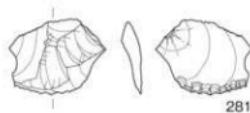
SD122(280)



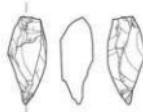
280



SR2(281~284)



281



282

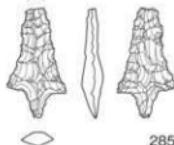


283

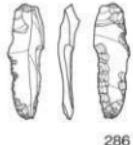


284

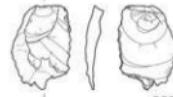
SX111(285~287)



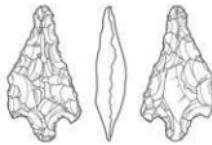
285



286



287



288

0

(280~285~288)

6cm
(2.3)

0

(279~281)~283~286~287)

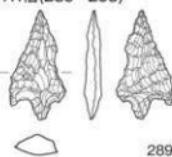
10cm
(1.2)

0

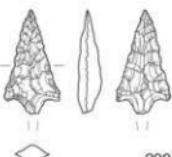
(284)

15cm
(1.3)

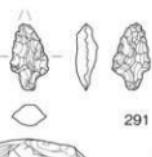
H1層(289~295)



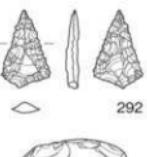
289



290



291



292



293

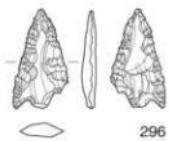


294

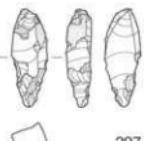


295

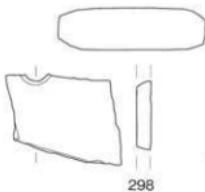
H2層 1号周溝造構直上(296~299)



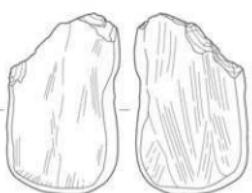
296



297

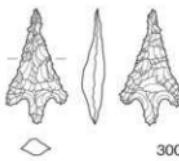


298

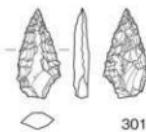


299

H3層 2号周溝造構直上(300~305)



300



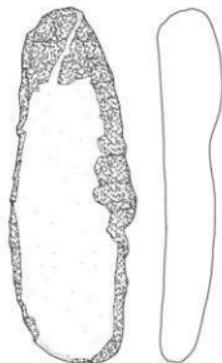
301



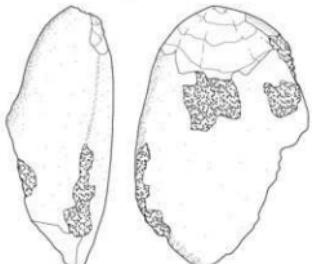
302



303



304



305

0

(303)

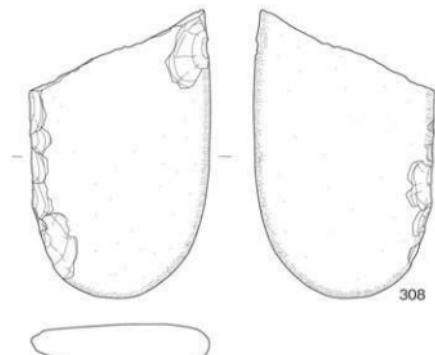
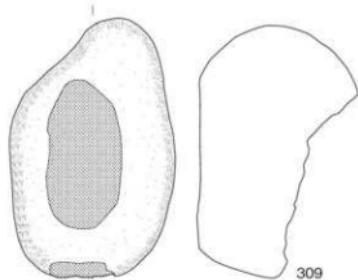
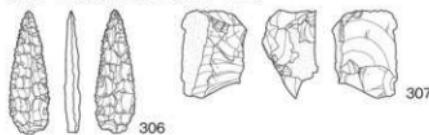
5cm
(1:1)0 289~292・296~298・300~305cm
(2:3)

0

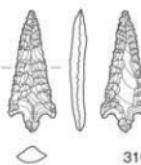
(293~295・299~304・305)

10cm
(1:2)

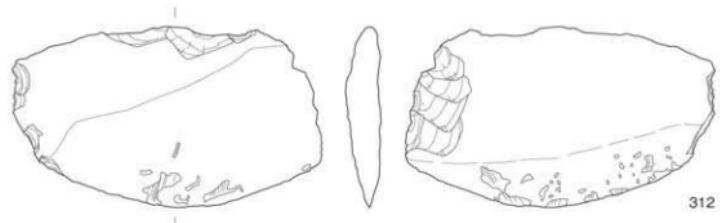
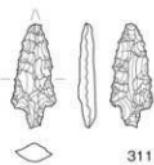
H3層 3号周溝遺構直上(306~309)



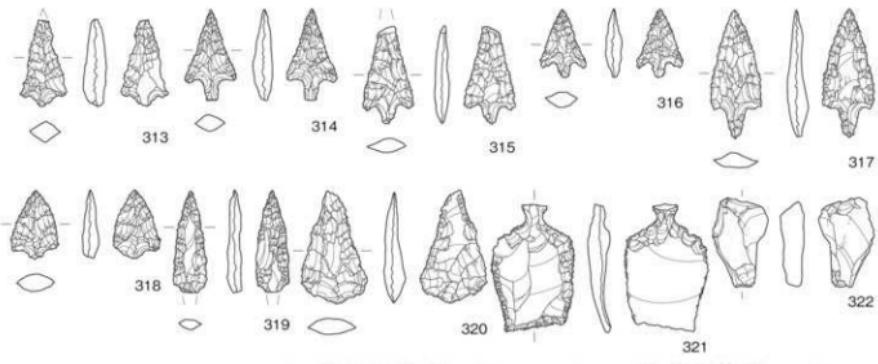
H3層 4号周溝遺構直上(310)



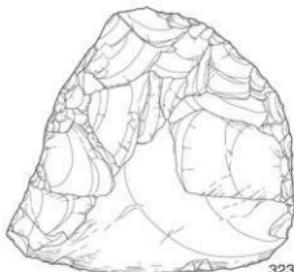
?b2b層(311~312)



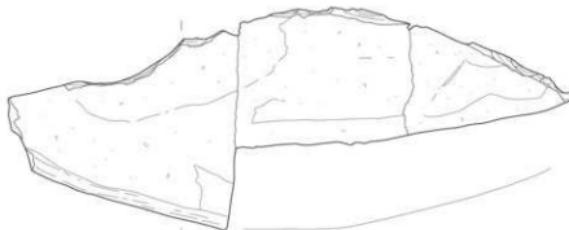
遺構外出土石器(313~322)

0 (306~310・311・313~320) 6cm
(2.3)0 (307~309・312・321・322) 10cm
(3.2)

遺構外出土石器(323~330) |



323



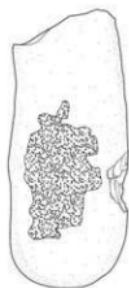
324



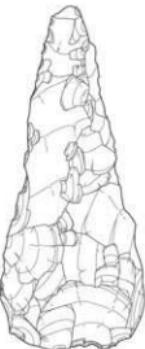
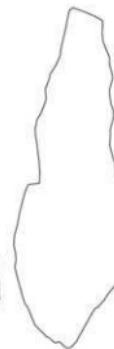
325

327

328



329



0

(324)

6cm
(2.3)

0

(323-325~330)

10cm
(1.2)



331



332



333



334



335



336



337

SX104

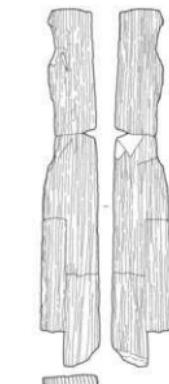


338

SR2a



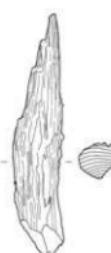
340



341



342



344

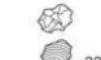


343

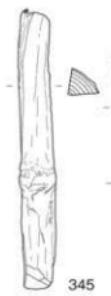


347

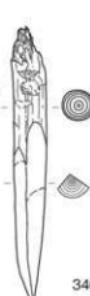
SI1-P3



339



345



346

0 40cm
(1.8)

SR2a(348)



348

遺構外出土遺物(349~358)



349



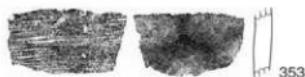
350



351



353



353



0

15cm
(1.3)

0

6cm
(2.3)

354



355



356



357



358



古墳時代遺構全景（北が上）



北区弥生時代造構群全景（北が上）



1～4号周溝造構 完掘（北から）



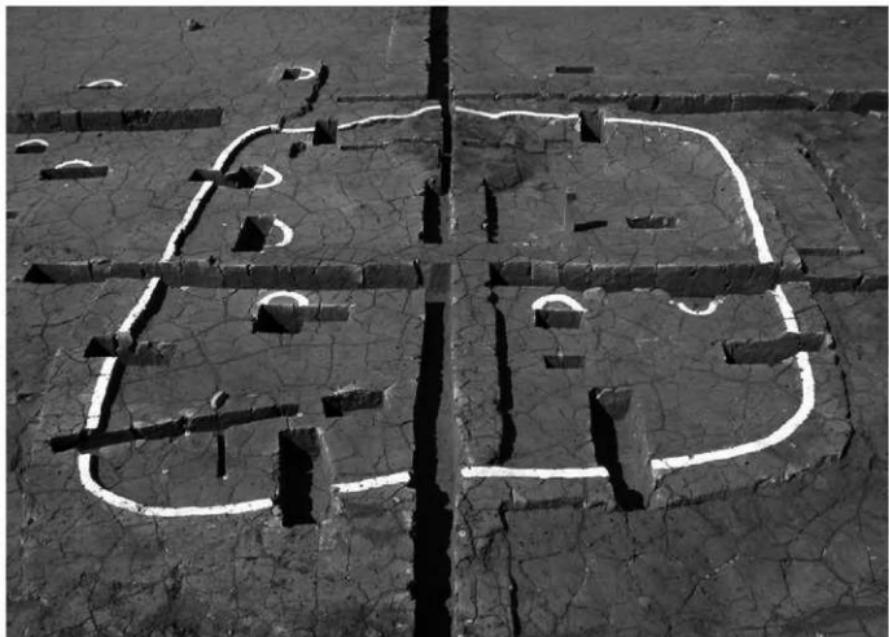
SI10～12 接出状況（北から）



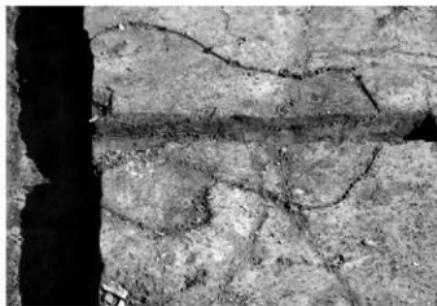
古墳時代土師器・須恵器集合写真



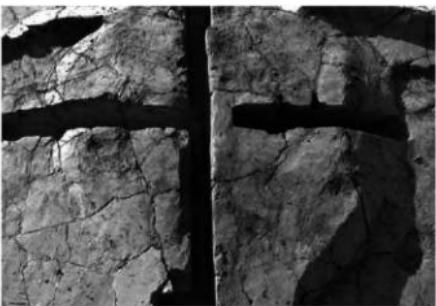
弥生時代土器集合写真



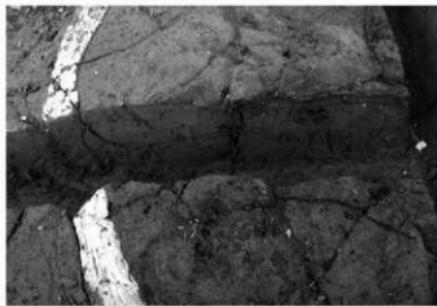
SI 6 完掘（東から）



SI 6 炉路東西セクション（南から）



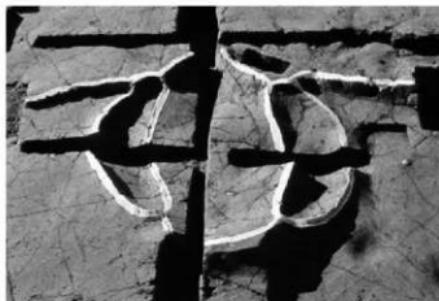
SI 6 カマド袖断割り（東から）



SI 6 カマド袖断割りアップ南側（東から）



SI 6 カマド袖断割りアップ北側（東から）



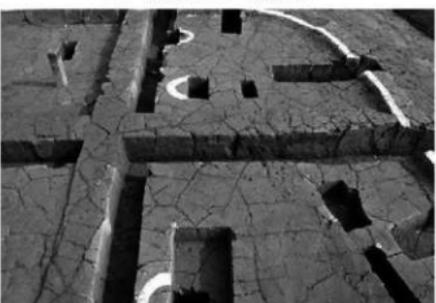
SI6 カマド掘方袖完掘 (東から)



SI6 南北セクション (南東から)



SI6 東西セクション西半部 (南から)



SI6 東西セクション東半部 (南から)



SI6 P1セクション (南から)



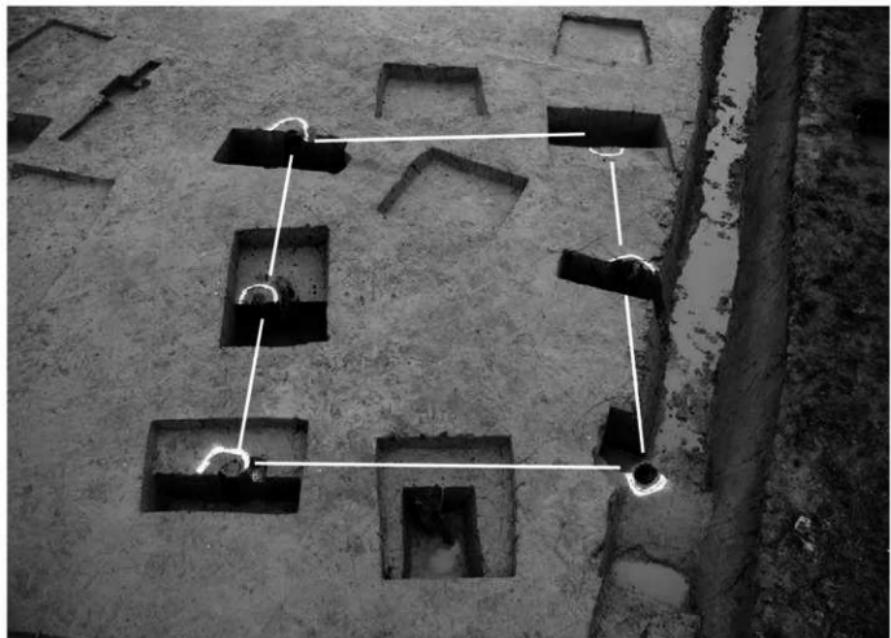
SI6 P2セクション (南から)



SI6 P3セクション (東から)



SI6 P4セクション (東から)



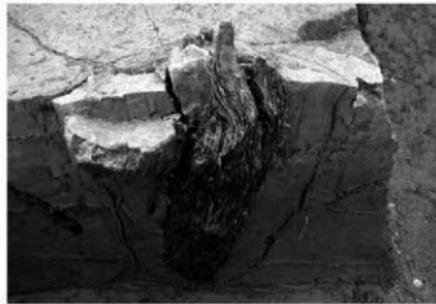
SB107 柱根検出状況（南から）



SB107 P1セクション（南から）



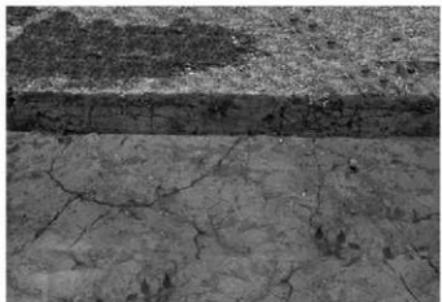
SB107 P3セクション（南から）



SB107 P5セクション（南から）



SB107 P6セクション（北から）



SK 1 セクション (東から)



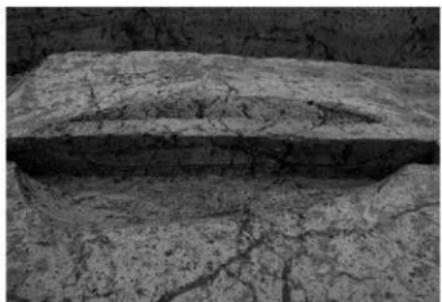
SK 1 完掘 (東から)



SK 2 東西セクション (南から)



SK 2 遺物出土状況 (東から)



SK 3 セクション (南から)



SK 2・3 完掘 (北西から)



SK102 セクション (南から)



SK102 完掘 (南から)



SK116 南北セクション（西から）



SK116 炭化物層検出状況（北から）



SR 1 セクションA（南から）



SR 2 a セクションB（南から）



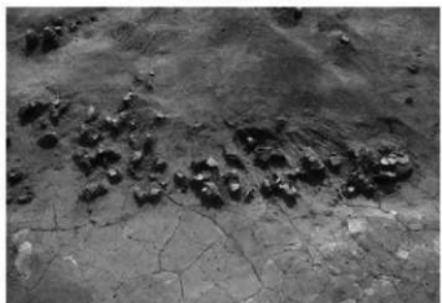
SR 2 a 古墳時代遺物出土状況（西から）



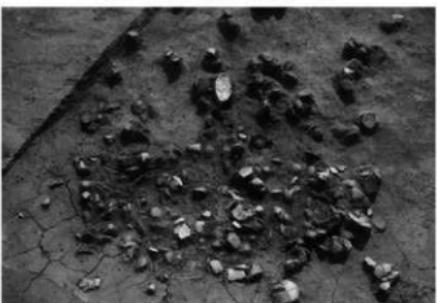
SR 2 a 遺物出土状況（北から）



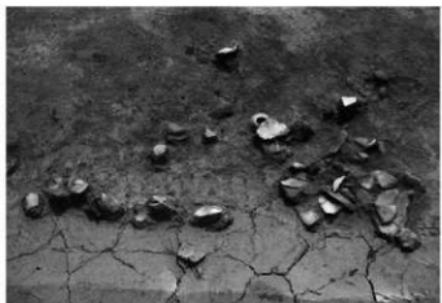
SR 2 a 遺物出土状況No.1地点（北から）



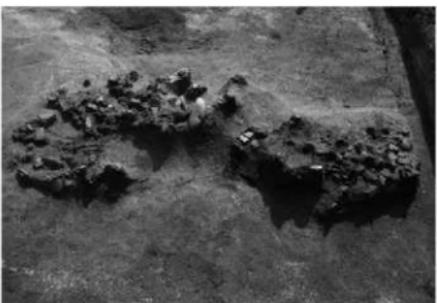
SR 2 a 遺物出土状況No.2地点（北から）



SR 2 a 遺物出土状況No.4地点東半（北から）



SR 2 a 遺物出土状況No.4地点西半（北から）



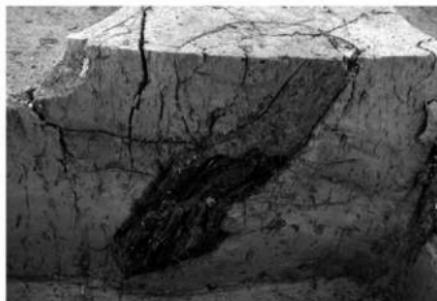
SR 2 a 遺物出土状況No.5地点（北から）



PI09 セクション（南から）



PI10 セクション（南から）



SX104 セクション（北から）



SX119 遺物出土状況（南から）



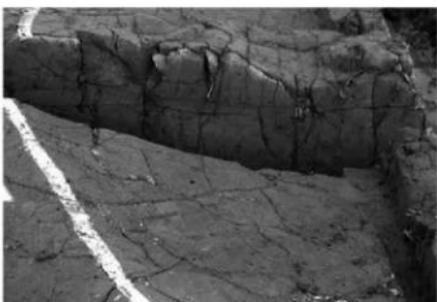
SX119 遺物出土状況（東から）



SX119 底面要出土状況（南東から）



SX121 遺物出土状況（東から）



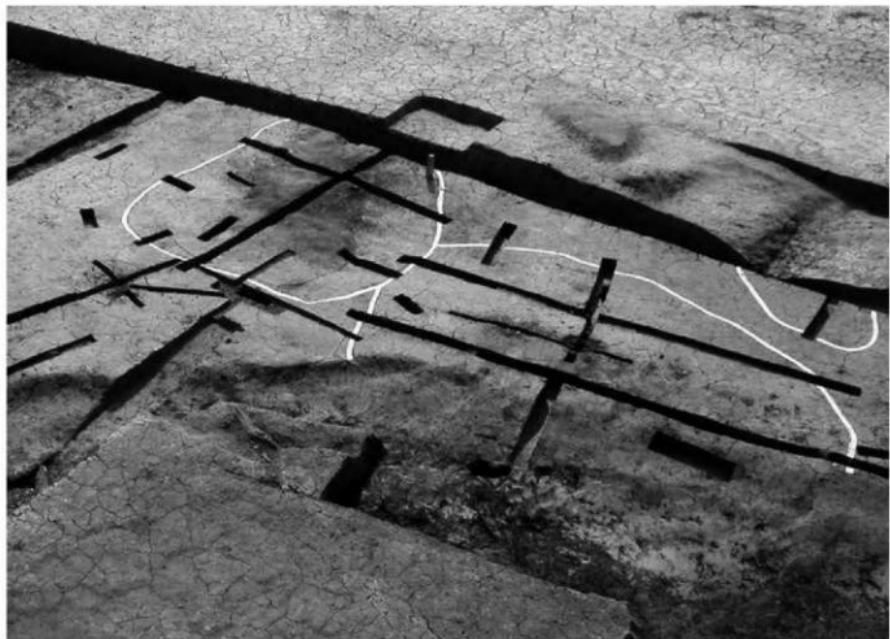
SX121 セクション（南から）



SX121 実掘（東から）



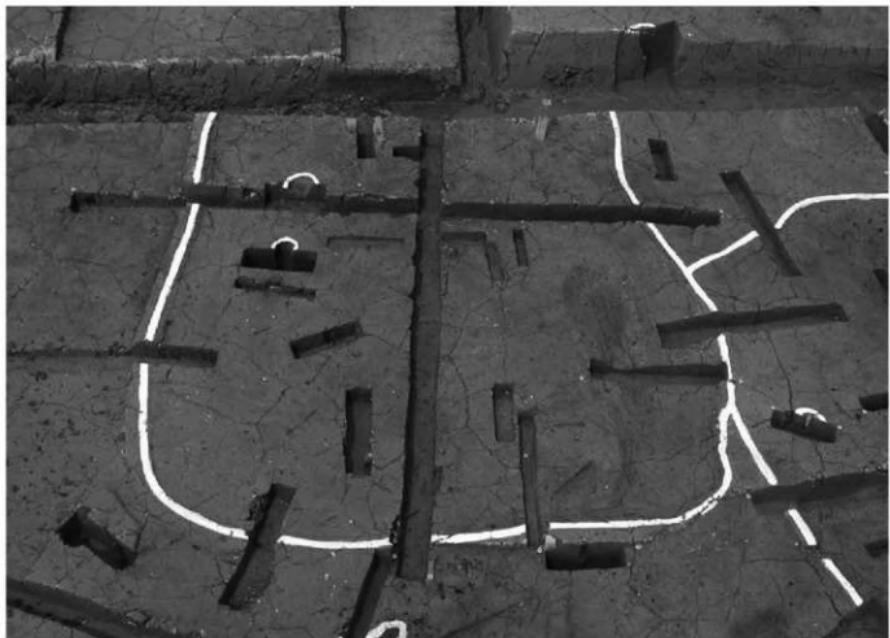
遺構断面実測作業



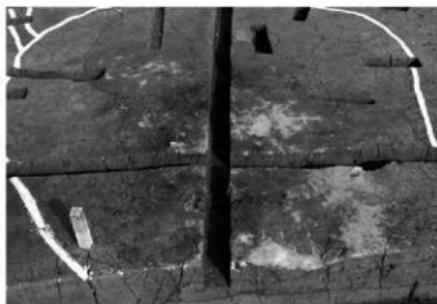
SI 1・3 掘出状況（北東から）



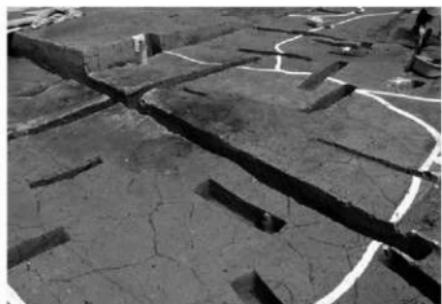
SI 1・3 完成（北東から）



SI 1 完掘（東から）



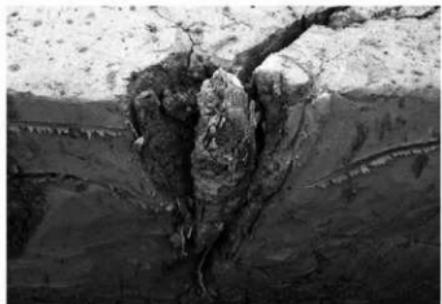
SI 1 炉跡検出状況（西から）



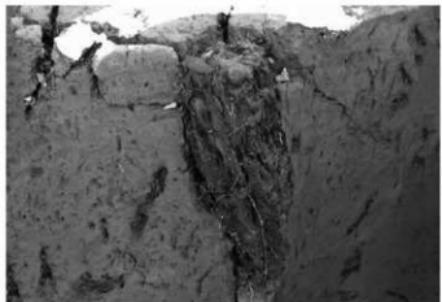
SI 1 東西セクション（南東から）



SI 1 P1セクション（東から）



SI 1 P2セクション（東から）



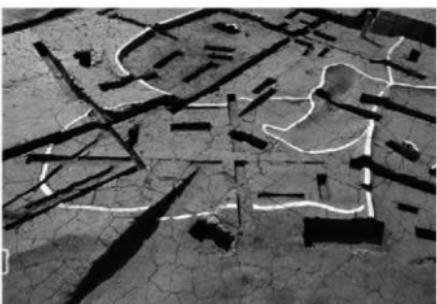
SI 1 P3セクション (東から)



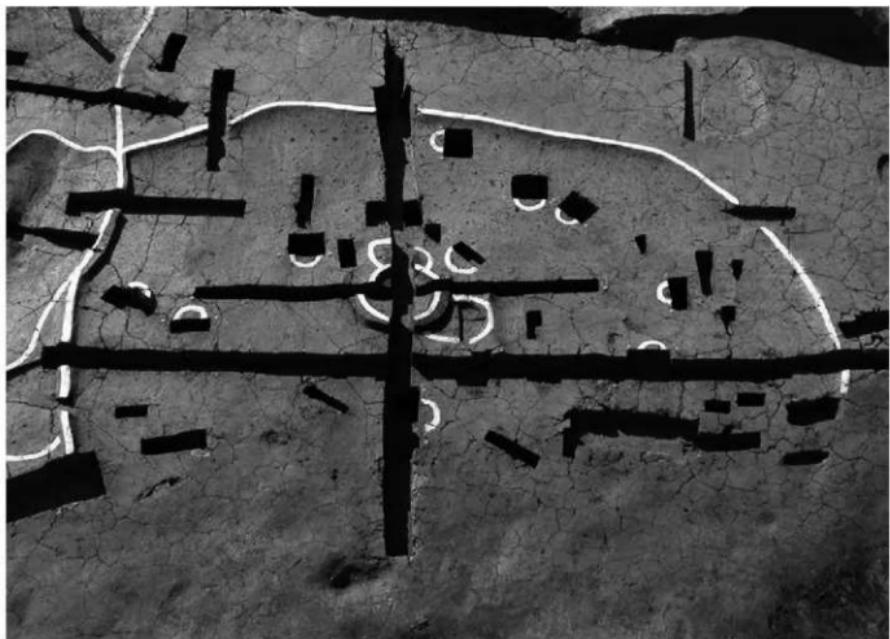
SI 1 P4セクション (東から)



SI 1 遺物出土状況 (西から)



SI 1 近辺炭化物集中部完掘 (南西から)



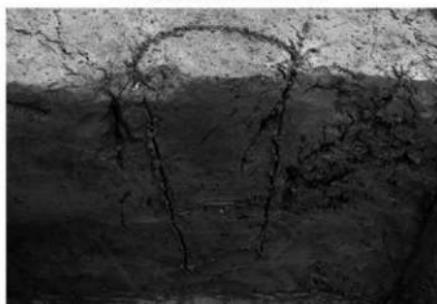
SI 3 完掘 (東から)



SI 3 炉跡検出状況アップ (西から)



SI 3 炉跡南北セクション (西から)



SI 3 P1セクション (南から)



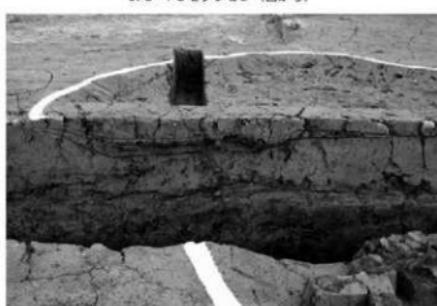
SI 3 P2セクション (北から)



SI 3 P5セクション (西から)



SI 3 PBセクション (北から)



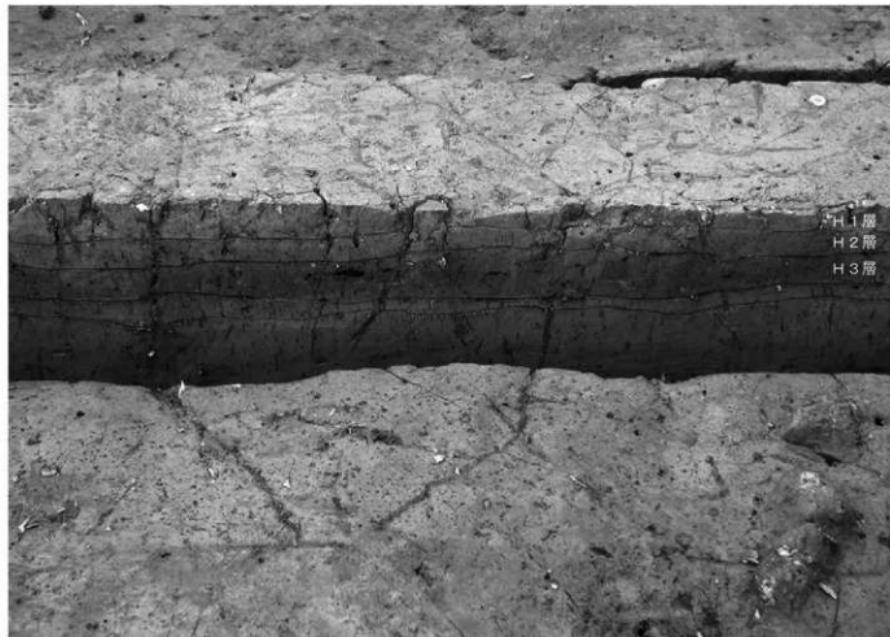
SK 4 炭化物層セクション (西から)



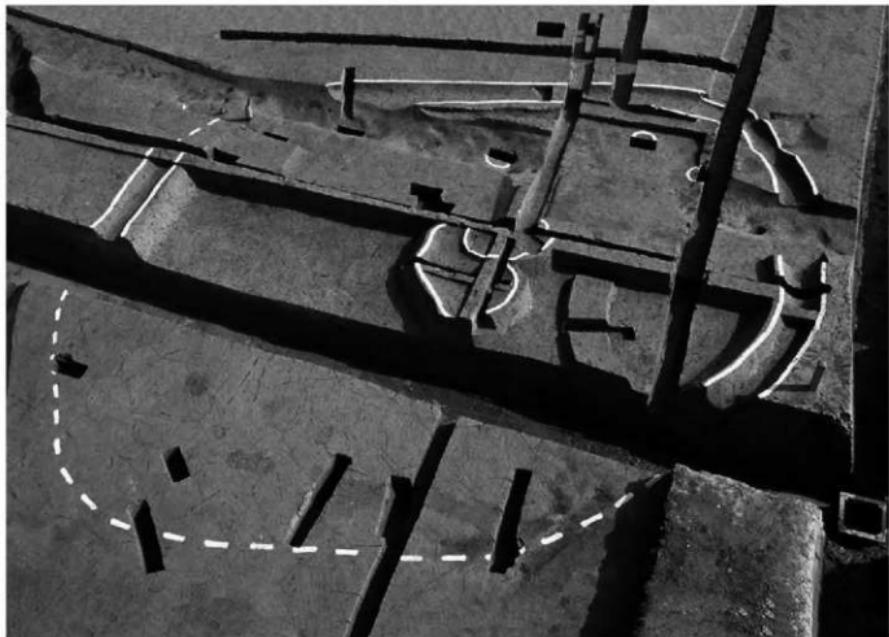
SK 4 遺物出土状況 (西から)



北区弥生時代遺構群 全景（北東から）



弥生時代包含層（東から）



SI 9 完掘（西から）



SI 9 P1セクション（東から）



SI 9 P3セクション（南から）



SI 9 P4セクション（北から）



SI 9 南北セクション（西から）



SI10~12 完掘（北から）



SI10 炉路セクション（西から）



SI10 P1セクション（西から）



SI10 P4根石棟出状況（東から）



SI10 P10セクション（南から）



SI11 炉路検出状況（西から）



SI12 炉路検出状況（西から）



SI11・12 東側崩溝部セクション（東から）



SI10～12 崩溝部セクション（東から）



SI13・14 完掘（北が右）



SI15 完掘 (東から)



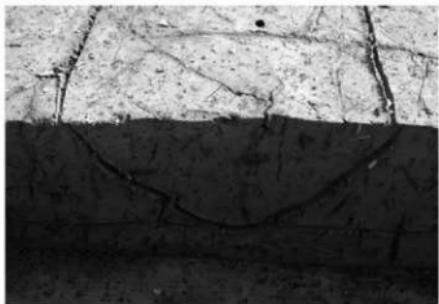
SI13 炉跡断面 (東から)



SI15 炉路検出状況 (東から)



SI15 P1セクション (西から)



SI15 南側周溝部セクション (西から)

SI 8



SI 8 完掘（東から）



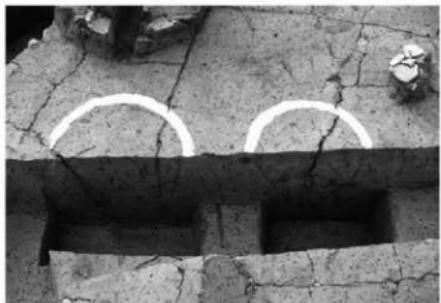
SI 8 炉路セクション（南から）



SI 8 南北セクション（東から）



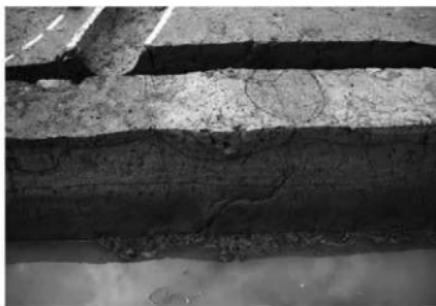
SI 8 P2セクション（北から）



SI 8 P3・4セクション（東から）



1・2号周溝造構 完掘（北から）



1号（右）・2号（左）周溝造構 周溝部セクション（北から）



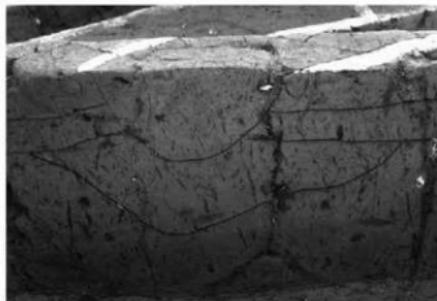
1号（右）・2号（左）周溝造構 周溝部セクション（北から）



1号周溝造構 南側周溝部セクション（東から）



1号周溝造構 南北セクション（東から）



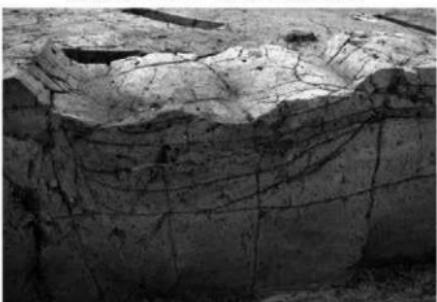
1号周溝遺構・S112 周溝部セクション（北から）



1号周溝遺構・S113・14 周溝切合い状況（北から）



1号周溝遺構 周溝ブリッジ様出状況（北から）



1号周溝遺構 周溝部セクション（北から）



1号周溝遺構 東西セクション（北西から）



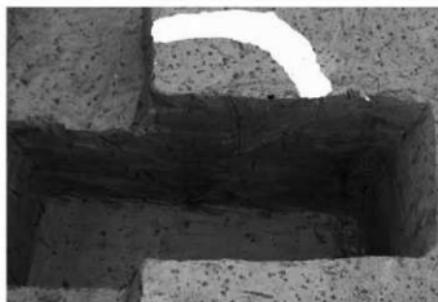
1号周溝遺構 台付跡出土状況（北から）



1号周溝遺構 遺物出土状況（西から）



1号周溝遺構 P1セクション（西から）



1号周溝遺構 P2セクション（東から）



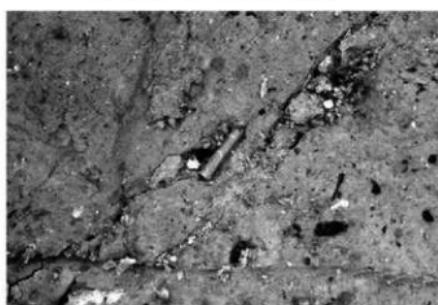
2号周溝遺構 1号土坑セクション（西から）



2号周溝遺構 1号土坑稼出状況（北から）



2号周溝遺構 1号土坑完掘（北から）



2号周溝遺構 管玉出土状況（東から）



2号周溝遺構 中央部遺物出土状況（北から）



2号周溝遺構 南東部遺物出土状況（東から）



1号周溝遺構周辺調査光景



3・4号周溝遺構 完掘（北から）



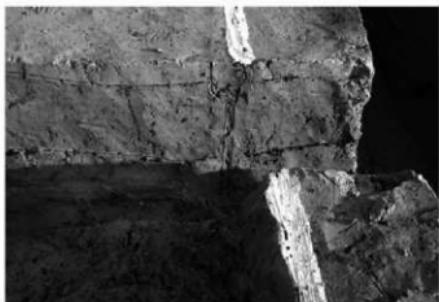
3号周溝遺構 1号土坑検出状況（南から）



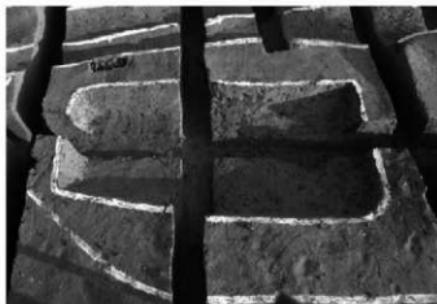
3号周溝遺構 1号土坑主体部検出状況（北から）



3号周溝遺構 1号土坑東側木棺部セクション（西から）



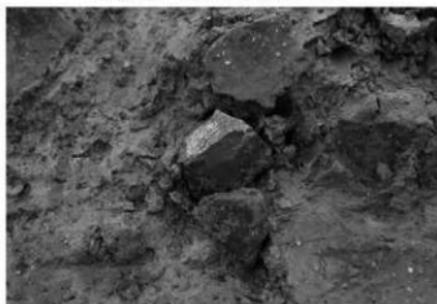
3号周溝遺構 1号土坑東側木棺壁セクションアップ（西から）



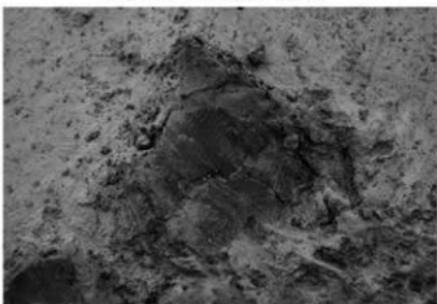
3号周溝遺構 1号土坑主体部完掘（西から）



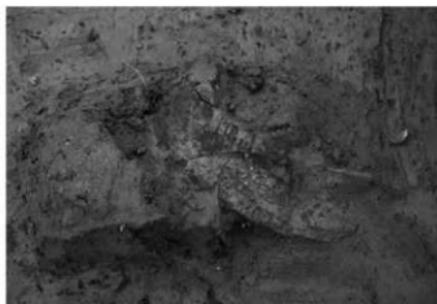
3号周溝遺構 1号土坑完掘（南から）



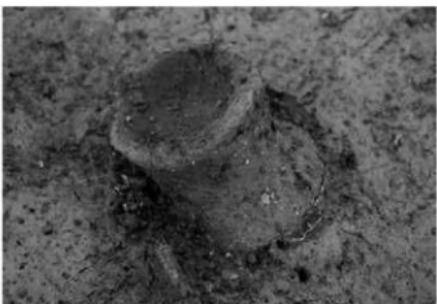
3号周溝遺構 遺物出土状況1（東から）



3号周溝遺構 遺物出土状況2（東から）



3号周溝遺構 遺物出土状況3（東から）



3号周溝遺構 遺物出土状況4（東から）



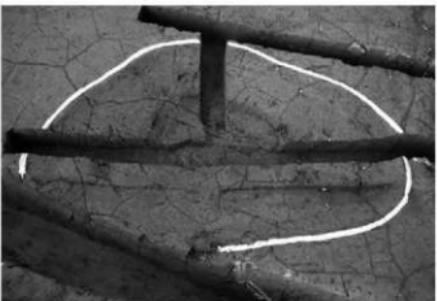
SK126 遺物出土状況（南から）



SK126 南北セクション（東から）



SK132 著物出土状況（北から）



SK132 完掘（南から）



SK134 短頭査出土状況（西から）



SK134 短頭査内部アップ（北西から）



SD122 著物出土状況（南から）



SD122 セクション（西から）



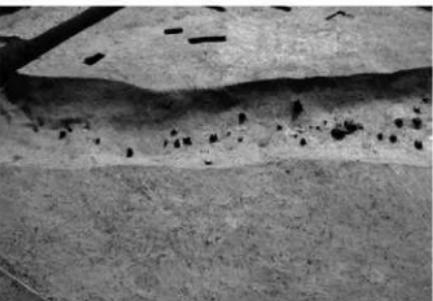
SD125 セクション（西から）



遺構精査光景



SD125 完掘（北東から）



SD125 遺物出土状況（北西から）



SD127 セクション完掘（南から）



SD127 完掘（南西から）



SD128 セクション（東から）



SD128 完掘（南東から）



SD129 セクション（南東から）



SD129 完掘（南東から）



SR 2 a セクションA（東から）



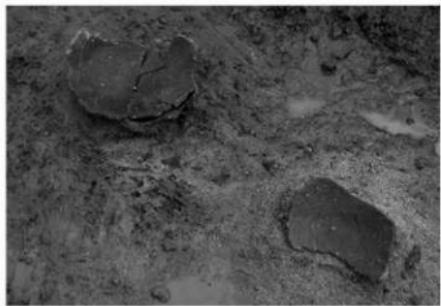
SR 2 a 大型石包丁出土状況（南西から）



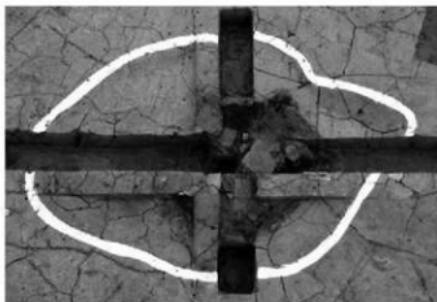
SR 2 a 弥生時代甕出土状況（北東から）



SR 2 a 弥生時代甕出土状況（南から）



SR 2 a 弥生時代甕出土状況（北西から）



SX117 要出土状況（北から）



SX117 東西セクション（南から）



SX117 南北セクション（西から）



SX117・周辺ピット群 完掘（南東から）



SX123 南北セクション（東から）



SX123 屋外炉検出状況（東から）



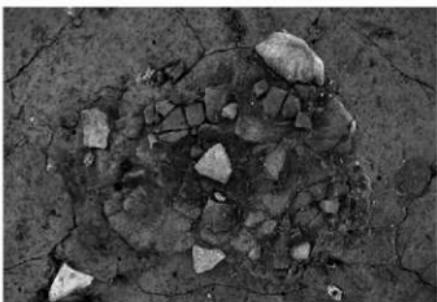
1号周溝状遺構下面 炭化物集中部検出状況（北から）



1号周溝状遺構下面 炭化物集中部検出状況セクション（北から）



54L21グリッド 遺物出土状況（南から）



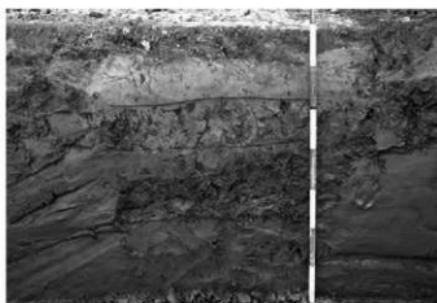
56Qグリッド 遺物出土状況（北から）



50O25グリッド 環石出土状況（北から）



54Qグリッド 大型直縁刃石器出土状況（南から）



下層トレンチ47R セクション（東から）



N列下層トレンチ 完成（南から）



北区 現況（東から）



北区 現況（南から）

SI 6 (1)



SK 1 (3・4)



SK 2 (5)



SB107-P 5 (2)



SK116 (6~12)



SR 1 (13)



SR 2 a (14~39)



5



12



17



20



21



23



28



29



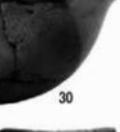
34



38



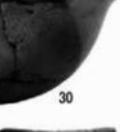
30



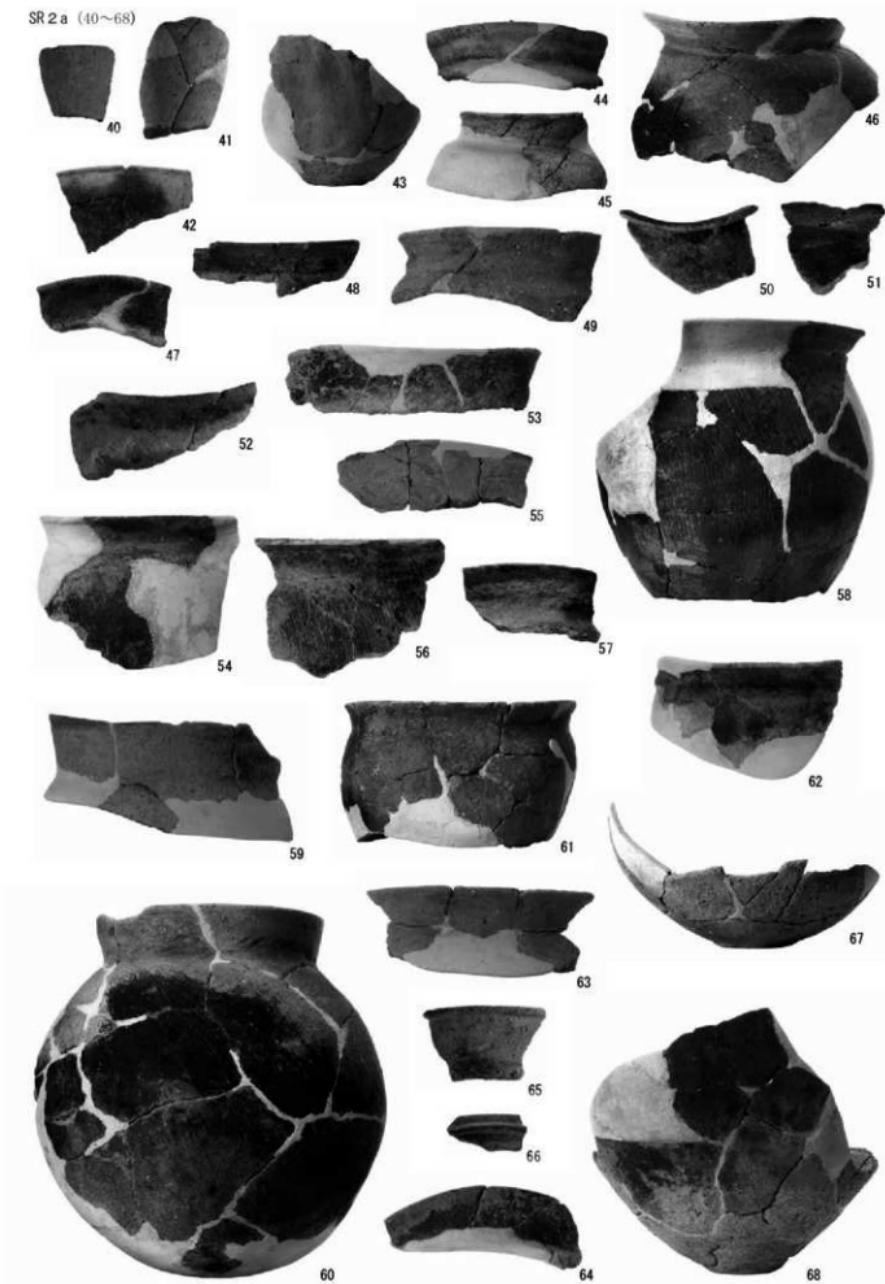
36



37



SR 2 a (40~68)



SR2a (69~72)



SX119 (73~82)



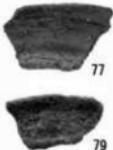
74



P101 (83)



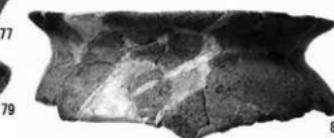
76



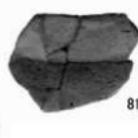
77



78



80



81



造横外出土遺物 (84~108)

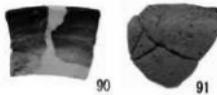
84



85



86



87



88



89



90



91



92



93



94



95



96



97



98



99



100



101



102



103



104



105



106

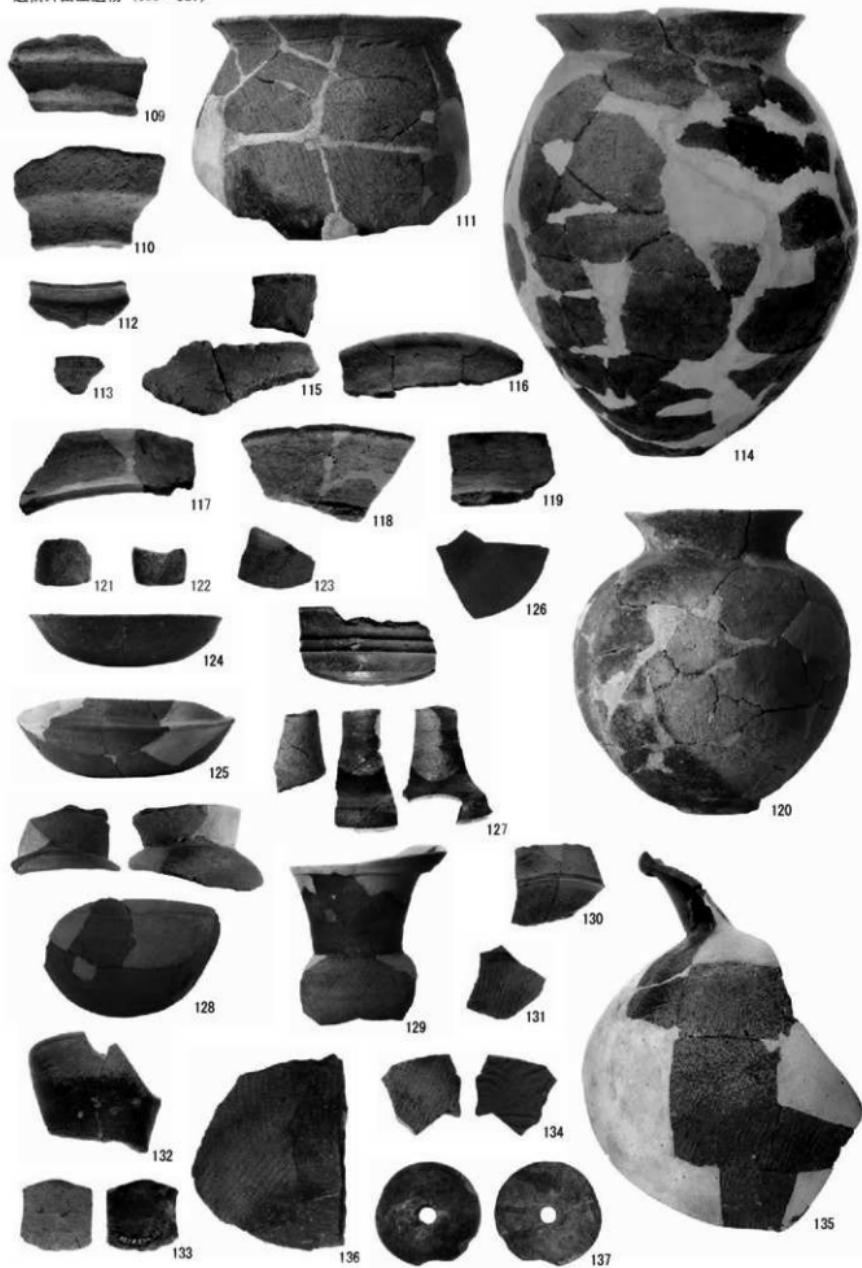


107

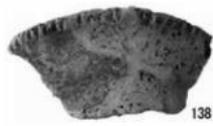


108

遺構外出土遺物（109～137）



SI 1 (138・139)



SI 3 (140)



SI 9 炉 (141)



SI 10 周溝 (142)



1号周溝造構 周溝 (148・149)



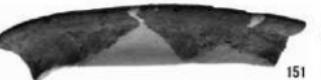
SI 8 (143~147)



2号周溝造構 周溝 (150)



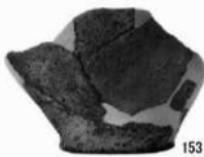
2号周溝造構 1号土坑 (151)



3号周溝造構 1号土坑 (152)



SK 4 (153)



SK126 (154・155)



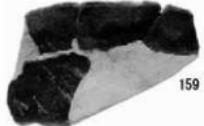
SK134 (156)



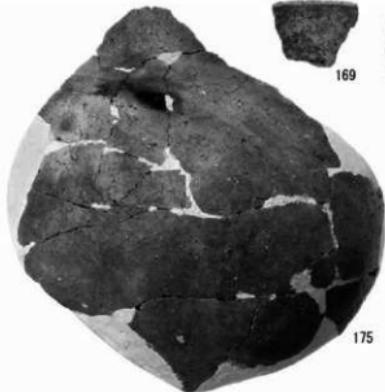
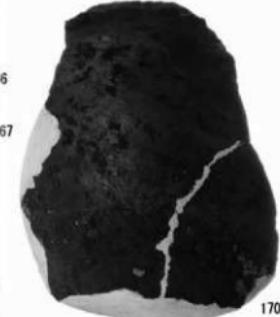
SD122 (157・158)



SD125 (159~162)



SR 2 a (164~179)



169

168

167

166

165

164

163

162

161

160

159

158

157

156

155

154

153

152

151

150

149

148

147

146

145

144

143

142

141

140

139

138

137

136

135

134

133

132

131

130

129

128

127

126

125

124

123

122

121

120

119

118

117

116

115

114

113

112

111

110

109

108

107

106

105

104

103

102

101

100

99

98

97

96

95

94

93

92

91

90

89

88

87

86

85

84

83

82

81

80

79

78

77

76

75

74

73

72

71

70

69

68

67

66

65

64

63

62

61

60

59

58

57

56

55

54

53

52

51

50

49

48

47

46

45

44

43

42

41

40

39

38

37

36

35

34

33

32

31

30

29

28

27

26

25

24

23

22

21

20

19

18

17

16

15

14

13

12

11

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

SR2a (180~198)

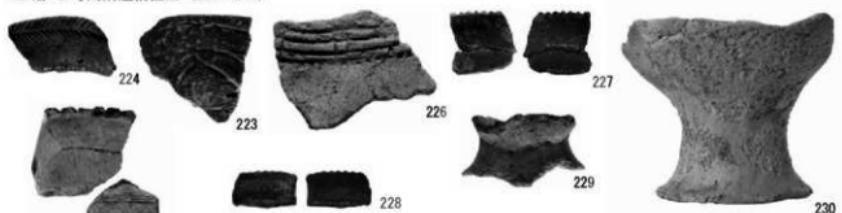


- 183 184 185 186 187 182
188 189 190 191
193 194 195 196 192
197 198 199 200 203
SR 4 (199~203)
204 205
H 1 層 (207~210) 207
H 2 層 1号周溝遺構直上 (211~213) 211
54R-P 2 (206) 206 矢印部拡大 208 209 210 212 213

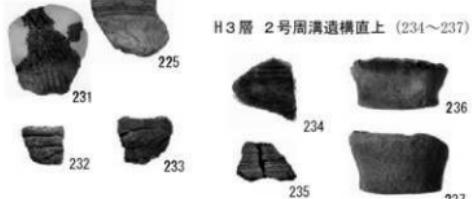
H2層 1号周溝造構直上 (214~219)



H2層 2号周溝造構直上 (223~233)



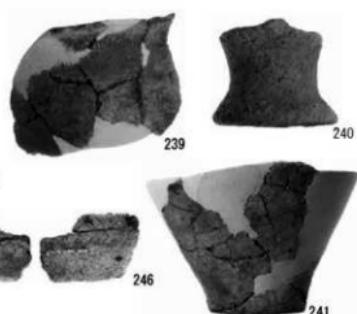
H3層 2号周溝造構直上 (234~237)



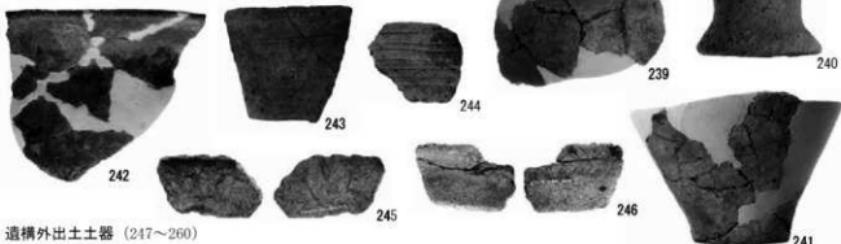
H3層 4号周溝造構直上 (238)



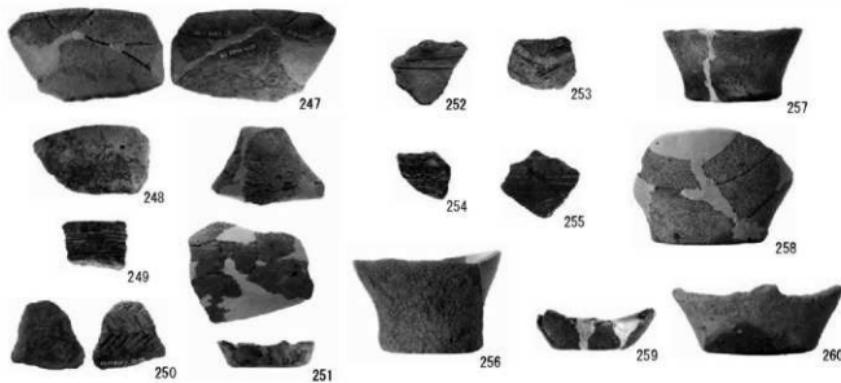
H3層 4号周溝造構直上 (239~241)



IIIb2b層 (242~246)



遺構外出土土器 (247~260)

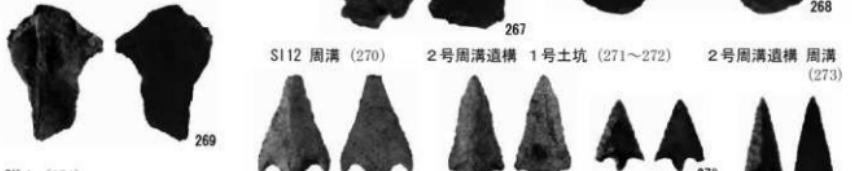


SI 3 (261~269)



SI 12 周溝 (270)

2号周溝造構 1号土坑 (271~272) 2号周溝造構 周溝 (273)



SK 4 (274)

SK126 (275~279)

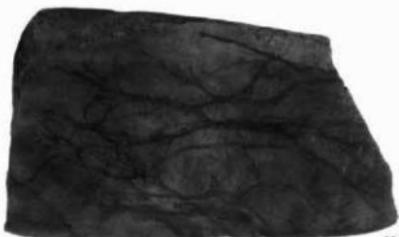


SD122 (280)

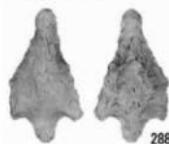
SR 2 a (281~284)



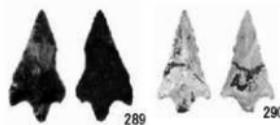
SX111 (285~287)



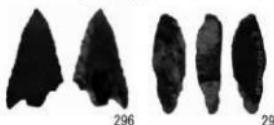
SX136 (288)



H1層 (289~295)



H2層 1号周溝遺構直上 (296~299)



H3層 2号周溝遺構直上 (300~305)



299

302

304

H3層 3号周溝遺構直上
(306~309)

305

306

307

310

H3層 4号周溝遺構
直上 (310)

308



309

IIIb2b層 (311)

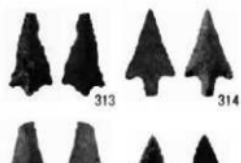


311

IIIb2b層 (312)



遺構外出土石器 (313~330)



312

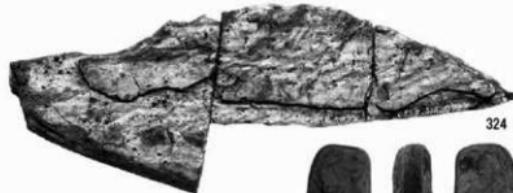


321



323

325



324



326

327



328



329



330

SB107 (331~335)



SI 1-P 3 (339)

SR 2 a (340~346)



機乱 (347)



その他の時代の遺物

SR 2 a (348)



348



352

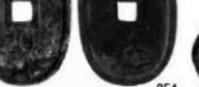


353

造構外出土遺物 (349~358)



354



355



356



357



358

報告書抄録

ふりがな	みちばたいせき ご						
書名	道端遺跡V						
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書						
巻次	X V						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第162集						
編著者名	前川雅夫(国際航業株式会社文化事業部 主任研究員) 丹下昌之(同 研究員) 江 弘和(同 研究員) 佐井流星(同 研究員) 片山淳道(同 研究員) 高橋 敏(パリノ・サーヴェイ株式会社) 斎藤崇人(同) 松元美由紀(同) 斉藤紀行(同) 馬場龍司(同) 沢田敦(埋文事業団調査課 日東道担当班長)						
編集機関	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団・国際航業株式会社						
所在地	〒956-0845 新潟市金津 93番地 1 TEL0250(25)3981 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒950-0808 新潟市東大通 2-3-26 TEL025(247)0318 国際航業株式会社新潟支店						
発行年月日	西暦2006(平成18)年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所取遺跡	所在地	市町村 遺跡番号			
道端遺跡 V	新潟県岩船郡荒川町大字南新保字道端97番地ほか	15-582	75 07分 00秒	38度 24分 59秒	139度 2005.04.11 ～2005.12.06	12,400m ² (上層9,600m ² 下層2,800m ²)	日本海沿岸東北自動車道建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
道端遺跡 V	散布地	縄文時代 中世			縄文土器 珠洲焼(壺・指鉢) 鏡貢(「水葉通宝」・「皇宋通宝」)		
	集落	弥生時代	平地式建物(7軒) 堅穴建物(3軒) 周溝遺構(4基) 土坑(9基) 溝溝(5条) 河川跡(3条) 性格不明遺構(5基) ピット(24基)		弥生土器(繩文系壺・壺・鉢・ 沈縄文系壺・壺・蓋)		土器片に痕跡が確認された。 誤認したアワ・ヒエ・コメが検出されたことから稻作農耕が行われていたことが明らかになった。
	集落	古墳時代	堅穴建物(1軒) 掘埴柱遺構(1棟) 土坑(5基) 河川跡(2条) 性格不明遺構(4基) ピット(7基)		土師器(輪・高杯・器台・瓶・壺・壺・手づくね土器) 須恵器(杯盤・杯身・無蓋高杯・瓶・壺) 石製品(紡錘車・砾石) 木製品(柱根・樋状木製品)		竈が4個体出土した。

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第162集	
日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 X V	
道端遺跡V	
平成18年3月30日印刷 平成18年3月31日発行	
発行 新潟県教育委員会 〒950-8570 新潟市新光町4番地1 電話 025(285)551 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新潟市金津93番地1 電話 0250(25)3981 FAX 0250(25)3986 平電子印刷所 福島町いわき市平北白土字西ノ内13番地 電話 0246(23)9051 FAX 0246(22)5222	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第162集『道端遺跡V』 正誤表

頁	位置	誤	正
抄錄	北緯	38度07分00秒	38度07分18秒
抄錄	東経	139度24分59秒	139度24分53秒